
樹当千

千葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

樹当千

【Nコード】

N0933L

【作者名】

千葉

【あらすじ】

千葉 樹はその日異世界に行った。

得た植物を操る能力で剣と魔法の世界を生きる決意を決めた樹の新鮮な感覚かつ正統派ファンタジー！！

一話 始まり

私こと千葉 樹はその日学校にいた。

正確に言えば学校の保健室にいた。

二時間目の体育でドッチボールの球を頭に受け倒れたのだった。倒れた俺を心配して様子を見に来る女子などもちろんいないわけであつて、黙つて天井のシミを数えているとドアが開いた。

「オー倒れたのかい優等生君」

スレンダーな体をした女保険教諭佐伯 望先生、通称男子生徒の望み、リアルエロゲ、起きたまま見る夢、など様々な呼び名がある。「どうしたんだい優等生君、最近なかなかここに来てくれないじゃないか」

「俺の記憶の中じゃ、熱射病で倒れた一回きりな気がします先生。」

あと俺の成績は下から数えて3番目です。」

「なーにかわいい生徒にはいつぱい来て欲しいもんなんだ、先生つてのは。紅茶飲むか？」

「先生は一人の生徒を特別扱いしちゃいけないんだ。」

「私だつて先生の前に一人の人間だ。好き嫌いだつてある。」

そう言つて紅茶をカップにコポコポつく。

「なあ、優等生君に見てもらいたいものがあるんだ」

「何です？」

「えーとたしかここらにあつたはず」

先生は紅茶を飲みながら答える。えっ、俺のは？と思つたのはしかたないことだろう。

「これだこれ」

先生が持つてきたのは10センチぐらいの鉢植えだった。中にあつる草のような植物はきれいな白い花を咲かしている。

「君は植物が好きだろ。この花の名前を知っているか？」

「俺は植物が好きですけどあんまり名前は知らないんです。でもま

「まったくこの花はみたことがないですね。」

「だろ、珍しいと思って校長の庭からパクッてじゃなくて、道端に落ちているのを拾ったんだ。」

「へー、前半部分は全くなにも聞こえませんでしたけど確かに珍しそうですね。放課後図書室にいつて、本を借りてみます。」

「ああ頼んだぞ。くれぐれもこの学校の最高権力者にみつからないように任務を遂行しろ。」

「イエッサー」

放課後俺は図書室にしのびはいり、幾重のトラップをかいくぐり無事保健室への帰還を成功した。先生は

「よくやったな！」

とだけ言い残し、帰っていった。

その後俺はいとしい植物ちゃんに話しかけながら、借りた本を読んでいた。

この姿を見られれば警察行きか良くとも精神病院行きだ。

3時間後

「ない、完全に無い。世界中にこの花は存在しない。ということは俺がこの新種の第一発見者でことかあ！じゃあ名前をつけますかな。」

「うーん、ありきたりなのは嫌だし、かといってあまり派手でも「あの人が厨二臭い名前をつけた人よ、ダッサ」となってしまうしな。」

「よし決めたお前の名はベアンテだ！！ふふーん、われながらい名だ。」

すると突然目の前の植物が巨大化していくではないか！

「どーしたベアンテ何が気にくわないのだ、いい名だと思っぞ。」

俺の意思など関係ないように、更に大きくなるベアンテは俺に絡みつくようにつるをのばしていく。

「おーいベアンテちゃん止めて落ち着くんだ。ベアちゃんギブです。グーテンモルゲン」

どんどんパニくる俺の視界がベアンテのつるで覆い隠されていく。

「ええーい南無三！ままよ！大往生！」

完全に俺の目の前が真っ暗になったところで俺は意識を失った。

二話 力!?

意識がはつきりしてきたがまだ目の前は真っ暗だった。

空をかくように手を伸ばすと、ガサツと音がした。どうやらまだ俺はベアンテに捕えられているようだ。かわいそうだが束をつかんで引き裂く。すると目の前には佐伯先生が、ではなくきれいな海がひろがっていた。

「やーきれいな海だ。日常の喧騒の中、僕たちは忘れてはいけな何かを忘れていると思う。でも見てごらん。」

そういいながら海に入り、海水を手にとって空へと放つ。

「この大自然の中僕たちは一つなんだ。小さなことなんて気にならなくなるよね?」

そういいながら一時間ほど現実逃避をした後、

「よしそろそろまじめに考えよう。保健室にいたのにまったく見たことの無い場所にいるのはいいとして、問題はこれから先どうするかだ。もとの場所に帰れる最有力候補はあのベアンテちゃんだな。」

自分がいた場所に戻ると、ベアンテちゃんはいくわらずそこにいた。気のせいかベアンテちゃんは俺が来て喜んでるようにつるを俺に絡ませてきた。そして俺の左腕に絡ませてちょうど腕輪のようになるとそのまま栄養か何かをゴボツゴボツと注いでいく。どんなしくみかはわからないが、おれの腕をつかんでいるだけのつるから確かに俺に力が流れこんできている。

「普通は気持ち悪いはずなんだがなあ。」全然不快感はなくむしろ気持ちいい。

全部注ぎこむと、ベアンテの姿は消えた。俺の左腕には深緑色のつる草が絡みついていてようなタトゥーができている。

「タトゥーを入れるなんて俺は不良になってしまった。」

そう落ち込んでいると、頭の中に声が響いてきた。

『聞こえますか?』

「はい、聞こえます。」

『普通にかえしますね。あなた順応力あるといわれるでしょう。』

「いえ初めて言われました。」

『こんな不毛な会話を続けていても仕方ありません、本題に入りましょう。私はベアンテです。』

「ええっ！」

『そしてここはあなたのいた世界ではなく魔法が存在する異世界です』

「マジで!？」

『そしてさっき送った力は植物の力や植物と話したり使役する力です。』

「おどれーた！」

『そして「チヨイ待て！おまえ簡潔に言いすぎだ。少しは話を理解する時間をくれ。」』

『あなたに力を渡してもうすぐ私の意識は無くなります。』『人の話を聞こう！』

『力の使用方法はいずれわかっていくでしょう』『もう説得はあきらめた。』

『ではこれからはあなたの力になりましょう』

勝手なやつだ。

とはいえひとりぼっちになってしまったな。

とりあえず必需品である水を探そう。

三話 出会い

ベアンテに能力をもらうとすぐに周りの木々の意識が感じられるようになった。

おおざっぱな喜びや歓迎の意思を感じる。どうやらまだ若い樹らしく会話をする能力は無いが俺の言うことはだいたいわかるらしい。

「水場はどこにあるんだ？」

すると木の枝が一本落ちてきて、その切っ先を俺から見て左の方に向けた。

「ありがとう」

木は嬉しそうに葉っぱを震わせた。

木の指した方向に進むこと一時間、ようやく水の流れる音が聞こえてきた。

幅10メートルくらいの川が見えると、近くに寄り水を飲み始める。ひとしきり飲み終わると近くに人の気配がした。

自分の気配を殺しながら藪に隠れると、向こう岸で女の人が水をくんでいた。

白金の鎧を身につけ長い金髪を肩下まで伸ばしたその姿は女神アテナを彷彿させる。

つり目が更に魅力を上げている。興奮で思わず前に身をだすと、ガサツと音がしてしまった。

「誰だ！？出て来い！」

ばれてしまったならしょうがないな。

「我が名はイツキ！東の果てよりこの地へきた。そなたはこの森に住む古い神か？」

「いや違う、何を言ってるんだ？」

そこは無視して「去れ」といつて欲しかったが異世界だから仕方ないか。

「どうせお前もこの森の遺跡に残る財宝が目当てか？」

「えっ、うんそうそう。」「よくわからないので適当にうなずいておこう。」

「なら貴様はライバルというわけか。ピンチになったら助けてやってもいいぞ。」

馬鹿にしたように彼女は言う。

「じゃあそんな時はよろしく。」

「き、貴様には男としてのプライドは無いのか？」

「そうは言われてもな。」

「貴様のような男は始めてだ。」

そういつて彼女は呆れたような顔をする。

「名前を覚えてくれないか？」

「これは申し遅れたな。我が名はユレイア・イーストフッド、武者修行の旅をしている。」

先ほどの非礼を許して欲しい。昔から女だとなめてかかってくる輩が嫌いなのだ。」

「気にするな、俺は気にしてないし。」

「そうもいかん、なにか手伝えることはないか？」

「じゃあこの国の名前と、その遺跡について教えて欲しい。」

「なんだ、知ってきたんじゃないのか。」

「実は特に目的地もなくふらふらと旅をしてきたからここがどこか分からないんだ。」

もちろん嘘だ。

「ここはザルナ王国だ。そして遺跡とはザルナ王国の南部に位置するここシンの森にある大昔の魔法の遺跡だ。子供でも知ってるぞ」

「そんなに有名ならもう財宝はなくなっているんじゃないか？」

「本当に何も知らないんだな。歴史上その遺跡にたどり着き帰った人物は3人しかいないんだぞ。そして彼らが持ち帰った財宝は各国の国宝になっでいて、ここシンの森にたどり着いた者はいても深部に一歩進めばそこから先は多種多様な魔獣や人を食べる植物もいるんだぞ。」

「だったら協力しないか」

「見た限り武器も持ってないし、私に利益があるとは思えんがな。」

「俺は人食い植物を避ける術をもっている。」

「きついようだが、お前が嘘をついても死ぬだけだぞ。」

「だったら俺が嘘つく必要は無いだろ。」

「わかった。これからよろしくな。」

そういつてユレイアは手をさし伸ばした。

「ああ、よろしく。」

俺たちは手を握り合った。すごくやわらかったぞ

四話 実験

最深部への入り口に入る前にキャンプをして夜を明かすことになった。

「なあ、何でユレイアはこんな危険な旅に出たんだ？」

「無事遺跡から帰った人物は3人しかいないとさっき言っただろ。」

「ああ言っただろ。」

「その3人すべてが男なんだ。だから女の私が女の力を証明したいからだ。」

ユレイアの思いつめた表情からなんか過去にあったんだなと勝手に俺は推測した。

するとユレイアは不思議そうな表情をして、

「お前はどうかんだ？旅をしてきたというのは嘘だろ。お前の服はどう見ても旅にはむいてないし全く汚れていない、オマケに武器も持っていない。どこから来たんだ？」

あちゃー、ばれていたみたいだ。どうすっかな。

「これから旅をする仲間なんだ。嘘はつくな本当のことだけ言え、言いたくなければ言わなくてもいい。」

本当のことを話しても信じないと思うしな、むしろ本当のことのほうが嘘だと思われる。

嘘は言わずに真実の一部だけをいうしかないな。

「気がついたらここについてたんだ。でも植物に襲われることは無いのは本当だ。」

「嘘は言っていないようだが、まあいいだろ。明日はしっかりと働いてもらうからな。」

そういつてユレイアは自分のテントに入ってしまった。明日までに能力の練習をしないと不味いな、まだしたのは樹と話したぐらいだしガチで明日死ぬかもしれん。

少し森を歩くとちよつとした空き地を見つけたのでここで練習す

るか。

ベアンテはなんか植物の力とかいってたけど、確かに今日はけつこ
う動いたのに疲れてないしそういうことだろ。

もう一つは植物を使役するとか言ってたな、俺的にはこの左腕のタ
トウが気になるな。

ために木が生えるのをイメージして左の人差し指で地面をついて
みる。

すると目の前に木が生えてきて、10メートルくらいの大きさにな
るまで約3秒。質量保存の法則までも通じないし、俺の創った木は
俺の意思どうりに動いてくれる。いろいろと実験したが普通に生え
ている木は俺の意思どうりに動かない。頼んでやってもらったがせ
いぜい葉っぱをおとすぐらいでしょんぼりしていた（十分すごいが）
、だが俺が落ち込むなよと手を置いたら急に俺の思い描いたように
動き出した。どうやら俺の左手が触れている間は自在にうごくら
しい。木は幹を横に伸ばして壁をつくることもできたし、いろいろと
無茶な動きをした。なかでも一番すごかったのは俺の身長ぐらいの
杖になれと言った時さすがに無理だろうとおもったが、木全体でメ
キメキいいながら外側から内側へと収縮していき一本の杖になった
ことだ。

完成した杖はかなりの密度をもっていて堅くしなやかだった。

「今日のところはこんぐらいにするか。」

満足した俺はキャンプに戻りさっさと寝ることにした。

五話 ペット

翌朝深部のなかへと出発した。

「お前そんな棒切れどこから拾ってきたんだ？私のナイフを貸すからさっさと捨てて来い。」

「俺はこれがいいんだ」

「私は知らんぞ。」呆れたようにユレイアがいうが、この杖のすばらしさを知らないからそんなことが言えるんだ。

奥へ進むほどいつそうと辺りに草が生い茂ってきた。

「そろそろ人食い植物がでてくるぞ、お前に任したからな。」

「俺を前に置いたのはそのためか」

その点に関してはまったく心配はしてないがな。

「来たぞ！大きな蕾の中にたくさんさんの牙をはやした植物型モンスターー『ヘルプラント』だ！」

「説明ありがとう」

「バカッ！食われるぞ」

あせるユレイアの声を聞き流しながらおれはモンスターに近寄る。50センチぐらいの大きさで根を足代わりに動き両手？に葉っぱを構えている。

「キュウウーン」甘えたように俺にちかづいてくるかわいいやつをどうして拒めようか。

そつと頭？もしくは顔に当たる部分をそつとなでると気持ちよさそうに口をパクパクさせる。周りから見ると今にも食べられそうにかみえないらしく、ユレイアがあわあわと慌てている。こっちも可愛い、あっちも可愛い状態を楽しんでいたがさすがにユレイアに心配されるのも悪い気がしてきた。

「おいユレイア大丈夫だって。」「はっ！？そいつは凶暴なモンスターだぞ逃げろ！」

「だから大丈夫だって」俺はこの子を撫でながら答える。

「なんで懐いているんだ？動物型モンスターならしつめた例は聞いたことがあるが、植物型モンスターをなつけるなど聞いたことが無いぞ」

「お前は特別なんだよね？」

「キャウキャウ」

俺とこの子のラブラブぶりをみてうらやましそうな表情をするユレイア。

「ユレイアもこの子をなでてみるか？」

「え、いいのか？」

「ああ」「それじゃあ」

おそろおそろ俺の腕の中にいるヘルちゃんに近づくユレイア。たぶん、いや絶対ヘルちゃんはユレイアが触った瞬間本能をさらけ出すだろう。急いでヘルちゃんに意思を飛ばす。

『俺の仲間だから丁重にな。』静かにうなずくヘルちゃん。

俺たちのやりとりがちょうど終わった後、ユレイアがヘルちゃんをなでる。

「キャウシュー」

嬉しそうにヘルちゃんが鳴くとユレイアの緊張した顔に花が開く。

「イツキーかわいいなあ、かわいいなあ」

「ごふっ」俺は吐血した。ふだんクールな女がそんなことしたら、ギャップがやばい。

「大丈夫か！？イツキどうしたんだいきなり血を吐いて、怪我したのか？病気か？」

「いやこれは世界の真理だ、気にするな。」

「そうなのか？」不思議そうに小首をかしげるのもヤバイ。

「そういうものだ。」

そっぴいながら二人と一匹で歩き続けて二時間、さすがにダラダラしてきた。

「ヘルちゃんが遺跡を知っていればいいのにな」

冗談めかしてユレイアがいう。

するとヘルちゃんがあいまいなイメージを送ってきた。どうやらあの遺跡のイメージらしい。

「ユレイアー、ヘルちゃんが遺跡まで案内してくれるらしいよ。」

「お前は話すこともできるのか？」

「うん」

「もうお前にまかした。」

ため息をつかれた！なんかショックだ。

六話 戦闘

遺跡にたどり着くまでに狼と猿がまじったような魔獣が襲い掛かってきたがユレイアが剣で、ヘルちゃんは酸液をだして返り討ちにしたのが計5回、ユレイアの氷魔法で冷凍させること計2回があった。ようするにユレイアは強い、俺はまったく何も動かずに戦闘がおわった。

正面に立つ紺色の建物がおそらく遺跡だろ。中に入ろうとするとヘルちゃんが弾き飛ばされた。ヘルちゃんが再び入ろうとしたがまた弾き飛ばされてしまった。

「どうやら遺跡が荒らされないようにモンスター除けの魔法が施されているみたいだな。」

「ヘルちゃんここまでありがとな。」涙を流しながらお別れをした。遺跡の内部は広く複雑な造りをしていたが、罠やモンスターを一度も見なかった。

「おかしい、いくらなんでも無用心すぎる。」

「ユレイア、それが宝物庫のなかで宝を物色しながら言うせりふとは思えないが。」

周りには金やら銀やら七色に輝く宝であふれている。目がくらんで気持ち悪くなるほどだ。

「よし私はこの剣にしよう。」

俺の声はもう届いてない。

「イツキそんなとこで何してる？宝は手に入れたんだ、もう帰るぞ」俺の襟首を掴んでひきずりだすユレイア。まあいいか、俺あんまり派手なの好きじゃないし。

遺跡の出口が見えてくると急に目の前に赤い色のついた風がつむじを巻き始めた。

「ものすごい魔力が集中してきている！気をつけるイツキ！」

風は一定の形を保っていたがパツと解かれ、つむじの中からは赤いフード付きのローブを身につけた骸骨が現れた。

「でででで出たー！でも納得だな、そんなにうまく行くわけないんだよ人生。」と俺。

『よくきたな冒険者よ、私はかつてここにいた最後の魔法使いが死ぬ間際に自身に魔法をかけてつくられたゴーレムだ。その手に持っているものを置いていけば無事におうちに帰してやるぞ』

「刺激が足りないと思っていたところだ。ユレイア・イーストフツド参る。」

『私も生前はロッドマスターと呼ばれた男、魔導の極みをみるがい』

まずユレイアが得意の氷魔法で巨大なつららを飛ばす。

『笑止、魔導師にちやちな魔法を放つとは』

そういいながら手に青い光を宿してつららをはじき落とす。

「目くらましにすぎんわ！」

剣を振りかざして首を跳ね飛ばそうとするが、ロッドマスターの手に受け止められる。

「何っ!？」

『ふ、この程度か。』

そのままユレイアを壁へたたきつける。ユレイアは衝撃で気絶して動けそうにない。

『しばらくとは言わん、永遠に眠れ。』

ロッドマスターが手の青い光を強くさせる。俺は急いで地面に左手をつけて樹をやしユレイアを捕まえて移動させる。

『ほほうなかなか面白そうな技をつかうな』

しゃれこうべを不気味に震わせカタカタさせながらこちらを見る。

「どうも、次は俺がいくわ。」

杖を横にかまえながらいうと、

『お前ロッドマスターの私に杖で戦うと言っのか？これはおもしろい、今日は自分の立場をわきまえないやつが多くて楽しいぞ。』

青い光を伸ばして杖にする。俺の杖とどっちがつよいかな？

『この杖はナナカマドの木を三日間月光にあてドラゴンの息吹でできたものだ。その程度の杖で一合持てばいいほうだな。』

「試してみるか。」

俺は異世界にきて上がった力で杖を相手へと振るった。相手の杖はそれを受け止めたと思いきやポキリとおれてしまった。

「一合で折れるのはそっちだったな。」

『あ、ありえん』

「ありえちゃうんですこれがw」

そのままとどめをさそうとするが素早く避けてしまう。

相手は警戒して距離をおいたので、俺は左手で地面をあちこち突くが十本以上は生えなかった。どうやら今の俺には同時に十本しか創った木を展開できないようだ。とりあえずその十本を相手に向かわせるがロッドマスターはひらりと宙を浮かびながらかわす。

『きりがないな、燃える』

巨大な火の玉が俺に向かってきたので慌てて木を硬質化させガードにまわしたが半分以上が燃えてしまった。

「ここはユレイアの手に習いますか。」

目の前に再び木を生やし相手の視界をふさぐ。

〈ロッドマスター視点〉

最初杖が折られた時は驚いたが、その時とどめをさしきれないことがこいつの戦闘経験の浅さを物語っている。

木を生やして攻撃させる私でも見たことが無い技だが、同時展開できる数はせいぜい十程度だと思われる。余裕でかわし魔法を放てるレベルだ。

やつが再び木を生やして私の視界をふさいだ、あの女剣士の真似でもしているのだろう。

下らんな、人はあせって勝負したときその全力をだす。私はやつの常時展開できる木をすべて数えて9本だとわかった。

7本、8本、9本、この後に私の死角からやつが出てくるな。

後ろから杖をかざして私に突っ込んでくる気配を感じる。

私が杖を掴んで受け止めるとやつの顔が青ざめた、そのままやつの首を切り離れた。

すると同時に後ろから衝撃を感じた。自分の胸から先がとがった杖が飛び出している。

『なぜなぜナゼオマエはここにいる？』

「よくお前の倒した相手を見てみる。」

やつの言う通りに見てみるとそこにはやつとそっくりな顔をしてはいるが、よくみて見ると足もとが何か変だ。足の後ろから木が生えているようにみえる。

『まさか、これも木だというのか？』

「正解！よくできました。最初にお前の視界を木で隠したのは、その後ろで俺そっくりの木人形を作るためだったんだよ」

『作戦負けというわけか。油断していたといえ私に勝ったのはお前が初めてだ。』

「今までの3人はどうしたんだ？」

『あやつらはこの遺跡の謎を解き安全な道を選びかえっていった。』

勝ったお前には戦利品をやらなければなるまい』

「え、いいの？」

『ああ、私の役目は終わったしな。もうすぐこの遺跡の役目も終わる。』

（樹視点）

そっくり終わるとロッドマスターは消えていった。のこったのはやつのできていたローブだけだ、おそらくこれが戦利品とやらだろ。さつきまで骸骨が着ていたと考えるとゾツとするが、着心地はなかなか気持ちいいものだった。

まずはお姫様を起こさないと。ユレイアはまだ床に倒れていて体をゆすつても、水をかけても起きない。なるほどお姫様を起こすには王子様のキスが必要ってわけか。

ならしかたないな、俺としては非常にひじょーに不本意だが必要とあらばやるしかないな。ではいざっ！としようとしたらゴゴゴゴと遺跡全体が揺れ始めた。

「くそー神！このシチュエーションに嫉妬して天変地異を起こすんじゃない！」

「あれ、どうしたんだその服は？樹やつは何処へ行ったんだ？そしてなんでそんなに残念そうな表情をしているんだ？」

「話している時間は無い、チツとりあえずここを出るぞ！チツ」

ユレイアは立ち上がるうとしたが、まだダメージが抜けてないので少しふらついた。

「ユレイア無理をするな！俺に負ぶされ、早く！」

「大丈夫だ、私は走れる。」

「いいから早くしろ！」おれは必死の形相でユレイアを促す。

ユレイアはしぶしぶな感じで俺に負ぶさる。

俺はものすごい力が湧いてくるのを感じた。神よ、このシチュを作るために天変地異を起こしなさんだんですね。なんたる役得！

六話 戦闘（後書き）

いつきに投稿しました作者の千葉です。

この後の展開も一応考えてはいるのですが、こうしたほうがいいなどの意見がありましたらドンドンご指摘ください。
作者が喜びます

七話 ギルド（前書き）

2010年7月12日

イツキのランクをBからCへと修正しました。

七話 ギルド

二人してあれからシンの森を抜け近くの街クザについた。

二人で歩いていると街中から人の視線を感じた。

「そんな珍しいローブを着ているからだぞ。」

「いやちよつとはそれもあるけど、大部分はちがうと思う。」

絶世の美女が街を歩いていたら自然と目が行くと思う、それとともに横で歩く男の俺には殺気がビンビンとばされているのが感じられる。

そんな男どもの視線を気にせずにユレイアは、

「にしてもここはなかなか暑いな。」

はあ、とため息をつきながら長い髪を指で耳にかけるユレイア

「と、ところでこの街では何をするんだ？」

必死にその誘惑を振り切ったはずねる。

「お前はたしかはるか東の地からここに来たといっていたな？」

「ああ」確かにそういう設定だったな。

「だったらギルド登録もしていないんだろ？」

「なにそれ？おいしいの？」

「いいか、ギルド登録は様々な職業の人たちの組合なんだ。仕事をする上で必ずみんなはいつているな。」

「ユレイアはどのギルドに入っているんだ？」

「私は冒険者ギルドにはいつている。」

「じゃあ俺も冒険者ギルドに入る」

「言われなくてもいれる気だ。」

なんかもうちよつとこう、やさしさが欲しい。

通りにたつ立派な木造の建物が冒険者ギルドらしい。俺たちが中に入ると辺りがざわついた。僧侶の格好をした人もいれば、鎧姿の人、ローブ姿の人もいる。

「おい、あれユレイアだぜ。」「本当だ、あのユレイアだ」

「横の男は誰だ？ユレイアは男嫌いでも有名だぞ。」

ユレイアは周りのやつらを見無視してカウンターに向かうので俺も慌ててついていった。

「いらつしゃいユレイア、最近顔を見ないね。今日はどんな仕事をとるんだい。」

「どうやらカウンターの姉さんとユレイアは知り合いらしい。」

「今日は私の仕事ではない、このイツキのギルド証を発行しに来た。」

「

「珍しいね？まあいいか、最初に説明するね。依頼はあそこにある掲示板から自分のランクと同じか一個上、もしくは一個下のレベルの依頼を受けることが出来ます。ランクは下からE、D、C、B、A、S、SS、SSSまであります。」

「ちなみに私はランクAだ。」胸をはってどや顔をするユレイア。

「俺の審美眼ではCだと思うが。」

「バカっ、そういう意味じゃない！」

「ハハハッww後はこの書類にサインして、あと血をすこしこの器にだして。」

サインは日本語で書いたけど、なぜか通じた。おねえさんに小振りなナイフを渡されて、たくさん血がでるように首にナイフを突き当てたらみんなが俺を必死になって説得してくれた。

「本当にちよつとでいいからな。」ユレイアは念を押す。

しぶしぶ指先をちよつと切って、銀色の器に血を流した。

そのままお姉さんはブツブツいいながら魔法をとなえる。すると血が固まって指輪になった。

「これが冒険者ギルドの印だ、今までにたおしたモンスターの経験値がその指輪に換算されるシステムになっている。死ぬまで外せないではめる指をちゃんと決めておくんだぞ。」

「それは私に説明させて欲しかったな。」

落ち込むお姉さんもグッド！

右の人差し指にはめると指輪が二回光った。

「驚きましたね！指輪が発光するのはランクが上がった証拠なんです。あなたはさっきギルドに登録したばかりで二回発光したので、Cランクというわけですね。」

やはりロッドマスターがおしたのが効いたな。

「ところでCランクってすごいのか？」

「すごいですよ！たいていの冒険者はCランクで大成したほうなんです。登録した時点でCランクになるなんて今までどんな所に暮らしていたんですか？」

俺は苦笑して流した。

登録したことだし、あとは武器屋に行つてイツキの装備を整えるか」俺の能力は確かに万能だがいかんせん攻撃力に欠けるからな、ちょうどギルドに入つたことだし揃えるか。

「じゃ行きますか。」

そういうことになった。

七話 ギルド（後書き）

これから更新速度がk s kしていくようがんばります

八話 武器と心のぬくもり

武器屋ではいかつい顔した歴戦の戦士が店員だった。

「あゝら、ユレイアじゃないのお久しぶりね。」

「今日はこいつの武器を見てやってくれなにか。」

「いいいい、今このおっさんから声が発せられたのか??」

「どうしたの坊や? 震えちゃって、か・わ・い・い。」

俺は吐き気を必死にこらえる、とりあえず武器を探さないと。

「じゃあじゃあ、まずこれはどう?」

オッサンが取り出したのはヌンチャクだ。

「あのまず最初はロングソードとか手ごろなの選ばない? いきなりヌンチャクってどうなんですか?」

「ちよつとしたジョークじゃないの、怒らないでよ。」

「もう俺が探すんでいいですよ」

「つれないわね。」

男がすねてもかわいくないぞ。

店内は古今東西の武器で敷き詰められている。

「どーしよつかな?」

とりあえず一本ずつ持ってみるが、どーもしっくりこないな。

しばらく悩んでいると店の奥からなにかが落ちる音がしたので、その方向に向かってみた。

床には日本風の槍が落ちていた。俺が一步進むたびに振動するそれはいかにもな感じを出していた。

「変わったものを気にいったわね。」

いつのまにか後ろに立っていたオッサン、見た目どうりの実力は持っているみたいだ。

「どうする? 買っていくの?」

「ちなみにお値段は?」

「二十万ラドになりまーす」

「ユレイアどうなんだ？」

「普通より少し割高だな。」

「お願いします！」

「そんなに気にするな、先行投資つてやつだ。」

「ちなみに一円と一ラドはほぼいっしょだ。」

「武器も手に入ったことだし、とりあえず魔獣の討伐Cランクを受けるか。」

俺は掲示板の左端にあった依頼書をはがして受諾する。

場所はクザから北へ向かう街道の途中に現れるらしい、依頼書についているモンスターの絵からすると大鷲のようなやつらしい。

「私はギリギリまで助けないからな。」

街道を歩きながらユレイアは言う。

「わかってるよ。」

俺だってユレイアの前でかつこ悪いところ見せたくはないしな。

街道は大人が十人横になっても歩けるくらい広い。まあさつき通りすぎていった荷車を引っ張っていた牛とトカゲを合体させて大きくしたような生き物がいるような世界だから決して広いとはいい切れないがな。

はあこの世界に慣れる日が本当に来るのかな？ちよつとホームシックになつてきた。

「どうしたんだイツキ？そんなに悲しそうな顔して？」

ユレイアは案外するどい、あるいは俺が顔に出やすいタイプかもしれないが。

「少し故郷を思い出していたんだ。」

「故郷は好きか？」

「たぶん俺が思っていた以上にな。」

「そうか・・・そろそろ休憩にしないか？あのユーリイの木の下で昼食をとろう。」

ユレイアがさした方向にはピンク色に色づく花を咲かした木が立っていた。

「桜じゃないか！？この世界にもあるのか？」

「イツキの故郷ではユーリイをサクラと呼ぶのか。きれいな名だな。」

「でもユーリイとユレイアって似てるな。」

「当然だ！私の名はユーリイからとられたんだ。親しい者は私を本名では無くてユーリイと呼ぶぐらいだ。」

「そうなんだ。」

その言葉を聞いて俺の胸に黒いものがよぎる。

「イツキになら許す。」

ユレイアは俺の心を読めるんじゃないか？

「ユーリイ。」「どうした？」

「ご飯にしないか」

顔が自然と笑顔になってしまふのはしょうがない。

九話 出発

昼食をすまして目的の場所につくと案外早く獲物がやってきた、翼をあわせて十メートルはありそうな巨大な鳥だ。

そのまま大きな鉤爪を向けて突っ込んできたのを左に転がって避ける。

「あれにつかまったらかなり痛そうだな」

槍じゃあの高さまで届きそうにないからな、俺の力を使うか。

俺の能力は拘束に特化している、今回もその力を発揮しようと俺はベアンテを放ち巨鳥の腹に巻きつけたまではよかった。だがやつは気にせず空を舞う、当然ベアンテをもっていた俺の体はやつの動きに従い空にひっぱられる。

やつは俺という荷物が気に食わないらしく、いつきに上昇してそのまま俺を地面に振り払う。風が耳もとでびゅんびゅんいながら地面へと向かっていく俺の体がまるで他人事のように感じた。遠くでユーリイが何かさけんでいるがよく聞こえない。そのまま地面に墜落すると鈍い音がして土のかけらがぱらぱら舞う、普通なら全身骨折で死んでいるとこだが不思議と体の痛みは無い。たちあがって怪我がないか確かめても赤のロープのどこにも汚れは無い。まで、なんで汚れてないんだ？あの勢いでたたきつけられて土汚れがないのはおかしいぞ・・・あのロッドマスターは大変なものをよこしてくれました。

「イツキの仇だー！」

俺が地面にたたきつけられて死んだと思ったか（普通は死んでいるが）、ユーリイがそういうとあの遺跡で手にいれていた碧色の剣から透明な気迫が立ち上り、かなりの高度にいた巨鳥にまでひとつ跳びするとその剣を突き立てる。すると巨鳥は内部からばらばらに解体された。

「イツキお前のことは忘れない。」

かつこよく地面に着地して一言きめるユーリイ。

「かつこいいー！サインして」

俺が拍手とともにさういうと、

「そ、そうか？でもまずは友人を弔わせてくれ」

「どんな人なんですか？」

「パツと見はお前みたいな顔をしていて、ちょうどお前のような変わった赤いローブを身にまとっている……ってお前イツキじゃないか！？」

ユーリイはいよいよ万能になってきたな

あれから俺が生き残ったわけを話すとユレイアは俺のローブをじろじろと眺めると、

「どうやら物理的衝撃を緩和する魔法と常に最善の状況を保つ魔法がかけられているな。」

「やっぱすげえなロッドマスター！」

「でも気をつけるんだぞイツキ。そのローブには防刃効果や魔法耐久力は無いに等しいんだからな。」

「なんでロッドマスターはその魔法をかけなかったんだ？」

「簡単だ。まず魔法で負けることは無いし、あいつは接近戦もできたが本来魔法使いは遠距離戦に特化してるからな。それにマジックアイテムはたくさん魔法をかけると一つ一つの効果が薄くなるという性質をもつから、それに使う分を物理的衝撃を緩和する魔法にそいだ方が効率的だと思ったんだろ。」

よく勝てたな俺。

「その剣もなんかのマジックアイテムなのか？」

「正確に言つと魔剣だな。風の属性が付加されている。」

「俺もユーリイみたいに武器をちゃんと使えるようになりたいな」

「まあ慣れだ慣れ。イツキは経験さえ積みばいいとこにいくぞ。」

とりあえずクザにもどった俺たちだが依頼に失敗したので当然報酬はなかった。

「うむ、そろそろ路銀が尽きてきたな。」

「あとどのくらいなのか？」

「だいたい三日分だな。」

「よし俺がかせいでくるよ！」

ただでさえ今までのお金はすべて払ってもらっているので俺はそう提案した。

女のひもになるなんて許されんからな。

「ささつとギルドで稼いでくるわ」

「油断するなよ」

俺はギルドに行きクザ周辺のモンスター討伐の依頼をとった。

なんでも今日戦ったあの巨鳥、名前は balan というらしいが、その巣が近くの岩場にできていて、近くの牧場の家畜がさらわれているらしい。

リベンジと金のためにふるぼつこになってもらおうか。

問題の岩場にたどり着いた俺は、ギアアギアアうるさい鳥どもを見て驚いた。

巣の中には二十羽以上の群れがいたのだ。確かに急いでたから何羽かは見てなかったけどまさかここまでとは。

二度と同じミスはしないように今度はベアンテを投げ放ち翼をおさえ一網打尽にしようと思ったが、半分はベアンテから逃れた。もう半分は怨みをこめてかなり強く締め付けたから気絶をしてしまった。

空に逃げた連中は怒りで突っ込んできたが、軽くよけた後は用意していたベアンテの網でみんな捕まえた。一羽ずつ近づいて頭に槍を突き刺しとどめをさす。心ぐるしいが生きるためだ。

あとは換金部位である一羽に一枚しかない balan の尾羽をむしり取る。

全ての羽をむしりとりギルドに帰ったところにはもう夕方になっていた。

「すみません、モンスター討伐の確認と部位の換金をおねがいしま

す。」

「では指輪をこちらに」右手をさしだすと、小さな機械を受付が指輪にかざす。

「無事バラン二十羽の討伐を確認いたしました。部位の換金はバラン二十羽分なので20万ラドとこちらは報酬の30万ラドです」

お金を受け取り、あらかじめ予約していた宿屋兼酒場にはいるとユーリイが俺を待っていた。

「どうだった？」

「この通り」袋を上に掲げながら答える。

「よし、明日は私の恩人に無事帰ったことを報告しに行かなければな」

「どこにいるんだ？」

「ザルナ王国の首都、エリアノだ」

九話 出発（後書き）

更新遅れてすみません。

なんだか展開が早い気がするのは俺だけでしょうか？

十話 素晴らしき変人たち

首都までは乗り合い馬車で向かった。当然俺とユーリイ以外にも人はいるわけで、なにやら両目を包帯で隠して小声で歌をうたっている人や、ときおり自分の右手を暴れないように必死でおさえつける人、馬車の隅の方向を見ながら何かと会話している人がいた。盲目の人は俺の方向に顔を向けて一瞬ビツクリしたような顔をしたが、俺の方がそれでビツクリしてしまった。

「イツキあの人見るよ、おもさ「今は黙れ！」

道中危険な場面が何度かあったが（すべてユーリイが原因）、三日後無事に首都に着いた。ものすごく疲れた。

「さすがに首都なだけはあるな」

いきかう様々な種族の群れは混雑を極め、あちこちで怒号が聞こえる。

「ここらは首都の入り口であり、たくさんの交易品が取引されているからな。中心部はここより静かだぞ。」

「そうじゃないと困る」

道の両側にたくさんの交易品が売り出されている中をぬうようにしばらく進むとやっと広場に出た。広場には法衣を着た集団が中心部の方向へズラズラと歩いていく。

「どうやらメイ八教の信徒らしいな、ちょうどいい、ついていこう」
なにがちょうどいいか分からなかったが、いずれ分かるだろう。

そのままついて行くと巨大な教会が建っていた。精巧な細工や模様が建物のあちこちに施されている。ユーリイが信徒に続き中に入っていくので俺も続く。

中は外以上に細工がきらびやかにも関わらず、嫌な派手さは全く感じられない。

神々しく荘厳な雰囲気を感じるぐらいだ。

俺も姿勢が自然とピシツとなる。

ユーリイは教会の一番後ろの光が当たってなく、目立たない長いすに座っており俺をみるとこっちにこいと合図するので俺はユーリイの隣に座る。

教会内では神父らしき人が説教壇で説教している。しばらくして説教が終わり信徒たちが帰ると神父がこちらにやってきた。近くで見ると顔にはクマができていて年が感じられるが、その吸い込まれそうな目が強い意思を表している。

彼は俺たちの姿がはつきり分かると、

「まさか、・・ユレイアなのか!？」

「お久しぶりです、カナゼ司教」

「ここにいるということは私の忠告通りにあの遺跡に行くのをやめたのだな、安心したぞ。

お前はこうと決めたら途中で意見を変えないからな」

「いいえ、私は遺跡にいきました。これが証拠です。」

ユーリイは腰の剣を抜いて渡す。

「これは魔剣じゃないか!？・・・確かに製造方法が失われた今存在するという場所はあるがそこしか無いな。生きて帰ってきてくれたことは本当に嬉しいが、あまり両親を心配させるなよ。」

「・・・はい」

すこしシユンとするユレイア。

「まあここまでにしておくか、ところでずっと気にかかってたんだが隣の彼は紹介してくれないのか？」

ユレイアのことしか見てなかった様に見えたが、俺のことも気づいてたんだな。

「彼は私のパートナーでイツキといいます」

「ただいま紹介されました、ユーリイの（永遠の）パートナーのイツキ・チバと申します。」

「なかなかの好青年のようだね。」

ダンディな笑顔でカナゼさんは言う。

「はあ、自覚はあります」

「それにユニークなところもあるみたいだな、いいパートナーを見つけたなユレイア」

「私の目は確かです。」

「君たちは似ているね。その歯に衣着せないあたりが」

カナゼさんは本当に神父さんなんだろうか？というかユーリイとど
ういう関係なんだろうか？俺は疑問に思ったことを聞いてみた。

「私とユレイアの父親は昔いつしよに冒険したなかでね、現役から
退いた今でもよく飲みに行くんだ。」

「私としてはカナゼ司教が父親だったらとどんなに考えたことか！」

「あれもユレイアを気にかけているのだ、あんまりそういつてやる
な。」

困ったように言うカナゼ司教だが、嬉しさで頬が緩みっぱなしでい
つても説得力が無い。

愛すべき親バカ達だな。

「これからどうするんだ？」

「それが特に考えて無くて・・・そうだ！カナゼ司教、イツキを鍛
えてくれませんか？」

「え、聞いてないぞ？」

「私はいいが、彼はどんな武器を使うんだ？」

「イツキは槍を使うんです。おいイツキ、あの槍術で有名な『黄金
のカナゼ』に槍を教わるなんて光栄だぞ！」

「いやだから俺は『イツキ君がそこまで言うなら仕方ないな、早速
明日から修行だ。今から私は師匠だ、崇め、敬え、奉れ！』

こいつらは病んでいる。

十一話 師匠の策略

あの後力ナゼさんじゃなくて師匠の家に案内されて、一緒に食事をとった。

その後ベランダで夜風に当たっているとユーリイが暗闇に現れた。

「どうしたんだ？」「俺達って会って一週間ぐらいだよな」

「なんだいきなり？まあ確かにそうだな。」

「こんなに気が合うやつは初めてだからもう隠し事はしたくないんだ、俺の話を信じて聞いてくれるか？」

「ちょうど聞きたいと思ったところだ、話してくれ」

それから俺は今までに起きたことをすべて伝えた。

「イツキはこっちに来て楽しいか？」

「えっ？」

「私達が出会った時イツキはこっちにきたばかりだったんだろ？だったらイツキは私と一番長く一緒にいるわけで、お前が楽しくなかったら私の責任になるわけだ」

「その点に関しちゃ、向こうにいた時より楽しいよ。」

「そっかそれなら良かった。」

二人でしばらく無言でこちらの星を眺めた。

翌朝から修行が始まった。

「まずは基礎体力だな。とりあえず走るか」

「はい師匠！」

それから街中を走り回った。ある時は路地から人ごみの中、屋根の上まで走った。

ベアンテの力で体力はついていくが師匠の動きは速すぎで視界から離れないようについていくのが精一杯だった。

「体力はなかなかだが、まだ俊敏性が足りないな。明日からずっとこのペースで今日のルートを走るように！」

「はい」

この人は汗一つかいてねえ、バケモンだ！！

「次は槍を使うぞ！」

よーしようやく槍が使える。

「まず槍を構えてみる」

俺はどこかの漫画でみたように槍をかまえる。

「なかなか筋がいいな。じゃあそのまま実戦といくか」

えっ！？ステップアップしすぎじゃないっすか？

師匠は黄金色の槍を掴みかかってきた。

結果は2秒でついた。俺がかまえていた槍を師匠は軽くはらって遠くに飛ばし、首に穂先を突きつけた。

「槍での戦闘経験はゼロと」師匠は片手でメモをとりながら言う、

なんかむかつくな。

「さすがに今のは無いんじゃないんですか？」

「ほう、お前はさぞかし実戦で死にたいと見えるな？」

確かに実戦では油断も隙もあったもんじゃないからな。

「すみませんでした。師匠」

「・・・まあいいだろう」

それから毎日修行が始まった。ユーリイは朝の鍛錬を俺と一緒にして、そのまま昼からギルドで依頼を受けていつてしまう。俺は昼から師匠と槍での特訓をしたが、師匠はああ見えてメイ八教のお偉いさんだから師匠が用事でいない時は一人で槍の練習を繰り返した。突きから払い、石突での打撃から上からの斬撃をゆっくりやっていき一回すむごとに動きを速くしていく。師匠は最終的に一秒かからないくらいが合格だといっていた。

その日は来るのだろうか？

一カ月後ようやく師匠に合格を出された。といってもさすがに一秒以内は無理で記録は1秒5だったが師匠が、

「まあ少しは速くなったがまだまだだな。後は経験だ、実戦を積み！実戦を！ちょうど一週間後にこのエリアノで五年に一度の武道大会がある。出る！」

「いろいろツツこみたいところがありますが師匠、これを狙ってましたね？」

「なんのことやらな？」

しらじらしい真似をしゃがって、この確信犯が！

とは言っても俺が師匠に逆らえるはずもなく結局エントリーするこ
とになった。

なんでも魔法やらなんでもありの大会らしい。

ユーリイにもどうするか聞いてみたが、

「私が出なくて誰がでる！」

と予想通りやる気満々だ。

もちろん俺はベアンテも使うぞ！むしろ使わないと勝てない。

十一話 師匠の策略（後書き）

なんだか今回はシリアス？を入れてみました。

自分としてはこれからも時々シリアスを入れていきたいです。

ここまで更新してこれたのも読者の皆さんのおかげです！ありがとうございます！

十二話 嫌な予感はず当たる

一週間はあっという間に過ぎ、いよいよ大会の日になった。

天気は晴天、闘技場の周りは活気に溢れている。俺は観客席の人の多さで緊張して鬱になってきている。それに待合室にいる人達の強そうなこと強そうなこと。

やたらに傷がある人や、おどろおどろしい大きな斧をもった人がひしめいているし、発せられる威厳が違う。

「今日勝てる気がしないな。」

「何を言っているイツキ？やる前からそんなことを言っては勝てるものも勝てないぞ。あつ、ほらもうすぐ20人ずつの総当り予選だぞ。行つて来い！」

しゅしゅ闘技場に向かう。

全員が闘技場に揃うとこの大会の解説者が舞台に現れた。

「ルール説明をします。殺しは認めません、ギブアップかリングアウト、戦闘不能と思われたら審判がとめます。まずは恒例の総当り戦だ！！残り二人になるまで初参加のみんなも常連のみんなも生き残ってくれ。では開始！！」

いっせいに武器をかまえて雄たけびをあげる選手たち。辺りを見回しても杖らしきものを持った魔法使いは見当たらない、どうやらあまり魔法使い人口は多くないみたいだ。だいぶ気が楽になった俺は日課の走りでだいぶ鍛えられたスピードで一気に相手に向かい槍で相手の武器を跳ね飛ばし、石突で後頭部をたたいて眠らせていく。あつという間に九人倒したらもう目の前には一人しか残ってなかった。

そいつをよく見るとなんと、馬車に乗っていた目を包帯で隠していた男だった。

「強いんだな。」

「あんたも倒した人数は一緒じゃないか」

「ははっ、確かに。名前は？」

「イツキ・チバだ。あんたは？」

「ナーガだ」

そのあと軽く飲みにいこうと約束して俺たちは別れた。観客は拍手喝采で俺たちを見送った。

ユーリイの試合が気になって見にいくと、ちょうど最後に残ったもう一人の男にナンパされたのがイラついたのかそいつの頭を剣の峰でうつて気絶させたところだった。

そんなこととしていいのかと思ったが心配は無用だった。

「先ほどユレイア選手が最後に残った男を気絶させましたが、あれは正当防衛なので不問とします。かわいいは正義なのです、ハイ。」

大部分の男の観客はうんうんとうなずいていたが、女性の観客はいまいち納得してない様子だった。

「どうだイツキ見てたか？」

「うん、最後だけ」

「で、勝ったんだな？」

「うん」

よつしとユーリイはガッツポーズした。かわいいなあ

「あ、俺これから飲みに行くから」

「えっ、今日は祝勝会じゃないのか？」

「ごめんな、先約があるから。」

「それは、女か？」

ユーリイは真面目な顔をして聞く。もしかしてやきもち妬いてんのか？だとしたらこんなに嬉しいことは無い！ここはひっかけてみるか。

「気になんの？」

「ああ、大会の参加者を脱落させるために女をけしかけるのはよくある事だからな」

「ああ、そう。」

ちよつと落ち込みながらナーガと待ち合わせた酒場にいった。中にはたくさんさんのガラの悪いおっさんがいた、働けよ。辺りを見回すとナーガがカウンター席からこつちに向かって手を振っていたのでそのまま隣の席に座る。

「どうした？落ち込んでいるようだ？」

「あんたは目が見えてないのにそんなことも分かるのか？」

「気配をかんじるのがうまいんだ。まあ感情はなんとなく分かる程度ぐらいだが、イツキお前の気配には驚いたぞ」

「どうしてだ？」

「森そのものが歩いていているかのように感じたんだ。初めて馬車に乗り合わせたときは驚いた」

まあ、たいていの植物は使役できるし、生やせるからな。

俺たちが話しているのを見ると店員のおばちゃんが出てきた。

「あんたらは今日予選を勝ち抜いた人たちだね、おごりだ。」

そういつておばちゃんが二つビールをさしだした。

「あんがと」「恩にきる」

二人でグビグビやる。

「あんたたちも凄かったけど、あの女剣士も凄かったね。たしかコレイアっていったっけ」

「それ俺の知り合い」

「本当かい！？でももう一人は知らないだろ、あの選手は予選最後の試合だったからね。」

「誰？」

「なんだか変な仮面をかぶって参加しているあんた以上の槍の使い手だよ。なんたって開始3秒で10人をたたきのめしたんだ！」

そこまでの使い手がいたのか、気になるな。

「もう少し何か特徴はないの？」

「そういえば、金色の槍をもっていたね。」

あれ？たしか知り合いがそんな槍をつかっていたような・・・まさかな、そんなはずは無い。あの人もそこまで暇人じゃないはずだ、そう信じて。

「まるで黄金のカナゼみたいだな。一時期は真似するやつが多かったけど、十年以上たった今やると逆に新鮮だな。」

俺の考えを無視してふざけて答えるナーガ、頼むからそれ以上この話を膨らませるな。

「ま、まあ当たるのはだいぶ先になるだろうし、今は関係ないな！」

「何をいつているんだい、次あんたが戦う相手じゃないか」

え・マジで！？

きつと大丈夫だ。そんなはずは無い！まず勝てる気がしない

十二話 嫌な予感はず当たる（後書き）

戦闘描写短っ！

と思ったかたもいらっしやるかもしれませんが、僕もその一人です。

あと新キャラ登場いたしました、これからも増やしていきたいです！

十三話 師弟対決

次の日

朝起きると師匠がこそそこそと何かの準備をしていた。なんだか嫌な予感がしたので一応確認してみた。

「あれ師匠、今日は何も用事が無いって言ってませんでしたか？」

「ハッ！なananなんだイツキこそこんなに早く起きて？」

みるからにおかしい、完全に目は泳いでいるし挙動不審だ。

「俺は日課のランニングですよ。で、師匠はどこに？」

「実は急に上に呼び出されてな。それよりイツキ！今日のお前の相手は手ごわいぞ。本気で来い、じゃなくて本気でかかれよ！」

案の定その後闘技場の舞台上上がったとき待ち構えていたのは、変なウサギの仮面をかぶった師匠だった。

「……がんばってくださいーい！！カナゼ司教！……」

応援席からメイハ教のシスターたちの声が飛ぶ。

「優勝賞金一千万ラドを教会に寄付しろ！もし負けたら辺境の教会に飛ばしてやるからなカナゼ！」

白い髭の生えた爺さんもそう叫ぶ。後からきいた話だがあの爺さんはメイハ教のトップ、つまり教皇様らしい。師匠の俺にばれないように軽く手を振る様子が微笑ましい。

「では始めます！」

師匠は緩んだ顔をキツと本気の顔に変えてこっちに突っ込んできた。俺はなんとか日々の師匠との訓練のおかげでついてこれるが普通の人には見えないだろう。

師匠の槍の穂先があらゆる方向から襲ってくるかと思えば、次には槍を振り回してくる。

穂先が腕をかすめて軽く血が流れていく。やはり純粋な槍術だけじゃ負けるな

俺は師匠の横なぎの一撃を身をかがめてかわすと同時に地面に左手をつける。

師匠はそのまま俺を突き刺そうとしたが、それより速く俺の生やした木がぶつかる。

そのまま師匠は2メートルほど吹き飛ばされた。やったかと思いきや師匠は普通に立ち上がった。

「衝撃の瞬間後ろに飛ばなければ危なかったぞ。それよりも何だその能力は？魔力が感じられなかったから魔法ではないようだな」

「敵に教えるとしても？（ていうか俺も知らん）」

「ふん、確かに。自分で謎をといてこそおもしろいというものだ。」

「じゃあ行きますよ」

俺は舞台上を走り回り次々と草木を生やしていった。草もシンの森にあつた獲物を捕まえる植物、シバリ草を生やしていきあつという間に舞台は森林と化した。

だがいきなりドッカンという音と共に舞台の真ん中から師匠が宙に飛び出した。師匠は空中で俺の位置を把握して着地と同時に、こんな物邪魔だというように俺の生やした木や草をぶった切りながら俺の方向にすごいスピードで向かってくる。

そして慌てる俺が必死に出した一突きをかわして俺の首に穂先を突きつけた。

額から汗がタラーと流れていくのが分かった。

「ま、参りました」

「よろしい！相手との実力差がわかれば十分合格だ。」

「もう演技はしなくていいんですか？」

「な、何のことだ少年？また会おう」

そういつてこそこそと逃げ帰る師匠をよそ目に俺は強くならなきゃなと思った。

「カッコーいいー、カナゼ司教！」「」

そして女の子にキヤアキヤア言われてえなとも思った。

十三話 師弟対決（後書き）

主人公弱っ！！と思った人もいらっしゃると思いますがそのうち強
くしていくので平気です。

十四話 ユレイアの戦い

外でユーリイとおちあうと

「相手が悪かったな。まさかあんなに強いやつがいるなんて知らなかったぞ。」

「えっユーリイのよく知っている人だよ」

「誰だ？まさかイツキか？」

「いやさつき俺はそいつと戦ってたんだぞ」

「さっぱり分からん」

あ、この子アホだ、俺はユーリイの説得をあきらめた。

「それよりも次はユーリイとナーガの戦いじゃないのか？」

「知り合いなのか？」「ちよつとな」

「どつちを応援してくれるのか？」

「友情は愛情に及ばない」

「ハハッ、期待してるぞ」

軽く手を振りさっそうと去っていく姿は俺以上に男前だ。

観客席に移動するとナーガが舞台の端から登場した。最初の試合同様武器を持たずに登場し、俺を見かけると手を振るので軽く答えた。少し遅れてユーリイが入る。ユーリイもこっちを見ると軽く手を振ったので、俺は投げキッスで答える。会場の男たちがうらめし気に見るが気にしないことにする。

「試合開始！」

ユーリイが剣で軽く牽制しながらナーガに近寄る。

ナーガは拳を上に掲げて地面を思いっきり殴りクレーターをつくった。

どっかの漫画みたいな真似をして辺りは土煙があがる。ユーリイがわずかにひるんだ隙を狙って死角から蹴りをくりだすが、ユーリイは剣の鞘で受け止める。

「クソッ、なんてバカ力なんだ。」

「俺は魔力を体にとりこんで戦う魔闘士だからな」

「だったら・・・私だって魔剣士だ」

そっぴいながら手に持つ魔剣に風が纏わりついていく。

「こいつはやっかいな相手だ、まだ魔剣を使うやつがいるとはな。」

ナーガも同様に魔力を手にくめていく。

そのまま二人はぶつかり剣と拳を交わすとあたりに衝撃波が巻き起こる。ユーリイは剣を左になぎ、ナーガを攻撃しようとするがそうはさせじとナーガも軽くかわす。だがそれを見越していたのかユーリイは急に剣先を変えて下から切り上げる、ナーガは両手を交差させ剣を防ぐが剣にくめられた風の勢いは防ぎきれずそのまま空に吹き飛ばされる。

宙高く飛ばされたナーガをユーリイは面白そうに眺め、お得意の氷魔法で宙を浮いているナーガめがけ氷塊を飛ばした。もちろん防ぎようの無いナーガは氷塊にぶつかりリングアウトした。

・・・そこまでやりますか普通？

ワアアアと歓声が起こり闘技場は熱気に包まれる。

ユーリイの知られざるドSぶりに気づかされた俺はこれからの付き合い方について考えさせられた。

控え室から出てきたユーリイと一緒に外へ出ると師匠が待っていた。ちなみにうさぎの仮面は着けていない。

「お疲れ様ユレイア、しばらく見ない間に強くなったな。」

「まだまだですよ」

謙遜しながらユーリイも少し嬉しそうな表情をしている。

「イツキお前があんな力をもっているとは思わなかったが、まだ能力の使い方が幼いぞ。自分の生やした植物のせいで死角を増やすとは笑止！もつと効率の良い戦い方があったはずだぞ！」

「すみません師匠。」

確かに今考えるともつといい手があったように思える。ベアンテで

師匠を捕えてボコボコにするとかもあったし、まず俺がこの能力を把握しきつてないのが一番のネックだな。

本当師匠には頭が上がない。

「でも序盤の槍術はなかなかだったぞ、一応私の動きは見えていたようだしな。」

「ありがとうございます。てかやっぱり師匠だったんですね」

「あ、ああ。まさか気づかれているとは思わなかったがな。」

「バレバレでしたよ」「気づかなかった。さすがカナゼ司教だ！」
隣で驚きと納得のいった顔をしているユーリイはほうっっておき俺は気になっていたことを師匠に聞いた、というかある意味一番大事なことだ。

「師匠は俺との戦闘中魔力が感じられないと言っていました、俺にも魔法は使えるんですか？」

「非常に言い難いんだが・・・お前は魔力を持ってないから魔法使いになる確率はゼロだ！」

「はつきり言ってるじゃないですか！！」

「だが事実だ！」

「カナゼ司教いくらイツキにはまったく才能がないからといって、それは言い過ぎでは・・・」

「まあ少し言い過ぎたかも知れん、お前の悲しむ姿が見たくてな。」

「師匠、頼みますから最後の言葉だけは冗談だと言ってください！」

「冗談に決まっているだろう。」

なんだか信じられなくなってきたな、最初は人格者だと思っていたのに実はこんな人だったとは。

しかしやはり魔法が使えないとはかなりショックだ。だって普通異世界にいったら魔法を使いたいのが男の子だろ。

「まあ、魔法使いなんて人口の一割程度だからそんなに落ち込むことはないぞ。冒険者ギルドのAランク以上は約八割が魔法使いだな。」

励ます気ないなこのオッサン。

十五話 集団の恐怖！！

少し落ち込んだがいつまでも悩んでいても仕方無い。

「ちよつと気分転換に出かけてくるわ」

「イツキ、夜までには帰ってくるんだぞ」「わかったよ、ママ」

「バカ／＼／＼／」

俺はそのあと街を歩いてみた。

よく考えてみると俺はこの街に来て以来、街の景色を全く見てないな。朝のランニングで見る景色はゆとりが無いからカウントはしないことにしよう。

ちよつと大通りに出てみるとたくさんの人種がウジャウジャと歩いていた。

猫耳から角、悪魔らしき翼や天使らしき翼、尻尾にミイラと個性溢れる光景が広がっているのを見るとなんだかテンションが上がってきた。

しばらく大通りの武器屋や魔法ショップを見ながら暇をつぶした後広場に行き、備え付けのベンチに座る。

そのままぼんやりしていると視界の端から鎧を身に着けた屈強そうな連中が俺に近づいてくるのが分かった。

「あなたがイツキさんですね？」

先頭に立つ到底戦えそうに見えない体の、ハンサム糞野郎が話しかけてきた。

完全に俺の私情は入って無い、客観的な意見だ！いや、本当に！

「あなた達は？」

「申し送れました、私達はユレイア親衛隊です！」

あれ、最近俺聞き間違いが多くて困るな。年をとったということかの。

「すみませんよく聞き取れなかったのでもう一度お願いします。」

「私達はユレイア親衛隊です！ちなみに私が親衛隊長のユンです。」
「よろしく」

「では率直に言わせてもらいますが、ユレイアさんから離れてください！」

「嫌だ！」

「わがまま言うな！私達はただ遠くで見ただけで良かったんだ。ユレイアさんは男嫌いで有名だったからな。ところが最近あのユレイアさんに付きまとっている男がいるというじゃないか。……お前が今すぐユレイアさんの元を離れば事は穏便に済むぞ」

「もし断ったら？」

「ユレイアさんの元へ行けないようにボロボロにするまでさ」

先頭の男率いる親衛隊が次々に自分の武器を抜く。

「お前たちがそういうつもりなら仕方無いな」

俺が槍を構えるとさっきの俺の戦闘を見たのか、親衛隊の顔に緊張が走る。

「逃げる！！」

颯爽と逃げ出す俺

「えっ！？……ま、待てー！！」

あいつらしつこく付いてきやがる。

俺の毎日の地獄のランニングコースを走っているというのにたいしたやつらだ。

というか親衛隊って何人いるんだ？逃げる度に人数が増えていき、もう百人を超えていると思うんだが。

街路の三つ目の曲がり角を行くとその先にはすでに親衛隊が待ち受けていた。

幸いまだ気づかれては無いがいつ気づかれるかは時間の問題だし、後ろからも追ってきている。

どうする俺！俺にできることは？

……植物関連しかないな。道の端には3メートルぐらいの街路樹

が植えられているから、これをどうにかして隠れないと・・・
とりあえず木に左手で触れてみるが、分かるのは木が喜んでいることだけだ。

もう時間も無いし観念するかと思い、あきらめて力なく木によりすがった時、その木は体を支えてくれずそのまま目の前が真っ暗になった。

いきなりの事で焦ったが、どこからか声が聞こえてきた。

「おい、あの男がこっちに来なかったか？」

「いえ、こちらには来てませんが」

「くそっ、おいあつちの通りを探すぞ！付いて来い！」

「「「分かりました」」」

そして足音と共に人の気配が消えていった。

まずここはどこなんだ？とりあえず辺りの様子を探るために手を伸ばすと、ゴツゴツした触感の壁らしきものを感じた。

あれ？でもこの感触はどっかで触ったことがあるぞ。・・・そうだ！木の幹の感触だ！

てことは、あの状況から考えるとここは木の中か！？

試しに目だけを幹にあてると外の様子が透けてちよつと面白い。

でもこのまま木の中に住むなんて勘弁してもらいたい。すると俺のそういう気持ちを理解したのか木が俺を外の方向に押し出して、無事脱出完了！

昼までに試合は終わったし、だいたい今は三時ごろってところだろう。

うざいやつらは消えたし、このまま新しい能力を発見するのもいいだろう。

・・・そういえばまだ図書館に行つてなかったな。

異世界の図書館だからきつと俺の能力開発の役に立つ本もあるだろうし行ってみるか。

十五話 集団の恐怖!!（後書き）

ドラクエジョーカー2にはまっている作者ですが、これからもよろしく願います。

十六話　また図書館で

入館料が少し必要だった。が蔵書数は50万以上ある大規模なものだった。

中に入ると真ん中が三階分の吹き抜けになっていて学者らしき人があちこちで見られた。

読書家の俺はここに今まで見たことの無い書物たちが眠っていると
思うと興奮してくる、ハアハアハア。

とりあえず興味が惹かれたタイトルの本を一冊ずつとっていき近くの
テーブルに座り見始める。

『魔獣の生息地とその生態』なんかは興味深くておもしろかった。
なんでも魔界という場所があり、時折魔界の扉が開かれたときこの
世界に住む魔獣の何倍もの強さの魔獣が現れるらしい、めったにそ
んなことは起きないらしいが。

なかでも一番は『危険な植物たち』その攻撃手段と生息地』だ！
俺の能力を使えばこの植物たちが普段は絶対生息しない場所に突如
発生することになるな。

なんて愉快なんだ！

花の花粉を吸い込むことによって幻覚を見せるムゲン草や、植物型
のモンスターを俺は操られるだけ操れるなんておもしろすぎる！

魔法が使えなくてもこの能力があれば十分だ、少し前のおちこんで
いた気持ちはすっかり晴れた。

さっそく帰って師匠に悪夢でも見せようかな。

師匠の家に帰るとパーンという音と共に、

「今日はお前の惨敗会だ！おめでとう！」

と師匠がクラッカーらしきものを鳴らして俺を迎えた。

「今日はお前の好きなものを揃えたぞ、さあドンドン食べる！」

俺はこの腹ただしい状況をひとまず置いて、先にテーブルについているユーリイにこっそり事情を聞く。

「なんでもあれからメイハ教のシスターに散々もてはやされたらしくてな。すぐく機嫌が良くなって今に至るというわけだ。」

「あの爺は調子に乗ってるというわけだな」

「まあ、そんなところだな」

あの爺には一度きつい制裁を加える必要があると判断した！年甲斐もなく女どもの言葉にのせられるとは愚かな。

「おい！今日はお前のための会だぞ、主役がそんなところにいてどうする！さあ来い」

「はい師匠、今行かせていただきます」

今だけ従ってやるよ糞師匠！だが明日貴様は後悔することだろう。

その後宴会は深夜まで続いた。師匠の自慢話がほとんどですごくつまらなく、途中ユーリイは明日の試合のためにさっさと退散してしまった。

「師匠も明日は試合でしょう、さっさと眠りましょう」

「う、うむそうだな」

そっぴいながら師匠を寢所に送る。

師匠は案の定酒の影響もあってかすぐにぐっすりと眠り始めた。

俺が待ちに待ったシヨウタイムがやってきた。

「あの死ぬほどつまらない時間を味あわせた恨み！思い知らせてやる！」

十六話 また図書館で（後書き）

主人公はなかなか黒いです。

あと最近お気に入り登録が増えました／＼／＼／

すごく読者の皆さんには感謝しております。

これからもこの小説を良くする為にこうしたほうが良いなどの意見がありましたらどうぞ！！

十七話 俺の怨み

翌朝

闘技大会の決勝戦ということで闘技場にはたくさんの人で溢れ、各国の要人らしき人たちもちらほら見える。

「みなさん！これからお待ちかねの決勝戦が行われます！まず華麗な戦闘と容貌で男性諸君をとりこにしてきたユレイア選手！」

舞台の端から解説者のせりふが気に食わなかったのか、機嫌が悪そうに登場するユレイア。

「ユレイアさ～～～ん！」「」「」「」

親衛隊も来ていたらしく一際大きな声が聞こえる。見つかるためんどくさいことになりそうだな。

「というか正直言っとうざい！！」

「続いて数年前冒険者業界から引退したが、未だ現役と変わらぬ槍の腕前でありメイ八教の司教でもあるあの『黄金のカナゼ』だ！・・・」

しーん

「さあどうぞ出てきてください！・・・」

脇から係員らしき人が出てきて解説者に何か耳打ちをした。

「えっ！？本当か？・・・えっと、ここで皆さんに残念なお知らせがあります。どうやらカナゼ選手は体調をくずし試合に出れる状況には無いようです。というわけでユレイア選手は不戦勝です。優勝おめでとうございます！」

「ええー」「」「」

今度はメイ八教のシスターさんたちがっかりした悲鳴をあげる。それとは対照的に俺はにんまりとした笑みを浮かべる。

「クソッ、イツキめ！」

ベッドにベアンテで縛り付けられて、更に痒みを催す草とマヒ草がびっしり生えていて苦しそうにしているカナゼの姿がそこにあった。

「優勝おめでとうユーリイ」

「なんだかすつきりしないけどな。それよりカナゼ司教は体調を崩したらしいじゃないか、見舞いに行かなくてはな」

「ああ、そのことだが師匠はひどい風邪をひいたらしく他人にうつしたくは無いから絶対見舞いに来るな！と言っていたぞ」

「そうか、ここを出るまでに挨拶したかったんだがな」

「まったくもって残念だな、一度でいいから会って話がしたかったんだが」

「……なぜお前がここにいる？」

飄々とした感じで仲間づらしたナーガがそこにいた。

「ああ、ナーガはなかなか見込みがあるから私達の仲間にすることにした。」

「これからよろしく」

「貴様は俺とユーリイの仲を引き裂く気か？」

「ユレイア様は我が神だ、そんな気は起こさんわ」

「ここにも信仰者が一人いた！？」

「戦いに身を委ねていた日々にある日突然一筋の光が射した。」

「なんか語りだしたよ気持ち悪い」

「そのお方は私の思い上がった心を吹き飛ばし、私に手を差し伸べられた。」

「たしかにユーリイが吹き飛ばしたな。」

「その御手をどうして拒めようか」

「ただ私はスカウトしたただけなんだがな。」

「なにやら語りモードにはいつているナーガはいったん無視しよう。」

「あの、俺行きたいところがあるんだが」

「どこだ？」

「とりあえず危険な植物がいっぱいあるところがいいな」

「ははっ、一般人が言ったら自殺願望に聞こえるが、どうせお前のことだから能力に関係しているのだろう？」

「ああ」

図書館に行った後、いろいろ実験してみたがどうやら俺の能力では一度左手で触れたものしか生やせないようだ。

それにこの世界には植物は500万種以上あり、いちいち生息地に探しにいっていたらきりがないと俺はかんがえたのだ。ちなみにベアンテは俺固有の技だから関係無い。

「なら北の秘境という手もあるが、あそこはかなり遠くて危険だからな。大陸の中央に位置する魔法都市レイドが妥当なところだろう」「えっ！？都市部に植物があるのか？」

「あそこは魔法薬や魔法の研究の為に巨大な植物園があるからな。」

「へえ〜」

「目的地は決まったな！さっそく食糧の調達に行くぞ！！」

「おいっ！！そこでラリッてる奴も行くぞ！」

「はっ、ユレイア様は何処に！？」

十七話 俺の怨み（後書き）

感想を・・・ください

十八話 迫る（前書き）

なんだか主人公がどんどん強くなっていきそうな今日この頃。

おかしい、こんなはずでは！？

十八話 迫る

「なあ、どう思うイツキ？」

「それでいいんじゃないか」

「適当に言うな！これは世界平和のための第一歩なんだぞ！！」

「・・・宗教をつくることか？」

「ユレイア様という唯一絶対神を崇拝する宗教ならそうなって当然だろう？」

おかしいことを言い出したナーガに俺は何度目かわからないため息を漏らす。

「あのなあ、ナーガ。まず神なんていないぞ」

「イツキの世界では神はいないのか！？」

ユーリイが驚いたように俺に訪ねる。

「えっ！？なるうとした人ならしっているけど、俺はまだ会ったことないから完璧には信じていないぞ」

俺の頭の中で少年漫画に似合わない高笑いする黒い主人公を思い浮かべる。

「あのなイツキ、こつちの世界には神が実在するんだ。そつちの世界はどうだが知らないが十以上の神は実際に確認された歴史をもっているんだ」

「ガチですげえな」

「そしてその神を深く信仰することで人は神から力を受け取ることができる、それが神の存在のもう一つの証明でもあるな」

「てことは、師匠も」

「もちろんカナゼ司教も神力を持っているぞ、イツキとの戦いでは使わなかったがな」

「更に師匠は魔法も使えるんだろ、無敵じゃないか。」

「いや、神力か魔法のどちらか一つしか生物はもてないんだ。それは古くから定まっいて例外は無い。」

いろいろあるんだなこの世界は

日が暮れかけていたのでその日は森の中でキャンプをすることになった。

「ユレイア様、今夜の夕食でございます。」

「ああ、ありがとう」

「ほら飯だ受け止めるや、イツキ」

「ちよっ、投げんな！」

なんだがユーリイのときと対応違いすぎることは無いか？

不満を持ちつつもそこらの獣肉の骨からとったスープとパンを食べ始める。

・・・米が食べたい。

飯を食べ終わった後は焚き火の前で俺の相棒である槍をぼろ布で磨く。

光沢が出るまでじっくり磨いてたら興味深そうにユーリイが近寄ってきた。

「やけに槍を大事にするな」

「この世界に来る前まで武器なんか持ったことは無かったし、自分の初めての武器だからよけいにな」

「私も幼少のころ初めて父親から剣をもらったときは嬉しくて寝るときも離さなかったからわかるぞ」

「ずいぶん物騒なぬいぐるみだな。」

「ユレイア様の幼少のころの話が気になります」

夕食の後片付けをしていたナーガが急に混じってきた。

「たしかにユーリイの過去は知りたいな」

「そうだなこれから冒険する仲間だから言っておくのも悪くないな。」

「さあユレイア来い！」

「わかりました父上」

剣を片手に持ち振り下ろすがあっさりと父上に受け止められてしま
う。

「ユレイア！剣は両手で握め！」

「でも父上は片手で」

「お前にはまだ早い！そらっ、隙だらけだぞ！」

これもまたあつという間に剣を吹き飛ばされてしまう。

「もつとよく相手を見ろ！体勢は低めに、隙を見て剣を振るえ！」

「はい父上！」

「よし朝まで打ち合いだ！」

「はいっ！！！」

「えっ！？ユーリイはその時何歳？」

「四歳だが？」

「ちなみに最後のお父さんの言葉は実行したの？」

「当然だろ。七歳までは毎日このパターンでそれから先はかなりい
ろいろな場所に連れてかれたな。餌に飢えた狼の群れの中とかな」
おそろしい経験を積んできたんだな、俺の師匠がものすごく優しく
思える。

「さすがユレイア様だ！！」

なにがさすがなんだ！？そしてユーリイも照れるな！

「なんだか気疲れしたから、そろそろ眠るか？」

「ああ夜更かしはユレイア様のお肌の天敵だから」「そうするか」
俺は近くの木に左手を置き、その隣のもう一本の木との間にハンモ
ックをつくる。

もちろんかなり寝心地がよくしてある。

そのまままったく曇りの無い夜の星を見ながら寝た

同刻

「大変です教祖、報告によりますとついにあのシンの森の遺跡から生還者が出たようです！」

初老に近い灰色の修道服を纏った男が重厚なつくりのドアを蹴破るように入り、教祖と呼ばれた端整な顔立ちの黒髪の青年に報告をする。

青年は机の上に積まれた書類を端に寄せて話しを聞く体勢をとる。

「数百年振りに生還者が出たか。してその生還者とは？」

「なんでもエルフと見間違うほどの美人と怪しげな赤いローブを身にまとった男だそうで」

彼はそれを聞き面白そうに笑う。

「なんだかおもしろそうな話をしてるジャナイ」

「ちょうどいいとこに来たなローグ」

まるで聖職者に見えない赤い髪をして耳に何個もピアスをつけた男が眠たそうにドアから現れた。

「また面倒事だったらお断りジャナイ」

「今回はお前も興味がありそうな話だぞ、なんたって魔導具がらみだからな」

「本当かい！？だったらまたコレクションが増えるジャナイ！早速殺りにいつてくるジャナイ」

「やつらは中央部に向かっている、おそらく行き先はレイドだろう」

「ああ、楽しみジャナイ」

「あまり民衆は殺しすぎるなよ、情報操作が面倒臭くなるからな。」

「そういうのはそっちにまかせたジャナイ、あと一人助手を連れてくジャナイ」

教祖はため息をついた。

十八話 迫る（後書き）

作者は読者分を栄養に生きております。

無論、死ぬまで！

十九話 魔法都市（前書き）

ついにPV18,000を超えました!!

目指せ!!PV19,000!

十九話 魔法都市

俺達は（時計をもっていないので分からないがおそらく）朝十時ごろにレイドに着いた。

「魔法都市とはきいていたがまさかここまでとは」

地上には百メートル近いドーム上の建物がいくつも並んでいてその脇にはたくさん塔がある。更に上空にはたくさんの小型の魔獣が行き来している。

「あれは魔法使いがよく利用する連絡用魔獣でな、なにしろこの広さだから常に飛び回っているというわけだ。」

「あのドーム型のは？」

「あれは一つ一つが研究用の実験棟だ。もちろん私達が行く植物園もあの中の一つだ。」

「ユレイア様失礼ながらどれが植物園のですか？」

「……………あれだ！」

「ぜったい適当に言っただろ！」

このままじゃ見つけるのにどれくらいかかるのだろうか？なにしろドームの見た目はすべて同じでここの連中はどこにあるかと聞いても、

「そんなことを教える暇があるなら、僕はこんなに急いでない！」

「私には代わりがいるから」

「そんなことより、こいつを見てどう思う？」

「こいつら……すごく……役立たずです。」

「こうなりや、二手に別れて搜索だな」

「普通三つに分かれないか？」「いい案だなイツキ！さっそくじゃんけんでもするか」

ナーガ貴様も俺と同じ考えだな。

『しかしユーリイは俺と一緒に行くんだ!』

『ユレイア様は私が守る!』

「「「じゃんけんポン」」」

俺、グー。ナーガ、グー。ユーリイ、パー。

「よし、これで二手に別れたな。さっそく搜索開始だな!」

「「やり直しを要求する(します)！」」

「何を言っているんだ? 一度決まったことだろ、では日が暮れる前にまたここに集合な」

そういつて俺達の話の聞かずに人ごみの中にまぎれていつてしまった。

俺達は視線をかわす(ナーガは見えてはいないが)、そして二人同時にため息をついた。

しかし落ち込んでいても仕方ないので、とりあえず植物園を探すことにした。

とは言っても一つ一つのドームの中を覗いていくだけだが、なにぶんレイドは大陸一の魔法都市なのでとにかく広い。三つめのドームを見終わったところで日はすっかり昇り、ひとまず昼食を食べることにした。

たくさんのお店が立ち並び通りで外見が一番よさそうな酒屋『記憶の片隅』に俺達は入った。

いかにも魔法使いらしいひねくれたネーミングだな。

さすが魔法都市なだけはあって店内にはたくさんの魔法使いらしき人がいたが今まで俺のような赤いローブを着ている人に出会ったことが無いらしく、俺を珍しそうに見るがもう慣れっこのので気にしないことにする。

物珍しさに店内をキョロキョロ見回すと店内の空気に似つかわしく無い少女がいた。

「おいナーガ、あそこにいる学生らしき子は何だ？」

「ああ、あれはレイド中央魔法学校の生徒だよ。あの揃いの服が目印だからすぐ分かる。」

元の世界の制服とはやはり違い、魔法使いの青いローブを着ていてフードには何かの魔獣の毛皮がつかわれているようだ。

すると俺の視線に気づいたのかその子がこっちにやってきた。

近くで見るとパツチリした目の可愛い少女だった。べっ、別にロリコンじゃないんだからね！！

「すみませんあなたのローブどこで買ったんですか？」

「いや、もらいものだけど」

ロッドマスターのな。

「大変珍しいですね、赤いローブなんてめったに市場にも出回りませんよ」

「何でだ？」

「知らないんですか？」

「あいにくね。」

「はあ、いいですか！まず魔法使いが作る魔導具にはその製作者の特性が出ることは知っていますね？」

「うん」

話をいちいち止めるのもめんどくさいので適当に相槌をうつておう。

「で、その特性の効力などで製作者の実力が分かりますが、顕著に分かるのはその色です。」

「へえ〜」

「でその色は青から黄色、緑、紫、赤という順にこめられた魔力が強くなっています。」

「だからか。みんなが驚いていて、今まで赤いローブを見たことが無いのは」

「そういうことですな。」

ほへ、知らなかったな。

「おい、イツキちよつと来い」

「何だナーガ？」

「いいから」

俺はしぶしぶナーガの話を聞くために近くに寄る。

ナーガが俺の耳元によると酒場の女性たちが、

「キャツ！こ、こんな所で」「暑いわね」

と騒ぎ出しさっきの女の子も頬を赤らめている。断じて違う！！止めてくれ！！俺はユーリー一筋だ！！

「おいさつさと用件を言え！」

「何を怒っている？まあいい、さっきお前のローブ姿を見た客が裏口から出て行った。なんだか嫌な予感がするからとつと出るぞ」

「確かにあやしいな。でもどうして分かったんだ？」

「昔から癖だな。新しい場所に行く際は、そこにいる人間全員の気配を確認しておくんだ」

「ナーガは用心深過ぎだが、今回は役にたったな。こうもしてられんからさつさと出るか」

俺達は追っての存在も考えてわざと人ごみの中に入ったり、脇道に入ったりした。

十九話 魔法都市（後書き）

アイディアはあるのに文章にできない！
小説って難しい！！

基本設定（前書き）

まだまだ説明不足かと思ったのでここらで一度説明しておきます。

これからなるべく速く投稿していくつもりです!!

基本設定

おそらくこれからも設定が増えていくと思います！

千葉 樹

身長：176

容姿：日本人なので黒髪、容姿はご想像におまかせします

能力：主に左手を介して植物を操ったり生やしたりできる、ただし一度自分が触れたことのある植物じゃないと生やせない。

・ベアンテから植物を使役する力と共に植物自体の力をもらったので力は人並み以上

・左手からベアンテのツタを出しムチや拘束用にも使える。

・木と会話できるが樹齡の浅い木とはなんとなく意思を感じ取れるぐらいしかわからない

・木の幹の中に入れる。（この時木の中は主人公の体以外ものままなので、幹の中が空っぽになっている訳ではない）

武器：槍↑これもいわくつきの代物らしくまだ力を秘めているよう。

ユレイア・イーストフッド

身長：170

容姿：腰までとどく長い金髪をもち、エルフと見間違っほどの美女。つり目がきつい印象を与えるがかわいいもの好きな面もある。

能力：剣の達人でありながら魔法にも深い知識と実力をもっている。

武器：風の魔剣

ナーガ・ディン

身長：182

容姿：ショートのカ髪で目に包帯を巻いているのが特徴。顔立ちは男前だと思う

能力：拳や四肢に魔力を纏い攻撃する魔闘士。目が見えないが人の気配を読み取ることが得意で戦闘の時にはその能力を駆使して戦っている。

武器：体全体

基本設定（後書き）

いまさらかと思いますがこの小説のタイトル「樹当千」は「一騎当千」からもじった物です！！

二十話 強敵

そして都市の中心部から離れて古い町並みが広がる場所に来た。
この辺りに来ると魔法使いの人もあまりいならしく建物もレンガ
造りのいたって普通なもの、空を飛ぶ魔獣の姿も数匹程度だ。

「ここまで逃げる必要あったか？」

俺は疲れを感じて建物の壁に寄りかかる。

「用心には用心をという言葉があるだろう」

ナーガもそう言いながら俺の真似をして寄りかかる。

「だったらまだまだ用心が足りないじゃない」

急な声に驚き俺は身構えて声の発生源を探す。

「上か！？」

ナーガの言うとおりに上を見上げると、ジャラジャラとピアスをつ
けた赤い髪の男が俺達が寄りかかっている建物の屋上に立っている
のを見つけた。

「馬鹿な！？声を聞くまでに気配を感じなかったぞ！」

「・・・それはたぶんこの子の力じゃない」

すると男の後ろから店内にいたあの少女が出てきた。

「貴様っ、あの時の！？よくも俺を・・・」

「な、何よ、『裏切ったな！』とでも言いたいの？別に私は最初か
らあんた達の味方なんかじゃ・・・よくも俺をホモと勘違いしたな
！」

「そこっ！？」

「おたのしみのところ申し訳ないじゃない。君はさっさとそのロー
ブをおとなしくよこすじゃない」

「断るじゃない」

「・・・わ、私は人の真似をするやつが一番許せないじゃない」

「落ちて着いてローグ様。」

「お前は下がってるじゃない」

ローグとか言う奴は手のひらに小さな火の玉をつくりそのまま俺達に投げつけた。俺とナーガはその場から急いでバックステップしてかわしたが、どうやら相当な威力が込められていたようで俺達を爆風が襲う。

なす術も無く俺は転がりレンガ造りの家に突っ込む。

かなり強く打ち付けたように感じたがローブのおかげでダメージは無い。

「大丈夫かナーガ!？」

「俺は平気だ」

瓦礫の中からひよろつと出てくる。なんで大丈夫なんだ!？

「あらうまく避けたジャナイ、でもこれはどうジャナイ」

奴は今度は両の手のひらに火の玉をつくり俺とナーガを個別に狙って放つ。

俺は間一髪目の前に木を生やして防ぐがあつという間に火が燃え広がりが、危うくローブに火がつきそうになる。

危ねえ!こんな貴重品が灰になるなんてことになったらもったいないじゃすまないぞ。

「その君はくだらないことを気にしてるジャナイ、そのローブはこの程度の魔法攻撃で駄目になるようなつくりはしてないジャナイ。・・まあ君の体は別だから避けた方が賢明ジャナイ」

ユーリイの嘘つき!!

奴は最後の言葉と共に今度は両手を合わせて巨大な火の玉をつくり再び放つ。

さすがに今回の攻撃はさつきと同じように防げないな。俺は左手からベアンテを出し、近くの建物に絡ませるとそのままベアンテに引っ張ってもらって火の玉を避ける。

少し距離をおいたことで心にゆとりができた俺は奴がまだ屋上にたっているのを確認した。

俺を追い詰めておいてあの位置から動かないと言うことは奴は完全遠距離タイプの魔法使いだな。

ナーガは奴の放つ火球を次々と避けていたがきりが無いと判断したらしく俺のいる場所に一時退避した。

「イツキ俺がおとりになる。その内に奴のもとへなんとかして行つて、どうにかして倒せ！」

「えっ！？不確定要素が多すぎなんだけど！」

「みたところ奴は典型的な遠距離タイプの魔法使いだから接近戦は苦手なはずだ！それともお前に重要なおとりがこなせれるか？」

「くっ、仕方ない」

「じゃあ、行くぞ！！」

ナーガはそう言いながら奴の方へ突っ込む。

奴は再びナーガを標的にし始めるが、ナーガは奴を翻弄するようにかわしていく。

奴の攻撃がナーガに集中し始めたので俺はその隙を突くように猛ダツシユで建物に向かい十八番の植物創造で足下に木を生やしていき屋上へと飛び出す。

「し、しまったジャナイ！」

「ローグ様！危ない」

奴の後ろで少女が叫ぶが、この距離では間に合いそうも無い。

俺は勝利を確信し奴に槍を突きたてようとした瞬間、奴の口が邪悪に歪むのが見えた。

「なんてね」

次の瞬間俺は屋上のゴツゴツした床に叩きつけられていた。

いきなりの行動だったので俺は奴が俺の鳩尾を蹴り更に右手で俺の頬を殴り倒したんだと気づくまでに少し時間がかかりぼんやりしてしまっていた。

だがその時間は奴にとって十分だったらしく俺がきていたロープを剥ぎ取るとそのまま俺を地面へ蹴り落とした。

俺は受身も取れず十メートル以上の高さから堅いレンガの上へ落ちた。

落ちた瞬間の衝撃で肺に溜まっていた空気がすべて外にでたような

息苦しさを感じ、その後体中を激しい痛みが襲った。

「イツキー!!」

ナーガの必死そうな声が遠くから聞こえる。

「うーん、この内在魔力はあの伝説のロッドマスター級ジャナイ。

君のようなグズがもっていたらこのローブがかわいそうだから私がもらってあげるジャナイ」

「き、貴様らー!!」

「ああ、まだゴミがいたジャナイ。さっさと片付けて次に行くジャナイ」

俺は消えいく意識の中で奴の勝ち誇った声を聞いた・・・どうせならユーリイのきれいな声が聞きたかった・・・な・・・

二十話 強敵（後書き）

ついに敵登場！これからの展開がどうなるかは作者自身ですら分からない！！

二十一話 搜索

「お、おい起きろイツキ」

俺は朦朧とした意識の中ゆっくり目を開けると目の前にはユーリイでは無くて、体中傷だらけの姿のナーガがいた。

「どうしたんだ？その怪我・・・」

だんだん意識がはつきりしてくると体中がズキズキと痛み、その痛みで先程の出来事を思い出した。

「はっ！や、奴等は何処へ行つた？」

「奴等はおそらくユレイア様のところだ。俺も必死に止めようとしたんだがこの様だ。」

くそっ！最悪な展開だな。

「とりあえずユーリイとの待ち合わせの場所に行こう」

「ああ、ユレイア様だけは守らねばならん！」

俺達二人は傷ついた体でふらふらしながら目的地に向かったがやつこの思いで着いたときにはすでにユーリイの姿は無かった。

「どうする？」

「奴がユレイア様を探している以上二手に別れて搜索するしかないまい」

「次奴にあつたら絶対後悔させてやる」

* * *

イツキたちと別れて植物園を探したがやはりなかなか見当たらない。どこにあるか道行く人に尋ねてみたがやたらに私を近くの店に誘おうとする者ばかりで全く要領を得ないので自分で探す、あるドームには目玉がたくさんある魔獣たちが檻の中にたくさん囚われていた

り、触れたものを感電させる雷光虫の表皮を使つての魔法の開発をしていたりとまるで見当違いの場所に行き着いてしまった。

もうそろそろイツキ達との約束の時間になるので次で探索をあきらめようと半ばあきらめながらドームの中に入るとそこには多種多様な植物が広がっていた。ドームには色とりどりの植物が溢れていた。まるで色の海が押し寄せてくるように感じた。

その中でも特に目を引いたのはドームの中央に悠然と立つ大樹だった。それはドームの中央に立つと言うより大樹の周りにドームを立てたように思えるほどそこで威容な姿を誇っていた。

私はその姿を見てしばし感動してしまつていたようで我にかへった時にようやく周りの音が聞こえてきたぐらいだ。

私はすぐにイツキ達を呼んでこようとしたが、ドームの外にちょうど赤いローブが特徴のイツキがいるのが見えた。

「おい、イツキこつちだぞ」

「ああユレイア、ここにいたのか」

「どうしたイツキ、お前いつもは私のことをユーリイと呼ぶじゃないか？」

「ああ、ごめんよユーリイ」

おかしい。呼び方を間違えてもいつものイツキならおどけるだけでわざわざあやまりなんかしないはずだがな。

やはりこの世界に来て知らないものに囲まれ続けてきつと気疲れしたんだろう。

こういう時こそ私が支えてやらねばな。

「イツキ、なにか相談事があるなら遠慮せずに言っただぞ！」

「なら・・・その魔剣をよこしてくれないじゃないヤナイ？」

「えっ？」

私はイツキの言葉に驚いて思わず聞き返した瞬間首筋に衝撃を感じてそのまま意識を落とした。

＊ ＊ ＊

「クソッ、どこへ行っただ」

ユーリイを探し始めてからも数時間はたったように思え、辺りは夕焼けの赤から夜の闇へと姿を変え始めている。

俺は待ち合わせの周辺の店や観光スポットを端から端まで探したがユーリイらしき姿はどこにもいない。もちろん待ち合わせ場所にはナーガをおいている。

ここまで探していないということはユーリイはまず間違いないやつ等に襲撃を受けているだろう。

俺は時間がたつほどに焦燥感に駆られてイライラしてくる。そんな俺の姿を見て道の端で陰口を叩いている冒険者風の男達の姿が目に入るとたまらなくなりついはその中の一人の胸倉を掴み軽く持ち上げる。

「おい、お前金髪のエルフと見間違っほどの美人を見なかったか？」

「ししし知らねえよ」

目の前の男がびびりながら答えるのを見ると自分は何をくだんないやつ当たりしてるんだろうと思ひ手をはなす。

だが目の前の男は無言で手をはなした俺に更にひどいことをされるとでも思ったらしくさつき以上にびびりながら話し出した。

「あああんたの言ったような美人は見かけなかったが青いローブを着た美少女ならさつき見かけたぞ」

「本当か！？その近くに赤い髪でピアスをつけた男もいなかったか？」

俺は思わぬ収穫に興奮して再びやつの胸倉を掴む。

「ああいたが、それがどうしたんだ？」

「そいつらはどこだ？」

「こ、ここから北へまっすぐに行った先にあるドームの中に入っていくのを見た。なんでもいいからあんたいいかげんこの手をはなしてくれないか。」

「すまん、助かった。サンキュー」

俺は急いで待ち合わせ場所に戻り目も向けられない程落ち込んでいるナーガを見つけると事情を話す時間が惜しいので無理やり引張っていった。

二十一話 搜索（後書き）

だいぶ更新が遅れました。次からは本格的な戦闘描写を入れていくつもりです！

あとPV20,000達成しました！これからもがんばって三日に一度ぐらいのペースで更新していきたいです。（あくまで目標！）

二十二話 再戦

いきなり引つ張られてナーガはしばらくギャアギャア言っていたが、道を走りながら事情を話したら自分でスクツと立ち走り始めた。辺りはすっかり夜になっていたが幸いなことに月（正確には月では無くウイスプという天体らしいが）明かりが辺りを照らしていて、道がはっきり見えるので夜の闇の中で足を躓かせることも無い。俺達は痛む体に鞭打ちながらやつとの思いでドームにたどり着いた。距離はせいぜい1キロぐらいだったが今の俺の体にはかなり遠くに感じられた。

ドームの入り口にはあの青いローブの少女が俺達を待ち構えていた。

「イツキ、お前は先に行け」

「・・・頼んだぞ！」

俺は槍を使って棒高跳びの要領で少女の真上を飛び越える。

「待ちなさい！ローグ様のところには行かせないわ！」

少女は着地した俺を狙い両手から勢いよくナイフを投擲するが俺は槍を回して弾く。

「おっと、お前の相手は私だぞ」

「ちっ、さっさと片付けてやる！」

後ろでナーガたちの声が聞こえてくるが俺は後ろ髪を惹かれる思いで暗いドームの中に飛び込んだ。

ドームの中は俺達が探し求めていた植物園のようだったが、目の前で奴がユーリイを肩に背負っているのを見た俺には全く喜べる状況ではなかった。

「おいっ！ユーリイに何をした？」

「ちょっと眠ってもらっただけじゃない。いやそれにしても滑稽だったじゃない、私が魔導具でちょっとお前に化けたらこの女はあっさりと騙されたじゃない。」

俺は奴への怒りが沸々と湧いてくるのを感じ槍を構えた。

「ほう、まだやる気じゃない。次は殺すけどいいじゃない？」

「お前をな」

奴は俺の言葉を面白そうに聞きながら耳にジャラジャラついているピアスの中の一つに軽く触れると、奴の背中に背負われていたユーリイがいきなり消えた。

「貴様！！ユーリイを何処へ！？」

「落ち着くじゃない、あの女はこの魔導具『闇の密室』の中へご案内しただけじゃない。もちろんこのピアスはただの拘束用魔導具では無いじゃない。中に閉じ込めた対象には素敵な悪夢へとご招待し小一時間で廃人同様へするという素晴らしい魔導具じゃない！！」

くそつ、ただでさえ体が本調子では無いのに時間制限付きか。状況は悪い方向にしかいかないがここで弱みを見せたらつけこまれるな。

「お前を殺す理由がまた増えたな」

「馬鹿にはこの素晴らしさが理解できないじゃない」

「ほざけつ！！」

俺は一気に奴との間合いを詰めて槍で突くがさっきまで何も持っていなかった奴の手にはいつの間にか一振りの剣があり、その邪悪なオーラを放つ剣で俺の突きは防がれた。

刀身にたくさんの異国の文字が浮かんでいるそのロングソードは主人の意思を反映するように鈍く光っている。

「続けてこれは魔剣ポラチネリカといってネ。この刀身が少しでも相手を傷つければそこから血を吸出しあつという間にミイラに変えてしまうじゃない。」

お前にお似合いの陰湿さだな。と話す暇すらも与えてくれず奴は切りかってくる。

俺は連続で切りかってくる奴の攻撃を防ぐがやつの剣技は相当な

ものでたまらず距離をとる。

「あららとんだ臆病者ジャナイ」

うるせい！俺はつい最近まで普通の高校生だったんだぞ！

それに少しびびったのもあるが一番の目的は戦いやすそうな場所へと移動しただけだしな。

「時間が惜しいからこれでお終いにするぞ」

俺はこの植物園にある植物達に協力をお願いする。そこには魔獣すら襲う植物もたくさんいたが俺の意思を感じ取ると萎縮して素直になり、ドームいっぱい植物たちのざわめきが広がるほどになってきた。

当然奴もこの異様な事態に気づき身構える。俺は心の中で植物たちに合図をだすと同時に左手からベアンテを大量に放つ。ベアンテはひとつひとつが意思を持っているかのように複雑な軌跡を描いて奴を襲い、植物たちは地面の土を吹き飛ばす勢いで奴のもとへとその強力な酸や棘をとけようとする。

奴はその嵐のような攻撃の中剣で切り裂きつつ火球を放ち奴を襲っていた植物を撃退したが次々に俺が植物に襲わせているので休みを与えさせない。

俺は植物たちの包囲網をどんどん狭めていき奴は端へ端へと追い詰められついに奴の逃げ場は無くなった。

「ジ・エンドだ」

「・・・クククク、私をここまで追い詰めるとはね。この手は使いたくなかったんだが・・・」

何か奴の様子がおかしいので俺は奴をベアンテで奴を拘束しようとした瞬間、奴は耳にたくさんついているピアスの中からもっとも大きな赤い宝石が入ったものを手にとり地面へと叩きつけて壊した。

俺が突然のことで驚いていると、奴の足下に転がっている宝石の欠片が急に赤い閃光をだし更に俺は驚かされた。だが奴にとってその現象は当然のものだったらしく驚いた様子は見られずその代わりに興奮した様子で近寄ると宝石の欠片を手を集めてそのまま飲み込んだ。

だ。

二十三話 負傷

俺は『痛くないのかなあ?』と思った。

だがそんな俺の心配を他所に奴は痙攣したように体をビクビク震わせながら、徐々に体の周りから赤い光を放ち始めている。俺はなんだか嫌な予感がしてベアンテでやつの体を拘束した。

「はあ、はあ、チカラが、力が満ちてくるジャナイ」

ついにやつの体の周りに力が溢れるのがはっきりと見えるまでになった。

ハンターの漫画では念だが、これはおそらく魔力だと思われる。

「まずはこのうざったらしい草どもを・・・」

奴は先程とは比べ物にならないほどの炎を頭上に呼び寄せた。

これはヤバイと思い俺は自分の体を覆うように木を展開した後俺の力の限界まで木を硬質化させ防いだ。そのあとすぐに轟という音がしてあたりの植物達の意味が感じられなくなったので外でだいたい何があったのか分かった。

俺が木の壁から出ると奴はほぼ焼け野原と化した植物園の中でにやけた面をしながら俺を待っていた。

「あとは君だけジャナイ」

奴はこっちに脱力したような体勢でやってきてろくに構えずもせずただまっすぐ剣を振り下ろした。俺が槍でそれを受け止めた時、あの勢いでは考えられないほどの力が俺の両手に響いた。まるで象がのしかかってきたようなその攻撃に俺は槍を地面に落としてしまった。槍が壊れなかったのは奇跡に近だろう。

俺はあわてて拾おうとすると腿が焼けたような痛みを感じて勢いよく転んだ。

振り返ってみると腿がばっさり切られ、そこからたくさんの血が奴の剣のもとへ吸い込まれていた。今まで感じたことの無いほどの痛みに冷や汗がダラダラと流れ俺は低く呻いた。

「君はじっくりいたぶってから殺してやるジャナイ」
くそっ、俺はこんなところで死ぬのか？

ユーリイを助けずに死んでたまるか！！

腿から流れる血を必死に手で抑え槍を杖代わりに立つ。信じられないほど痛いはまだ立っていられる。

「・・・私はそういう根性論は嫌いジャナイ。君はさっさと絶望した表情を私に見せるジャナイ」

「俺だって・・・嫌いだよ。・・・でもな・・・ここで立たなきゃ・・・ユーリイ救えないだろ？」

俺が言い終わると同時に奴は俺の腹をけりつけ俺はそのまま数メートルほど吹き飛ばされ、何か堅い物にぶつかり止まった。

ぶつかった物を見るとそれは巨大な樹だった。先程の奴の魔法でもそれは全く焼けた跡が無く、表面はゴツゴツとしていて普通なら堅くて冷たい印象を与えるがそれは不思議と暖かさを感じた。

俺は安心を求めてか、それに触れた。

そして俺は木に吸い込まれた。

二十三話 負傷（後書き）

最近になってミスチルを聞きながら執筆していると全く筆が進まないことに気づいた千葉です。

二十四話 初めての覚醒（前書き）

この間更新した日に一日でなんとPV8 500を記録しました！！

何・・・だと！？

二十四話 初めての覚醒

気づくと俺は真っ白な空間にいた。

そこには同じく白い椅子が二つ備え付けられていた。

その様子からおそらくここには誰かがいるんだろう。

「おい、俺はここから出てユーリイを助けなきゃいけないんだ！早くここから出してくれ！！」

『ここには時間の概念が無い』

どこからか声は聞こえるが姿は全く見えない

「誰だ？」

『我は世界に根を下ろす六つの存在、空の柱の一つだ』

「さっきの話は本当か？」

『嘘をつく必要が無い』

俺はそれを聞いてすこし安心したらそういえば体の痛みが無いことに気づいた。

「あんたが怪我を治してくれたのか？」

『怪我は治っていない、先程も言ったようにここには時間の概念が無いから痛みも無い』

「で、たぶん俺の予想じゃあんたはあの大樹でいいんだな？」

『肯定だ』

「なぜ俺をここに呼んだんだ？」

『・・・お前には我らが統率者と呼ぶお方が封じられている』

「えっ！？そんな奴いた？」

『お前がベアンテと呼ぶお方だ』

「ああ」

『そのお方のお力がお前にも与えられているがお前はただの人間ゆえに、使える力もそのほとんどが封印されている。』

「だが俺は今、力が必要なんだ！どうにかならないのか？」

『お前がこの世界に来て自分自身の力をつけたようなら封印の一部

を解けと我らは統率者様から言い預かっている。だが制御に失敗したら死ぬ可能性もあるぞ」

「失敗したらどうなんの？」

『統率者様の種なるものがお前の精神内にある。我が今からするのはその種に濃密度の栄養を注ぎ込みその種を成長をさせることだ。もしその力を制御しけれなければお前の精神内にある種はその肉体にまで根をのばしお前の体内から最初に根を伸ばし始め、最終的にはお前の皮膚を突き破るまでになる』

思ったよりもかなりグロいな。

「今できるのはそれしかないんだろ？」

『うむ』

「だったらやるしかないじゃないか」

『覚悟はできたようだな、ならばこれから始めるぞ』

しばらくすると体にゆるやかに何かが入っていくのを感じた。それは生命力に溢れていて流れ込んでくる度に軽い圧迫感を覚えた。

『終わったぞ』

「えっ！？本当か？思ったよりもずいぶん楽じゃ・・・」

言葉の途中でいきなりものすごい痛みに襲われた。まるで頭の中がミキサーでかきまわされているかのような痛みに俺はあたりに吐しゃ物を撒き散らす。それでも痛みは治まることは無く、むしろさつきよりも酷くなってきたという気がする。

助けてくれ！この痛みを止めてくれるならなんだってするから！！

なんでこんな目にあわなきゃいけないんだ、俺は望んでこんな世界に来たわけじゃ無い！

俺以外にもっと適役がいるだろ

世界を救いたいとおもっている善人やあるいは自分の私利私欲のた

めに生きる人間だつてきつと俺よりも適任だ

だからこれ以上俺を攻めないでくれ

『イツキは私のパートナーだからな』

『おいおいおいおい、言ってる意味をわかってるのか？』

『私達が出会った時イツキはこっちにきたばかりだったんだろ？
だったらイツキは私と一番長く一緒にいるわけで、お前が楽しくなかつたら私の責任になるわけだ』

『その点に関しちゃ、向こうにいた時より楽しいよ。』

・・・そうか、そうだな。ユーリイのおかげで俺はこの世界も悪くないと思えたんだ。

そのユーリイを助けるためなら痛みなどにかまっている暇はないな

『どうやら力を制御したみたいだな』

「ああなんとかな」

正直かなりの体力を使ったはずだが倦怠感の中に不思議な充足感に満ちている。

今なら空も飛べそうだぜ！はあはあはあ／／／／／／

『違う世界へ行っている途中で申し訳ないがとりあえずお前の体を

見てみたらどうだ？』

「どうしたんだ？俺の美しさならもう十分過ぎるほど自覚してるが」
『いや普通に違うが、力を制御すればその証拠となるものが体に現れるのだ。お前はどうか？』

「どれどれ・・・ああこれか」

俺の両足にはイバラの足環がついていた。なんだが罪人の足枷みたいで嫌だな

『うむ、見事に制御できたようだな。それと先程お前の意思が流れ込んできてな、統率者様に代わって詫びよう・・・本当にすまなかった。お前の意思とは無関係にこの世界に連れてきてしまったのは完全に私達の責任だ。』

「そんなにあやまんなくていいよ」

『しかし・・・』

「だって俺はこの世界好きだからな」

二十四話 初めての覚醒（後書き）

俺はこの世界嫌いだけどな b y 作者

二十五話 激戦

俺が外にでると奴は驚いた表情をしていた。

そりゃさっきまで瀕死だった奴がピンピンしているから当然な話だが「お前どうしたじゃない、さっきの怪我は？」

実はベアンテの力を制御した後俺のぱっくり割れていた腿の怪我からニルニルとツタが生えてきてそのまま俺の怪我を塞いだということがある、それを見たときは凄く気持ち悪かった。

まあ慣れるしかないな、きつとこれから先も大きな怪我をした時はまたあれと同じことが起きるだろうしな……気持ち悪っ！！

……これからは怪我をしないように気をつけよう。

「ああ気に食わないじゃない」

どうやら俺の平気な姿が御気に召さなかったらしく魔力を集中させ後ろの景色が魔力によって歪む程の魔力を纏い、今度は炎を矢へと具現化させその数百に及ぶほどの矢尻を俺に向ける。

「行くジャナイー！」

目の前にはたくさん矢が迫ってきているが今の俺にはまったく危機感を感じない。

俺は炎の矢を余裕で次々と避ける。

こんなにも体が軽いなんて思わなかったな、たぶんこのイバラの足環のおかげなんだろうが。

俺はそんなことを考えながら残像を残しつつ奴の後ろに移動しそのまま奴の背中を蹴る。

奴はかなり大げさな感じで吹き飛ぶが、俺の赤いローブを着ていたのでダメージは無いようだ。

すっかり忘れてたな。だがそのロープにも弱点はある！

俺は再び始まった矢の攻撃をかわしながら目的の物を探すとちょうど奴が立っている場所のすぐ横にあるのを見つけた。俺は移動して目的の槍を手にとると同時に奴目がけて飛び込むように突きを放つ。奴も俺の突然の動きに不意をつかれて反応が遅れたらしく、惜しくも穂先が腹に突き刺さることは無かったがロープを真横に切り裂いた。

「お、お前はこれがどんなに貴重なものか分かってないジャナイ！競売にだせば一億ラドはくだらない代物ジャナイ！！」

「知らない」

今はただ奴をぶちのめしたいという感情しか生まれてこない。俺の本気な表情に奴は危機を感じ取ったらしく今まで全くしてなかった魔法の詠唱を始めた。俺は詠唱を止めるために奴の喉もとに槍を突きつけるが、既に奴の魔法の詠唱は終わったらしく奴の体は煌々と炎によって覆われてしまった。皮膚が焼け付くような高温に耐え切れず俺は距離をとる。

「どんな手を使って強くなったかは知らないがもうお終いジャナイ、私がこの術式を発動したらどんな攻撃も私に届かないジャナイ」

たしかに前の俺ならあつという間にやられていただろうな、だがベアンテからたくさんの植物情報が渡された今の俺ならやれるはずだ。一歩一歩奴のもとへと近づくたびにものすごい熱が伝わってくるがそれでも俺は足を進める。

「ついに狂ったジャナイ？まあ君が死んだら楽でちょうど良いジャナイ」

奴の炎へと左手を伸ばして俺にとっては当然なことに、奴にとっては予想外なことに奴の纏っていた炎が俺の左手に吸われた。

「な、何故ジャナイ!?」

「なーに簡単な話だ。火山の火口付近に自生している、炎を栄養分として生きる植物がいてな。俺はそいつの力をちよつと借りただけだよ。さあ、種明かしはお終いだ。命が惜しければさっさとユーリイを解放しろ」

首に槍を突きつけたまま俺が優しくお願いすると、奴は徐にユーリイが囚われているピアスの金具を捻じる。するとどういう原理かは分からないが仰向けに倒れたユーリイが出てきたので、お礼に俺が手のひらから種を首に打ち込むと奴はガクツと倒れた。

「ユーリイ大丈夫か!？」

ユーリイの顔は青ざめ、それに酷くうなされているようで俺の呼びかけにもまったく反応を示さない。目の焦点も安定せずまるで壊れたおもちゃの人形のように視線が空をさまよっている様子から精神崩壊の一手手前の非常にヤバイ状態だ。

一刻の余裕も無いので俺はユーリイのおでこに左手を置き人の記憶を食べるユメケシを二、三本生やす。あまり多く植えると記憶喪失になりかねないので細心の注意を払う必要がある。それから先はユメケシから送られてくるユーリイの悪夢だけを取り除く作業だが、闇が物質化したような暗闇の中、周囲からたくさんの憎悪や悲鳴が聞こえてくる映像はまさに悪夢と呼ぶにふさわしいもので、悪夢の密度と量に辟易しながら精神を疲労させつつ悪夢を消していく。

永遠と思われた作業もようやく終わりが見えてきたが悪夢は最後の抵抗とばかりに俺の油断した精神の隅を攻めてくる。俺はその不意打ちに必死でこらえてしばらくの格闘の後、悪夢は力を無くし、ついに消去された。

俺はそのまま大の字になって倒れる。

汗だくのシャツが肌にくっついてすごく気持ち悪いし、体がかなり

だるい。

急に眠気が襲ってきてまぶたを閉じた瞬間ユーリイの声が聞こえた気がした。

・・・何でそんなに焦った声をしてるんだ？

* * *

「すまない、先を急ぐのでな」

そうナーガは目の前で倒れている少女に言い放つとイツキが行ったドームの中へと駆ける。

「なによ・・・あんた、目、見えるんじゃない」

少女は最後にそう言うと言意識を落とした。

* * *

二十五話 激戦（後書き）

長い戦いが終わりました！

ここら辺の戦闘描写はかなり悩みました。

それに主人公は凄く動かしにくい野郎なのでかなり苦勞もしました。

あと、先日感想をくださりとても嬉しかったです！！

作者も応援に答えてがんばっていきます！！

二十六話 予想できたこの展開

その後もしばらく俺達は街にいた。それというのも俺は一週間意識が無かったらしく一応念のために五日ほど入院することになったのだ。

一日に数回聖職者が神聖術の治癒をかけにやってくるのだが、実際俺の体はベアンテの力のおかげで二日目には体力もすっかり回復したので暇を持て余した俺は病室のベッドの上でゴロゴロしていた。ちなみにあの赤いローブは俺が完全に駄目にしてしまったので、今はナーガが買ってきてくれた紺色の麻のシャツと七分丈のズボンをはいている。旅には向いてなさそうだがなかなか丈夫なつくりをしていてけっこう俺は気に入っている。

病院というのは本当に暇なものでぼんやりしながらベッドの上で寝転んでいると足首に巻きついたイバラの棘がシャツに引っかかり破いてしまった。俺はどうにかならんものかと考え、とりあえずちよつとイバラに触ってみたが不思議と棘が全く痛くなかった。やはり俺自身の能力だから俺に危害が加わることはないのだろう。

とは言ってもこのままだと服を着るたびや、ベッドで寝るたびに引っかかりそうで怖いな。

とりあえず一回外してみるか。

結果、外れねえ！あきらかに足から外れそうなくらい輪っかには余裕があるのだが足首から先はまるで不可視の壁でもあるかのごとき動かなくなる。

こうなればあれだな。太古の時代より存在する究極の解決方法『押して駄目なら引いてみる』作戦しかねえな。

先程までは外に引つ張ろうとしていたから今度は中に埋め込ませようぐらいの気持ちで行くか。両手でしっかりイバラを掴んで足首に押し当てるようにすると、俺の足の中にイバラは吸い込まれていた。

ミッションコンプリート!!

まあどういう構造かは気になるが異世界だからなんでもありということにしておこう。

それよりさっきから頭に違和感を感じるな。

何だろうと思いい俺は頭を触ると、そこにはさっき触ったような触感がするものがあった。

その正体を確かめるために病室の隅についている鏡で見るとやはりというか何と言うか。

よく大会で優勝した人がつけるのは月桂樹の冠だが俺のそれはイバラでできた冠だった。

・・・うん、最初はなんだか嫌だったが慣れるとむしろ良いな。

「おーいイツキー!! 急いで支度しろっ、この街を出るぞ!!」

「どうしたナーガ、それよりこの冠似合ってない?」

「あ・・・ああ、なかなか良いんじゃないか・・・て、そんなことよりお前はさっさとこれに着替えろ! ユレイア様も今食糧品の調達をされているところだ、準備が整い次第ここを出発するぞ!!」

「何でなんや〜、うちまだ体力回復してないんやでー!!」

「嘘付けっ!! ピンピンしているくせに。それとその気持ち悪いしやべり方を止めろ!!」

「で、何故この街を出なきゃいけないんだ？」

『・・・こいつ急に真面目になりやがって』

「おいおい、何か大事なことがあったんじゃないか？」

「くそっ！釈然とせんが、説明しよう。とりあえずこれを見る。」

ナーガは新聞紙っぽいものを俺に渡す。この世界にもあるんだな今まで全く見たことが無い文字で書かれていたが俺には読めた。たぶんベアンテの力だと思うので俺の中にいるベアンテに感謝しておう。

「えーと、どれどれ『魔法都市レイドの視察中にゼノア教の幹部ローク・エソードさんが何者かの手によって殺害されました。ゼノア教はこの犯人の搜索のためにレイドへ聖地守護隊の派遣をするそうです。』だって。アホな事をした奴がいるもんだなあアハハハハ」
「現実を受け止めるイツキ」

こいつはヤバイぞ、これ完全に俺だし。あのときれてなんだか殺しちゃったみたいだな、ついに俺も人殺しかあゝ。

「私もユレイア様からこれを聞いた時は驚いたぞ。ここレイドは完全な中立都市なためにあらゆる武装勢力の派遣・駐屯は禁じられているはずなのにな。ゼノア教はかなりのコネを持っているようだ。そしてなんだか落ち込んでいるところを更に凹ませるようで悪いが、この聖地守護隊はその名とは裏腹にドラゴンの討伐も受け持つ実力派戦闘部隊だぞ。」

「よし、さっさと逃げようぜ！！」

「そうしたいのはやまやまなんだが、今から急に出ようとしても門番に必ず止められる。それを回避するために城壁から抜け出しても見つかったしまった場合は更に怪しまれる結果になるから危険すぎるだろう。」

「じゃあどうすんだ？」

「幸い冒険者ギルドの護衛依頼は門番のチェックが甘いからそこを狙おうと思う。」

「もう手配したのか？」

「ああ一応な」

「だったら何の心配もいらないじゃないか」

「ところが護衛対象はどこぞの貴族のお嬢様でな、その子が護衛は女だけで構成すると言ってきて・・・」

「だったら無理じゃん」

「いや、女3人で登録した」

「…えっ！？ナーガ知っているか、俺らは生物学上オスなんだぞ」

「仕方ないんだ、私だって一生懸命探したがこれしか護衛依頼はなかった」

「・・・明日に出発しない？」

「聖地守護団は遅くとも今日の深夜にはここに到着するそうだ。そこまで早い理由はおそらくブーストの魔法で移動速度を上げているんだろう」

「・・・じゃあひょっとしたらさっきお前が着替えると言って渡した袋には女物の服がはいっているんじゃない・・・」

「惜しいな、服とカツラだ」

この時程俺の予想が外れて欲しかったことは無い。

二十六話 予想できたこの展開（後書き）

投稿が遅れた理由は小説を書き溜めていたからです。

決してゲームにうつつを抜かしていた訳ではありません!!

どうぞこれからもご意見感想をよろしくお願いします!!

二十七話 女って大変そうだ

「ねえ、ゼノア教って有名なのか？」

長めのスカートをはいて黒髪のロングにイバラの冠をつけた少女？が聞く。

「数年前前から勢力を強めてきた宗教でな。今では十数力国が国教に定めていて、メイハ教の次ぐらいに有名なんだぞ。」

全身鎧姿で腰まで届く長い金髪の美人が答える。

「ユレイア様は博識ですな」

ローブを纏い茶髪のショートでなかなかの美女？がゴマをする。

・・・そう、何を隠そう、俺、ユーリイ、ナーガだ。

「それにしても二人ともよく似合っているな。イツキはかわいいし、ナーガは美人だぞ。」

そう、俺も驚いたことにナーガはかなり女装が上手かった。さすがに体の筋肉を見ると男だとばれるので、それを隠すためにローブを着ると女にしか見えない。

なんだかくやしいな。

「それにイツキその冠良く似合っていてカッコイイぞ」

「あんがと」

「そこのお三方！あなたたちは雇われたんだからしっかり働いてもらわないと困ります！」

そういつてくるのは貴族のお嬢様つきの家庭教師兼、侍女のサリアだ。メガネをかけていてクールな女と言う感じだ、そして美人だ。

「・・・はい」

「では馬車の外の護衛は頼みましたよ」

そういいながら貴族のお嬢様の乗っているきらびやかな馬車の中に入っていった。

「なあユーリイ、なんで護衛は女だけなんだ？」

「サリアが言うには、貴族のお嬢様は幼い頃からそれはそれは大切に育てられたらしく父親以外の男は嫌悪しているそうだ」

「じゃあもしもばれたら大変なことになるんじゃないやあ・・・」

「ああたぶんな、だからこれからイツキとナーガは女言葉を使い、女の子らしさをアピールするんだ」

「わかった」「わかりましたユレイア様」

「違う女の子言葉でだ！」

「分かったわ」「分かりましたわユレイア様」

本当にこれで大丈夫なんだろうか？

それから俺達はしばらく街道を進んでいき、時折出るはぐれ狼や蝙蝠の魔獣はナーガとユレイアが全て対処することになっている。

俺は初めて着るスカートのせいで上手く動けないし、俺の能力は護衛にはピッタリの能力なので戦闘の間は馬車の近くで待機している。

「ねえ、サリア私モンスターって見たこと無いから外観いていい？」

「ダメです！！旦那様からお嬢様を危険な目にあわすときつく言われてますので。」

「ケチ」

「モンスターは本当に危険なんですよ！！」

「ちえっ、分かったわよ」

馬車の中から二人の話し声が聞こえる。一人はサリアでもう一人がお嬢様ってことか。

会話を聞くになかなかのおてんばぶりでサリアも大変だろうな。

それにしてもすることが無いな。あゝあ、何か面白いことが起きないかな。

そんなイベント発生フラグをつぶやく俺の努力が報われたのか、近

くの草むらから狼が飛び出しちょうどユーリイとナーガの間をすり抜けるようにして俺の待ちうける馬車に向かってきた。

距離は数メートル位でまっすぐ俺の方向に向かってくる。血走った目でこちらを見据え、その巨体には似合わないスピードで向かってくる狼だがレベルアップした今の俺なら余裕で仕留められるザコだ。俺が狼を倒すべく槍を構えた瞬間守るべき馬車の中からいきなり少女が飛び出してきた。

「へっへっ、誰がモンスターを見るのをあきらめるもんですか!!」
「待ちなさいお嬢様っ!!」

その少女の後をサリアが追いかけてくるがすでに少女は馬車を飛び出た後なのでもう遅い。

そして当の少女は生の狼の恐ろしさを目にして今にも泣き出しそうな顔をしている。

「な、何なのよこの生き物は？」

最悪なことに狼はおびえる少女といういい獲物を見つけ標的を俺から少女に変えて勢いよく少女の方へ走り出した。

俺は全力で地面を蹴り数メートル先の狼の喉に槍を突き刺す。

「ご無事ですかお嬢様？」

「え、ええ」

その後少女の為に一度休憩をとることになった。

ユーリイは剣の素振りをしていて、ナーガは辺りの見張りを、そして俺はなんだか少女に懷かれてしまった。少女の名はクミと言い、髪をポニーテールにしているこっちに首を振り向くたびにいい匂いが……はっ!? 危ねえー、危うくロリコンになるところだったぜ!!

「ねえ、どうしてイツミは冒険者になったの？」

ちなみにイツミは女装することになった時決めた俺の偽名だ。

「ユーリイが誘ってくれてね」

女言葉は気持ち悪いな、しかし我慢だ俺っ！！

「ねえそのイバラの冠をかぶらせて！」

「別にいいけどこれを私以外がかぶったら死ぬよ」

「ええっ！？」

「おいおいイツミ、嘘をついたらかわいそうだろ」

「ナロア」

ナロアはナーガの源氏名だ。

「そ、そうよね。イツミも冗談がすぎるわ、もう。」

「イツミ以外がかぶったら五感全てを失うんだろ？」

「えええっ！？」

純粹な反応をするクミで遊ぶのはとっても楽しい。その後もサリアの目を盗んで休憩の間はナーガと一緒にクミで遊んだ。

しかしユーリイがサリアにチクったらしく笑顔で近くの林に連れこまれ、首下にナイフを当てられた状態でお説教をくらった。

ちよっとふざけただけなのにな。いつの世も天才は理解されない

その日の旅程もクリアし、俺達は湖の近くに野宿することになった。まるで海のように広くコバルトブルー色の湖はとてもきれいで途中でナーガが止めなかったらそのまま飛び込んでいたところだ。たしかに今俺は女という設定だったな。

手馴れた手つきで肉を捌く俺、高校の時は全く料理をしてなかったがこの世界に来てだいぶん慣れた。なにしろユーリイが作る料理はまさに男料理という感じで、下手をすると食材が生のまま入っている時もあるぐらいなので率先して俺がやるようになった。

「この肉料理美味いぞ！イツミこれはどんな料理なんだ？」

「故郷の民族料理の肉じゃがです」

「なあ、サリアこの料理こんどシェフに作ってもらおう！」

「確かに美味しいですね。驚きました」

予想以上に人気であつという間に鍋は空っぽになった。特にユーリイは鍋の中身が無くなるもとの凄く悲しそうな顔をしていたのでかなり気に入ったんだろう。

日はすっかり暮れたがウィスプ（月みたいなもの）は青く輝いており辺りの景色ははっきり見える。

こんな綺麗な景色は日本では決して見れないものだろうが……暑い。日本の夏の暑苦しさのようでジメジメとしていて常に汗がにじみ出るような状態だ。

ああ、カツラを脱ぎたい！！ものすごく蒸れるんだぞこれっ！！
「ナロアちゃんもう限界だ」

「私だつて暑いんだ、我慢しろっ！」

「あらっ、じゃあそのローブを脱げばいいじゃない？」

かなりえげつないことを言うなクミは。『パンが無ければお菓子を食べればいいじゃない』並みの暴言だぞ。恐るべきはその純粹さというわけか！

「ローブを脱いだ程度じゃこの暑さはしのげませんよお嬢様」

ナイス補助だサリア！！さすがに貴族のお嬢様付きの侍女だな。

「これから一緒に湖で水浴びをしませんか？」

そう誘うサリアは良く見れば出る所は出てへこむ所はへこんでいる体だ。

「喜んでダメだ！！」

「どうしてですかユレイアさん？皆で行った方が楽しいですよ」

「そうだよユーリイ」「そうですよユレイア様」

ナーガと俺は背中の後ろで結託の握手をする。だがユーリイがものすごい笑顔で俺達に近寄ると思いつき俺達の足を踏む。

「や、やっぱり私達は寢床を作らなきゃいけないから後で入るわ」

「そ、そうですね。ユレイア様たちは気にしないで楽しんでください」

「そ、そうなの。気が変わったら来てね」

「イツミー、早く終わったら絶対来るのよ！」

サリア、クミの順番で俺達に声をかけ、湖の方へ走っていく。

最後に残ったユーリイが笑顔でこちらを向くので、俺とナーガは後ずさりする。

「くれぐれも来るんじゃないぞ！」

無言でコクコクする俺達。

その後は楽しそうに走っていきなされた。

二十七話 女って大変そうだ（後書き）

次回の投稿は二〜三日内にするつもりです。

皆さんの応援が作者の投稿速度とやる気を加速させるのでぜひ感想をください。

W杯で日本代表におくる声援の十万分の一をおらに分けてくれ！！

二十八話 作戦B（前書き）

PV8万突破！！みんなの気持ちが作者の血と骨になる！！

二十八話 作戦B

「おい、ナーガ貴様あきらめるつもりか？」

「まさか」

「というか目が見えなかったら意味無くないか？」

「かつて偉人が言った『目で見るんじゃない、感じるんだ』と。俺はその通りにして心の目を開くことにする。」

「我が盟友ながら素晴らしい心の目の活用方法だ。見直したぞ！」

「そうこれで不安要素は取り除いた。ならば後は突撃あるのみだな」

「いや待て、ユーリイはかなりの強者だ。策無しでは壊滅は必須。」

「ならばどうすればイツキ軍師？」

「よろしい我が策を教授しようナーガ二等兵。喜べ」

「はっ、自分は幸せ物であります」

作戦は単純だ。

ユーリイに見つからないようにサリア達を覗く。

本当ならユーリイが本命なのだがナーガと議論した結果命の保障が全く無いということ、サリア達は俺達を女だと思っているので見つかっても何の心配も無いということが重要なファクターとなった。

「にしてもすごいなイツキの能力は」

俺とナーガは湖の周りに自生する木々の中を移動中である。俺も知らなかったが木の中を通過するこの能力は俺と触れている人も一緒に通過できる。

しばらく移動するとサリア達の声が聞こえてきた。

「心の目の準備は出来たか？」

「ああ今なら世界の真理すら見える気がする」

俺はそれを聞き安心して、木の幹の内部から上方向に移動して一番

太い枝の上に出る。

乗ったとき少し枝がきしんだが、なんとか二人分の体重を支えてくれた。

「ここならピッタリだろ」

「ああまさに絶景だな」

湖がかなり遠くまで広がっているのが見える。月明かりに照らされかなり幻想的な風景だが今回の目的はそれじゃない。

人影が水浴びをしているように見えるのだが湖から立つ深い霧のせいではずきり見えん。神は我らを裏切ったと言うのか!?

俺とナーガが絶望の淵に落ちかけたその時、神が我らの願いを聞き遂げたか(この世界には神が実在するそうなので可能性は無くはない。そして願いを叶えたその神はたぶんどスケベだ)霧が突然の風に流されていく。

霧がすっかり晴れたその先は、容姿端麗で引き締まった体の……男がいた。

俺はショツクのあまり木から落ちた。俺が落ちた後続けてドスンという音が後ろから聞こえたのでナーガも落ちたのだろう。

「誰だっ!？」

やばい音に気づかれたらしい、ナーガとアイコンタクトをとり逃げるために走り出そうとした瞬間後ろから首に鋭い刃を当てられた。

「貴様ら何者だっ!？」

俺とナーガはおとなしく両手を挙げ奴の方へ振り返ると奴は酷く動揺したような顔になった。

「す、すまない。貴婦人の方に剣を向けるとは大変失礼な真似をしてしまった。私はクロトというものだ」

「私は村人Cのイツミです」

「私は村長Bのナロアといえます」

村人ならまだ分かるけど村長Bって何だよ!!!一つの村に何人いる制度なんだ!?

「ナロアさんと言っんですか、美しい」

全然こいつ大事なと聞いてねえよ。

「あの、服っ／＼／＼／＼」

ナロアがいかにも恥ずかしそうに男に指摘する。なんなのその演技力？どこで身につけたんだ、そしてその演技は本当に必要なのか？

「おっと、すまない今着替える」

目の前で着替えた男。なんでここで着替えるんだよ、あっちで着替える。そしてこのままツツコミキャラが定着していいのか俺？男は一人で器用に鎧を身に着けていく。なんだか角のような装飾がついていていかにも強そうな印象を与えるその鎧はどこぞの騎士のようだ。

「あのどこかの騎士のかたですか？」

ナーガも気になったらしく堂に入った演技で聞く。

「まあ、そんなところだ」

「なぜこんな所にお一人で？」

「移動途中本隊とはぐれてしまってな、ここで迎えを待っているんだ。」

こいつこの年になって迷子かよ、プススス。

「ほら噂をすればなんとやらだ」

男が指さした先には二人の甲冑姿の男たちがかけてくるのが見えた。あれだけの勢いで走っているのに音はほとんどせず、二人にも疲れしている様子は全く見えない。

「団長！こんな所にいたと思えばナンパしてたんですか？」

「心配したぜ団長。また一人でドラゴン倒したのかと思っただぜ」

「すまん。この貴婦人たちが私を離してくれなくてね」

何その嘘っ！？あとこいつ団長なのか！？

「はいはい分かりましたよ。」

「どうせ移動途中に寄った魔獣の被害を受けている村を救いにいったんだろっ？」

「……………」

「はあ、さつさと目的地に行きますよ」

「みんな待っているのか？」

「ええ、全く聖地守護団の団長ならもつとしっかりしてください！
えっ！？

「ああ、なら全力で走っていくか」

「勘弁してくださいよ。僕は団長みたいな化け物じゃないんですか
ら」

「そうだぜ。ミロの言うとおりだ」

「私は普段そんな風にお前たちを鍛えてないから大丈夫だ。ではこ
れで失礼する美しきナロア嬢、イツミ嬢。行くぞキドル、ミロ！」
「はっ！」

そう言う俺の全力より数倍早いスピードであつという間に走って
いった。後を追う二人もほぼ俺の全力のスピードで追いかけていく
のが分かって少しシヨックだった。

「聖地守護団の団長だったのか」

やはりナーガも驚いているようだ。

「ああ俺もビックリした。俺の団長のイメージはオールバックで逆
十字架のコートを着ているものだったからな」

「そっち！？」

「とりあえずこのことをユーリイに知らせなきゃな」
すばらしい大義名分ができた！！

二十八話 作戦B（後書き）

今回話の都合上短いかもです。

あとこれからシリアスを入れていくか、このままの感じで行くか読者の皆さんの意見を参考にしたいです。ぜひ感想をください

二十九話 別れ（前書き）

更新が遅れた分、今回はちょっと長めなのでお許しください！

二十九話 別れ

俺達はユーリイが水浴びをしている場所に急ぐ。

「おい、ユーリイ!!」

「ちよつ!?!こつちに来るなイツキ!!」

「重要なことなんだよ」

俺は草の陰で自分そっくりの形の木人形を創る。色は元の木のままなので近づけばバレるが、幸いにも今は夜なのでかなり近づかないと分からないだろう。

「ま、待て!こつちに来るなっ!!」

「よしっ、今行く!!」

「なんでだバカっ!!!」

俺の声に合わして人形を飛び出させた瞬間ユーリイの氷魔法をくらって氷漬けになった人形が目の前を横切っていった。

「な、だから言っただけ危険だった」

「ユレイア様の氷魔法をくらえるなんて幸せな人形だな」

「いや、あれがお前だったらどうだって話?」

「ユレイア様の氷魔法をくらえるなんて幸せな私だな」

ダメだこいつ。人間として大事な何かを失っている。

「ほほう、なかなか興味深いことを話しているな」

俺とナーガがゆっくり振り返るとそこには大きめのタオルを体に巻いた女神がいた。

「お前たちは人があれほど言ったことが聞けないのか?」

「それでも可能性がある限りあきらめなくなかったんだ(です)」

「いいセリフが悪く聞こえるからやめろっ!!」

そんな感じで数日間旅を続けた。

レイドから西へ西へと街道沿いに移動していくとついに目的地のダツドルメアに到着した。

ダツドルメアは品種配合によつて有能な移動用、戦闘用、補助用、捕獲用の魔獣を次々と生み出してきた地であり、魔獣使いを育成するための学校も設立されている。

サリアとクミはここからワイバーンの飛行船に乗つて故郷に帰るらしい。

「ワイバーン船は今日の夕方に出発らしいからそれまで街を見ましようイツミ！」

やたら元気があるクミは俺の腕を掴んで引つ張る。

俺はユーリイとナーガに助けを求めようとアイコンタクトをするが、『楽しい』、『子ども相手に犯罪は犯すなよ』と全然とりあつてくれなかった。

サリアもクミの侍女なので一緒についていくと言つたら急にユレイアが不機嫌な顔をした。

なんでだろう？

街の入り口に建つ巨大な門には様々な魔獣たちの絵が精巧なレリーフで描かれており今にも動き出しそうに見える。その中には小型のドラゴンやゴブリン、ユニコーンなど有名なものもいたが今まで全く見たことの無い奇妙な怪物もたくさんいた。

俺はじつくりそれを見て行きたかつたがクミがせかすのでしかたなくあきらめた。

「なんでもこの門は今まで使い魔になつた魔獣たちが描かれているらしいですよ」

「へえ、サリアは物知りなんだな」

「そんなこと無いですよ／＼／＼／＼」

ものすごく照れてるな。なんかクールなキャラが照れると可愛さは当社比で三倍は跳ね上がると思う。そしてそんな俺の思いを見越し

てか、後ろからのユーリイの視線の破壊力も三倍に跳ね上がる。

門を通り過ぎるとそこには大きな噴水があり、近くの本チでは魔獣使いらしき人が自分の魔獣と和んでいる。まるで小型犬のようなかわいいものから一つ目のゴツイ体をした魔獣までたくさんいたが唯一共通しているのは、みんなパートナーと仲が良さそうにしているとこだ。俺としては正直、不細工な豚の魔獣が飼い主の男と頬を寄せ合っているのを見るのはキツかった。

建物はレンガ造りの上から更に鉄板を重ねた非常に頑丈なもので、おそらく魔獣が暴れた時を考えて造られているのだろう。その建物の所々には屋上に飛翔系の魔獣のために巨大な止まり木が設置されている。

そしてちょうどダツドルメアを抱え込むように山があり、山の中腹には立派なお城が建っている。

「あのお城は魔獣使いのための学校です。あそこからの偉大な魔獣使いネヴァとミヴァが輩出されたんですよ。」

はい、何のことやらな。サリアの言い方からすぐ有名な人物らしいが俺が知るわけが無い。サリアに分からないといって赤っ恥をかくのは嫌なので後でユーリイかナーガに聞くとしよう。

「あれ、クミがないぞ」

さっきまで俺の視界をウロウロしていたんだけどな。

「本当ですか？お嬢様に何かあったら大変！私探してきます!!」
そういつてサリアは人ごみと魔獣ごみ？の中へ入っていった。

「……よしっ、観光に行くか」

「いや何でだイツキ!？」「おかしいだろ!」

「冗談だってアハハハハ」

ユーリイとナーガが冷たい目で俺を見る。

「さっさと探そうぜ!」

後ろから本日二度目の冷たい視線を感じたがそんなことは気にせず颯爽と走り出す

結果すぐにクミは見つかった。というかダッドルメアの自衛団詰めの迷子センターらしき所で泣きながら自衛団の人とお菓子を食べていた。

俺を見ると泣きながらしがみついていたクミ、なんかドラマとかでよく見た光景を実際に体験するとは思わなかったのてちよつと感動した。そして俺にしがみついて泣く幼女を見ると・・ジュルリ。

「あの大丈夫ですか？よだれが出てますけど」

おつといかんいかん、ナーガの言ったことを思い出せ俺っ！！

「グスツ・・イツミごめんね」

「私はいいけどサリアかなり心配していたから後で謝りなよ」

「ヒック、わかった」

サリア達に合流するとクミは深く頭を下げてあやまった。

「あまり……心配させないでくださいね」

「……うん」

その後はみんなで観光をし、クミはなんだかたくさんのお土産を買っていた。俺も昔修学旅行の時買ったな、懐かしい。

楽しい時間もあつという間に過ぎワイバーン船の出発の時間がやってきた。飛行船のそばで待機しているワイバーンは体中に棘がはえている小型のドラゴンという感じでかつこいい。

「本当にお世話になりました」

「気にしなくていいよ」

「そうだぞ」

「そうですわ」

「クミ、お別れだな。」

「イツミ達もこんど内の領に来たときは寄ってね。絶対だから」

そう言つとさつさと飛行船の中に入ってしまった。

「お嬢様は別れがつかくなるのが耐えられなかったんですよ」

俺達は互いの顔を見てニヤニヤする。

「それとイツミさん、ちょっとこちらへ」

俺は不思議に思ったがとりあえずサリアの言つとおりにする。

「最後に一言、お嬢様は鈍くないですよ」

そう言つと飛行船へと走つていく。

「ちよつ、それどういう意味だ？」

サリアは走りながらこちらを振り向いて微笑むだけで何も答えてくれない。

そのままワイバーン船は飛び立とうとするがその前にクミが窓から顔を出して叫んだ。

「イツミ今度はその女装を解いた時に会いましょう!!」

何・・・だと・・・!!?

バレてたのか!? 確かにサリアの言つとおりだよ。

でも一つだけ疑問があるな。

何故ナーガの女装はバレなかったんだ?

三十話 酒場での出会い（前書き）

だいぶ遅れましたがPV10万突破しました。

一度でいいから「私のPVは五十三万です」とか言ってみたい！！

三十話 酒場での出会い

その後近くの宿屋で部屋を借り、ようやく女装のためのカツラと女物の服を着替えた。

俺は本当にしばらくぶりに男として生きられるので重くのしかかっていた肩の荷がとれたかのようにすがすがしい気持ちになっていたが、隣で着替えるナーガは心無しか少しさびしそうな表情をしていた。

それは本当にどうかしている気がしたが世の中にはいろんな人がいるんだと自分に言い聞かせ、言いたい気持ちをグツとこらえた俺は偉かったと思う。

着替えた後はユーリイと合流して近くの酒場に寄った。

造りは少々古そうだが店内にはぎわっていてなかなか良さそうな店だ。ここでも魔獣とマスターのコンビが目立って多くいて少し肩身が狭い気がしたがそんなことを言っているところでは何処にも行けないから我慢しよう。

とりあえずこの店主に肉料理と飲み物を注文して今回の旅の思い出について語り合った。

ユーリイは俺がサリアの話をしだすとムツとした顔をしてそっぽを向いたのでナーガにアイコンタクトで助けを求めたが、ただ『空気を読めよ』とでも言いたげな顔で見返すばかりだ。なんとかしてユーリイの機嫌をとるためにとりあえず今日疑問に思っていたことを聞いてみる。

「なあユーリイ、ネヴァとミヴァって知ってるか？」

「ああ、あの伝説の魔獣使いのだよ。」

「良かった。詳しく教えてくれないか？やはり俺にとってユーリイだけが頼りなんだ」

「ふふう、仕方ないな」

えらそうに胸を張るユーリイはご満悦の様子だ。

「ネヴァとミヴァは双子でな、幼い頃から魔獣と話することが出来たらしい。そしてある日二人は非常に珍しいことに森で怪我をしたドラゴンの子どもを見つけたんだ。ドラゴンも最初は二人を警戒していたが毎日話す内に二人と友達になった。

それから二人とドラゴンは共に大きくなり旅へでて、洪水で流されかけた村の人を救ったり、人を食うオーガの群れを倒したりした。

だがそんな冒険も長く続かなかった。彼らと共にいたドラゴン、名はアンヘルというのだから。そのアンヘルは彼らとの旅の途中メスのドラゴンと出会い、二匹の間に子どもが生まれた。

その子どもを狙ってある魔法使いがねぐらに忍び込み子どもを盗み逃げていった。

ネヴァとミヴァは何とか魔法使いの寝ている隙にその子どもを取り返してアンヘルのもとへと届けたが、アンヘルの怒りは収まらずネヴァとミヴァの制止を振り払いその魔法使いが潜んでいた小さな村を灼熱のプレスで炭化させたが、それでもアンヘルの怒りは収まらない。一説によるとドラゴンの怒りを止められるのはわが子の鳴き声だけといわれているからな。

そしてアンヘルは今のザルナ王国の一つ前の王国であるブリアン王国に飛び立ち破壊をしようとしたがそれを待ち構えていたのがネヴァとミヴァだ。

アンヘルと彼らは大事なパートナーだったが、怒りで興奮したアンヘルにはそれが分からない。

そこでネヴァは両手を、ミヴァは両足をアンヘルに自ら喰わせた。アンヘルは己のマスターの血肉を喰らったことで正気を取り戻し、自らの行いを反省し生涯彼らの手足になることをその場で誓ったらしい」

「その後は？」

「ここから南の方向にあるキリ山脈の方へ飛んでいったらしいがそれ以上はわからないんだ」

さすが伝説になるといだけの話ではあるな。

「お嬢さんなかなか詳しいですがその後の話がいけねえや」

なんかここの店主のオッサンが会話に参加してきた。

「貴様つ、ユレイア様を侮辱する奴は私が許さんぞ！！」

「いやナーガ落ち着け。お前が出てくると話がややこしくなるから」
「しゃべっていいんで？」

オッサンも気まずそうに言ってくるじゃねえかナーガのアホッ！！

「ああすまない。どうぞ」

「その話の続きでは確かネヴァとミヴァはそこでドラゴンと共に死んで石になったと聞くぞ。」

「バカかつ！！あんたが言ってるのは首都にあるモニユメントだ。

オチはお嬢さんの言うとおりだよ」

隅で飲んでいた冒険者の一人がそう言う。

「何言ってるんだ！？俺の話の方が正しい！！」

「俺の聞いた話だと今も二人はキリ山脈で生きてるって話だぞ！！」
酒場の連中が次々と話に入ってきて好き勝手に口論を始めたのですっかり蚊帳の外になってしまった俺は奴らを放っておいてグビリと酒を飲む。

次々にビンを開けていく俺を見てユーリイは少し咎めるような視線を送ったが無理はするなよとだけ言って先に宿屋へ帰っていった。

それにしてもさっきから明らかにアルコール度数の高い酒をがぶ飲みしているが全く酔う気配が無い。これもベアンテの能力のせいだ

としたらちよつと迷惑だな。

もう二、三人の客を残しほとんどの客がいなくなった頃、隣では途中まで俺に付き合っていたナーガが『ユレイア様』と呻きながら寝だしたのでさっさと勘定をすまして宿に帰ろうとしたが、その前に俺の服のすそを引っ張る感触がした。

どうせナーガが寝ぼけて引っ張っているんだろうと思い、振り向いて一発殴ろうとしたが当のナーガはカウンター席で突っ伏して寝ている。

じゃあ俺の服のすそをひっぱっているのはなんだろう？と確認したその先には顔が竜のようで体が馬の生き物がいた。

慌てて飛びのいたがそいつはただ俺をそのアーモンド状の目でじっと見つめてくるだけだったのでどうやら襲う気はないようだ。

「お客さん、心配しないでください。そいつはマスターと契約した騎竜だから滅多に人は襲いませんよ」

たまには襲うんじゃないか！！

…あまりこいつに近づかないようにしよう

そんな俺の意思を無視して騎竜とやらがこりずに俺の服のすそをひっぱり、ついて来いという意味表示をするので仕方なく店の隅のほうへついていくと木製のテーブルに体を預け寝ている女がいた。騎竜はその女に体を寄せて揺り起こそうとするが女に起きる気配は無く、騎竜は困ったように俺を見る。

「お前の主人なのか？」

騎竜には人語が解せるらしく俺の質問に首をコクリと頷く。

「それでどうしろと？」

騎竜は自分の背に何度も主人を乗せようとするが、うつぶせで脱力しきつているので主人を上手く乗せられない様子だ。

一度ため息をついてから俺は女を抱きかかえる。ただでさえ軽い体だったから今の俺には人型の綿をもっているような重さしか感じら

れなかった。

騎竜の背に女をのせるとご機嫌な様子でキューと鳴く様子は見た目の蔵つさとは逆で可愛かった。

用事がすんだ俺はそのまま会計をして帰ろうとしたが店主が目ざとくナーガという大きな忘れ物を持って帰れと言うので仕方なくナーガの片足だけを掴んで地面を引きずりながら夜道を歩いた。

ナーガが堅い石畳の上を引きずられながら幸せそうな顔をしていたのでムカついて5回ほど間違って投げ出してしまったが、当のナーガはそれでも幸せそうだったので体力の無駄遣いを止め、地面から木を生やしその上にナーガを乗せて宿までその木を伸ばしていくことにした。

道半ば頃に後ろから蹄の音が聞こえだし、不審に思い振り返ると背中に主人を乗せた例の騎竜だったので驚いた。きっと主人と同じ宿なのだろう

「お前も大変だな」

そんなこと無いよとばかりに首を振る騎竜

「そうか、俺は大変だよ」

俺が引きずっている物を見た後、こちらを向きかわいそうにと言うように軽く鳴く。

こいつはいい奴だな

そのまま目的地の宿につきさつさと寝るために自分の部屋に帰ろうとしたがそこで後ろから自分を引っ張る存在がいた。

「今度は何だ？」

騎竜は自分の背に乗っている主人を首ですす。

「もしかして主人が部屋の鍵を持っていて入れないのか？」

肯定を示すように縦に首を振る。

仕方ないとは言え女のボディチェックは犯罪の匂いがしてなかなか

気が進まなかったがしぶとく騎竜がせまるのでなるべく意識せずにやることにした。

だが予想以上にこの女は素晴らしいプロポーションだったので理性を抑えるのが大変だった。

しかもそれでいてちょうどいい筋肉がついているのでおそらく俺達と一緒に冒険者だろう。

時折出す息の漏れる声は今までの人生で一度も彼女がいない俺には毒過ぎる。

とりあえず目的の鍵を探し出し部屋の鍵を開け、ついでに女をベッドに寝かしてやった。

ただもつと肌の感触が味わいたいからかじゃ絶対無い！！

騎竜にお休みを言って帰ろうとしたらいきなり強い力で引つ張られ俺は意識を失った。

三十話 酒場での出会い（後書き）

今までずっと書いた小説をストックしておりましたが最近を考え付いたものをすぐ投稿しているもんですからミスもあると思います。

バンバン悪いところ、あれば良いところを教えてください！！

三十一話 目覚めの感触（前書き）

どうしてこうなった？

三十一話 目覚めの感触

なんだか柔らかい触感を後頭部に感じて俺は目覚めた。

目を開けると朝日が目に差し込んできて、その明るさに慣れるまでに少し時間がかかる。

とりあえずベッドから抜け出そうとベッドの隅に手をおき踏ん張ろうとしたその時、再び俺の手に先程感じたような柔らかいものがふれた。

いったい何だろうと思いつつ俺が見た先には女性の象徴をしっかりと掴んでいる不謹慎な手が…

恐る恐るその豊満な体の持ち主を見ると、幸運なことにスヤスヤと寝息をたてていてどうやら俺のした事に気づいている様子はないようだ。

危ねえ危ねえ、しかしかなり柔らかかったな。

そういえばどこかで目覚えがあると思えば昨日酔っ払って寝ていた女じゃないか、

昨日あれだけ世話をしたんだからこれぐらいのご褒美はあって当然だろ！と思うことにしてとりあえず女を観察することにした。

褐色の肌に映える白い髪が肩のあたりまで垂れ下がっていて、特徴的なアーモンド形の目とプルプルとした唇が男をそそりそうだ。

ユーリイとはまた違った美しさをもっているな。

ユーリイはまるで人形のような美しさだが、この女性は猫のように野性味溢れた美しさをもっている。

しばらく眺めていたら床のカーペットの上で寝ていた騎竜が起きだして俺に甘えるように鼻を体にこすり付けてきた。
何この生き物可愛すぎなんだけど!?

可愛いさにやられた俺が頭や脇のあたりをこすってやると騎竜は構ってもらえたのが嬉しいのか興奮して更に体を寄せ付ける。仕舞いには二メートル近い体をぶつけてくるまでになったのでベアンテの蔓で拘束するという素晴らしいアイディア（お仕置き）が採用された。そのままお説教をしたら反省したかのようにクーンと可愛らしく鳴きだしたので許してあげた。

そういえば先程までの大きな騒ぎにもまったく起きずに寝ているこの女はすごいな。

試しにどこまで起きないかを確かめるためにほっぺをグニグニしてやるといきなりパチツと目を開けた。

俺は少し、いやかなり驚いたが再びほっぺを触りだした。

「何を…やっているんじや?」

「お前のほっぺを触っている」

「いやそれは分かるが何故我のほっぺを触っているのじや?」

「憂さ晴らしだ」

「そうか………っておかしいじやろ!!」

まったく昨日こいつの面倒を見たのに何で文句を言われなければならないんだ!?

世の中これすべてギヴ&テイクなのですよ。

それでもわあわあ騒ぐこの女を黙らせようと思い、試しに喉の辺

りをさすつてやると急に目をつぶつて気持ち良さそうな顔をする。本当に猫みたいだな。このままだとゴロゴロと喉を鳴らしそうだな。

しばらくそうしていたが急にハッと我に帰り素早い身のこなしで後ろに飛びのく女

「我に何をしたのじゃ！？我をここまで困惑させるとはさてはお主奇術師かの？」

「何もしてねえよ！」

「ええい聞く耳持たんわ！！行けつ、ガロン！」

シーーーーーン

部屋の中には空しい沈黙がながれる

「何で言うことを聞かないんだガロン？」

すごく困った表情を浮かべる騎竜改めガロンは表情が豊か過ぎると思う。

「ギュルラ、ギュレレ、ギュララララ」

「ふんふん」この人は恩人だから攻撃するのはダメ！！「じゃと！？どうということなのじゃ？」

それから二人？はしばらく話しあっていた。正直何を言っているか全く分からなかったのでここらへんは割愛する。

「いや本当にすまないことをしたの。酔いつぶれた我を宿まで送ってくれたばかりかこれから朝食を奢ってくれるなんて器が大きいのう」

「そんなこと言った覚えは無いっ！！」

「チツ…けち臭いのう。……まあここで会ったも何かの縁じゃ、我はマキアというもの、この子はガロンじゃ。」

「俺はイツキ、薄幸の美少年だ！！」

「そうかイツキというのか、変わった名じやのう。」

はい、スルーされました！

マキアたちと一緒に部屋を出ると窓の外から喧騒が聞こえてきた。全身甲冑姿の男たちがこんな朝早くから誰か人探しのようで付近の住民たちに聞き込みをしている。

「おい、奴は見つかったか？」

「ええ、なんでもこの宿に入っていくのを見た者がおるようです」

なんだかきな臭い雰囲気だな。

「おーおー、こんな朝早くからご苦労なことじゃなあ」

「やっぱりお前か」

「そんな風に思われとったとは心外じゃのう」

「だが事実だろ？」

マキアはこつちを見て何も言わずに笑うだけだ。

「それじゃあ、またの！」

マキアは慣れた様子でガロンに跨り、窓から飛び出した後は家屋の屋上を伝って遠くにいつてしまった。

なんだか豪快な奴だったな。胸も性格も・・・

しばらくボーとした後、階段を降りるとすでにユーリイとナーガが椅子に座って料理を待っていた。

「ずいぶん遅かったじゃないかイツキ、もうすぐ私が起こしに行くとしていたところなんだ。」

「そうだぞイツキ！ユレイア様を待たせるなんてあつてはならんことだー！」

「すまん。変な夢を見ていたんだ」

朝からかなりのポリユームの朝食だったがナーガとユーリイは当然のような顔をしていたのでおそらくこの世界じゃあこれが普通なのだろう。この二人がおかしいだけなのかもしれないが・・・

この店で人気のヨデル（果物の一種らしい）のジュースは酸味と甘味がちょうどよくて美味しかった。

「そんなに美味しいのか？ちょっと飲ませてくれ」

ユーリイはそう言う俺の飲みかけのジュースを奪い直接飲んだ。ナーガが隣で『バ、バカな……間接だ……と！？』とほざいている。

今日は刺激的なことが多い素晴らしい日だな。

「全部飲んじやったぞイツキの」

その止めの一言で俺は吐血した（推定：700ml）

ナーガは血の涙を流していた（推定：致死量）

三十一話 目覚めの感触（後書き）

今回の終わらせ方は納得できないからおそらく書きなおすかも。

改めて新キャラ登場！！今考えてみたらこの作品登場人物少ないな。

次は一気に百人の新キャラが出る予定ですww

三十二話 世の中いろいろあるよ

「なあ私達でギルドをつくらないか？」

ユーリイが宿屋から出ておもむろにそう言った。

「ギルドって俺らは既に冒険者ギルドに入っているじゃないか。何でまた？」

「俺達が入っているのは冒険者ギルドという大きな枠組みだけだ。

その中で気の合う仲間や同じ信条を持つ者が集まって更にギルドをつくるものはたくさん存在する、……いやほとんどだな。」

「まあランチともいうらしいがな、たいていはギルドと言った」
「なんかややこしいな。」

「ギルドをつくって何か得になるのか？」

「この世界では魔物退治は普通集団で行われるからソロよりも優先的に依頼を受けれるし、有名になると一層そうなるな。冒険者ギルドへ毎月活動金を支払わなければならないがその分、モードを格安で提供してくれたり、魔導具の優先的な売買もあるんだぞ。」

「モードって何？」

「なんだイツキ知らないのか？モードというのは冒険者ギルドが独占している魔法技術で、ある物体の中にたくさんの物が詰め込まれる未だ謎の魔術だ。もちろん上限はあるがな。」

ああ、異世界に行く話の中でよく出てくるアレね。

「いいんじゃない？」

「じゃあ決定だな！！」

「ああ、ユレイア様。なんて素晴らしい笑顔なんだ！！」
ナーガって最初の頃とだいぶ印象違うよ。

「でも他にいろいろ決めなきゃいけないこととかがあるんじゃない

か？誰がギルドマスターになるかとか、ギルド名とか、本拠地とか。

「…うむ、全く考えていなかったな」

ユーリイが言い出したくせに……まあそこが可愛いんだが

「俺はユレイア様にお任せする。」

「だったらイツキがギルドマスターってことでいいか？」

「却下で！！」

そんなことには向いていない絶対の自信があるし、なにより書類やら何やらでめんどくさそうだからな。

「やっぱりここは美人で頼りがいのあるユーリイがギルドマスターとして適任だろ」

「こそ、そうか。イツキがそこまで言うなら／＼／＼」

「激しく同意だ！！」

ユーリイのテレ顔は癒されるがナーガが横でハアハアしだすからナーガのいないところで見せて欲しいものだ。俺の精神衛生的にもな

「次はギルド名だな。何か意見は無いか？」

「『ユレイア親衛隊』なんてどうですか？」

「残念ながら既に存在するんだなこれが」

思いだすだけでウザくなる集団だ。本当に消えて欲しい。

「クソっ、先を越されたか！！」

「イツキは何かないか？」

「十個候補があるな」

「そんなにか！？言ってみてくれ」

「十個中、十個が下ネタだがそれで良いのなら」

「「却下だ！！」」

ちえっ、結構お気に入りだったんだがな。

「そんなに言うならユーリイは何かあるのか？」

「確かにユレイア様の意見には興味がある。」

「ふふゝん、当然あるぞ！！」

「何だ（ですか）？」

「『怪盗ドロ太郎』だ!!」

えっ……………!!?

俺達は怪盗だったのか？冒険者ギルドじゃなくて盗賊ギルドに入ってたほうがいいんじゃないか？

あと今決めてるのはギルド名であって、個人の名前じゃなかったはずでは？

「す、素晴らしい!!ユレイア様の才能ははっきり言ってカスだが、そこに痺れる！憧れる！」

こいつ今不謹慎なこと言わなかったか？照れるな！ユーリイ!!！
貶されているんだぞ!!！

「じゃあ『怪盗ドロ太郎』で決定だ「ダメだ!」……………な、何故だイツキ？」

「人として恥ずかしいからだ。仕方無いから俺が真面目に考える」

とは言ったものどうしようか？考えても下ネタか厨二臭いものしか出てこない。

「うーんとりあえず仕事探しに行って当面の金を稼がないか？」

「そうだな、ユレイア様の意見は捨てがたいがこれからずっと背負っていくことになるから名前はよく考えたほうがいいと思う。どちらにしろギルドの加入金にはあと数十万ラド足りないしな。」

「だったら尚更だな。おーい、ユーリイそこで落ち込んでないで依頼受けに行くぞ」

「……………そんなにダメかイツキ？」

まあ世の中にはいろんな人がいるからね…

ギルドへの道を歩いて行くと道の端にある街路樹の影に隠れていて、酷く既視感を感じさせる存在がいた。

その魔獣使いの体半分は木からはみ出ているし、後ろの騎竜のほうは今にも俺に飛びついて行きたそうにウズウズしている。当然気配に鋭いナーガは訝しげな表情をしていたし、ユーリイも警戒心バリバリで剣に手をあてていつでも攻撃できるようにしていた。

俺は魔獣使いに気づかれないように街路樹を遠隔操作して足を木の根で縛り動けなくした。

「よし行くか」

「しかしイツキあいつ等はどうするんだ？」

「心配するなつてユーリイ。もう俺が済ましたから」

気を取り直して再び道を歩き始めた俺達を呼び止めようと飛びだそうとしたマキアは計画通り根に足をとられて勢いよく転んだ。

「な、何じゃこれは！？あつ、ちよつと待て！！我を置いていくな
く……！」

「何だイツキあの御仁と知り合いなのか？」

「いや全然知らない人だよ」

「イツキはすぐ女の子と仲良くなるんだな」

膨れっ面をして不機嫌をアピールするユーリイは絶滅危惧種に指定され、全力で保護しなければならん！！

ギルドにつくと四方から鋭い視線を感じた。やはりここダッドルメアでは冒険者も魔獣使いでばば占められていて俺達のような奴はあまり歓迎されないらしい。

それに冒険者たちが下卑た目でユーリイを見るので俺とナーガはユーリイを隠すように前へ進む。

胸くそ悪いが基本的にユーリイは何処へ行ってもそのような目で見られるか、ナーガのように信仰している目しかないので仕方無いといえはそうなのだが。

「ギルドランクを計っていかないか？」

レイドからここまでけっこうな数の魔物を倒してきたのでもしかしたらけっこう上がっているかもしれない。

「え」と、イツキさんがC、ナーガさんがB、ユレイアさんがAです。すね。」

「全然上がってないじゃん。」

「そりゃ……イツキは基本クミ嬢たちのお守りだったからな」

「それにある程度までランクが上がるとそこから先はなかなか上がらなくなるんだ、私やナーガのようにな。やはりギルドを組んで大きな依頼をうけたほうがいいんじゃないかイツキ」

「名前、考えとくよ」

掲示板にはたくさんさんの依頼があつたがどれも低ランク用の簡単な依頼ばかりで高額依頼はなかなか見つからない。

「これなんてどうだ？」

ナーガが差し出した依頼書を見ると『シロガネの討伐（討伐証明部位である角は必須） 報酬50万ラド』と書いてあった。

「いい額だな。良しっ、これにしよう」

「ちよつと待てこれ四人以上で参加って書いてあるぞ」

「「えっ!?!」」

確かに下のほうにそう書いてある。

「他に高額依頼って無いのか？」

「残念ながら無かったぞイツキ」

「このような失敗をするとはお恥ずかしい／＼／＼」

いや待て、一人だけ心辺りが無いこともないのだが……

「ほほうどうやらお困りのようじゃのう？」

いつのまにか俺達の後ろに立っていたようにどや顔のままやっているマキア。

なんか頼りたくないな

悲しいけどこれ多数決なのよね

カラツカラツと軽い蹄の音が不気味なほど静かな山道に響く。山といっても木々は無くむき出しになった岩が行く手を阻むように点在し、生命の欠片が見つからない程の枯れた土地だ。

辺りにはピリピリとした緊張感が漂うが、そんな中俺は騎竜のガロンの上で初めての乗馬？を楽しんでいた。マキアが言うには、騎竜は非常に珍しい動物で賢く、そしてその強靱な足で谷を超え、更には空も飛べるというスーパー魔獣らしい。

そうは言ってもガロンには翼がないので不思議に思ってたマキアに聞いてみたら、翼はかなり大きく地面を走る時に邪魔になるので普段はしまっているらしい。

そして何より乗り心地が最高だ。

鞍もつけていないのに全然腰やケツが痛くならないし、その柔らかくて黒い毛皮はまるで絹の滑らかさとウールのモコモコさが合わさったような素晴らしい触感でおもわず頬ずりしてしまう程だ。

「おい、イツキそろそろ変わってくれ！！私もそのガロンに乗ってスリスリしたいんだ」

騎竜はせいぜい二人乗りでパートナーのマキアは当然として、今は俺が乗る番だった。

「じゃあ帰りはユーリイな」
俺の出した案にユーリイは喜んでいたが、本当ならずっと乗っていい。

それほどこのガロンの乗り心地は最高だし、初心者は前に乗ったほうがいいとマキアに言われ前に乗ったがこの体勢だと後ろのマキアのホニャララが背中当たって更に幸せへと導いてくれるのだ！！

僕にはまだ頼れるピーがあるんだ。こんなに嬉しいことは無い！！

しばらくするとゴツゴツしていた道が途切れちようど休憩によさそうなき地が現れたのでそこで休むことにした。

「ユーリイ、ダッドルメアで有名な菓子屋さんのクッキーがあるのだが食べるか？」

「本当か！？マキアは優しいな」

ここまで来るまでにどうやら相当仲が良くなったらしくユーリイとマキアは女の子トークをしだした。

当然この空気に入れない俺やナーガ、ガロンの男連合は隅っこで自分の武器の手入れをしながらだべっていた。

「なあナーガなんで空は青いんだろうな」

「おそらく青という色は光の中でも「そんなことは聞いてないっ！そっじゃなくても」と夢のある話をききたいんだ」

「・・・きつと空の向こうにはたくさんの魚がいてな、」

「ほう、それで」

「その魚の鱗がキラキラ光って青く見えるんじゃないのか？」

「・・・あつゴメン。今全然別のことを考えていたわ」

気のせいかナーガが持っていたボロ切れを破る音が聞こえた。

ああ世界は平和だな

急にガロンが起き上がりギュララと鳴き始めた。

「気をつけろっ！！敵がくるのじゃ！！」

マキアが言つと同時に俺の後ろにある岩が真つ二つになりその間から二本角の魔獣が現れた。体はまるで鉱石のように硬く鈍い銀色に輝き、ライオンの顔と猿の体を合わせたような姿をしている。そして先程巨岩を切り裂いた爪は鋭く真つ赤な色をしていてまるで今まで殺した獲物の血の色で染まっているかのようだ。

岩にもつとも近かつた俺に真つ先に突っ込んできたがその横つ面をナーガが拳でぶん殴る。

「立つたままだぞ死ぬぞイツキ」

「助けはいらなかったんだがな」

ナーガに殴られ２メートルほど吹き飛んだがまるでダメージもなく立ち上がってくる。

やはり堅いな。

「こいつがシロガネって奴か？」

「おそらくな」

威嚇のために左手から起爆草の種を奴にむかつて飛ばしたが素早い動きですべてかわしてしまふ。だが外れた種は地面に当たると勢いよく爆発して奴をびびらせた。

その隙を狙つてユーリイは得意の氷魔法で足を凍らせ風の魔剣で比較的もろそうな喉もとを切るがガキインと鉄を切つたような音が響きシロガネは苦しそうな顔をするが致命傷には程遠い。

シロガネは手の爪で何度か氷を削つて氷から脱出するとマキア目がけて駆け出した。

マキアは冷静に背中から矢を取り出すと弓につがえて激しく動くシロガネの右目に矢を見事的中させた。

流石に目はもろいらしく狂つたように叫び激しく動き回るシロガネだがまだまだ元気な様子だ。俺は両手を地面に押し付け奴の足下に巨木を生やす。

奴はいきなり足下から現れた木に驚いて逃げ出そうとするが生命力

溢れる緑の力には勝てず巨木の根に縛り上げられてしまう。

ちょうど首と顔だけが巨大な根の中から出ている状態になっても叫び、根に噛み付こうとしている生命力には驚きだがもう何もできない。

しかしこのまま放っておいてもこいつはせいぜい三日は生きるだろうからちゃんと後始末をつけないきゃだな。

「なあマキアちよつとガロン貸してくんない？」

「あ、ああいいぞ」

俺の力に驚いた様子のマキアに了承を得ると、甘えたそうに近寄ってくるガロンに乗る。

「ガロン、あいつ目がけて走ってくれないか？」

「ギョル！」

俺の言うことを理解したガロンは強靱な足で地面を蹴り景色を置いていってしまうほどに加速してシロガネ目がけて走る。

普通なら怖く感じるだろうが、ガロンの走りは地面への衝撃を全く感じさせないので逆に気持ちいいくらいだ。

そしてその勢いのまま間近でシロガネのさらけ出しになった喉もとをみるとシロガネは怯えたように息を呑む。

そして俺は俺の愛槍を加速したスピードで喉もとに突き刺した。

やつの堅い皮膚もそれには耐え切れなかったらしく赤い血を天へと吹き上げる。

「よくやったなイツキ」

「だろっ」

「そこは慎むところだろうイツキ」

ナーガとユーリィが褒めてくれるのは嬉しかったが一人マキアだけ

が輪に入ってこなかった。

ちよつとさつきやりすぎたかな？ま、でもあいつ倒すのはあれしか無かったし。

証明部位である角を取った後にガロンと遊んでいるマキアのところ

へ行ってみたが俺への嫌悪感は見られなかった。じゃあ何でなんだ？

「何でさつき輪に入ってこなかったんだ？」

「・・・うむ。どうやら我はイツキに惚れてしまったようなのじゃ

／／／／」

・・・なんだか大変なことになりそうだな。

三十二話 世の中いろいろあるよ（後書き）

ギルドの名は別に作者が決めてもいいですが、こんな名前がいい！という読者のためにあえて決めませんでした。特に何も要求が無い場合、作者がきめます。

あとついに出了ましたね。ユーリイのライバル登場なのです！！

なぜ彼女をああいう話し方にしたか？ですが、それはナーガとユーリイの話し方がほぼ一緒だからすごく書きにくいことに気づいて次出てくるキャラは特徴的な話し方にしようとおもったからです！！

個人的にこういうしゃべり方のキャラが好きだからというのもあるけどね。

三十三話 女の敵（前書き）

初めて投稿の間が一週間以上あいてしまったorz

三十三話 女の敵

* * *

イツキと出会ってからもう二ヶ月になる。

初めて出あった時はいきなり変なことを言い出す奴だったが・・・それは・・・今でも変わってないな。

それはともかく私はイツキが闘う姿をあまり見たことが無い。ロッドマスターと闘った時も私は気絶をしていて見てないし、前回ハローグとかと言う奴相手に闘ったらしいが私はイツキに化けたローグに騙されて魔導具に囚われの身だった。

実際に見たのはカナゼ司教との闘いの時だけだ。

結果は三分もたずにイツキが負けたがカナゼ司教相手に良くもったほうだ。

それにイツキは異世界出身らしく、考えられないことだがこの世界に来るまで一度も本格的な戦闘訓練を行ったことや武器を持ったこととすらないそうだ。

それにも関わらずイツキはたかが一ヶ月であの黄金のカナゼから基礎となる全ての槍術を学び大会の参加も認められるほどに上達した。

いくら師匠が良いからといって成長のスピードが速すぎる。

カナゼ司教も直接イツキには言わなかったが、陰で私に「あれほどの才能は見たことが無い。若い頃の私の十分の一に過ぎないがな。だいたいイツキは師匠を敬う気持ちが全く無いぞ！うだうだ、くだくだ……<二時間後>…」というわけで私は奴をたたき潰そうと思う」

・・・なんだかイツキの師匠になってからカナゼ司教がおかしくなった気がする。

まあカナゼ司教も影ではイツキの才能をちゃんと認めているからイツキが自分の才能に慢心して精進を怠ってほしくないのだろう（そう信じたい）

それにイツキは戦闘の才能だけでなく料理の才能もある。

女として非常に悔しいのだがイツキの作る料理は味付けが細やかで見た目も良い。

このあいだ作ってくれた『ニクジャガジャガ』？とかいった故郷の料理はとても美味だったのでまた今度作ってほしいものだ。

ともかく！！そういうイツキの魅力に引き寄せられて近寄ってくる女が最近多くてこまっている。

なんだかイツキが綺麗な女性と仲がよさそうにしているのを見ると私のニクジャガジャガが突然やってきた人に食べられたようなそんな気持ちになる。

そんな気持ちをナーガに相談すると、

「神よっ！！私に怨敵イツキを殺す力をお与えください！！」

と空に向かって叫んだので私は「神を信仰し始めたら神への順応性が高まり、魔法が使えなくなるぞ」といつてあげた。

ナーガは魔闘士かつ、かなりの強者なのでその力を失うことは痛いからな。

そして今回のシロガネの討伐の件で私はほとんど初めてイツキが真剣に闘う姿を見た。

シロガネはBランクの中級レベルの魔物で鉄のように堅い皮膚を持つていることが特徴だ。

正直Cランクのイツキではキツイかと思い私とナーガで仕留めるつもりだったが奴は予想以上に堅く私の力のほとんどが封印されているとは言え、魔剣で斬れなかったのはだいたい良かった。

長期戦も覚悟したがイツキの大樹降臨で奴は身動きがとれない状況に追い込められ、更にイツキは騎竜のガロンに乗って、勢いをつけたまま奴の喉もとを槍で貫いた。

ガロンに乗ったのはおそらく自分の槍の技術では決定力が不足していると考えたのだろう。

戦闘において重要なことは自分の今持つ実力で何が出来るかを考える瞬時の判断力だ。

それを戦闘経験がたかが二ヶ月に過ぎないイツキが体現しているというのはパートナーとして嬉しくもあり、悔しくもある。

それほどまでに今回のイツキの戦闘は素晴らしかった。

なんだかマキアがボーッとイツキのほうを見ていたのが少し気になったがそんなことより速く帰ってイツキとナーガと私で新しいギルドを作りたい。

この3人で作るギルドだ、きっと素晴らしいものになるだろう。

* * * *

「そういえばどうしてマキアは追われていたんだ？」

ガロンに顔中舐め回されながらマキアに聞く。

「我のことが気にかかるのか？」

艶っぽい笑みを浮かべてマキアは答えるが、俺としてはガロンが顔を舐めるとジユワツとまるで酸に溶かされているような音がするほうが気にかかった。

溶けて・・・ないよな？

俺の無言を肯定と受けとったか、マキアはフツツと笑って答えた。

「少し前にダッドルメアで商品の流通を牛耳っている商人から依頼を受けてな。その時に商人はどうやら我の魅力に惚れてしまったらしく金をやるから愛人になれと言ってきたのじゃ。もちろん我は断ったぞ！！だが彼奴はお抱えの傭兵たちをつかって我をさらおうとまでしてきおるのじゃよ」

「だが奴らは騎士の格好をしてたぞ」

「商人の悪知恵よ。騎士の格好をさせておけば市民も搜索の協力ぐらいはするじやろう？」

なかなか悪い奴がいるもんだな。

「マキアっ！！そのような女の敵をほうっておいていいのか！？」

いままでマキアと一緒にガロンに乗っていたユーリイも話を聞いて激怒した。

「しかし、奴の屋敷は警備が厳重で我とガロンでは突破することは出来んのじゃ」

マキアが落ちこんだようにうなだれたが、俺には下を向いた後少し笑っているのが見えた。

気をつけるユーリイ！！これは誘導尋問だ

「なら私達が協力しよう!!」

ユーリイならそう言ってくれると思ってたよorz

ダツドルメアに着くととりあえずシロガネの角を持っていき報酬を受け取った。

あんだけの化け物を倒してたった20万ラドとは世の中思ったよりも味気ないな。

「それで商人を痛めつける作戦はあるのかユーリイ？」

「違うぞイツキ痛めつけるのでは無く天誅だ。」

「そうだイツキ、我々は偉大なる指導者ユレイア様の名において天誅を加えるのだ!!」

「……マキアは何か作戦はあるか？」

「うむ、まず屋敷の地形が分からんことには作戦の立てようがないの」

「うゝん、それは考えてなかったな」

「ダメじゃないかイツキ、準備は大事だぞ!」

ハハハww、俺のセリフだバカヤロー

「だが偶然ここにあるのじゃ」

そう言つてマキアは胸元から一枚の羊皮紙を取り出す。それには屋敷周辺の全体図から内部の部屋構成、あげくの果てには守衛の巡回ルートや交代の時間までがこと細かく描かれていた。

これを屋敷の人間がみたらゾツとするだろう。いったいこいつはどのくらいの時間をかけてこれを作ったんだろう？

「おいマキア、お前最初から侵入するつもりだったろ」

「な!？何のことじゃ？」

「はあ、で作戦は何だ？」

「うむ、その前に皆に渡しておきたいものがあるのじゃ」

マキアはガロンの背につんである大きな皮袋の中から四つの手のひらに収まるぐらいの長方形の箱を取り出し酒場のテーブルの上に置

いた。

なんだか見たことがある形だな。

「これは知り合いからもらった通信用の魔導具で名をコードというものじゃ。いわば水晶球の小型版と思ってくれれば良い。ただし使用範囲は三キロ程度で、まだ試作品な為に不具合も起きるかもしれないがのう。」

マキアの口ぶりからしておそらく携帯とかトランシーバーの類だろう。

「ほほお、マキア嬢は中々珍しいものをお持ちですな。これは故郷の技術でつくられたのですか？」

「あつ、ああ」

なんだかマキアは酷く動揺しているようだな。

そんなにナーガはおかしなことをいったか？

「と、とりあえず作戦は常にこのコードを使って連絡、および指令を出していくからコードは大切に扱ってくれの！」

俺はさっきまでコップの下にいていたコードを取り出し、急いで結露した水滴を服でふき取って何事もなかったかのようにポケットへ入れる。

「決行はいつだ？」

皆のジト目を無視して俺は聞く。

「今夜だ」

三十三話 女の敵（後書き）

今回は文が荒かったか。

三十四話 天誅。いや、人誅？（前書き）

テスト週間だったので更新遅れました。

真に申し訳無い！！

三十四話 天誅。いや、人誅？

月明かりが辺りを幻想的に照らす薄闇の中、遠くの方で犬が鳴いているのが聞こえる。

『あゝこちら隊員I、隊員Yそちらの様子はどうか？オーバー』

『非常に可愛いワンコを見つけたぞオーバー』

『Y様が非常に可愛いぞオーバー』

『隊員Nはすぐさま帰れオーバー』

『だいたいオーバーとは何じゃイツキ？もつと皆は真面目にやるべきだと思ふのじゃが…』

そう俺達は某商人の屋敷に潜入する際、それぞれの進入ルートから入ることになったのだ。

各個での潜入はより敵からの発見率を上げることになるのだが俺達にはマキアが用意した地図があるし、それになによりこの通信用魔導具『コード』をもつと使いたかったからである。

『石で躓いたぞオーバー、でもってその石はなかなか綺麗だったぞオーバー』

『隊員Nのそういう報告はこれから無視していくぞオーバー』

『『隊員Y・M共に了解！！オーバー』』

その後も何かを言っていたナーガを無視してマキアが突入のゴーサインを出したのでそろそろ活動するでしょう。

俺は屋敷の裏から潜入することになったが、この屋敷の周りは三メートルほどの鉄柵で囲まれているので一番警備が厳重な正面を除いてあまり潜入の難しさに違いは無い。

重要なのはタイミングだ

妙に高そうな装備をつけた巡回の兵士が通り過ぎていった後急いで柵に近寄り、力任せに柵を開いてすきまをつくりそこに体をねじ込ませると再び力任せに柵を閉じる。

あまりスマートなやり方では無いが柵を壊すよりも音が出ないですむので今回はそうした。

次回があるとは思わないが…

屋敷は宮殿のようなつくりをしていて綺麗に手入れされた庭や悪趣味な魔物の銅像が置いてあったりしたが、肝心の建物への入り口が見当たらない。

普通ここまで大きな屋敷だと入り口の五つや六つぐらいありそうなものだがそれらしきものは無く焦りは募るばかりだ。

トロトロしてるとまた警備の連中が来てしまう。

角の向こうから見張りの連中の話し声が聞こえてくる段階になって今まで上を見てなかったことに気づき、見上げると頭上十メートルにようやく入り口になりそうな窓を見つけた俺は急いでその窓へつながるベランダにベアンテを伸ばし、引っかかったのを確認した後ベアンテを収納してなんとか見張りにばれずにベランダへと降り立つことが出来た。

「ふう、ギリギリだったな」

さうて後はこの家の主人とお話するだけだなと…油断していたのがいけなかったかもしれない。

「武器を置け」

いつのまにか俺の首もとにはナイフが押し当てられていたのとおりあえず俺は謎の人物のいうことを若干ビビりながら聞く。

「良し。そのまま両手を頭の後ろで組んでゆっくりこつちを向け」
恐る恐る謎の人物と顔を合わすとそこには・・・どや顔のナーガがいた。

「まったくイツキは油断しすぎだぞ。もし俺が敵だったらどうする？」

「フフフフ、ハハハハッ！！」

「どうした急に笑い出して、ついに壊れたか？」

「テキハツケン、コウゲキヲカイスル。」

「止めるっ、槍をこつちにむけるな！！アッー！！」

「こちらスネーク、潜入に成功した」

「了解だ。そういえばナーガだけ潜入成功の報告が無かったんだが知っているか？」

「…いや、ナーガは知らないが足下でピクピク動く生物なら知っているぞ」

「はあ、なら帰りにでも拾ってくれ」

それだけ言つとユーリイはコードを切った。

何ぶん潜入なので屋敷内では無駄な会話はしないようにと決めていたからだ。

ユーリイに帰りに拾えと言われたがナーガはでかいから運ぶの面倒くさいな

仕方無いから俺の大自然の力をちよつと分けてやって回復させるか。

…もともとこの力は大自然の力を借りて本人の自己治癒速度を速めるというもので神聖魔法のようにケガの部分を修復するわけでは無いのだが、その分即効性は神聖魔法を軽く抜く

それを考えても、誰のせいかは知らないが先程まで見るも無残なほ

ど体中を痛めつけられていたというのにもう全快しかけている……この回復速度は異常だぞ？俺も人のことはいえんが……

すぐにナーガは気がつく顔と顔を上げて死んだような目をしながら虚空の一点を見つめる。

ふざけているのだと最初は思ったが、あまりにも長くぼんやりとしているので心配になってナーガの肩をゆすって起こす。

「おい起きろナーガ！ナーガちゃん起きなさい！！……チバ・イツキが命じる、起きろっ！！」

最後の一言が効いたのかナーガの目によやく生気が戻ったのでホッとする。

「どうしたんだナーガ、ぼおっとして？」

「……いや、何でも無い。気にするな」

変な奴だな。あと、普通治療した俺にお礼とかあるだろう

「とにかくずっとこのバルコニーにいる訳にはいかないから、とっと入ろうぜ」

「……ああ」

なんだかナーガの様子がおかしい気がする。

……だが特に興味がないのでここは無視しておこう。

しかしどんなに探しても普通はあるはずのバルコニーへと続く扉は無く、あるのはガラス製の窓だけだ。

「入り口はあそこだけか」

現状確認のためにつぶやいた独り言をようやく正気にもどったナーガが聞き、苦笑いしながらやってくる。

「どうやらそのようだな。それでどうする？窓を壊したらその音を聞いた兵がやってくるぞ」

「ナーガには分からないだろうが、この窓には内鍵がかけられている」

「しかし俺達は今外にいるから関係ないだろ」

「あまいなナーガ君！まあ君はそこで黙っていたまえ」

こういう時によくTVとかで見た泥棒の侵入方法が役に立つな。

俺は槍を両手でしっかり構え穂先に全神経を集中させると窓に軽く穂先が入るように槍を突き刺し、そのまま槍の先で円を描く。

そして円形に切り抜いたガラスが重力に従って地面へと落ちていくその前にそのガラスを槍で突き刺し、こっちへ引き抜けばミッシェンコンプリートだ。

後はあいた穴に手をつつこんで内鍵をあければいいだけ、アホの子のナーガですら出来る。

「・・・イツキ、お前だいぶ槍術が上達したな・・・」

ナーガは口をポカンと開けて驚いている。

「俺も自分の才能が怖いよ」

でも師匠には遠く及ばない

槍の先が70センチ程しか無いというのにあきらかにそれ以上の大きさのものをいとも容易く切り裂いていくんだからな。

なんでも達人になると己の槍気で切断範囲をある程度増やせるらしい

俺の目測だと師匠は三メートル以上切断範囲がある。唯でさえ槍は攻撃範囲が広いというのに……

師匠はいずれ自分も使えるようになっていたがその日は来るのだろうか？

何はともあれ俺は今やることをやらなきゃな

窓から部屋に侵入して辺りを観察すると、どうやらここは使用人達の部屋らしく二段ベッドが三つ並べてありその中にはまだ幼い少年たちがすやすやと眠っていた。

俺とナーガは足音をたてないようにひっそり移動して出口のドアを開けるとそこには長い廊下が広がっていて足下には高価そうな絨毯が…

庶民で日本人の俺は靴を履いたまま絨毯を踏むというのに忌避感があるのなるべく端の方を歩いていたがナーガがこつちをおかしなものでも見る目で見たので途中から真ん中を歩くことにした。

これが日本人の美德だというのに…

とりあえず一番偉いこの屋敷の主は一番上の部屋にいそうなので、階段を上へ上へと上がっていったが家の中に兵はいないようで、時折屋敷の使用人と会った時は素早くベアンテで拘束した後、天井に吊り下げてばれないようにした。

にしても、この家の調度品は全てが金や銀、よく知らないが高価そうな材質でできたものばかりだな。

どれほど悪いことをすればこんなに金持ちになれるのだろうか？

しばらく進むといかにもな部屋をみつけた。

扉の両端には二対の翼をもち片手に剣を掲げた醜悪な顔の悪魔の石像があり、到底入る者を歓迎しているようには見えなかった。

「まったく、いい趣味してるな」

「全くだ」

扉まであと数歩というところで急に石像の目が赤く輝きだし、こちらへ剣を構えた。

『『待て！』』

「おいおいこいつらしゃべるのか？」

「どうやら魔導ゴーレムみたいだな」

『『わが主はお休みだ。邪魔するものは許さない』』

ゴーレムかあ、いよいよファンタジーめいてきたな

「邪魔するっていったら？」

『貴様らを排除す、ガツ s d s f r t r ヴあう v t ……』

奴らが話しきる前にゴーレム一体の脳天には俺の槍が刺さり、もう一体の脳天はナーガが粉々に拳で砕いた。

俺長い（・・・）話を聞くの嫌いなんだよね。

槍を引き抜いて扉を開けると、一番最初に目に着くのは月明かりがさす窓際で佇んでいる二人の女神だ。

憂いを帯びた顔の二人だったが俺達の姿を見ると、ホッとしたように笑みを浮かべる。

「遅いぞイツキっ！」

「すまん、ナーガが女湯をどうしても覗きたがるのを俺は必死で止めていたんだ…」

ユーリイとマキアは魔獣でも逃げ出すほど冷たい視線をナーガに向ける。

「いえっ、違いますよ！！全然そんなことはしていませんから、そんな目で見ないでください！！」

女性陣の目の前で土下座をするナーガを見て楽しんでニタニタしていると、ナーガがこっちに憤怒の表情を向けて口の動きで『後で絶対殺す！！』と言っていたから笑うのを一旦止めた。

「それでこいつどうするんだ」

俺の指差す先には天蓋つきのベッドでゴーゴーといびきをかいて寝るメタボな商人。

「そうじゃな、盛りのついたオス猫は去勢と相場が決まっておろう」

「うむ、賛成だ！」

それは同じ男としていたたまれないな

「さすがにそれは・・・」

「何だ！？反論でもあるのか？」

ユーリイが『お前も同類か？』とでもいいかげんな目でこっちを睨んできたが、ここで引き下がったらこの先ユーリイに一生勝てない気がするので一度ガツンと言ってやらないとな

「あのく、去勢されたらこの商人は使用人達に責任を求めてクビが良くて体罰をすると思うし、情操教育的に良くないと思うんですよ、はい」

俺は根っからのへたれでした

「うーん、確かに後味が悪いな」

「その代わりに提案があるんだが」

俺の可愛い寄生植物たち、もとい何者かの手によってその商人はまるで人が変わったかのように商品の品質向上や価格低下、更には孤児院の建設や教会への寄付などの善行を積極的に行い始めたらしい。もちろん、女を囲って遊ぶことも無くなりその代わりに密かに美男子を集めているらしい。

不思議なこともあったものだな。

三十四話 天誅。いや、人誅？（後書き）

そろそろシリアスを書きたいので少しずつフラグを立てていって
いる今日この頃です。

読者の皆さんも要望があればどうぞ

三十五話 人は道を歩き出す

「ギョルルル」

今俺の膝の上にはガロンがその凶暴そうな竜の顔を置いて、機嫌が良さそうに尻尾をパタパタ振っている。

俺達は平日の昼間から誰もいない宿屋のロビーでだべっていた。

昨日の任務で体の大きなガロンは潜入に不向きとされ参加できなかったのでご機嫌とりに俺が自分の膝を貸し出しているという訳だが…

「なあマキア、これってパートナーのお前の仕事じゃね？」

「我らは主人とペットという関係では無く、強い友情によって結ばれた仲なのじゃ。じゃからそれはガロンに気に入られたイツキの仕事じゃと思うぞ」

「ギョツ！」

ガロンも同意するように鳴く

「それにしても、ガロンは良い所におるの。後で我と代わるのじゃ！！」

ガロンはプイツと首をふって否定を表す。

可愛いな／＼／＼

「そういえばなんで俺はこんなにガロンに懐かれているんだ？いや、別に嫌な訳じゃあないんだが・・・」

「しいて言うなら女の勘かの？我もガロンも趣味が似ているしの」

「へえ、ガロンってメスだったんだな」

「今一番大切なところが無視された気がするんじゃが・・・」

「そ、そそそそといえばギルドの名前は決めたのかイツキ！？」

なんだかユーリイが額に汗を浮かべながら必死な形相で聞いてくるので少し怖い。

「ああ、『ルクゾの宴』なんてどうだ？」

「ほほう、創世記の神話からとったんじゃの？さすが我が見込んだ

男じゃ」

「確かにマキアの言うとおりだ。私がしっかり歴史について教えた甲斐があったというものじゃないか」

創世記の神話とはこの世界の始まりの時代と共に神々が出現して、活躍した出来事について説かれた説話で学校の教科書や宗教の聖典にも書かれておりこの世界に住んでいる者なら知っていて当然らしい。

俺は師匠との修行の合間にユーリイから教わっていたんだが、この神話とやらはとにかく長くて『ニアの御神がその子キグナスに授けたのがかの栄光なる戦斧エポであることは先述している通りだがここで彼が用いたのは大地燃ゆるローロルの地で得られる聖鉄をステュグスの川で冷やしたものに……』と永遠と続くかのような説明を見てやる気を無くすのは仕方無いと思う。

しかし、その中で俺は唯一気にいった神話があった。

それは光の神の一柱であるツァイクが長い旅路の果てに邪神クレーシアを倒すという分かりやすい話で、その中にあるのが『ルクゾの宴』だ。

この神話も他の神話と同じように最初から最後に邪神クレーシアを倒すところまで一貫して生々しい表現や遠まわしな婉曲を用いていて、全体的に暗い雰囲気醸し出しているのだが唯一、ツァイクが旅の途中に再会した幼馴染の神達とルクゾの地で三日三晩の宴会をするシーンは邪神クレーシアに立ち向かうことへの不安や戸惑いを忘れてただただ楽しみ、互いに飲んで笑いあう、そんな見るものをも楽しくさせるような物語がそこにあった。

だから俺達のギルドもそんな互いに笑い楽しめるものにしたいと思っ
いそういう名前にしたのだ。

「ナーガはどう思う？」

さつきから思いこめたような表情でいて、いつもならユーリイが話す言葉を一言一句漏らさないように聞いているというのに今日のナ

「ガはガツクリ頭を垂れてユーリイの言葉を一言一句漏らさず聞きながらメモ帳にユーリイの話した言葉を書き込んでいる。

「……あれ？症状が悪化している！？」

「おいナーガ、聞いてんのか！？」

「えっ！？あ、ああ、確かユレイア様と出あって一ヶ月目のお祝いに何をプレゼントするかの話だったか？私はユレイア様に緋色黄金製の鎧をプレゼントするつもりなのだが……」

「そうなのか！？ありがとうナーガ！！」

もう突っ込むの疲れたよ……

俺の癒しはガロンだけだな。

そう思いながらガロンの長い銀髪を手で梳く……！？

あれ？ガロンって鬢たてがみはあるけど、黒い毛だし銀髪ではなかったよな

恐る恐る膝の上を見るとまるで猫のように体を丸めて幸せそうに俺の膝の上を独占しているマキアの姿が……

さっきまで俺の膝の上にいたはずのガロンを探すと、いつのまにか部屋の隅にあった鉄の檻に囚われの身になっていてこちらの方を見て哀れに鳴いていた。

「マキアがここにいるのは良いとして（俺の中の天使や悪魔たちもこの状況は全員一致の賛成意見を出している）、どうしてガロンはあんな目に遭っているんだ？」

「いや、どうしてもガロンが変わってくれんと言うので我の地魔法で少しの間檻の中で反省してもらったのじゃ」

こいつ……全然反省してねえ！

むしろ檻の中にいるガロンに見せつけるようにして俺の膝の上で頭をスリスリさせる

いや、俺は別にかまわないよ。むしろもつとして欲しい

「イ・ツ・キ？貴様はいつたい何をしているんだ？」

「・・・」

俺はナーガに目で助けを求めると、ナーガは軽く俺と目を合わせ真剣な表情でユレイアのもとへと向かう。

「ユレイア様」

「どうしたナーガ！？今はイツキに用が・・・」

ユーリイは振り返ってナーガに先程までの勢いで言い寄ろうとしたが、ナーガの真剣な表情を見ると言いよんだ。

俺は心の中でナイス！とナーガに賞賛を送った。

「ユレイア様、私は急な事情が出来ましたのでここを離れます。もう二度と会うことも無いでしょう」

「・・・！？」

「はっ！？何言ってたんだナーガ？」

隣でマキアはオロオロしていたが今の俺はそれを気遣う余裕が無い。

「くだらない冗談なら止めるよナーガ！」

「残念ながら冗談じゃない。俺は本気だ」

「ナーガお主は本当にそれでよいのか？」

ナーガは下を向いて少し名残惜しそうな表情をした後、顔を上げて俺全員を見回すように首を動かすと

「そうだな。唯一あるとするならユレイア様に緋色黄金製の鎧を差し上げられなかったことかな」

俺は冗談めかして言うナーガがム力ついてたまらない。

「ナーガ、私はお前がいなくなってしまうたら悲しいぞ」

「・・・そろそろ行きます」

俺は宿屋の扉から出て行こうとするナーガの前を体で遮る。

「俺は認めないぞ」

「…すまん。ユレイア様を・・・頼んだぞ」

そういうと俺を押しつけて、人の混雑している通りに入りしばらくその頭を覗かすと人ごみの中に消えていった。

三十六話 追跡（前書き）

楽しみにしてくださる読者の皆さんの期待に答えたい！

三十六話 追跡

ナーガが出て行った宿屋の中には深い静寂が訪れていた。

詳しく説明もせずに勝手に出ていったナーガとそれを止めきれなかった自分自身にいらついで仕様が無い。

ナーガは俺の親友だ。

お互い隠し事はしていても、根っこのほうでは一緒にいたいという思いで繋がっていたと思っていたのに……

俺は苛立ちで拳を握り締め、宿屋の白くて頑丈そうな壁にその拳を振り下ろす。

ドスツと鈍い音をたてた後、少し血でにじんだ拳を壁からゆっくり離すと壁は俺の拳型にへこんでおり、端の方からパラパラと壁の欠片が落ちていく。

そしてさっきまで痛んでいた拳も傷口を塞ぐようにニユルニユルと^{つた}薦が生えてすぐに傷の痕も無くなり、ひりひりした感覚だけが手に残った。

俺もスツカリ化け物になっちまったな……

こんな化け物にもう親友なんて出来るのか？

「イツキ、さっきまで我慢していたがもう我慢の限界だ！何だその女々しさは？臆病風ににでも吹かれたような表情は？壁になんぞ八つ当たりしおってそれでお前の気分は晴れるのか！？」

俺は急激に怒り出したユーリィに啞然としてしまつてただ黙るばかり

りでいる。

「確かにナーガの決意は堅そうだった。だがイツキ、お前はここでナーガと別れてしまっていていいのか？」

「……」

「私達は同じ『ルクゾの宴』の仲間じゃなかったのか？」

ユーリイの言うことは正しい

ナーガの固い決意が秘められた表情を見ると、小心者の俺はただ最後の言葉を受けとめるだ事しか出来なくて、結局最後に奴を引き止められなかったのだ。

こんなに広い世界だ。このままだと本当にもうナーガと会える機会など無いのかもしれない。

俺はこの世界で生きていくと決めた。

だったらこの世界で悔いの残るようなことはしたくない！！

「ありがとうユーリイ」

「気にするな」

「そしてこれからよろしくなマキア」

「えっ!？」

マキアはいきなり振られたことに目をパチパチさせて驚いている

「……私も一緒に行つてよいのか？」

「いや、今更？」

「マキアお前も『ルクゾの宴』の仲間だ」

マキアはそれを聞くと嬉しそうにガロンに抱きつく。

ガロンは少し迷惑そうな表情をしたがまんざらでもなさそうだった。

ガロンの羽毛に顔を埋めるマキアが俺には泣いているように見えた。

俺達は宿にある荷物をとるとすぐにナーガを追って出発した。

ナーガは目に包帯を巻いていてかなり目立つので道行く人に尋ねることで簡単に情報を手に入れることが出来たが、ダッドルメアから北東の方角に行ったということまでしか分からなかった。

「北東の方角には何があるんだ？」

「近い場所ではイリア公国、更に北東にはラノーラ帝国があるのじや」

「おそらく前者はないだろう。イリア公国は三十年以上前から完全に鎖国状態だからな。死体でもない限り国に入れないし出れない」

「イリア公国を北周りに迂回してラノーラ帝国に入る案が一番妥当じゃろうな」

「それに速度を速めれば途中のヤコブ村で追いつけるかもしれない！」

「そうじゃな」

言い出したのは俺なのに全然話に着いていけない

悲しいけど、ここ異世界なのよね。

今度からはユーリイの異世界地理講義を耳から耳へと流さずに真面目に聞くようにしよう

ダッドルメアから出るのに少々時間がかかったが俺達は出発した。

緑豊かなダッドルメアから北上していくと徐々に緑が減っていき、

日が暮れるころにはサボテンらしき生物を除いて草一本見当たらない荒野に姿を変えたところで野営の準備をした。

さすがに一切休み無しの強行軍だったので旅に慣れているはずのユーリイまでも肩で息をしていて疲労を隠しきれない様子だ。

マキアもガロンの上で仰向けに寝そべっている状況なので、唯一動ける俺が店で買った食材で簡単なものをつくり、疲れているマキアたちに無理やり食べさせた。

飯を食べないと体はろくに動いちゃあくれないからな

「ユーリイ、マキア、今夜は俺から見張りをするよ」

「すまないイツキ。ウィスプが沈んだ頃に起こしてくれ、そこで交代しよう」

ユーリイはそう言う俺がベアンテを編んで作ったハンモックに飛び込み、スヤスヤと静かな寝息をたて始めた。

「おやすみなのだじゃイツキ。ユーリイを起こしたら二時間後に見張りを交代しようと伝えてくれ」

マキアも既に眠っているガロンに抱きつくようにして眠りについた。

「さーて」

さすがに大分体力はあるとはいえ、今日の旅程はかなりハードだったので横になるとすぐ寝てしまいたくなるような眠気を感じる。

俺は最近全く違和感がなくなったイバラの冠をいじりながら近くの黄色の花を咲かした一番大きなサボテンに近づいて話しかける。

『すまない、少し力をわけてくれないか？』

サボテンから肯定の意が感じられたと同時に俺へ力が流れ込んできた。

この厳しい環境の中に生息しているのもあつてか、サボテンには予想以上の生命力があり、昼間の体力の消耗をすべて回復してくれた。

お礼の言葉を述べるとサボテンはカーツという擬音が出そうなほどその棘棘な表面を真っ赤にした。

この子、女の子だったのか！？おそらく性格は見た目どおりツンツンしているのだろう。

いや、さっき照れたからこの子はツンデレだな！！

この子によって心と体もリフレッシュした俺は寝ているユーリイとマキアに近寄り（別にやらしい下心があつて近づいたわけではない事をここに誓おう）、深い催眠効果のあるトミン草を地面から生やし、その花粉をそつと顔に落とす。

酷い幻覚作用をもたらす幻覚草の一種だが、何事もつかい次第というわけだ。

おそらくどんなにうるさくしても朝まで一度も起きないだろう。

俺みたいに直接植物から力をもらえないユーリイとマキアはしっかりと休んで、明日の旅程に備えるべきだ。

三十六話 追跡（後書き）

三十七話 村人との交流（前書き）

ついにPVが二十万突破！！

三十七話 村人との交流

翌朝、寝ずの晩をした俺は体力的には余裕があっても精神的にはかなり疲れてしまっていたので、ユーリイとマキアを起こさなかったことへのお説教の途中で寝てしまっていたようだ。

気づいたときには、フカフカしたガロンの背に乘せられていた。

「おつ、やっとイツキが起きたのじゃ」

「……どのくらい俺は眠っていたんだ？」

まだ少し眠っているような感覚があったので一度頬を叩くあたりは昨日のような荒野では無く、ただっ広い草原に変わっていたのでだいぶ遠くに来たのだろう。

「だいたい五時間ぐらいかな。もう少しでイリア公国が見えてくるところだ」

「……噂をすればじゃの。あれがイリア公国じゃ」

マキアが指さした方向を見ると、地平線の端になにやら細長い建物があるのが見える。

おそらく塔なのかな？

「正確に言つとあの塔の下にイリア公国があるのじゃが、あの塔はあまりにも高いから、ここで見える訳であつて実際のイリア公国まではまだかなり距離があるんじゃない。」

「だが、ここらで迂回して行った方がいいだろう」

「そうじゃな」

「えっ！？まだかなり距離があるからもう少しぐらい近づいても大丈夫じゃないのか？」

「あの塔、正確な名称は知らないがかなりよく出来た魔導建築物だな。あの塔自体が生きていて、塔の一番上から侵入者がいないか一日中探している。つまりあの塔が見えるということは、逆にむこうからもこちらが見えるということだ。」

「じゃあ、今も見られているのか？」

「ああ、でも塔の半分が見えるところまで近づかなければ向こうからの攻撃は無い。」

「恐ろしい建物もあつたもんだな」

「イリア公国が三十年以上も鎖国を維持できているのはあれによる働きが多いからの」

はるか遠くにある塔を見送りながら俺達は再び出発した。

日が暮れる頃になり、ようやく到着予定のヤコブ村についた。
水が今日の分しかなかったので、正直ギリギリだったのだ。

ヤコブ村に入ると、道行く村人の視線がこちらへ突き刺さりかなり居心地が悪い。

今までユーリイやマキアの美貌ゆえに一緒にいる俺を睨みつけている奴らが多かったがこの村人の視線は今までのそれとは違って、唯こちらを警戒し恐れているようすである。

「おい、貴様らは何者だ！」

遠巻きに見ている村人の奥のほうから皮製の鎧を身に着けたおそろく三十過ぎのオッサンが出てきた。

腰に剣を差してはいたが、かなり年季のいった代物らしく剣の鞘はボロボロで、あの様子だと中の剣も錆だらけだろうことが分かる。

クワやカマのほうがよっぱど武器として使えそうなくらい酷い。

その持ち主もよく見ると手足が震えておりビビッているのがあからさまだ。

そのあまりにも可哀想な姿に悪戯心が芽生えた俺は、いかにも強そうに複雑な動きをまじえて槍を体の周りで回転させた後ビシッと正面に槍を構える。

すると俺の槍の腕前に更にびびったおっさんはヒーーーーッと叫んだので俺は少し満足した。

「アホかつ！！村人を怖がらせてどうするんだ（じゃ）！！！」

二人の叱責と同時に俺の頭にまるで二頭の象に踏まれたかのような衝撃が来て俺は意識を落とした。

俺の霞がかった意識は顔を移動する生温かくてベトベトした感触によつて次第に晴れていった。

だがまだまだ寝ていた俺はそれをガン無視して再び眠りにつこうとしたが、そうはさせじとばかりにその攻撃は激しさを増す。

終いには俺の顔が丸ごと生温かいものに包まれたので仕方なく目を開けると目の前はまだ真っ暗だった。いや、暗さに少し慣れると目の前には白い棘のようなものがびっしり並んでいるのが分かった。

「ここは……どこだ？」

ユーリイとマキアに殴られたところまでは覚えているが、俺はどうしてこんな訳のわからないところにいるんだ？

「ガロン、もうよいぞ」

マキアの声がどこからとも無く聞こえた後、俺の前には赤土で造られた壁を背景にしているどこか不機嫌そうなマキアとユーリイがいる風景が広がった。

視界に遮るものが無くなると、あたりに置かれた農具からここがどこかの小汚い農家の中ということが分かる。

「まったく、お前のせいでいろいろと大変だったんだぞ！あれから村人たちに事情を説明して、ようやく親切な人が泊めてくれたんだからな」

「すまん、若さゆえの過ちというやつだよ。……そういえば、さっき俺が見たものはなんだったんだ？」

「それはイツキの後ろにおるじやろ」

マキアの言ったことを怪訝に思いながら振り返るとそこには興奮した様子のガロンがいた。

「ガロン……だぞ!？」

「さっきお前はガロンの口の中にいたんだよ」

俺の額に冷や汗が浮き出る

「……ガロンは草食性だよね？」

「……たぶんの？」

マキアは目を逸らして小声で言う。

「頼むから断言してくれ!!」

「我にも分からのじゃ! ガロンは時々普通の騎竜とは違うことをするからの」

俺はつぶらな瞳をしたガロンを初めて怖いと思った

俺は今晚泊めてくださるお礼に料理をつくろうとしたところ、泊めてくださった年齢不詳でのスウおばさんが俺の変わった? 調理方法に興味を持たれて、家来る? みたいなノリで一緒に料理をつくることになったのだが……

「へえ、あんだ器用だね!!」

俺が今やっているのはただのジャガイモの皮むきである。はっきし

言って皮むきは料理の基本中の基本であってこれが出来なくてどうするんだと思っただが、家に泊まらせてもらっている身分である俺はもちろん言えない。

代わりにスウおばさんは今までどうしていたんですか？と聞いたら、

「そんな面倒くさい事やったことないよ。そのまま包丁で四等分さね。」

芽は？毒だよあれ。そんな俺の考えを無視するかのように玄関の木
の扉が開いた。

「ただいま」

あれ？どこかで聞き覚えのある声だな

「ああ、あんたお帰り。今日は随分と遅いじゃないか」

「今日来た物騒な旅人のせいで大忙しだったんだ……！？」

この家の主人は俺を見ると口をポカーンと開けたままフリーズした。

「へえ、あんたとイツキ君は知り合いだったんだね？」

「ああ、……一応な」

こつちを警戒するように睨んでくるおっさんはそう、あのビビリのおっさんだ。

どうやらこの村の警備隊に入っているらしいが、俺の一挙手一投足

を気にするのでさすがに疲れる。助けを求めようとユーリイとマキアに目で伝えたが『自業自得だな（じゃ）』と一蹴された。

「全く、あんたは人一倍臆病なくせにどうしてこんな職業を選んだんだ？」

「そんなこと決まっている、お前を守るためだ！キリッ」

「たくっ！！そんなことはこの飯食って立派になってから言いなノ
／／／／／！」

そうスウおばさんが頬を赤く染めながら言つとさっきまでのキリッとした表情が見る間に暗くなっていく。

やっぱり苦労してんだなおっさん

おっさんは覚悟を決めたかのようにスプーンをとると、オレ作のビシソワーズ（ジャガイモの冷製スープ）をゆっくりと口へ運んだ。

「うっ、うまい！！」

「イツキ、お代わりを所望する！！」「美味しいのう」

「こ、これはスウがつくったのか？」

「ほとんどイツキ君だよ」

「……どうやら私は誤解していたようだ。イツキ君、最・高！！」

調子良い野郎だなこのおっさん

三十七話 村人との交流（後書き）

夏休み中なのでなるべく速く書くつもりが遅れてすみません。

時間がほしいお!!

三十八話 真実（前書き）

これからも頑張ります!!

三十八話 真実

「ハッハッハッ、もっと飲んでくれイツキ君！ユレイアちゃん！」

「あんた今日夜警の番じゃあなかったのかい？」

「ハッハッハッ、どうしよ、警備隊長に殺される」

「気にすんなおっさん、今日のお詫びにオレが行ってやるよ」

「ハッハッハッ、それは助かる！幸いもう魔物の出現時期は抜けたからイツキ君にまかせて大丈夫だろう」

すっかり意気投合した俺達は仲良く酒盛りをしていた。

ユーリイは珍しく酒につきあってくれたが、マキアは酒に弱いらしくさっさと床についたらしい。

初めて出会った時は酔いつぶれるほど飲んでいたくせに……

「イツキ君、私がこんな稼ぎはほとんど無くあるのは危険だけの仕事をするのはなぜだと思う？」

ユーリイやスウさんが外の井戸へ食器を洗いに出かけた後、急におっさんは杯の手を止めて、真剣な表情で聞いてきたので俺は当たり障りの無い答えをだす。

「スウさんを守る為じゃないんですか？」

「あれはスウの手前だからそう言ったんだよ。」

じゃあいつたい何の為におっさんは仕事を？

「私はね、小さいころから昔話の勇者様みたいにいずれ伝説となるような旅に出てみたかったんだよ。」

小さい頃からこらえ性の無い私は十四歳でこの村を出て帝都へ向かったんだ。おそらく帝都にいけばどうにかなるとでも思っていたんだろう。

だが現実はその優しくは無い。何とか剣術の先生を見つけて剣を教わったが、私の兄弟子にあたる人の剣の才能を見て、私のちっぽけな自尊心は粉々になってしまってたな。

とても伝説になるような勇者にはなれないと気づいた私は、帝都の喫茶店で働いていたスウを連れてこの村に帰ったわけだ。

だが……今のような歳になって、時々過去の自分のように勇者になりたいと言わないまでも、ただ一人の男として強くなりたいと願ってしまうのだよ。

だから今も常に危険と一緒に、こんな仕事をやっているのだ。

どうだ、笑ってしまうだろ？」

自嘲気味に話すおっさんは俺に問いかけるように言うが、返答はきつと期待していない。

少しの間気まずい沈黙が俺達の間にとくと、ようやく食器の洗いをすませてきたらしいユーリイとスウお婆さんのたのしそうな声が近

づいてきた。

おっさんはハツとしたような表情になると、こちらに目を合わせ『内緒にな！』という意味のウインクをする。

正直おっさんのウインクには何の魅力も無いし気持ち悪いだけだったが男の約束だけは守ってみせよう

「イツキ君そろそろ夜警の時間だよ。今日はうちの夫の代わりにイツキ君が行くって隊長さんに伝えておいたからね。集合場所はこの村の広場だよ」

「分かりました。それじゃあ、行ってきます」

「イツキ、気をつけろよ」

「ああ」

広場には既に十名近い人数がそろっていて、ただでさえウィスプが明るく人の顔まで判別できそうな夜にかがり火までも灯しているのは動物避けのためでもあるのだろう。

そう考えながら広場へと近づいていく俺に気づいたらしい集団の中の一人が手を振ってきたので俺も槍を掲げてそれに答える。

「やあ、君がイツキ君かい？スウさんから話は聞いているよ」

出迎えてくれたのは片目に何かの動物の引っかき傷がついている、おっさんより少し若いぐらいの男性だった。

「今夜はお世話になります。右も左も分からない新人ですが精一杯

やらせていただきます」

もちろん敬語はバンバン使う。第一印象は重要だからな

「これはご丁寧に。私はここの警備隊長をやっているケン・エマウ、ケンと呼んでくれ。」

この若さで隊長やっているのか、まあ中々強そうだしな

「よろしくお願いします」

「まあ警備といっても魔物の出てくる時期は過ぎたのだから、そこまで気を使わなくていい。この時期は例年通りなら熊や狼などが多く出没するが、今年は見たという情報すら入ってこないし大丈夫だろう。村の周りにかがり火を数箇所配置したので、君は北側のかがり火の周辺を見張ればいいだけだ。どうだ簡単だろ？」

どうして熊や狼を全く見ないのか気になったが、地元のケンさんも気にしてないようなのできつと大丈夫だろう

警備の人皆に軽い挨拶をしたところで俺は北側の見張りへ行っただが既にそこには先客がいた。

「遅いわっ!!」

「ギョッ!!」

「私はあんまり待ってないがな」

マキアとガロンとユーリイが武装した姿のままスタンバってた。

「何でここにいる？」

「以前お前に一晩中見張りをさせてしまったことがあったろ？だから今日はその恩返しというやつだ」

「イツキはもう帰って寝てよいのじゃぞ」

「ギョルツ！！」

女性陣と一頭はやる気満々の様子でいるがそつは問屋がおろさない！

「俺は帰らんぞ！」

「何故じゃ？我らが女だからという理由でその発言をするのなら、例えイツキでも幻滅するぞ」

「いや、仲間がいなくなるのは嫌だからな」

それは今回の出来事で強く実感したことだった。
誰一人知り合いのいないこの世界で生きていくのはつらすぎる。

マキアとユーリイも納得してくれたか、俺が残るのを黙って認めてくれた。

二人にも大分世話になっているからな、今度大きな宝石店があったら何か買ってプレゼントでもしよう

そんなことを考えながら俺は目が暗闇に慣れるためにあえてかがり火を背にして辺りを見回すが、ケンさんが言っていた通り動物たちの気配も無く正に平穏だ。

だがどこかおかしい気がする

確かに今危険な動物の気配はないが、こんな田舎の地なのに鹿や鳥などの鳴き声も全くしない

不審に思つてユーリイとマキアを見ると二人も俺と同じような表情をしていたので疑問は確定に変わる。

戦闘に備えて槍の鞘を取り外すとウォーンという狼の鳴き声があちこちから聞こえてくる。狼の声が反響して空気までもビリビリと震えているようだ

「狼は来てないと聞いていたんだがな」

ケンさんはそんなこと言つてなかったのに
どっかで見過ごしたにしてもこの狼の声からして見過ごす数ではないはずだしな

まあ、今そんなことを考えても仕方ないしまず起きたことに対処すべきだ。うん。

暗闇の中からおぼろげに何かがちらへと向かつてきているのが分かる。こちらへとやって来るのは決して可愛い猫ちゃんやウサちゃんじゃないのが確定しているのがつらいな

隣ではマキアがおもむろに背中にかけていた真つ赤な弓をギリギリと音が鳴るほど強く引いている。

「待てっ、マキア！！まだ相手の姿すらろくに見えていないのに矢が届くはずが無いっ、矢の無駄遣いだ！！」

マキアはユーリイの言うことを弓に集中して聞いていない様子でそのまま矢を放った。

矢は予想を遥かに超えるスピードで闇を切り裂いていき薄靄の中へと突き刺さるとズサツと何か重いものが落ちた音がした。

「一頭討伐完了。後七十頭か、ちと多いのう」

マジですかっ!!この距離から!?!ってっつかそんなにいるの!?

マキアは続けて何本も矢を放つ。よく観察すると弓を構えてから矢を放つまでの間隔がすごく短い
いったいどんな目をしてんだマキアは?

「クツ、奇襲はもう通じないようじゃの。十頭は倒したのじゃが…」

謙遜乙

やっととはつきり姿が分かってくると、その姿の異様さに気づく
奴らは四足歩行では無く二足歩行でこちらへと向かってきていたのだ。

「これが俗に言う狼男ってやつか」

「いや、あいつ等は常にあの姿をしているから正確にいうと人狼だな」

ユーリイがそう答えた時には、もう人狼たちが目の前に迫っていた。
先頭の一頭が鋭い爪のある片手を空へとかがけてこちらへ振り下ろ

そうとするが、次の瞬間には上半身と下半身が斬り離されていた。

ユーリイが風の魔剣の能力で遠く離れた場所から腹を斬ったのだろう
俺もそろそろ働かないとな

槍を片手に人狼の真上に飛んでそのまま脳天へと突き刺す

着地すると人狼の返り血で服がベタベタになっていて気持ち悪い。

人狼の攻撃にはフェイントが無くて読みやすかったが、その分圧倒的なパワーとスピードを備えており一度でも受けたらヤバいだろう。
師匠より全然遅いから余裕だけど

マキアを乗せたガロンは襲い掛かる人狼を素早い動きで避け、マキアはその隙について矢を放ち殺している。だが奴らにも知恵があるらしくマキア達を大きな包囲網で囲み徐徐にその大きさを小さくしていく。

さすがにあの数ではマキアでも対処しきれない

ユーリイの様子を横目で確認するが俺の所以上に人狼がいるというのに次々と数をさばいていく
だがそれでもマキアを助けに行く余裕は無いようなのでいくしかない

マキアのもとへ行くのを邪魔する人狼の脇をすり抜け包囲網の一番薄い部分に俺は蹴り入っていく

「助けに来たぞ！マキア！！」

「はぁ／＼／＼／＼／＼イツキ！！ワンモアじゃ、ワンモアプリーズなのじゃ！！」

「そんなこと言ってる場合か！？って危ねえ！」

俺めがけて来る鉤爪を頭を下げることで避け、ガラ空きの腹に回し蹴りをはなつ

「アアアア！数多すぎだつ！！……マキアっ、俺が包囲網を崩すからユーリイ連れてここから離れる！！」

「わかつたのじゃ！！」

マキアも聞き分けがよくなったなあ

マキアがユーリイをガロンの背に乗せたのを見送ると最近すっかり馴染んできたイバラの冠を外し地面へと置く

あとはしばらく待つだけ……だが、狼さんたちが一斉に飛び掛ってきたのでそこはカットして俺の持つ大地の力を一気に注ぎ込む
するとイバラの冠が急激に膨れ上がりまるで爆発するかのように成長した

数分後、村以外のすべてがイバラに覆われ人狼たちは体中にイバラが巻きつけられ少しでも動くと血が吹き出るような素晴らしい光景が広がっていた。

さすがに疲れた

ダるくなつてイバラだらけの地面に寝そべると村の方からケンさんが来るのが見えた

「痛くないのかい？」

心配そうに問いかけるケンさんはやはり親切な人だ

「大丈夫です」

「そうか、それにしても素晴らしい力じゃないか！予想以上だよ。

……だがこいつらをこのまま生かしておくなんて、甘すぎだぞお前
！！」

「ケンさん？」

「やっぱその程度の奴ってことか。何で上はこんな奴に目をつけるのか分かんねえーよ。」

こいつ誰だ？怪しいな

そう思った俺はベアンテで奴の体を拘束する

「ほほう、有無を言わず捕縛か。中々良い勘してるな。だがまだまだ甘え！！」

奴は筋肉を膨らませて着ている服を破くと、ウォーーンと一声鳴き人狼へと姿を変えていき、その有り余る力で俺のベアンテを易々と引きちぎる。

今まで一度も破られたことのないベアンテの捕縛を破られてしまったショックで俺は一步も動けなかった。

「俺はそこらの人狼共と違うぞ。この程度のモノなど兎戯に等しいんだよ。」

くだらねえ人間にも化けれるしな。」

「お前はいつたい何なんだ？」

「氣にくわねえが、お前の良く知っている鋭眼のクソ野郎と一緒にスパイだよ」

「鋭眼つてだれだ？」

「そんなことも知らねえのか。ナーガだよ。
あいつは今までお前らの情報を集めていたのさ」

「……何……だと？」

ナーガがスパイ？そんな馬鹿な

「おっとこれ以上はいけね。今日は部下の失態に免じて殺さずにおいてやるよ」

だがそれだけじゃ俺の氣がすまねえからな、一発くらっつけ」

奴は重い蹴りを俺の腹部に叩き込んで去っていった。

まだまだ弱い俺は

いつかもっと強くなって、そして……俺は……

三十九話 ヤコブ村には変なおっさんがいる(前書き)

この物語が終わった後、第二部を書こうと思っています。

いつの話になることやら……

三十九話 ヤコブ村には変なおっさんがいる

また……か。

また気絶したのか、俺は

酷く体が重い

ゆっくり瞼を開けてふと横を見ると木製のタンスの上に男性用の着替えが綺麗に折りたたまれて置いてあった。

改めて自分の体を見ると腹部に何重も包帯が巻いてあり、あの人狼の蹴りの酷さが伺える
とりあえず立ち上がろうとしたら腹部に痛みが走り咳き込んでしま
う。

咳を抑えるために当てた手には血がべっとり付いていたので、どうやら内臓をいためているらしい

長い咳が止むとあたりの喧騒が聞こえてきた。
時折泣き叫ぶような声が聞こえてくるのであまり穏やかな様子ではないようだ

また咳き込まないように出来るだけ急いで立ち上がりおそらく自分の為の物であろう着替えを着て外へ出る

……悲惨だった

村の建物のほとんどが崩壊や半壊に近い状況になっていて、今だ火が出ている建物もある。

極力被害の少ない建物にはたくさんのケガ人が並んでいて悲鳴や嗚咽が絶えることは無い

あの人狼たちの仕業だろう

あの時すぐに止めをさしていたらこんなことにはならかった
悔しいが俺は奴の言うとおりに甘い、甘すぎる

奥歯をかみ締めながら、何か手伝うことは無いかと思いその建物に入るとまず消毒用のアルコールの臭いと血の臭いが鼻に入ってきた。そして次に堅い床一面にケガ人が寝ているのが目に入った。その中で続々とやってくるケガ人を手当てしている女性たちの中心となっているのはスウおばさんで治療の仕方が分からない若い女に指示を出して陣頭指揮をとっている。

「スウさん、俺もケガ人の治療手伝いますよ」

「あらイツキ君！確かに今は猫の手も借りたいぐらい忙しいけどケガはもう大丈夫なのかい？」

「平気ですよ」

「……そう、じゃああっちの人から頼んだよ」

スウさんが俺の体の状況を知りながらあえて見過ごしてくれたのは本当に感謝してもしきれない。

俺は恵まれているんだと思う

スウさんに言われた方向に歩いていくと見覚えのある顔がいた。

「ユーリィ、マキア」

「イツキ！？もう大丈夫なのか？」

「まだ寝ていてもいいんじゃないぞ」

「大丈夫だ。この人たちの治療は俺がするからユーリイたちはケガ人を探してここに連れてきてくれ」

挨拶も手短に俺は床に寝ているケガ人のもとへ急ぐ。処置も十分にされてなく、衛生状態もよくない今では治療の遅れは命に関わる。

火傷や人狼の噛み傷、引つ掻き傷が多いが中には崩れ落ちた瓦礫による圧迫骨折などケガの種類は様々だ。幸いなことに狼男と違って人狼に噛まれても人狼にならないらしいから安心だが……

若くて体力のある人には大地の力で自己治療能力を高めて治療するが、年配の方にはそのケガに合った薬草を処方していく。

治療を嫌がる子どもや大人がいたが、人狼によるケガは感染症の原因にもなるのでベアンテでしっかり縛り付けて治療した後は泣きだした子どもに手作りの飴をあげて泣き止んでもらった。

泣き出した大人は見苦しくて仕方が無いのでさっさと建物から出てもらったが……

そんなこんなで飯も食わずに治療を続けていき夕焼けが目にしみるころようやく全てのケガ人に治療し終えた。後半は全てのけが人が俺のもとへ押し寄せてきて途中でユーリイとマキアのヘルプが無かったら俺は再び倒れていただろう。

「だっつ、疲れた」

「イツキ、ほらっ来るのじゃ」

マキアは正座の状態で膝の上をポンポンと叩いて俺を誘う

それは疲れた体にはとてつもなく魅力的な誘いで、フラフラと吸い寄せられるかのように綺麗な膝の上を指す俺だったが途中でいきなり横から出してきた足によって躓いてしまう。

「イツキ、いきなり躓くとは大分疲れているようだな」

「いや、今はユーリイが……」

「なら私が寝所へ連れて行ってやろう」

「別にいいよ。自分で行くから」

「遠慮するな。私にまかせておけ」

全く人の話を聞こうとしないユーリイに背負われて連れて行かれる。普通なら恥ずかしくて降りようとするが疲れすぎてどうでもいいやという考えに至る俺。

やたらユーリイが嬉しそうだったのと、後ろのマキアがまるで子どものように頬を膨らませていたのが印象的だった。

次の日ヤコブ村を出て行くことになった。どうやら人狼たちは俺達を狙ってきたらしいのでこれ以上ここにいるとまた巻き添えになってしまう。

そう判断して誰にもばれずに日の昇る前村を出る……はずだったが、村の出口にはおっさんが待っていた。

「朝早くからお勤めご苦労様です」

「ハッハッハ、そちらこそそんな荷物を背負ってこれからどこへ行かれるつもりですか？」

チツ、どうやらごまかされてはくれないようだな

あと呆れた目でこつちを見るのは止めたまえレディたち！！

「で、どつたのおっさん？」

「いやなに旅立つ前に少し手合わせを思ってたね」

「おっさんも物好きだね」

「では行くぞ！」

オッサンはぎこちない足取りで剣を振り上げながらこちらへやってくる。

大振りな一撃は俺に当たるはずが無く、体を捻らせてかわし昨日ユーリイにされたように横から足をつきだして転ばせる。

「ぐわっ、……さすがにやるなイツキ君」

「おっさんも足がそんな状態でよく立っているね。ほら見せてみな」

座り込んでいるおっさんの足首は人狼の噛み傷でざっくりと裂けている。

「これは酷いな」
とユーリイ

おっさんは体力がありそうなので薬草とアルコールでしっかり消毒

した後、大地の力で傷を塞いでいく。かなり痛いはずだがおっさんは目を閉じたままピクリとも動かない
そうして治療が済むとようやく俺は言いたかったことを言う。

「なんで俺が治療している時に来なかったんだ？」

「それは「どうせスウさんに余計な心配かけたくないとかいうつまらない理由じゃろうよ」

やっぱりね。でもマキアそれを先に言うのはどうかと思うよ
ほらおっさんもタジタジしているし、

「しかし、私はイツキ君のように強い男にならなくてはならない！
スウにはとてもじゃないが……」

「おっさん、おっさんの言う強い男ってのはただ単に腕っぷしが強い奴のことを言うのか？おっさんの憧れていた勇者はそんな奴だったか？」

「それは……違う」

「そうだろ、だから俺は強い男なんかじゃない。」

「そんな……」

急に今まで目指していたものを見失い困惑と落胆に陥るおっさんはガツクリと膝をついた。

「だが俺は自分なりに強くあろうとしている。

だからおっさんもゆっくり強さについて考えて結論をだせばいいと思う。

きつとその時おっさんの進むべき道が見つかると思うから」

「イツキ君」

俺は後ろを振り返らずに片手でバイバイして村の出口へ向かった。
俺達の正面から朝日が差し込み気持ちいい出発になるなと思「イツ
キ君、最っ・高!」……っただけどそれはやっぱ気のせいだった。

三十九話 ヤコブ村には変なおっさんがいる（後書き）

今回は話の都合上短いです。 すんません

あとそろそろユーリーの両親を出したいなと思っています

いったいどんな変人か僕も楽しみですww

四十話 それぞれの思惑（前書き）

改めてみると文章がおかしいので少しずつ訂正していきます

四十話 それぞれの思惑

* * *

それは白と黒の部屋。

壁から床まで磨き上げられたかのような白い大理石で覆われており、椅子や机といった会議室に必要なものは見当たらない。

椅子の変わりに黒い一辺が一メートル近くの立方体がまるで積み木のように置いてあり、それが円形になるように配置されている。

積みまれている数が違うのはその上に座る人の力の強さを表している。

高さが上のほうから順番に天席、上席、下席と分けられているのだ

天席に座る男は二十代とかなり若い、身にまとう王者の風格がその場ににいる者たちにそんなことも気にさせない。

「何か報告は無いか、諸君？」

「私は特にありませんよ教祖様」

うやうやしく一礼して答えるのは上席に座るブクブクと太ったデীবオという男だ。

表では人一倍信心深い態度をとってはいるが、奴の本心はここでの権力にしか興味は無い。

その直属の部下である若い男は上司の無能さに辟易しながら立ち上がる。

「失礼ながら一つ報告があります教祖様」

デーボは自分の部下の唐突の発言にイラつきその場で叱責しようとしたが、教祖が目でそれを封じたので居心地悪そうに再び席についた。

普段感情を抑えなれている男ですら喜悦が顔にでないようにするのは一苦勞だった。

「まずは三年間の任務ご苦勞といっておこう。
多少予定外のこともあったが記憶は無事戻ったようだな。」

「ハッ、ありがたき幸せ！！」

「しかしお前の記憶が戻った後は奴らをここラノーラ帝国に誘導するのが本来の任務ではなかったか？何か申し開きがあるなら言うてみる」

教祖の鋭い視線はその場の空気をまるで固体と化したような気にさせるほど強いものだった。男は軽く冷や汗をかきながらそれでも強い意志を持って答える。

「あの男には今回の計画で必要とされる力が見込まれず、更にあの男の力は不安定な様子でこのまま計画を行った場合力の吸収はおるか、魔高炉の崩壊にもつながりかねないと考えた為であります」

「ふふん、一応は納得できる理由だな」

男は教祖の放つ空気が緩くなったことを感じ、ホッと小さくため息をつく

「しかし教祖様。奴はまだまだ成長しそうだし力不足については時間が解決してくれそうだぜ」

男もそれについては思い当たる節があるだけに自分の同僚のそんなカミングアウトを憎憎しく思った。計画通りにいかない苛立ちが徐々に焦りを強くする。

「あとはその不安定な力をどう制御するかだが……」

「ヒツヒツヒツ、それについては提案がありますぞ教祖様」

腰を屈め、大きすぎてサイズの合わない眼鏡をかけた老人は生物兵器と魔導兵器のスペシャリストでこの教団における裏の戦力を造り続けている主要人物だ。

「どうやらその男に宿る力は人の身に過ぎる力。ならばそれを制御し力を発揮する大元、『核』が体内にあることでしょう。それを取り出せばあるいは……実験は成功し、更には永久機関すら完成するやもしれません」

「仮定ばかりの議論を交わしても計画は進行しない。ローケンは再び人狼を引き連れて奴を連れて来い。今度は失敗は許さんぞ。話はそれからだ。」

「教祖様、私も行ってよろしいでしょうか？」

「ナーガ、お前は計画のために自室で休んでおけ」

「しかし、「これは命令だ」

「……わかりました」

ナーガの心境は複雑だった。

* * *

ヤコブ村を出て少しした後

「あの、言っておかなければならないことがあるんだが……」

「どうしたのじゃいきなり？」

「なんでも言ってみろ」

いつかは言わなければならぬと思っていたナーガのことを俺はユーリイたちに包み隠さず話した。

「ナーガが私達のスパイだったと！？そんな馬鹿な！？」

「それは敵の人狼が言ったことじゃろう、我らの仲を裂こうとしての策略ではないのか？」

「おそらくそれはないだろう。」

奴は俺の実力を圧倒していた。わざわざ嘘をついて混乱させる必要はないはずだ」

「じゃあとりあえずナーガがスパイだと仮定して、いったいどのスパイなのじゃ？」

そういえばナーガがスパイだというのに驚いてそんなこと考えもし

なかったな

「……そういえば昔カナゼ司教が言っていたな。ラノーラ帝国の帝都では夜、街中にも関わらず狼の鳴き声がすると。」

「それは確かなのか？」

ラノーラ帝国に行くのは当初の予定にあったが、結構カナゼ師匠は意味も無い嘘について人を困らせる節があるのでいまいち信じられない

「分からない。だがそれぐらいしか情報がないのが現状だ」

確かにユーリイの言うとおり人狼がいたとしてもナーガがいるとは限らないし、第一帝都はかなり広いだろうから見つかるとも限らない。それにナーガに会って何を話していいか俺には分からない。何故スパイなんてやっているのか？と聞くべきか、そもそも俺達にそんな価値があるのか？考えても分からないことだらけだ
最悪、ガセネタだった場合は完全に打つ手が無くなる。

うーん、必要な情報が少なすぎるな

落ち着いて今分かっていることを見直そう

まず俺達にはナーガについての確実な情報が無い
この件に関してはどうしようも無いから今は放置だ

……そういえばケンという人狼はナーガのことを知っている素振りだったな。

そして奴は最後に「今日のところは……」と言っていたことから再

び襲撃に来る可能性があることが分かる。

となると、次こそは奴にリベンジしてボロ雑巾のようにした後ゆっくりと奴から情報を引き出すのが一番平和的かつ確実性の高い作戦だろう

もちろんそのためには俺が強くならなければならないと意味が無い！！

そして短期間で強くなるには人に教授されるのが一番だ。だいたい一人で強くなれるなら俺は師匠に教えを請いたりはしない、絶対に！！

「とりあえず強くなきゃな」

「確かに今の私達には力が足りない」

「どこかに安全でここから近くて俺に戦闘を教授する強い人がいる場所はないもんかね」

「それは都合良過ぎじゃろイツキ」

やっぱりマキアもそう思うかね

「だったらもう俺にすることと言えばガロンを撫でるぐらいしかない」

「ギュツギュツ！！」

はぁ〜可愛いなガロンは、正に癒し！！

毛並みもいいし何でもみんな騎竜をかわないのか不思議に思うぐらいだ
まあ、心あたりは無いこともないが……おそらく食べもの？

「イツキ、アホ面させている所悪いんだがその場所、私に心当たりがある。」

「ガチなのかユーリイ!？」

「ああガチだ。」

「何故それを早く言わんのじゃユーリイ!！」

「いやゝ、私も出来るだけ頼りたくなかったというか何というか……」

物事をキツパリ言うユーリイにしては珍しく言い難そうに語尾を小さくする。

何がそんなに嫌なのだろうか？

もしかしてかなりの怖面で人の血を見るのが大好きなオヤジか？それともかなりの美人で人をいたぶるのが大好きなお姉さんか？

……あれ？後者は悪くないかも？だが新しい性癖に芽生えそうな気がするので少し怖い

でも最初は誰だって怖いって聞くし、慣れれば……って危ねえ!!

言ってるそばから芽生えそうになっていた。

もしかして俺にはそっちの気があったというのか!？

認めん!!認めんよ私は!!

「また変な考え事をしているようじゃのイツキは」

「そろそろ慣れてきている私が嫌になるんだ」

「うむっ、分かるぞそれ!!」

とりあえず考え事から抜け出して、失礼なことを言っている美女連中の話に混ざる

「で、結局どんな人なんだ？」

「うむ、すっかり忘れておったわ」

「まあいずれ分かることだがイザルト・イーストフードという名の人物だ」

「あれ？イーストフードといえば……」

どこかですごく聞いたことのある苗字だ。するとユーリイも俺の表情を見て軽く肯定の頷きをする。

「そう、父だ」

四十話 それぞれの思惑（後書き）

最近こついう終わり方が多いと思う件についてw w

他のかたはどうしてあんなに上手く終われるか不思議です

四十一話 出会いはリリンが生み出した文化のホニャララ（前書き）

お気に入りユーザ登録をしてくださっているお方へのメールの送り方がわからなかったのでここでお礼をいっておきます。

どうもありがとうございました。 作者は深く感謝しています!!

これからもどうぞよろしく!!

四十一話 出会いはリリンが生み出した文化のホニャララ

あれからユーリイの案内で更に北へ北へと進んで行くこと五時間、ようやくユーリイの足が止まり目的地に着いたことが分かった。止まった先には真っ暗な森があり、その薄気味悪い森への入り口はまるで巨大な魔獣が獲物を丸呑みにしようとしているかのようにポツカリと不自然な大穴をあけている。

「この山に私の実家があるんだ」

「ほほ、本当にこんな所にあるのかの？」

マキアは怖いのがダメなのか、俺の肩に掴まりブルブルと震えている。

俺と同じくらい髪を洗ってないはずなのにマキアの白銀の髪からはいい匂いが漂ってくるので十代の男の子には正直堪らん！！近くで見るとやっぱりマキアは美人だ。

……そう、こっちを見るユーリイの視線が漫画とかでよくある熱線に変わるぐらいにね・・・

「ゴホン、それじゃあ行こうか」

ユーリイの視線に耐え切れなくなった俺は渋々マキアの手を離してその大穴に向けて足を進めた。

森の中は外で見たよりも不気味で日光もあまり入ってこない。木々

たちも奇妙に捻じ曲がって成長していて元気が無さそうに一見見えるが少し意識を通わせたところ、不思議と見た目に反して元気な様子だ。

元々こういう植物なのだろうか？

まだまだこの世界には分からないことだらけだ。

一方、俺の前方ではユーリイを前にしてガロンに乗りながら泣きそうな表情でユーリイにしがみ付くマキアの姿が。ガロンも心配そうにギューと鳴いているがそれさえも耳に入らないようで時折頭上でカラスのような生き物がギャアギャア鳴きながら通り過ぎていくと、キャアーツと声を上げて顔を伏せ震えだす始末

良いね、それっ！！

もうそんな人種はとづくに絶滅したかとおもっていたよ。

ユーリイに全然怖がる様子が無いのはきつと実家近くだから慣れているんだろう

俺的に言えばユーリイも怖がって抱きついてきて欲しかったが幽霊とかお化けに関してはあきらめるほか無いだろう。

その代わりにいつかきつとユーリイの怖がるものを見つけてやるっ！！

最有力候補としては蛇、ネズミ、クモ、ムカデかな。あつ、でも後半は俺もダメだ。

そんなことを考えている内にユーリイはガロンの背から降りて森の少し広がったところにある一本の何の変哲も無い木に近づく。そして何やら木の幹に複雑な紋章を描きだし始めた。

一通り描き終ると少し距離をおいて、

「アバカム！！」

すると先程までただの木があつたはずの場所に大きな木製のドアが
たつていた。

「すごいじゃー!!」

「これは父がつくつた仕掛けで、この仕掛けを知らないものは入れ
ないんだ」

「封印魔法の類じゃの」。どうやらユーリイの父上は魔法に精通し
ておられるようじゃ」

「それが分かるマキアも大分魔法に詳しいようだな」

「……まあの」

「いやあゝ良いな魔法。師匠には才能無いって言われたけど俺もい
つか使いたいな」

「帰ったら私が父上にかけてあつてもいいぞ」

ユーリイはそういいながら慣れた動作でその重厚なドアを開けた。

中は天国だった。山の中にも関わらず暖かい日差しが降り注いでい
て外の暗い景色が嘘のように感じられる。遠くに見える大きな木と
一体となつたような家へと続く道沿いには緑ユレイアの由来である
ユーリイ（桜）の木が何本も並んでいて壮観だ。
そんな見るものを和ませる光景がそこにはあつた。

俺とマキアとガロンは目の前に広がる風景を楽しみながらその家へ向かった。

家の入り口にはたくさんの植木鉢が置いてあったのでおそらくユーリイの両親のどちらかが育てているんだろう。奇抜なピンクから落ち着いたブルーまで様々な色の花が並んでいる。

「ここで少し待っていてくれないか。いきなり知らない人が来たら両親も驚くだろうから」

「ああ」「わかったのじゃ」

俺はこの鉢植えの花たちをまだ見ていなかったのでユーリイの案には大賛成だった。

今の俺にはお花さんと話すという電波さんのすることを地で行けるからな。

「イツキは本当に植物が好きじゃのう」

マキアは少し呆れたように言う。

「まあ、好きじゃなきゃこんな能力身につけてないと思うしね」

そっぴや今ベアンテ何しているんだろう？そっぴえばこの世界に来たとき眠いから寝るって言ったつきりだな。

また空の柱についていう奴から力を貰えば目覚めるかもしれん。その時を待とう

「あらら、お客さんですか？」

大きな植木鉢の影から声をかけて現れたのはユーリイと同じ金髪の十二歳ぐらいの可愛い女の子だ。

長袖に土が付かないように腕まくりをして、園芸用のスコップを片手にもっている様子からさきほどまで庭弄りをしていたことが伺える。

「お邪魔してまゝす。俺達はユーリイのギルド仲間んだけど君はユーリイの妹さん？」

「違うよー！！私は・・・」

「シクエちゃん！！こんな所にいたのか！？」

玄関からユーリイが飛び出してきてシクエちゃんと言っらしい子に駆け寄る。

「あつ！ユーちゃんだ〜！！私ユーちゃんに会えなくて寂しかったよ〜」

「そうかゴメンなシクエちゃん」

ユーリイはシクエちゃんのご機嫌取りに頭をナデナデする。シクエちゃんもユーリイに撫でられてご満悦の様子だ。

俺とマキアは二人の間に他の誰も入らせない空気があるのを感じて話しかけるのを躊躇する。

「いったいこの子は誰なんだ？妹では無いようだしきつと近所の子かな？」

するとユーリイもようやく俺たちの不思議そうな表情に気づいたらしくゴホンと一度咳をした。

「あゝ、この子はシクエちゃんと言って……私の母だ」

「ほほう随分若そうな母上じゃな」

『えっ！？それだけ？』

もっといっぱい突っ込みどころあるよ。若いつてレベルじゃないし、ユーリイは完全に実の母を子ども扱いしているじゃん。

それでいいのかイーストフード家！！』

「どうも俺はチバ・イツキっていいいます」

と言えるはずも無く俺は形式通りの挨拶をする。

「我はマキアという者じゃ。」

「よろしくねーイーちゃん、マキちゃん。それにしても嬉しいよ！
！久しぶりにユーちゃんがお客さんを連れてきてくれたからね

あと私のことはシクエちゃんって呼んでね」

シクエちゃんはそのまま俺達を家の中へ案内した。ガロンは家の中へ入れなかったので外でお留守番だ。最後までキューンキューンと鳴いていたので心が痛んだが入れないなら仕方無い。

とりあえずお茶を出してくれるようなのでユーリイに案内されるまま食卓に向かった。

食卓には既に人が座っている。まるで海のように澄んだ青い瞳に高い鼻、若草色の髪の毛を持つキリッとした顔つきのイケメンがそこにいた。そしてこちらをジロツと見ると、

「ユレイアこちらの方たちを紹介してくれないか」

「はい父上。」

もうだいたいの予想はついていたがやはり若いなお父様。俺と同年と言っても信じるぞ。

「左端からイツキ、マキアと言って私がギルドマスターをやっている『ルクゾの宴』のメンバーです。本来ならもう一人いますが今ここにはいません」

「なるほど。」

「自己紹介が遅れたが僕はユレイアの父でリザルト・イーストフツドという。見ての通りエルフだ」

そう言つてリザルトさんは髪を耳にかけてそのエルフの特徴でもある尖った耳を見せた。

この世界のエルフは耳が横に伸びて先端が尖っているのでは無く、後ろに向けて尖っている。そして彼らは総じて若草色の髪の毛を持つており、魔法に長け、森の中を獣のように駆け巡りたい美しい容姿をもっているのがこの世界の常識らしい。

こんなチート種族の血を引くユーリイはそのほとんどを受け継いでいるようで正直羨ましく思うのは俺の心が狭いからなのか。

そんなどうでもいいことを考えながらシクエちゃんに差し出されたお茶を飲む。

お茶は甘さと酸っぱさが混じった不思議な味だったがとても美味し

かった。

「そついえばイツキ君、実を言うと君の事は前から知っていた」

「えっ！？それはどうしてですか？」

「正確に言つと一週間前からなんだが、親友から君のことを聞いてね。」

おそらくもうすぐ狩りから帰ってくるころだと思つのだが……」

「帰つたぞ。シクエちゃん今日はこれで鍋にしてくれるか？」

「良かった。お客さんが増えてちょうど食材が足りなかったの」

玄関の方でそんな話し声が聞こえた。

どうかで聞いたことのある声だ。あまり良い予感がしないが……

「ほら帰ってきたようだ。君のよく知る人が……」

マキアは誰？とも言いたげな表情で俺を見ってくるが俺は目の前の災厄をどう回避すればいいか頭がいっぱいなので気遣う余裕は無い。

「誰か他に客が来ているのかいシクエちゃん？」

「奥にいけば分かります」

足音とともに着実に近づいてくる。

そしてその男は部屋に足を踏み入れた。

「イツキ！？どうして貴様がここにいるんだ？」

そこには質素なつくりの修道服を着た銀髪の渋いおっさんが・・・

「……ハロー、師匠」

すごく憂鬱だった。

四十一話 出会いはリリンが生み出した文化のホニャララ（後書き）

そして作者も憂鬱だった。

四十二話 師匠の教え（前書き）

これからの特訓編です。引き続きお楽しみに！！

四十二話 師匠の教え

師匠はそれから前回俺の植物で酷いことになったとクドクドしゃべりだしたがユーリイのお父様のリザルトさんが『もうそれぐらいで・・』と止めてくださったのでそれ以上長引くことはなかった。

だいたい師匠は過去のことに関われすぎなんだよ。男なら前を向いて生きやがれ！！

とは言え、師匠がいるのは正直助かる。師匠はいろいろと残念な人だが槍の腕前だけは尊敬しているからな。槍を教わる上でこれ以上はないという人だ

「師匠、リザルトさん！！お願いがあるんです。聞いてくださいませんか」

「嫌だ！」

この野郎せつかく人が頭下げているっていうのに……

「お前の頼みを聞くのは嫌だ。だが偶然にも私は任務を早く終わらせてしまつてしばらくここに滞在することになっている。だから暇つぶしにお前の修練に付き合つてやる！ありがたく思えよ」

「し、師匠！！」

「もちろん私も君を鍛えるというのはやぶさかではない。それに君はどうやら私の娘をさんざん引き連れまわしているらしいしな」

あれっ！？何でリザルトさんそんなに引きつった笑顔してるの？
そして片手に渦巻いている力は何！？

「うむう、すさまじい魔力が片手に集中しておるのじゃ。純粋な魔力のみで空気が震えておる。さすがユーリイの父上じゃ」

いやそんな解説はいいからマキア。どうにかしてくれ

「ようこそ魔法の世界へ」

リザルトさんはそれはそれはいい笑顔をしながら俺にその魔力球（名前は後で知った）を放った。

どうしてこの世界の達人と呼ばれる人たちは変な人ばかりなんだろう。

その日の晩俺は歓迎会というのに一口も食べる気が起こらなかった。リザルトさんにつたれた魔力球が腹部にジャストミートし、食欲を奪っていたのだ。

それでも優しいユーリイは俺が何か食べれるように薄味のスープをつくってくれて、マキアはそのスープをフーフーしながら口へ運んでくれようとしたのだがリザルトさんがうっかりユーリイの作ったスープに下剤を入れてしまったり師匠が『たまには弟子をかわいがらんな』とマキアに変わって屈辱のアーンを強制してきたりするので外の風を吸いに行ってくるすただけ言っただけ俺はさっさと退場した。

外の空気は思った以上に冷たくてビックリした。流石に息が白くな

るほどではなかったが肌寒かったので上着を着てくればよかったと今更ながら思う。

山は夜に冷えると聞くがまさにそうなんだな。都会で暮らしていたころはこの時期夜蒸し暑くて眠れなかったが……

会えない家族の顔が一通り浮かんだ後ナーガの顔が浮かんできた。この満天の星空の下いたい奴は何をして何を思っているのだろうか？しばらく星空を見上げ俺はまだまだ盛り上がっている様子の宴会会場に戻った。

「おきなさーい！！ほらほらイーちゃん！！」

シクエちゃんの可愛い声とは裏腹にものすごい力で襟元を掴まれ、揺すられる。

「どうしたのシクエちゃん？」

シクエちゃんに引つ張られ伸びきってしまったシャツのたたずまいを直しながら壁にある時計を確認する。

「えっ！？まだ朝の三時じゃん！！どうしてこんな朝早くに！？」

シクエちゃんは当然とでもいいたげな表情で答える。

「それはねー私の可愛いお花ちゃんたちが水を欲しがっているからだよ。それに今日一日分の私達の水が無くちゃ大変でしょ！」

「水を取って来いと？」

「うん、あと私のことはシクエちゃん先生って呼ぶこと！」

「……何ですか？」

「あれっ！？言ってなかったっけ、私はイーちゃんに格闘を教える先生なんだよ。」

だからこれも修行の一環ってことだよ」

そう言いながら渡されたのは巨大なタンクらしきものだ。

よくビルとかデパートの屋上にあるやつを思い浮かべてくれればいい。

違うのは背負いやすくするために皮製の丈夫な綱が二本ついていることぐらいだ。

それにしても……すごく……大きいです。

これが一日に使う水の量だというなら日本の地下水脈はとうに枯れ果てているだろう。

「じゃあここから十キロ先にある川から水を汲んできてね、近くに小川があることにはあるんだけどそれじゃあ日が暮れちゃうから。」

「分かりましたよシクエちゃん先生」

まあ俺から強くなりたいてって言い出したからなやるしかない！！

水を汲んで帰るのが終わったのはそれから五時間後の八時過ぎだった。

さすがに疲労しきって喉からヒューヒュー音が鳴る。

もう一歩も動けねえ

芝生に横になって庭を見るとユーリイとリザルトさんが木製の剣をつかって打ち合っていた。ユーリイが一方的に攻めているように見えるがユーリイの額には汗がうかんでいるのに対しリザルトさんは

全く汗をかいていない。

ユーリイが進まない状況にイライラして大振りな袈裟ぎりを加える。だがそれを当然のごとく見越していたリザルトさんが剣を素早く横に振ってユーリイの木剣をなぎ払う。

カランツと軽い音をたてて俺の前にユーリイの木剣が転がってきたので俺は片手で受け止める。

その木剣を見て驚愕した。

木剣には『娘は渡さない!!』と刻まれていたのだ!!

あの一瞬に、それもたかが木剣で俺の方向へと正確に飛ばすとは…
…恐ろしい子!!

「まだまだだな。これから精進に励め」

「はいっ、父上!」

リザルトさんから言われていることは厳しいがユーリイの表情は嬉しそうだった。口ではあまり会いたくないと言ってはいたが家族に会えてユーリイの笑顔が多くなった気がする。

ランクAの冒険者の前にユーリイは一人の女の子なんだな

「イツキ、今暇かう?」

マキアが倒れこんでいる俺に向かって声をかける。

なんだか片手に赤い弓を持っていてあまり良い予感がしないんだが

「少し弓の訓練をするから付き合って欲しいのじゃ」

「で、俺は何をすればいいんだ?」

いつまでもここで寝転ぶわけにもいかないので重い体に鞭打ち、よっこらせつと立ち上がる。

体がミシミシなっている。これは明日筋肉痛だな

「イツキの頭の上にりんごをおくから、ただジツとしておけばいいのじゃ」

「いいか、絶対体に当てるなよ！！フリなんかじゃ無いからな！！」

「なるほど。そういうタイプのフリじゃな」

マキアが納得のいった表情が怖い！！こいつ狂ってやがる……

「ちよつ、冗談じゃ冗談。」

マキアも俺の心底ひいた目を見て慌てて弁明を始め出す。

まあマキアの弓の腕前は人狼たちと戦ったときに見たから問題ないだろう

俺が了解の意を伝えるとマキアは50メートルほど離れた地点へと移動し弓を構えた。

弦を引き絞り一呼吸、二呼吸したところで声をかける。

「マキア、お前のことを信じている」

「……イツキ／＼／＼／＼！？」

動揺してふいに放たれた矢は目標から大きくずれ俺の上着の袖を貫いていた。

「ああ~~~~!!」

「くっ、イツキ私の矢で怪我をしたのかの？こうなればお主の肌を傷物にした責任をとらねば……」

「俺のお気に入りの服が。ロッドマスターから貰ったローブもあの変態野郎にダメにされたからな。俺ってツイてねえー!!」

「落ち込むなイツキ。我の服を貸してやろう」

「ありがたくお断りします!!」

この世界に来て毎日がサバイバルだったから慣れない俺は服をあつと言う間にボロボロにしまつて唯一無事だったのが今の服だったからな

それにこの世界は服の値段が異様に高いししばらくはこの破れた服で我慢するしかないな

「おーい、みんな朝ごはんにするよー!!」

シクエちゃんの作る料理はおいしい。きのこ自家製野菜のサラダにリゾット、グリルチキン。特にチキンの焼き具合が完璧で、皮はこんがり中からは肉汁が溢れ出るほどだった。

そんな充実した食事をすました後師匠についてくるように言われた。物見高いユーリイやマキアもおもしろそうだからという理由で後についてきたが正直やめて欲しい。

師匠がこれからすることはだいたい想像できるし……

あまりみつともないところは見せたくない

「よしっ、ここらでいいだろう」

師匠がそう言ったのは池のほとりの開けた場所だった。身の丈をゆうに超す師匠の黄金の槍は太陽の光をキラキラと反射している。

その槍が俺に向けられていなければただ綺麗だろうと思っただろうな

「お前がどれだけ成長したか見てやろう。後、お前は植物使うの禁止だ。」

「師匠とやるのは疲れるから嫌いなだけだな」

「バカかお前は？それじゃあそろそろ行くぞ」

口ではそう言ったものの俺も師匠と久しぶりに闘えて嬉しい。まだまだ師匠に届くとは思わないが少しは師匠に俺の成長を認めさせてやる。

師匠相手に後手に回ると永遠に攻撃の機会が回ってきそうにないの
で先制攻撃をしかける。

ベアンテによって強化された脚力で後ろに回りこみ突きとみせかけ
てのなぎ払いも師匠は体を後ろに傾けてかわす。

次々と槍を師匠目がけて衝くがどれひとつとして当たらない。

中には惜しいのもあったが師匠は自分の槍で刃先を違う方向へと受け流す。

前回闘った時と似たような流れになるのを感じた俺はこの状況を打破するために師匠によって受け流された槍を体の横で一回転させ槍の石突の部分で土を巻き上げ師匠に飛ばす。

さすがに師匠もこの攻撃は予期していなかったようで一瞬動揺した

様子を見せる。

チャンス!!

師匠の槍は長い分間合いも長いが、近寄ったらその攻撃手段のほとんどが削られる。

でも俺の槍はちょうど短槍と長槍の間ぐらいなので師匠より十分間合いを生かすことが出来るだろう!!

一足飛びで師匠の間合いに入り槍を打ち上げようとしたが師匠は筋肉が浮き出るほど槍を強く握っていて己の武器を離さない。

この膠着状態は不味いと思った俺は師匠の胸板を蹴って距離をおく。けっこうな勢いで蹴ったはずだが師匠は微動だにしないのでおそらくダメージもほとんど無いだろう。

まったく! どんだけ化け物なんだよ

「……そろそろ攻撃するぞ」

師匠はそう言う俺にむかってつつこんでくると思いきや!? 普通の歩くスピードで近づいてきた。

その師匠の突飛な行動にいささか驚いたが槍を構えて待ち受ける。ジャリジャリと土を踏みしめながら歩いてくる師匠は余りにもスキだらけだが、それゆえに手が出せない。

そんなふうにあが逡巡していると師匠はいつのまにか目の前まで迫ってきていた。

嫌な予感を感じて体を伏せると頭上を師匠の槍が通過する。

まったくのノーモーションからのあの衝きをか寄せたのはまさに奇

跡としかいいようがないな。

とはいえ師匠がそれぐらいで追撃を止めるような人じゃないので俺はしゃがんだ体勢から足払いをする。師匠は軽く飛んで避け、着地と同時に俺の槍を掴みもう一方の手で槍をもっている俺の手に鋭い手刀をはなつ。

そのあまりの痛さに手が痺れ俺は敢え無く槍を落としてしまった。

「このっ、軟弱物!!」

師匠は風を切るほどの激しいビンタをした。

観客の女性たちがあつと息を呑む音が聞こえる。

打たれた右ほほはしばらく感覚が無くなった後熱を持ち始め、頭の中では何故っ!?!という考えといつか師匠を絶対泣かしてやるという思いがムクムクと膨れていく。

「何でぶつんですか!?!」

「当然だ。自分の命をつなぐ槍を落とすということは自分の命を落とすということだ。」

もつともお前の命のほうで槍より軽いというなら話は別だがな」

くっ、正論だけに言い返せない。

「そんなムスツとした顔をするな。今回の戦闘は前よりましだったぞ。」

戦闘時間が一分から三分に延びている。大幅な進歩じゃないか？」

何このおっさん喧嘩売ってんの？

はいはいすごい進歩ですよ。師匠に俺の攻撃すべてが避けられて、息すらもきかせない程短い戦闘を進歩と呼ぶならな。

「イツキ、お前が本当に強くなりたいたいならその槍と話してみろ」

なかなかおもしろい冗談ですねと言おうと思ったところで言うのを止めた。師匠の顔があまりにも真剣そのものだったからだ。

師匠はふざけた人だが時々真剣な表情をする時は嘘なんかつかない。そういう時は教会の中でも高位な司教という役職についていることも頷けるほどだ。

でも現代人である俺は槍と話すなんていまいち信じられないのも確かなので一応確認をとっておく。

「師匠はその黄金色の槍と普通に会話ができるんですか？」

「いや、意志の疎通は出来ない。」

その性質に魔をもつ武器はたいてい強い意志をもっていてな。その意志を聞き取り武器に認められることを『話す』というんだよ。

実際にこちら側から話しかけても答えは帰ってこない」

師匠の話を聞いていたユーリイとマキアも『なるほど』といったような声をあげる。

「実際に試してみたら分かるさ。」

まず己の武器を持って胸のあたりに当てるんだ。そして目を閉じて
ひたすら武器から意志が伝わってくるのを待つ。

まあ一気に認められるとは思ってないからゆっくりやるといい。
そこにいるユレイアとマキアちゃんも試しにやってみなさい。」

「ふむ、難しいのじゃ」

「あせるなマキア、カナゼ司教もおっしゃっただろう。」

どうやらこれは大分根気のいる特訓らしい」

上のマキア達の会話から分かるようにこの特訓はそうとう大変だ。
かくいう俺も愛槍を胸にかかえて瞑想のまねごとをしているが槍か
らの意思は何も感じられない。

これはまだ俺が槍に意志があるということに半信半疑なのが原因な
のかもしれないが、異世界人であるユーリイやマキアも感じられて
ないので時間がかかるものなんだろう。

しかし何も進展が望めないまま無為にこうやっているより槍の特訓
をしたほうが効率的なんじゃないか？また次に何時人狼が襲ってく
るかも分からないというのに……

そんな不安で押しつぶされそうになる。

ふと気配を感じて目を開けてみれば目の前には師匠の姿が

「師匠どうしたんですか？」

動揺を隠して何気ないように聞く。

「安心しろ。ここは外とは隔絶された世界だ。そう簡単に進入など
できん」

「……師匠にはバレバレみたいですね」

「私だけでなくお前の仲間にもな。」

女はな、男のたまに見せる弱みにコロッといってしまっんだ。だから
たまには仲間に頼れ」

そうおちゃらけて言う師匠。

良しっ、今度相談に乗ってもらおう!!

別に落としたい訳じゃないよ、本当に……!!

四十三話 訓練×訓練×訓練（前書き）

まだまだ暑いですね。作者もこないだ倒れました。

自分のつくった料理のあまりの不味さに……

さあ四十三話始まるよー！！

四十三話 訓練×訓練×訓練

結局槍からの意志は伝わってこないまま午前はあつという間に過ぎた。

昼食も朝食に劣らず美味しい食事だったが気分はなかなか上がらない。師匠にああ言われたがまだ自分の心の中で気持ちを整理できていないのだ。

昼食後はシクエちゃんとの戦闘訓練という予定だったが俺が一番早く昼食を食べ終え、一人で筋トレをしたり槍の技を磨いたりした。考えだすと不安の波が押し寄せてくるので、何も考えずにただ体を動かすことで不安から逃げたかったのだろうと思う。

だがそれは無意味な杞憂だった。俺はその後にあるシクエちゃん在地獄の特訓で何も考えられないくらいに疲れきつたのだから……

「まずはね、シクエちゃんと格闘だよ!!」

「え！？でもシクエちゃんを殴るのはちょっと……」

そうシクエちゃんはどっからどう見ても少女だ。せいぜい中学生ぐらいにしか見えない少女を相手に格闘は抵抗がある。というか抵抗が無いと人としてダメだろ。

それに今の俺はパンチで壁に穴を開けることが出来るぐらいだし尚更ダメだ。

「大丈夫！！イーちゃんの攻撃は絶対当たらないから。」

そう自信満々に言うシクエちゃんは可愛い。金髪少女は何故こんなに可愛いのだろう？

きつとユーリイも小さな時こんな感じで可愛かったんだろうな。

待てよ！！マキアは小さな頃も褐色で婆言葉だったんだろうから…

…いかん、想像したら鼻血が出てきた

「どうしたのイーちゃん？」

小首を傾げるなシクエちゃん！変な道に目覚めてしまいそうだ

「なんでもないです。」

シクエちゃん、怪我しても知りませんよ」

「うん！！じゃあこっちから行くね」

「ちよつ、ま！！・・・」

全然闘う心構えが出来てなかった俺は制止の言葉をかけようとしたが、その瞬間かけるべき相手を見失った。

文字通り消えたのだ。

一陣の風が通りすぎたと思うと腹に強烈な衝撃を受けた。

息が吸えなくなりヒーヒーとしんどい呼吸をしながらおそらく攻撃したのであろうシクエちゃんの姿を探す。

シクエちゃんは地面に膝をついている俺を見おろしてそれは綺麗な笑みを浮かべていた。

「息は整った？次行くよ」

今度は俺も制止の言葉をかける必要を感じなかった。というか声をかける時間を与えてもらえなかった。

だが今度は姿を見失わないように目を凝らす。

すると影がこちらの方に向かってくるのがチラッと見えた。

それを感じ取った俺は一步後ろへ下がり回避行動をとる。

シクエちゃんの回し蹴りが俺の胸を掠め俺は避けれたと確信しニヤリと笑う。

そんな甘い考えは通じることは無かった。

かすただけのはずのその蹴りで巻き起きた風圧にあっけなく吹き飛ばされた俺。

土が口に入ってすごく不味い。唇も切れたのか唾に血が混じる。

シクエちゃんは少し驚いた表情でこちらを見ていた。まさか俺が避けるとは思ってなかったんだろう。

とはいえ今のはほとんどマグレみたいなものだったからな

たぶん次同じ攻撃が来た時は避けられないだろうし。

でも防戦一方は嫌だから一撃だけでも入れたいな。

そんなふうに考えていた時期が俺にもありました

奇跡の回避はその後一度も起きず、もちろん攻撃のチャンスなんて一度もないままボロボロのごとく扱われる始末。

血反吐も吐きましたよ。でもその度にメイ八教の司教直々による高等な神聖術を受けて無理やり回復される↓特訓↓死にたい、という方程式が成り立ってしまうまでに時間はかからなかった。

「頼むもう死なせてくれ!!」

「お、落ち着けイツキ。その首にあてているナイフをゆっくり降ろすんだ」

「ユレイアの言うとおりだ。ここで死なれては後片付けがめんどくさくなるからな

死ぬならどこか誰の目も届かないほど遠くで死んでくれ」

「カナゼ殿!!それは少し酷いぞ!!」

「いや、カナゼの言うとおりだ。ユレイアに近づく男は死んだほうがいい」

「頼む、誰かもう止めてくれ!!」

「もう、イーちゃんをいじめちゃメツだよ!!リー君、カナちゃん!!」

元凶のあんたからそんなセリフが出るとはな。人生って不思議だ……

そういうひと時の楽しい? 時間をすごした後はいよいよ待ちに望んだりザルトさんによる魔法の訓練だ。

師匠に才能無いとは言われたがやはりファンタジーの世界に来たのだから少しぐらいは使いたい。魔法使いになるというのは男の子の夢であり、厨二病患者の妄想の最終到達地点なのだから。

「イツキ君ついて来なさい。」

……あとそのマキアちゃんといったかね？君もだ」

「！？……はい、了解したのじゃ」

自分が何故呼ばれたのかわからない様子のマキアは隣のユーリイに何で？と言う顔をしていたがユーリイも首を傾げるばかりだ。

「父上、私も参加したいのですが……」

「いや、ユレイアはもう私から教えることは無い」

「し、しかし……」

「それにお前には他にやらなければならないことがあるのだろうか？」

その言葉で何かに気づいたのか、ユーリイはリザルトさんに一度礼をして家の方向へ去っていった。

ユーリイは父親に対して他人行儀なほどに礼儀正しいな。

きつと幼いころからリザルトさんに厳しくしつけられてきたのだろう。

うちの家族内ではタメ口がデフォだと言ったらきつと驚くだろうな

……

リザルトさんが案内した先はどうやら魔法の演習場のようで武装した兵士のような人形が横位置列にブラツと並び、そこから少し離れた場所には地面に刺さったロッドの上に浮かぶクリスタルがあった。

宙に浮かぶクリスタルは時を忘れたかのようにキラキラと輝いていて、年甲斐もなく興奮した俺は声を弾ませながらマキアにあれが何か聞こうとしたが当のマキアは、

「な、何故こんな所にセンス・クリスタルがあるのじゃ!？」

あれは個人が所有できるものではないのじゃぞ!!

……フッフ、あれは我のものじゃ!!」

完全に目が逝っちゃってる様子だったのでとりあえず俺はそのセンス・クリスタルの元へ駆け寄ろうとするマキアを羽交い絞めにして抑えた。

「何をするっイツキ!?こらっ、放せ!!」

まだ諦めないのかマキアはセンス・クリスタルの方向へ手を伸ばし、さながらゾンビのような格好で呻き声をあげる始末。

「いいかげん諦めろマキア」

「うつつ、しかしあれは……」

「今度何か一つ願い事を聞いてやるから、なっ!」

俺の言葉を聞いたマキアは急に暴れるのを止めた。

なんとかこの場を収めたくて勢いで言った言葉だったがどうやら予想以上の効果をあげたようだな。

「……本当じゃな？」

「ああ本当だ。」

「なら今日のところは諦めよう。じゃがイツキ！その約束を忘れるなよー！」

「いったいどんなことをさせられるのか不安だ。
まあ大抵のことは我慢してやろう」

「話は終わったかい？」

「あつ、はい終わりました！どうもすみませんー！」

「ハハハツ、そう畏まらなくてもいい。私も久しぶりに面白いものを見せてもらった」

……あれ？怒ってないのか、そういえばリザルトさんの自然な笑顔は始めて見たな。

こう見てみると優しそうな人なんだけどな、事実を知っているからそう素直に思えない。

「ではこれより魔法の訓練を行う！」

「はいっ！」

「まずはあのクリスタルに手を入れなさい」

リザルトさんが先程のセンス・クリスタルをさしてそう言うがどう

見ても俺の手があの中に入るとは思えない。

「大丈夫だ、入れてみなさい」

再びリザルトさんに言われたので俺はゆっくりクリスタルに触れてみる。

するとあるはずの堅い感触が無く、液体のようできて気体のような不思議な感触がする。

そのまましばらく手を入れた後リザルトさんにもういいと言われゆっくり手をクリスタルから抜いた。

手を抜いた後クリスタルは緑色の淡い光を発し、再び元の色へと戻っていく。

「何だったんですか今のは？」

「……このセンス・クリスタルというのは自分の元からもっている魔力量と使える属性が分かる非常に便利なものだ。今で君の魔力量と使える属性が分かったのだ。」

「で、どうだったんです？」

「それは……」

「リザルト殿、言いにくいようなら我が代わって言いましょうぞ」

「……それでは頼む」

「ではイツキ、我から説明しようぞ」

やたらもつたいぶるな。ひょっとして魔力量は無限で属性は存在する全てとか……！？

ここから千葉 樹の勇者伝説は始まるというのか！？

「イツキの属性は風で魔力量は……一般人と同程度、つまり魔法は使えん」

えっ！？さすがにさっきの願いは自分でもあり得ないと思ったが全く使えないというのはキツイ。

「嘘だと言ってよマキア」

「残念ながら事実じゃイツキ。才能が無かったと思ってここはバツサリ諦めろ」

「……普通はそう考えるだろうがイツキ君にいたっては話しが別だ」
リザルトさんのセリフにより下降したテンションが一気に上がる俺。
我ながら単純だが魔法が使えると聞いて喜ばない奴はいないと思う。

「どういうことですかナリザルト殿？」

我には何故そうなるかさっぱり理解が出来んのじゃが……」

「そうだな。ここはイツキ君のためにまず魔法とはどういうものか説明しておくことにしよう。」

僕達魔法使いは大抵二つの魔力を合成して魔法という結果を生み出す。

一つ目は大気や大地に蔓延する魔力、マナだ。この魔力は世界中あらゆる場所に存在していて動植物や無機物にさえ影響を及ぼしている。良くも悪くもね

二つ目は生まれながらにして人が持つ魔力、オド。このオドは遺伝に深く関わっている。

親から子へ、子から孫へ、オドが巨大な親からはオドが巨大な子が生まれやすいということだ。

そしてここからが大事なのだが、イツキ君はこのマナとオドをどのくらいの割合で合成すると思う？」

「1：1ぐらいの割合じゃないんですか？」

「……そんなことが出来るのは一部の才に秀でたものだけだ。

過半数はせいぜい3：7ぐらいで、見習いになると

この二つの魔力の割合が1：10と効率がすごく悪いのが分かるだろう？」

「確かに効率が悪いですね」

思った以上に魔法は現実的だ。ゲームのように簡単にバンバン打てるわけでは無いらしい。

「こつも効率が悪いのは偏に魔法使いとしての技術だけが問題では無いのだよ。

マナという指向性の無い大きな魔力をオドという魔力で指向性を持たすには

オドの量を多くして足りない部分を賄うのが一番簡単な手と言える。
う。」

「しかし、それがイツキとどう関係があるのじゃ？」

「確かイツキ君は大地の力を使って怪我人を治療したといていたね。」

「はい、確かにしましたがそれが何か……？」

「その大地の力というのがマナなのだよ。」

「どうやら君は生来マナとの親和力が高いようだ。まるで精霊のようにね。」

「マナ単体を扱えるなど……信じられん」

「おそらくマナとの親和力が高いのはベアンテのおかげだろう。ベアンテ自体が精霊みたいなもんだしな。納得、納得！！」

「と、俺は納得していてもマキアはどうにも納得できない様子でこちらをジロジロと見てきたのでこっそり耳元で俺が異世界人だってことを話したらやけに納得された。」

「そうでもなければ有り得ん！！と大声で叫んだので耳の鼓膜が破れそうだったが……」

ともかく魔法の訓練は始まった。

俺がマナを単体で扱えるのは植物を操る時と回復の時だけらしいが、それでもベアンテによるマナとの親和力のおかげでマナとオドの割合が100：1で魔法を行使できるらしく俺の少ないオドでも十分に魔法が使えるらしい。そういうわけで魔法を使う上で必須な自分のオドを感じれるようになる訓練からすることになった。

四十三話 訓練×訓練×訓練（後書き）

魔法使えたらいいなあ

物語のアイデアがいっぱい出てくる魔法なんかがあればバッチリです
ね！！

四十四話 魔法

ともかく魔法の訓練は始まった。

俺がマナを単体で扱えるのは植物を操る時と回復の時だけらしいが、それでもベアンテによるマナとの親和力のおかげでマナとオドの割合が100:1で魔法を行使できるらしく俺の少ないオドでも十分に魔法が使えるらしい。そういうわけで魔法を使う上で必須な自分のオドを感じれるようになる訓練からすることになった。

自分の中のオドを探し始めて二時間、全くその感覚がつかめないままでいた。

リザルトさんが言うには『森の中で迷子になったユレイアを探す』感覚らしいがそれを聞いたら尚更分からなくなった。

そんな俺を見るにみかねてマキアがアドバイスしてくれるには『山の中で迷子になったガロンを探す』感覚らしい。

何も変わんねえ!!

……もうこいつらに頼るのは止めて自分でどうにかしよう。

とりあえず自分の中にある力を探すイメージだったな。するとまず最初に分かるのは俺の中にある植物たちの統率者であるらしいベアンテの大きく優しい力。

これでもまだベアンテの本来の力には遠く及ばないらしいからビツクリだ。きつと完全体になったら世界を掌握できるかも？なぐらいにこの力は大きい。

さてと、オドはいつたいどこにあるのかな？

必死に自分の中のオドを探すが姿どころが影さえも見当たらない。
もしかして俺にはオドなんて無いのかも……

そんなことを思い始めたときあることに気づいた。

ベアンテの力の根源のすぐ近くに弱弱しく輝いているものが見えたのだ。

ベアンテとはまた力の方向性が違うその力がどうやらオドラしい。
そんなに近くにあつて何故気づかないのかと思うならこう考えたら
分かりやすいだろう。

あなたは象の足にしがみ付いているアブラムシの姿がみえますか？

つまり象がベアンテでアブラムシがオドだ。普通は気づかないだろう。

それに考え直してみたら俺の視界の中におそらくオドは入っていた
と思う。それも何かあそこはおかしいとしっかり感じていたのだ。

……だがあれがオドだと認めたくなかった。あんなちっぽけで弱弱
しい光を放つものがオドだと認めてしまえば俺の中の何かが壊れ、
封印されていた第二の人格が暴れだす……そんな予感がしたのだ。

まあこれ以上厨二設定に逃げるのは精神衛生上良くないからもう止
めにしよう。

空しさがこみあげてくるだけだしな。

何はともあれオドが確認できた旨をリザルトさんに報告しよう。

「リザルトさん、マキア、オドを感じ取れましたよ。」

「よくやったな」

「さすが我のイツキなのじゃ」

褒められるのはやはり嬉しい。それが身近な人からだったら尚更だ。とはいえ、あまり表情に出すのは恥ずかしく感じたので無表情を装い話を進ませる。

「次はどうするんですか？」

「次は属性魔法の特訓だが、ここで少し座学に入ろう。」

「魔法の種類には属性魔法、召喚魔法、封印魔法、時空間魔法の四つがある。」

順に説明すると、属性魔法は魔法使いが攻撃や防御、治療、付加などに使うもつとも使用頻度が高く応用性もあるものだ。

そして二つ目の召喚魔法は魔獣、精霊、神獣などの生き物や剣などの武器と契約することによっていつでも呼び出すことが出来る。

三つ目の封印魔法だが、これがなかなか深くてね。鍵をしめたり開けたりするような簡単なものから神を封印し込めるかなり強力なものもある。最近の魔法使いは封印魔法を軽く見て、昔のようなハイレベルの封印魔法師が少なくなってしまったがね。

そして最後の時空間魔法だが、これは今の技術じゃ説明できないんだ。」

「それは何故ですか？」

「イツキ君は知らないだろうが、かつてこの世界の技術力は今の技術力を遥かに凌いでいた。俗に言う『原典の時代』だね。」

この時代の魔法使いの数は人口のおよそ九割。現在の魔法使いの数が人口の約一割だからこのすごさが分かるだろう。そして各国の魔法使いたちは自分達のもてる技術を生かして、自らのオドだけでその力を発揮させる道具、魔導具を発明した。

現存する魔導具は全てこの時代の物を模倣して作られたといってもいいだろう。

だが、極端に成長した技術文明はその力によって幕を下ろす。書物によるとどこかの国が発明した世界中に存在する魔法使いから生命力を吸い上げマナに変える魔導具によって、魔法使いが全滅しかけたらしい。

これを止めるために造られた魔導具が転移機で、残った魔法使い全員がそれに大量のオドを流し込み生命力を吸い上げる魔導具を異相空間に飛ばし見事世界の危機を脱したわけだよ。

要するに時空間魔法というのは、その転移機を造る際にかけられた魔法だということ。

そして転移機が大都市を除いて存在しないのはその時空間魔法が今だ解明できていないからなのさ。わかったかい？」

「は、はいたぶん」

ずっと足下にいた蟻から視線を離して俺は了承する。

昔から座学の時間だけは苦手だ。高校の授業ではノートもとらずずっと外の景色を見てぼんやりしてたもんな。今は何もかも懐かしい……

「属性魔法についてはそこにいるマキアちゃんに聞いたほうが早いだろう。」

私はこれから少し用事があるので後はマキアちゃんに頼んだよ。」

「ちよつ、何故我が……」

マキアがリザルトさんのセリフにつっこもつと声を出した時にはリザルトさんが既にどこかへと去って行った後でマキアの声が虚空に空しく響く。

「ちゃんと今まで話を聞いてないからすぐに対応できないんだよ」

「ずっと蟻を見つめておったイツキにだけは言われとう無いっ!!」

「で、教えてくれるか魔法?」

「……むう、リザルト殿の頼みを断るわけにもいかんし仕方無いのう」

未だ納得のいかない表情で渋々言うマキア。

「確かイツキの属性は風だけじゃったが実際存在する属性は九種類ある。」

火、水、風、土、氷、雷、影、毒、念の九つ、

まあ大抵の魔法使いはこのなかの一つから五つぐらいは属性として持っておる。」

「火から毒までの属性ならなんとなく分かるが最後の念ってやつは何なんだ？」

「念は手を触れずに物を動かしたりある程度人の心を読んだりできる珍しい属性魔法での、目に見えんから対応がとりにくいのが特徴じゃ。」

マキアの説明からすると地球でいう超能力に近いイメージだな。

そのことをマキアに話してみると『どこの世界でも似たような所があるのじゃな』と関心してる様子だった。

そう考えるとパイロキネシスやエレクトロマスターはこの世界で言う火や雷の属性をもった人なのかもしれない。以外と身近なところにファンタジーがあるもんだと感心する。

「そつえばマキアの属性は何個あるんだ？」

「教えてもよいが誰にも秘密じゃぞ！」

案外リザルト殿は気づいているかもしれんがそれでもじゃー!!」

「あ、ああ」

マキアが強い口調で言うので少し驚いたが、よく考えると自分の属性を教えるということは弱点を教えることにもなるので納得いった。

「我は念……以外の属性魔法をもっておる。」

「本当か！？すごいな～！！」

「じゃあ俺に風魔法の使い方を教えてくれないか？」

「えっ！？イツキは怖がらぬのか？」

マキアはキョトンとしたような表情を浮かべるが何故そんな表情を浮かべるのか分からない俺もマキアと同じようにキョトンとする。俺は少し間をおいて、

「何でだ？」

「ああ！そういうえばイツキは異世界人じゃったの。だったら知らんでも無理は無いの。」

マキアの意図が読めないがとりあえず嬉しそうなので良しとしよう。まずは魔法が一番だ！！

そこからはマキア解説の優しい魔法講座が始まった。

「まずは魔力の合成が出来るようにならなくては魔法など使えんから。う。オドとマナを1：100の割合で合成するんじゃ！」

ほんのちよつとのオドとマナを自分の中で混ぜ合わせるのは想像以上に難しい。

なんとか自分の中のオドを取り出すのはいいのだが、マナの量が多

すぎて上手く魔力を合成出来ないのだ。

1：100にしなければいけないところなのだが、1：10000のようになってしまう。

「お主は合成が下手じゃのう」

マキアは呆れたように言うが俺だって全神経を使って集中しているのだ。これ以上集中したら新しい世界に『こんにちは』してしまう。

「んなこと言ったって……」

「もっと集中するのじゃ!!」

優しい魔法講座じゃなくて鬼畜講座の間違いだったな。とは言っても、このままでは俺が魔法を使えるようになりそうもないのでマキアの言うように更に集中する。

息をすることも意識するのが勿体ない。ただ考えるだけの存在になる。

酷い頭痛がしたがそれすらも今は放っておく。

マナとオドがある場所に俺という意識体を送り込み自らの手で適量のオドを掴む。

もう片方の手で大きな緑色の光の塊、『マナ』に手を入れる。

おそらくこの中の中心部にベアンテがいるのだろっ、どうしてもかは分からないがそんな気がした。

そうしてバスケットボール程の大きさのマナを取り出し、両手にある魔力の球を胸の真ん中あたりで合成した。

するとあたりの景色がゆっくり消えていき気がつくともとの場所に
戻っていた。

目の前でマキアが心配そうな表情をしていたので心配させないように
軽く笑みを浮かべる。

マキアは安堵のため息をつくと俺の魔力合成が上手くいったのに気
づいたのか優しく笑う。

「よくやったの。」

「ああ、まあ俺にとっちゃ簡単だったさ」

ふらつきながらそう言う。これは男としての意地だ。

「ならその合成した魔力を使って魔法を使ってみようかの」

そしてその意地はしばしば自分の足を引っ張ることになる。
自分でいったんだけどな。

四十四話 魔法（後書き）

リザルト説明乙。

出来ればご意見、ご感想をください。

四十五話 素顔の魅力

「そんな顔をするな。風はイメージがしやすいから直ぐに出来るようになると思うぞ。」

「だったらマキアがお手本見せてよ!」

「わっ、我はいいのじゃ!!人のことはいいからイツキはさっさとイメージせいっ!!」

「はいはい、分かったよ」

とは言ったもののどうしよっかな。風といえば某有名RPGの魔法のように竜巻を起こしたり某忍者漫画のように手の平に小規模の台風をつくったりといういろいろあるが共通するのは吹き飛ばしたり、切り刻むイメージだと思う。

とりあえずそういう感じでやってみるか。

狙いは訓練用の人形

合成した魔力を手に集めて風の塊を押し出すイメージ!!
さあ、行けっ!!

「おおっ、なんということじゃ!!」

マキアのセリフに勝利を確信した俺は集中して閉じていた目をゆっくり開く。

目の前には人形が木っ端微塵に吹き飛ばされている姿が……見当たらない

さっきのマキアのセリフはいったい何だったんだろう？

声の主は……隣で気持ち良さそうに目を閉じておそらく俺がおこしたであろう風にあたっていた。

「なんと気持ちいい風じゃ！！高原をかけぬける風、夏の夜にそつと人を癒す涼風、

そのどれにも当てはまらない風が今ここに！！

魔法初心者是最初攻撃魔法をつかいたがるというのに人を癒す風を起こすとは、

イツキはなかなかの人格者よのう……！」

「だ、だろっ！！俺もそうしようとは思っていたんだがここまでマキアが喜んでくれると

は思わなかったよ。アハハハ」

ふう、危ねえ。なんとかこの場は逃げ切ったが次は成功させなくては！

攻撃のつもりでやったはずなんだが少し合成魔力が少なかったのかもしれない。

……よし、こんなもんでいいだろ。少し多すぎかもしれないがさつきみたいに恥をかくのは御免だからな。

「待てっ、イツキ！それは魔力が多すぎる。中止するんじゃない！」

んなこと言われても魔法の止め方知らないし・・・

とりあえずマキアの口調からじゃやばいことになりそうだからターゲットを目の前の人形から急遽変えて、思いつきり頭上へと放つ。極端に圧縮された空気がブーンブーンと羽虫のような振動音をだしながら空へと向かっていく。

その音がどんどん速くなっていくのが聞こえだすともものすごく嫌な予感がしてくる。

マキアも顔を青白くして急いで逃げろと目で訴えるので、ロケット花火を点火したら急いで物陰に隠れるほどビビリな俺はダッシュで逃げ出そうとするが先程の魔法で魔力を使い尽きたのか、体が鉛になったかのように重く石に躓いて無様に転ぶ。

間に合いそうに無いと感じたので出来るだけ体を地面に伏せ想定できる被害を少なくする。

「バカッ、イツキ！」

その程度じゃ防げん！！クソッ、今待っておれ！！」

「アホッ、こっちへ来るな！！巻きぞいをくらっぞ！！」

互いをけなし合うがどちらも相手の安否を気遣ってのことだがそんな状況をせせら笑うかのように天からの振動音はその速度を速めていきマキアが俺の手を掴んだ瞬間、音は消えた。

あたりを無慈悲なまでの風が襲った。圧縮された空気が解き放たれるとき爆風が起こる。

それはまさに一個の爆弾と化す。

周辺の木々は風によって押しつぶされた後空へと舞い上がり、飛礫がマシンガンのようにあたりにぶつかる。

終わりを迎えることのないように感じるほど長い時が過ぎると余韻も無くいきなりそれは終わった。

唯一それがあつたことを知ることが出来るのはあたりに散らばる被害のおかげ。

「大丈夫かイツキ？」

「ああ、なんとかな。ていうかそれ普通は男のセリフじゃないか？」

「男なら細かいことは気にするでない」

俺とマキアを包む薄紫色の球状の何かによってどうやら救われたらしい。マキアがつくったこれもおそらく魔法の一種なんだろう。そういえばマキアに俺の制止を無視して助けにきたことを怒ったかないと……

「うん？どうした口をポカンと開けて、そんなにさっきの魔法に驚いておるのか？」

「……いやマキア、お前、その頭！？」

マキアの頭には、いや正確にはマキアの頭の上には……二本の角が生えていた。

よく悪魔の描写で山羊の頭というのががあるがゲルリと曲がったマキアの角は正に山羊のそれだった。

それに良く見てみると綺麗な褐色の肌が薄紫色へと変わっておりマキアのセクシーな体をよりいっそう強調している。その肌の色がヴァンパイヤを想起させるが角をつけているヴァンパイヤを俺は聞いたことがないので何か別の存在なのだろう。

マキアも俺が遠慮なくジロジロ見てくるのに気づいているとは思うのだが本人はうつ伏せのようになっていて全然リアクションがないのがつまらない俺はマキアの肩を掴んで下から見上げるように顔を覗き込んだ。

……な、何故かマキアは泣いている！？

どうしてだ！？プルプル、僕悪いスライムじゃないよう！！

・・・とりあえずネタに走っている場合じゃないことは確かなので現実に向き合おう。

「どうしたマキア！？さっきの俺の魔法でどこか怪我したのか？」

「うつ、うつうつ。我はもうお終いなのじゃ、もう我に近寄るなつ！！」

そんなに涙目で言われても……

「こっちを見るなつ！優しい言葉をかけるなつ！

……どうせ最後はみんな裏切っていく。」

最後の言葉は今までで一番小さな声だったがひどく重みのある言葉で俺はかける言葉を失う。

きつと彼女はこの姿で今まで悲しい目に遭ってきたのだろう。

ここで下手な慰めをして彼女の気持ちを全て分かったかのように言うのは今まで頑張ってきたであろう彼女を一番侮辱することになる。

「……マキア。」

「……」

「マキア。」

「……」

「マキア。」

「……何じゃ？」

小さく今にも途切れてしまいそうな声。普段のマキアから発した声とは思えない。

「たぶんマキアの姿のことだと思うんだが……」

「……」

無言は肯定と受け取ろう。

「ここから去るつもりか？」

首を縦に振る。

ハア、やっぱりそういうつもりだったか。

「じゃあ去る前に聞いておきたいことがある。いいな？」

これもまた肯定。

「まずマキアはどういう人種で何故隠していたんだ？」

「……わ、我は魔界に住む俗に言う魔人という人種じゃ。紫色の肌とさまざまな動物の角を生やしておるのが特長で、七つ以上の属性魔法に通じ総じて気が荒く攻撃的な生き物であることが原因で狩りの対象になり一時期は絶滅の危機もあった。」

姿を隠していたのは……迫害に遭うのを避けるためじゃ。」

「なるほど。それは分かったが、何故マキアはそんな迫害のある中こつちへ来たんだ？」

「我だって好きでこつちへ来たわけではないっ！！

魔界とこの世界、現界をつなぐ穴が時折自然発生することはどうせ知っておるまいな？」

「いや、知っている。」

たしかザルナ王国の首都エリアノの図書館でそのようなことが本に書いてあったな。

あの時はそんなに注目してなかったがまさかここでその知識をつかうことがあるとは思わなかった。」

「ふん、まあよい。我は幼い頃その穴に巻き込まれこの現界に来ただけじゃ。」

これでもうよかろうっ！もう二度と会うこともあるまい」

「マキア、待てっ！

……誰が去っていいって言ったか？」

「何を言っておる、『去る前に言っておきたいことがある』と言うたではないか。」

「ああ、だから去る前に言っただろう。俺はお前が去ることを認めたわけじゃない」

「それは屁理屈じゃっ！！」

「ああ、屁理屈だっ構わない。俺はただマキアにいて欲しい。それだけなんだ」

まっすぐマキアの瞳を見てそう伝えるときまでの冷たい態度が嘘のように落ち着きを失う。今にもはわわわとか言ってしまいうだ。

むしろ言えっ！！

俺をもだえさせてみるがよいっ!!

「し、しかし……私のこの姿を見て、気持ち悪いとはお、思わんのか？」

「そんなことは無いぞ。むしろ萌えだ」

「燃え（・・・）とはなんじゃ？」

「萌えとはハキキュンとなることだ。」

「……イツキが何を言っておるかさっぱりじゃが、どうやら悪い言葉ではないようじゃの。」

こんなに分かりやすい説明はないというのに何故マキアは理解できないんだ!?

萌えは故郷じゃあ国を超えて理解される共通概念だと言つのに……惜しむべきは文化の違いというやつか。

「それとその角を触らせてくれないか？」

「……いいぞ？」

恐る恐るマキアの角に触ってみると結構丈夫で微妙にくすぐったそうではあったが別に性感帯ではなかった。少し残念だが見るからに堅そうだったので仕方ないかという納得の気持ちもある。

そういえばユーリイのとんがった耳をまだ触ってなかったな。ハーフェルフであるユーリイの耳を触ったときいったいどんなリアクションをとるのだろうか？

頼むから『え、こいつ何やってんの？キモい』みたいなリアクシヨンは帰ってきて欲しくないな。

そんなことになったら死ねる

＼（＾　＾）／

「というわけでユーリイにもちゃんと言えよ」

「どういうわけか知らぬがユーリイにも言わねばならんかあ」

「大丈夫だ。ユーリイはきっと受け止めてくれるさ」

「確かに変態のイツキと一緒におれるくらいじゃしの。

なにか勇気が湧いてきた今の内にユーリイに伝えてこようかのう。
行つて来る」

「俺を例に挙げてから行動速くない！？」

「気のせいじゃ」

まあ元気になったみたいだしいいつか。

あゝ、あゝ、あんなに急いで走つたらこけるぞ。

まるで誰かから逃げるかのような勢いで走って、そんなに早くユーリイに伝えたいのか？

すると肩にトントンという誰かが叩くような感覚を覚え後ろを振り返る。

「イツキ君、どうしてこんな状況になっているんだ？」

笑顔のリザルトさんに恐怖しながらあたりの状況確認。

そこにはまるで嵐が通り抜けたかのような悲惨な光景が広がっていましたとさ

「じ、実はさっきなんの前触れもなく巨大な竜巻という自然災害が発生して俺達を巻き込んだんですよ。いやゝあれは驚いたな。」「
(全て棒読み)」

「その証人であるマキアちゃんはどこにいるのかな？」

「マキアはその竜巻に巻き込まれてはるか空の彼方まで飛んでいきました。(遠い目)」

「じゃあ君に責任をとってもらわなくてはね。」

「だが断る！」

「口応えしたからペナルティ更にプラス100だね。」

「すいません!!一度言ってみたかっただけなんです。」

「あははは、僕にジョークは通じないよ。じゃあ逝こうか？」

マキアの裏切り者っ!!

四十五話 素顔の魅力（後書き）

どこか遠くまで旅をしたい。そう考えた作者は今日も近くのコンビニで夕食を買い取るのであった。

あ、あと感想をいただけると嬉しいです。

四十六話 やはり修行（前書き）

前回書くのを忘れていた魔人の設定

魔人は人に擬態できます。しかし魔法を使うとその擬態が解けてしまふ。

これが無いとマキアが元の姿に戻った理由が説明できない。

後、魔人は魔界に自然発生するゲートではなく人工的につくられたゲートによって現界へ行けていましたが絶滅の危機に瀕した時それを破壊しました。

本当にすみませんでした！！

四十六話 やはり修行

あれから俺の魔法による被害の後をかたづけることになった。広範囲に土が吹き飛んでいたのでその処理は想像を絶するほど面倒だった。

全てが終わる頃にはあたりは真っ暗で、地球では見ることの出来ない星座が空に浮かんでいる。

なんだか急に胸が重くなり地面に仰向けになって空を見上げる。

そうか……これがホームシックってやつか。自分はそういうのになるタイプじゃないと思ってたのに案外分らないもんだな。

「ほらっ、あそこで寝ておる」

「本当だ。私はただのゴミだと思っていたぞ。」

「一番に気づいたのはユーリイじゃろうが」

「……何のことだ？」

「まったく、素直じゃないのう。」

そんな会話が聞こえたので上半身を起こし軽く手を振って合図する。

「飯をくれ。今なら放射能で汚染された謎の肉でも食べれそうなんだ」

「カニバリズム溢れる発言じゃな。」

「なかなか変わった嗜好の持ち主であるイツキには残念な話だがあいにく夕食はただのツナサンドイッチでな、迷惑なら私とマキアで食べるでしょう。」

「実は俺肉を食べると体中に蕁麻疹が出来る体質なんだ!!」

「だからどうした?」

「お腹がすいて倒れそうなんです。後生ですからそのサンドイッチを愚かな私めにお与えくださいませ。土下寝でもなんでもしますから……」

「お前にプライドはあるのか?」

「プライドなぞ大義の前ではゴミ屑同然よ!!」

何だかんだ言っても結局ユーリィは優しいわけでサンドイッチをくれた。

うん美味い。

翌日から修行が始まったがいつまでたっても槍から声は聞こえてこない。

特に目立つような装飾も無く、柄の部分に触れば手にぴったりつくような一体感があるこの槍が何故何も話してこないんだ?

やはり師匠が完全にボケ始めたのか俺をからかう為に嘘をついた線が濃厚だぞ。

でもユーリイとマキアは額から汗が流れ落ちるまでに真剣に武器の声を聞こうとしているというのに強くなりたいと言い始めた自分が最初にあきらめたら人としてどうなのか？

……いっちょ師匠に騙されたと思ってやってみるか

そしてしばらく瞑想すること一時間

「む、何じゃこれは？」

「どうしたんだマキア、イツキの顔を見て吐き気でも催したのか？」

「えっ、そうなの！？」

「いや……そんなのでは無いのじゃが………」

マキアは弓を膝の上に乗せるとそのまま黙り込んだ。すると俺の心配そうな表情にきづいたのか師匠が少し落ち着けと肩に手を置く。

「マキアちゃんは随分速かったな。イツキとユレイアがまだその武器を手にして間もないというのもあるがそれを抜いたとしても速い。

……きつとよっぽど相性がよかったんだろうな」

よく見てみるとマキアは誰かと話しているように動いていても楽しそうな表情をしている。師匠の言ったことは本当だった。

でも師匠は会話なんて出来ないって言ってなかったか？

後でマキアに聞くとしよう

そんなことを考えているとマキアの『話』も済んだらしくゆっくり

目を開けて手元の弓をいとおしげに眺めた後じつとその様子を見ていたこちらに気づき恥ずかしそうにする。

「で、どうだったんだ？」

隣でユーリイが興奮気味にマキアに声をかける。

むしろ当然か。武器が意志を持つだけでも驚きだというのにそれを感じる事が出来るなら何を思つか気になる。ぶっちゃけ俺も早く知りたい。

「はつきりとした言葉ではないのじゃが我が所有者でよかったというようなことを言っているように感じた。

我はそれが嬉しくてのう、カナゼ殿は会話出来ぬと言っておったがこちらもお礼を言わずにはおれなかったのじゃ」

「そこまでの意志を見せるということは、それは魔弓なのか？」

「うむ。先祖から伝わる家宝なのじゃ」

「くそつ、私も負けておれんぞ!!」

「あまり気を詰めると上手くいかなぞユレイア。

特に魔剣などの魔導具は気位が高く難しいからな。気長にいけ」

「はいっカナゼ司教！」

「師匠！俺にも何かアドバイスを!!」

「イツキは……まああれだ。……頑張れ」

「師匠もつと具体的に言っていただかないと分かりません」

「良しつ、ユレイアいい集中だぞ」

こいつが本当に司教だとしたらメイ八教は近い将来終わるな
いつものように自分一人で頑張るか。

結局何も掴めず俺は午前の修行を終えたがユーリイは終わる頃に何か掴み始めたらしく師匠が言うには早くて明日には『会話』ができるようになるらしい。シクエちゃんの料理はあいかわらず美味しかったが今日は十分に楽しめなかった。

そして昼食後はシクエちゃんが自分の作った料理を俺の胃から助け出そうとしているかのようにめった打ちにして毎回の修行を終わらせた。

この修行は俺の体を痛めつけるだけのような気がして本当に嫌になる。なにしろ俺はシクエちゃんの攻撃を無造作にくらい反撃をしようとするとかウンターが胸に、顔に、鳩尾に入る有様。そしてボロボロの体のまま次の修行の場である魔法訓練場に行くのであった。

「あれっ！？リザルトさんは？」

正体がばれたマキアは俺とユーリイの前では魔人の姿をさらすようになったので今日も角がある。

「イツキが来る前になにやら用事があると言って我にイツキの先生

を勝手に命じての。

それで今こうなっておるといわけじゃ」

「どうせ今頃何かしているユーリイの様子でも見にいってるんじゃないの？」

「親バカの鏡じゃの」

「全くだ」

「では早速じゃが魔法の授業に入るかの」

「おう！」

そういうことになった。

「前はイツキに魔法障壁を教えてなかったせいで危なかったが今
回覚えればあのようなことにはならん……とまではいかんが大分ダ
メージを減らすことができるぞ」

「先生、魔法障壁とは何ですか？」

「うむ。良い質問じゃ」

「魔法障壁とは属性魔法の一種でな。魔法使いには必須の技術で要
は相手の魔法を防ぐ盾のことじゃ。」

それぞれ己の持っている属性を使って行使するのじゃがその形は様
々での。状況に応じて使い分けんと死にも繋がりかねん重要な技術

「じゃぞ」

「前回マキアが俺の風魔法から身を守った魔法障壁は何の属性だったんだ？」

「あれは少し特別でう。我の持つておる属性を数種類混ぜた複合障壁というやつじゃ。」

「防御力は一種類の属性でつくった魔法障壁を軽く越すが習得するのが難しく、我でも数年かかった。」

「それに一種類しか属性を持たないイツキにはどうせ使えんしのう」

「クツ、少し懂れてただけだな」

「こればかりは才能じゃしの」

「ではいつものように魔力を合成するところからじゃ。」

「今回は前のように合成しすぎることがないようにな！ー」

「言われなくてもわかってるよ」

「とは言ってもだんだん魔力を合成するには慣れてきたがその量になると未だ難しいのひとことだ。細心の注意を払って合成する。」

「出来たぞっ！」

「うむ。量はそのくらいじゃの。だが遅すぎる！これでは戦闘に使えるぞ」

「そこらへんはおいおいやって行け。次はどうするんだ？」

「うむ、今更言われると難しいのう。」

「なんというか『通さない！』みたいな気持ちのまま、マナで壁をつくるイメージじゃのう」

「誰もが持つている心の壁か……」

でも風の属性じゃああれを再現できないだろうからあきらめるか。適当にかき集めた風を円の形に薄く延ばしてみる。

だがこの形だと風がすぐに分散して形を止めるのが難しいしそれに何より敵の攻撃が来たとしても防げず素通りしてしまうだろう。

厚みと敵の攻撃を逸らすのに反りが必要だからこんな形かな。

出来上がったのはラウンドシールドの形をした風の魔法障壁。

維持するのがすごくつらくて時々端がぶれるがなんとか形になっていてホッとした。

「なんとか出来たようじゃな。」

……イツキはオドさえあれば魔法使いとしていい所まで行けたのかもしれんのう」

「もうあきらめたさ。それに俺はどっちかというと槍使いだしな。」

「そういえばマキアも風使えるんなら風の魔法障壁見せてよ」

「うむ。いいじゃろう」

マキアは瞬きのあいだにオドとマナを合成するという離れ技を当然

の顔をしてやってみせる。さすが魔に通じる人である魔人の名に恥
じない腕前だ。

それから先は更に驚かされた。マキアは自分の体をスッポリ包むほ
どの竜巻をつくるとその中に飛び込んだのだ！

かなりの錬度でつくりだされた竜巻はこちらを吸い寄せようとする
ほどの力を感じるというのにマキアの身は無事なのか！？と心配す
る俺をよそに涼しい顔で出てきた。

「これが全方向防御形の風の障壁じゃ。今は分かりやすく見せるた
めにあえてつくってから中に入ったが実際は自分の周りにつくるの
が普通でのう。イツキも後でつくることになるから良く見ておくよ
うに！」

「それって入るとき痛くないのか？」

「イツキが前回使った風の魔法は強力な攻撃魔法じゃからイツキも
ダメージを負うのじゃが普通は行使者自身が受けるダメージはかな
り軽減されるからのう。それにあればイツキが魔力の制御に失敗し
たのが大きな原因じゃ。」

まあ、とにかく行使者が魔法障壁で怪我をうけるなんてことは無い。
安心せい！」

「わかったよ」

そうして今日も修行を続けるのであった。

四十六話 やはり修行（後書き）

次は修行がだいぶ飛ぶ予定です。書くのがたいへ（ry
話が進まないと思つまらないと思いますので

四十七話 お主は愛い奴よのう（前書き）

最新新しく小説を書き始めたけどここで宣伝するような卑怯な真似だけはしたくないです。

どうぞ『仙水さんの歩むハンター道』をよろしく!!

四十七話 お主は愛い奴よのう

大分朝の水汲みは楽になってきたがその他の修行は実感できるような成果を挙げていない。

カナゼ師匠の武器との対話に関してだが対話をした後の武器はかなり性能があがっているように思える。

一番初めに話せたマキアは当然のことながら弓の威力、精度ともに上がり何より今まで必要だった矢がいらなくなったのだ。弦に手をかければ自然に魔力で構成された矢が手の中に出現し、それに自身の魔法を組み合わせた新魔弓は岩を貫き内部から破壊するという恐ろしいものになった。

そして二番目に話せたユーリイは剣に常に氷の属性が付与されその冷たいまでの鋭い剣閃は敵を斬ると同時に凍らせる。またユーリイが得意とする氷魔法の威力が2〜3倍にまで上がりマナの消費も減るというありがたい効果までついている。

今ではすっかり剣を離さなくなり、睡眠中はもちろん食事中まで持ち歩き楽しそうに話しかける始末。ユーリイの笑顔を独占し始める剣にちよつとイラつとさえした。

最後は…俺だが全ての神器が使えるようになりベクトルを操る能力を身に着けた。

すまん、冗談だー！！

もちろん出来損ないでヘタレな俺は『オートノカタキヲトルノデ

ス』という電波以外何も聞こえないし何一つ進歩が無いダメ人間だ、死のう

「イツキ、ちよつと来い」

ユーリイとマキアはそれぞれ対話できた武器の性能を試している中俺は師匠に呼ばれた。

あまりにも才能がない俺にきつい一言でも言われるのだろうか？
何にせよ気がすすまない

「何ですか師匠？」

「お前に同じ槍使いとして一つ助言をしておこう」

「急に何を…」

「いいから聞け。……槍という武器は非常に気位が高い武器だ。

わがままな女と思ったほうが良い。

だが気位が高いからといって決して至高の武器というわけでもない。

」

俺は師匠の言いたいことが分からなかったが師匠の真剣な様子から真面目に聞く。

「要するにお前は槍を愛していない。」

俺はちゃんと槍に愛着をもっている。何故師匠はそんなことを言うのか？

「不満げな顔だな。」

確かにお前は槍を大事に扱っている。
だがそれは幼子が自分の玩具を大事にするのと一緒に感情だ。

結局お前は武器本来のもつ力を信じきれていない。」

何か言い返そうとするが言葉にでず空気を求める金魚のごとく口を開け閉めする。師匠の言葉はあまりにも思い当たりがあることだったからだ。

「これからでもいい。武器を信じる。」

彼らは常に私達に語りかけているのだから」

無言のまま師匠に一度深い礼をしてその場を離れる。

どこか自分の気持ちを整える場所に行きたい。自然と足は家と反対方向の森を目指した。

昔から何か嫌なことがあれば森の中へ入った。森という大きな存在が自分をすっぽり包んで守ってくれる気がしたのだろう。そして今もその時と同じように森にいる。

木々が己の葉をすり合わせてザワザワと心配そうな音をたてるのを嬉しく感じる自分がいた。

彼らはいつも俺を守ってくれた。ふと視線を落とすと無骨な槍が見える。

彼らとこの槍はどう違うのだろうか？どちらも同じではないか。

こんな単純な対比論で納得する自分もどうかと思ったがそれが自分なので仕方無い。

「遅れてすまない。今からでもかまわないかな？」

するとあたりが静かになっていきしばらくたつとかすかに音が聞こえてくる。いや、声か？

これが槍の与えてくれた最後のチャンスだと直感的に感じた俺は手元の槍を握り締め意識を集中させる。今にも消えてしまいそうな程小さなその声を閉ざさないように……

少しずつ声は大きくなってくるのだが何を言っているのかがはつきり聞こえない。

そしてあともう少し大きくなれば聞こえるといったところで声は途絶えた。なんだか胸に隙間ができた後冬の冷たい隙間風が入ってくるようなそんな感じた。

『なかなか面倒臭い遠まわしの婉曲だね。君は女子にもてなさそうだ』

「失礼な！！こう見えて学生時代はジョニーというアダ名で女子に一定の人気があつたんだぞ」

『一定の人気www』

「まったく失礼な野郎だな」

『・・・・・・・・』

「・・・・・・・・」

『・・・・・・・・』

「お前はいつたい誰だ！！！？？」

「べ、別に僕は君を心配してきたわけではないんだからな」

「男なのにツンデレとか誰トクだよ！！あとちゃんと質問に答えろ」

「おもに腐女子たちのためだよ。」

あといい忘れていたが僕はこの槍く五つの軍隊>（フィフス・ラン
ス）だ。」

なぜか非常にこいつに親近感が湧くのは何故だ？

師匠は会話らしい会話が出来ないといっていたがこいつとはこんな
に話しが出来る理由も知りたい。

「話したいことは山ほどあるが、姿が見えないと話しづらいだろう。
姿を現してくれないか？」

「顕現は久しぶりだね」

そう声が聞こえると目の前の地面に白い輪っかがでてくる。そうし
てようやくここが森の中ではないことに気づいた。雲の上に乗って
いるのだ。それもかすみのような薄いもので足下の強度を確かめな
がら恐る恐る見下ろすと大地が遥か遠いところにある。高所恐怖症
の俺としては早いところお暇したくなる光景だ。

そんなことを考えている内に輪っかからいつのまにか出てきたらし
い少年が俺を見下ろす。

水色の髪の手端が寝起きのようにあちこちへクルツと曲がっている
天然パーマを隠そうとしてなのか大きめの外套についているフード

を被り、たしか槍の石突についていた小さな銀の装飾が五つ連なったものを大事そうに首からぶら下げている。顔はまあ…愛らしいとだけ言っておこう。

『どうかな？ちゃんと顕現できてる？』

「もとの姿を知らないから断定は出来ないがたぶん出来ていると思うぞ」

体のあちこちをぺたと触って確認している少年の様子はまるでなくし物を必死に探しているみたいに見えておもしろい。身長もせいぜい俺の肩ぐらいしかないだろう。

「まずは応えてくれたこと、感謝する」

『別に感謝されるようなことをした覚えはないよ。ただおもしろそうだったから出てきただけ』

「まさか！？」

『どうかした？』

「お前はツンデレがデフォルトだったのか！？」

『ち、違うよ！』

ためらうな、益々その疑惑が確信へと変わっていくじゃねえか！！

「質問していいか？」

このままだと終わりそうにないのでとりあえず話をきりだす。

『いいよ』

「何でお前とはこんなに会話できるんだ？

たしか師匠はそんなに会話らしい会話は出来ないって言ってたぞ。」

『ああ、あの人の持っている槍も僕と同じ魔槍なんだけどやつは堅い奴だね。』

ほとんど必要なことしか話さないし主人に情が湧くと別れがづらいからって自ら積極的にコミュニケーションをとらないんだよ。

確かユーリイとマキアだっけ？二人の持っている魔器はもっと話していると思うよ。』

その発言でやはりこいつは今までずっと俺が持っていたあの槍だということに改めて教えられた。師匠に後で謝っておかなくては……

『他に何かないの？』

「そうだな、じゃあ対話が終わった後皆は新たな能力を得ていたがお前はどんな力がつくんだ？」

『それは僕の名前から想像できるでしょ。』

たしかく五つの軍隊＞（ファイフス・ランス）だったな。

『そうそう、今度からは僕のことをフィランて呼んでいいよ』

「アッハッハハハハ。フィランは可愛いなあ」

フィランの頭をゴシゴシとかきむしると露骨に痛そうな表情を浮かべて嫌がる。

『痛ッ。じゃ、じゃあね』

プツンとむりやり回線が千切られるような感覚がして再び目を開けるとそこは先程までいた森だった。

まったく可愛い奴め！

ユーリィやマキアが愛おしそうに武器を見つめる理由が俺にも分かった。

四十七話 お主は愛い奴よのう（後書き）

特に書くことは無い！！

四十八話 良いことと悪いこと

フィランとの会話が成功したことを師匠に報告するとその程度のことが出来なかったら貴様は私の弟子ではないと生意気なことを言われたが今は気分がいいので許そう。

ユーリイとマキアにも報告したが二人とも喜んで祝福してくれた。だがユーリイはちょっと待ってるというと一度家に帰ってしまった。

「何だろう？」

「我にもわからん」

マキアも不思議そうに言うので謎は深まるばかりだ。

しばらくしてユーリイが何か布のようなものを持つてくるのが見える。走ってきたのか荒い息をしながらユーリイはそれを俺の手に押し付ける。

「イツキがいつまでもそんなみつともない服を着ているのは目障りだからな。」

マキアのせいで服に大穴が開いているのを今更ながら思い出し、マキアを横目で見ると本人は何も知らないばかりに口笛を吹いてごまかす。マキアはとりあえず後で苛めるとして今はユーリイの気持ち嬉しい。

「あ、ありがとう。見て良いか？」

「勿論だ」

ユーリイに手渡されたそれは赤を基調としたローブのようで絹のような滑らかさでありながら俺の力で引つ張っても千切れないほど強く、裾に施された銀色の糸の刺繍が神秘的な印象をもたらしている。以前ロッドマスターに託された赤いローブに似ているがデザインが大幅に違う。

「以前イツキが敵の攻撃によってせつかくのロッドマスターから貰ったローブをボロボロにしまっただろう？これはあの時破れたローブからつくったんだ。」

「付与されている魔法効果は全て消えてしまっていたがローブは不死鳥の毛で織られていたから防具としては優秀だったので再び魔法を付与して織り直した。」

この素材を使って鎧を新しくつくろうと思ったがあまり鎧を着慣れていないイツキは持て余すだろうと思い、普通の鎧並みの強度と防御力を持たせてある。」

「あと未だ魔法をあまり使えないイツキの為に魔法障壁ほどではないが魔法の威力を軽減させるようにもしてある。」

さすがにロッドマスターが一度付与した魔法の残存魔力が強くて再び魔法を付与するのに少々梃子摺らされたが私の魔法にかければこんなものだ」

腰に手をあててユーリイはどうだと言いたげだが強がっているのはバレバレだ。

「だったらその後ろに隠している手を見せてもらおうか」
ギクツと出るはずのない擬音が目の前のユーリイから聞こえた。というか自ら口に出して言った。こんな所でまで天然な彼女に癒される自分がいて俺の病気は相当重症だと思う。

「ユーリイ、バレバレじゃぞ。」

午後の魔法訓練の時我らに内緒でコソコソしておるのに気づかんとでも思ったのか？

まして食事中も手を隠すかのように手袋をつけておったのに」

「そんなバカな！？計画は誰にも言っていないはずっ！！

し…しまったー！！」

自らの発言で墓穴を掘るユーリイにマキアも呆れているがその表情は優しい。

「ささ、観念して両手をだしなさい」

渋々と隠した両手を突き出す。ユーリイの綺麗な手は火傷に覆われていて、その酷さを表すかのようにピンク色の肉の部分が見える。思わず目を背けたくなったがその行為はここまでして頑張ったユーリイの努力を無駄にすることだと思いユーリイの手を見つめ続ける。怪我の酷さに驚いたと同時にロッドマスターの魔力のすさまじさが思い知らされた。

それにマキアによるとこのような高密度の魔力による火傷は高位の神聖術士でも相当難しいそうで完璧に元通りにするのはほぼ不可能らしい。直ったとしても手の皮が不自然に引きつったりするだろう。

だが俺にはまだ一つ手段がある。

この間俺に力をくれた空の柱という奴の話によると残り五柱同じ存在がいるらしい。そいつらは俺の中のベアンテに力を取り戻させることが出来るので治癒の効果も上がるはずだ。

それで本当に治せるのかどうかは分からないが今はそれしか手段が

無い。

「ユーリイの手を治してあげたいが今の俺の力じゃ元の綺麗な手には治せない。」

だからいつか必ず元通りに治すまで待っていてくれないか？」

「……ああ、頼んだぞ」

俺はユーリイの信頼の笑みに答えたいと思った。

ローブを着ての昼からの魔法訓練にはユーリイも加わることになった。

そういえば今までユーリイは氷属性しか使っているのを見たことが無いが他に属性はないのかと聞いたところ案の定あった。（むしろ魔法を使えて一つの属性しか無いことの方が珍しいのだが）

「私は氷と念が使えるのだがあまり念は得意ではなくな。」

あと封印魔法を少々使える程度だ。ほぼ全てに長けているマキアが羨ましいよ」

「我は器用貧乏じゃからユーリイのようにそこまで一つの属性を極めておらんよ」

ユーリイが氷でつくった三角形のパネルをおそらく念の魔法でフワフワと浮かせてピラミッドを完成させたのを見ながらマキアはそう言った。何百枚の氷のパネルを全く同じ大きさでつくり、更にその一枚一枚のパネルを崩さないように積み上げていくのにはかなり精

密な魔力コントロールと集中力が必要なことは魔法初心者の俺でも分かることだ。

しかもユーリイがつくりだした氷は一週間たっても消えないほど低温らしく、それを知らなかった俺はその作品を触った瞬間凍傷になりかけたwww

リザルトさんはその様子を嬉しそうに見ていたがユーリイが俺の指を舐めて溶かそうとした瞬間俺の腕をつかんで近くの小川に連れて行き指が元の感触に戻るまでずっと後ろに視線を感じ続けた。

「もう大丈夫みたいです」

振り返って見るとリザルトさんは真剣な表情をしていたのでまだ怒っているのかと思ったがどうやらそうでもなさそうだ。

「……イツキ君。君はユレイアのことをどれくらい知っている？」

「ハーフエルフで凄まじい剣の使い手でもあるが優秀な魔法使いでもあることですかね」

「そんなことを聞いているのでは無いつ!!僕は……なっ!？」

俺の発言を強い口調で怒鳴り話し出そうとしたが急に何かに気づくといつも冷静なりザルトさんに初めて驚きの表情が浮かぶ。

「ど、どうかしたんですか!？」

「封印…結界が破られているだど!？何故だ……!？」

話についていけないがどうやらあまり良い展開ではないようだ。リ

ザルトさんもしばらく動揺したようだが気を取り直して俺と向き合う。

「イツキ君、どうやらこの入り口に掛けられている封印魔法が何者かによつて解けかけているようだ。」

こんなことは普通では有り得ないのだが、現状その有り得ないことが起きている。

私は封印魔法の補強をしてくるから、カナゼにこの状況を伝えてきてくれ!!」

「はいっ!!」

師匠はこの時間帯庭のあたりをうろうろしているはずなのだが今日に限ってその姿を見せない。いつもは迷惑なぐらいエンカウント率の高い師匠だけに差し迫った状況で見つからないことにイライラする。

「師匠のバツキャロー!!」

「誰がバカだ!!」

悪口に反応して師匠が現れた!

たたかう↑

まほう

どうぐ

にげる

と、こんなアホなことをしている暇はないので師匠にさつさと事情を伝えると「早く言えバカ」と俺の頭を殴って槍を片手に家を飛び出していった。他の人にも伝えに行こうと急ぐと庭の隅に綱で繋が

れたガロンの姿を見つけた。俺の姿を確認するとすかさず駆け寄ってきたので、そのサイのような強力な突進を避けガロンの背に飛び乗る。

俺と熱い抱擁？が出来なかったのが不満そうな鳴き声をだすガロンだがあれを喰らったら普通の人なら死ねるだろう。俺は死ななくても回復するのに時間がかかるだろうから今のような切迫した状況の中受けるわけにはいかないのだ。

「ガロン。すまんが今は少々忙しいんだ。とりあえずマキア達にいる所まで連れて行ってくれないか？」

魔獣使いとそのパートナーの間にある絆は互いのいる位置がなんとなくわかるらしいのでそれを利用させてもらう。ガロンも分かったというように嘶くと急に加速したのであやうく落ちそうになった。しばらく景色が後ろに吸い込まれていくと、目的地である魔法訓練場に着いたようで速度も遅くなり不思議そうな顔をするマキア達の前で完全に止まる。

「イツキ、わざわざガロンに乗って戻ってこなくても歩ける距離じやろう？」

隣にいるユーリイは何も言わなかったが言いたいことはどうやらマキアと同じことのようにだった。

「リザルトさんがかけていた封印魔法が何者かの手によって破られてかけているらしいんだ。」

「まさかっ！？あの父上の封印魔法だぞ。」

「ああ。今リザルトさんが補強しに行ったが口ぶりから言ってそう樂觀できる状況じゃないみたいだ。」

俺はまたあの人狼たちがやって来たんだと思う。」

このタイミングから言って間違いないだろうと思っていたがマキアは訝しげな表情を浮かべる。

「人狼は確かに力が強いが魔法は使えず、リザルト殿の封印魔法は決して物理的な攻撃で壊せるようなものではない。

となるとリザルト殿と同程度かそれ以上の魔法使いが魔法によって攻撃して来ていると考えていいじやろう。そんな状況で我らに何ができるのじやろうか？」

不安そうな表情を浮かべるマキアにユーリイはやや強い口調で言う

「まだ敵は一人だと決まった訳ではないぞマキア。

それにたとえ敵が強大なものだとしても向き合わねばならない時もある！

それが父上よりも強い相手でもな」

マキアは少しの間逡巡した後に納得したのか大きく縦に首を振る。

そして俺達はリザルトさんが封印魔法の補強をしにいった森の入り口に向かった。

そしてユーリイの案内によってやっと見つけたリザルトさんと隣にいる師匠の正面の空間には多数のヒビが入っているかのように見えた。リザルトさんの額には汗がダラダラと流れていて手は今にも破られそうな封印魔法を持続させるためかブルブルと震えていてつら

そうだ。

「リザルト、頑張ってくれ！」

「…い、今は話しかける……な」

師匠の励ましをウザそうに拒否するリザルトさん。

気持ち痛いほど分かります。今度飲みに行きましよう。

しかしリザルトさんの努力も限界に達したのかついにヒビが一面に広がりガラスが割れたかのようなパリンツという音とともに封印魔法が崩壊した。

すると今まで封印魔法の結界で見えなかった目の前の景色が見え、銀色のローブを着てドラゴンの頭を模した杖を片手に何百もの人狼たちの戦闘に立つ若者がいた。

四十八話 良いことと悪いこと（後書き）

新しく小説を書き始めて改めて

この小説を読んでくださっている読者の皆さんに対する感謝の気持ち
が湧いてきました。

今まで見てくださっている常連さんも初見のかたもありがとうございます。
います。

これからも頑張って更新していきます!!

四十九話 華麗なる戦闘（前書き）

だいぶ更新が遅れて申し訳ありません！！

四十九話 華麗なる戦闘

キリリと引き締まった顔立ちと特徴的な尖った耳から青年はリザルトさんと同じエルフ族ということがわかる。そのリアルイケメンに街中で会ったら思わずぶん殴りたくなるほど造作は完璧だ。だがこういう奴は大抵何かしらの致命的な欠点を持っていることが多い（ただの僻み）。

それを見つけ出せば……

「何故こちらをジロジロ見ているのだ。たかが人間の分際で!!」

こいつの欠点は性格だねっ!!

さすがにイラツときたので何か言い返そうとしたら、リザルトさんが俺以上の怒声で青年に返した。

「お前こそ何故ここにいるんだグルーナ!!」

もはやお前はエルフ族から追放された身、この地域に立ち寄ることは禁じたはずだ!!」

「何故ここにいて!?」

夫が妻を迎えにくるのは当然じゃないですか、なあユレイア?」

その言葉に驚愕してユーリイを見るが、ユーリイは親の敵を見るかのような眼でただグルーナという男を睨んでいる。何が真実かよく

分らないがユーリイがこいつを嫌いでいるということは確かだ。

「世迷言を！！」

貴様に娘をやるぐらいなら最近ここにやってきた馬の骨にやったほうがマシだ！！

馬の骨がすごく気になったがそれはともかく、リザルトさんは剣を手にしてグルーナ相手に斬りかかった。しかし先ほどの結界が破られたときの疲労が溜まっているのか、動きは幾分遅くなっている。案の定その攻撃は竜の頭を模した杖によって阻まれ、返す一撃でリザルトさんを貫こうとするがそれはいつの間に関に自分の横から消えていたユーリイが止めた。

「夫の出迎えご苦労、ユレイア」

「誰がつ、貴様などに！！」

死ねっ、死ねっ、死ねー！！！！

ユーリイの剣技は怒りでぶれにぶれていたが、その殺気は今までに感じたどんなものより強い。それを平然とした表情で受け止めるグルーナにユーリイの殺気は更に膨れ上がっていく。

しかしユーリイの手は魔法による火傷で覆われていて今は気力だけで剣を振るっているようなものだ。

そんな状態で無茶したら手の傷は悪化して二度と直らなくなるかもしれない。

最悪二度と剣をもてなくなってしまうたらユーリイは絶対後悔するだろう。

まっ、そんなことはさせないが

「何っ！？」

普段ならユーリイに気づかれず後ろを取るなどできないが、ユーリイはグルーナへの怒りで平静を欠いている状況なので後ろへ移動し、石突による打撃でユーリイの意識を刈り取ること簡単だった。気絶したユーリイを抱えて一度グルーナと距離をとろうとしたが、グルーナは

「人間の分際で妻に触れるな！！」

つと言いかたで俺の体を貫こうとした。

相手も怒りで攻撃が単調だったので避けることも簡単だったが、何分しつこい。

そんな俺を見てマキアが弓で正確な援護射撃をして出来た隙に、力ナゼ師匠が俺とグルーナの間に入りなんとか脱出成功。

急いでユーリイを抱えガロンのもとへ運ぶがユーリイの顔色は青ざめ、眉間に皺が集まっている。きつと夢の中でもあの男を憎み、殺そうと追いかけているのだろう。そこまで憎む理由は分からないがユーリイの憎みは俺の憎み、人間をバカにした態度も許せんがユーリイは俺の嫁！！発言をしたことはもつと許せん！！

ユーリイの眉間を優しくなぞって皺を消すとガロンに預けて安全な場所に逃げると命令する。ガロンは一度可愛く頷くと去っていった。

「クソッ、あの騎竜を追え！」

「それは俺達の役目に入っていないんだけどなグルーナさん。」

並んだ人狼たちの奥からあの時の奴（元ケンさん）が現れてそう言った。

どうやら利害関係はしっかりしているらしい。

「ならば自ら行く！！」

「おっと、そうはせんよ。

バカ弟子に師匠のすごさと自分とどれぐらい実力が離れているかを思い知らせるためにな」

全然かつこよくないことを口走りながら黄金の愛槍をグルーナの喉元に突きつける師匠。

しかしグルーナは躊躇わず杖をガロンに向ける。

「死ねっ、“毒の矢”」

するとグルーナの杖先から毒々しい緑色をした矢がガロン目がけて飛んでいく。俺は風の塊でそれを迎撃しようとするが、未だ魔力の合成が遅くて全ての矢を迎撃しきることはできなかった。そしてその矢がガロンに当たるその瞬間

「まだまだ甘いのうイツキ」

俺なんかとは比べ物にならないほどの豪風が矢を全て弾き飛ばしてしまった。

そのあきれ返るような威力の魔法を使ったことによってもとの魔人の姿に戻ったマキアが偉そうにふんぞり返る様子はとても可愛らしい姿だったことをここに述べておこう。

「我らはこいつの相手をするからイツキはその人狼たちを頼んだぞ」

マキアの信頼がこそばゆいと共に嬉しい。俺は立ちはだかる二メートル越えの人狼たちを見上げながら凜々しく言った。

「マカセナサーイ！」

『ちよつと、真面目にやってよね』

手に握られたフィラン（愛い奴）から突っ込みが入る。

「はいはい、わかってますよ」

冗談もそろそろ止めにして現状確認。

一番体の大きい先頭の元ケンさんの後ろには人狼が約百匹、そして木の上にも同様に百匹、

これではまるで軍隊のようだ。

多勢に無勢ここに極まるだな。

『忘れたの、僕の正式な名前を？』

そういえばなんだったつけ？確か<五つの変態>だったつけ？

『今わざと間違えたでしょ！僕もう二度とイツキと話さないから！』

ジョーク、ジョーク！

フィランの反応が可愛いからつい……

『……これつきりだよ。僕の名前は^{ファイフス・ランス}く五つの軍隊ぐ。

つまり五本の槍が使えるってこと。』

え……それだけ！？

『それだけとは何なのさ！？』

言っておくけど僕は魔槍の中でもかなりレアなんだからね！！

それに使える槍は通常形体とは別に五つあって、その全てが伝説級の代物ばかり！

対軍、対魔、対空、対国、対神なんでもござれだよつ！！』

それなんてチート？

『まっ、君はまだまだ修行不足だからせいぜい一本の槍しか使えないだろうけどね』

一本でもあれば誰にでも勝てるだろ。

『そんなことはないよ、僕は五つ揃ってこそ本来の力が出せるんだ。

一気に五本召喚するにはまだ大分先のことになるかもね。
なんせ今まで僕を使いこなした人なんていないもん。』

そう言われると使いこなしたくなるな。

『ハハハ、じゃあ頑張つて』

眼を開けるとやはり変わらず人狼たちがいる。
槍を見てみると形が変わっていて、何故か十文字槍になっていた。
攻撃範囲は確かに増えたが実践ではどう影響するかな？

「よしっ、やろうや」

俺の挑発に人狼たちは簡単に乗り、グルルルと合唱にも似た声が響く。少し挑発したことを後悔しながら槍を構える俺。へっぴり腰になつてなければいいのだが……

「お前たち……やれ」

ケン（もうケンでいいや）の号令と同時に人狼たちは飛び掛つてきた。さすがに一齐に飛び掛ると混戦状態になつて仲間討ちをしだすせいか、集団としての利を生かせる数（それでもかなり多い）が上と正面から襲い掛かつてくる。

一撃で殺らなければこの数相手では大変しんどい。長期戦の構えで波状攻撃されればさすがに死ぬだろう。

爪や牙の群れを掻い潜るのはシクエちゃん在地獄の組み手の成果が少しは出たのか、楽だった。後はこの槍の威力だが……

ギャオウーン、ギャン、ギヤーーーン！！

断末魔の叫びが絶えないほどだ。具体的に言えば人狼一匹を突き刺す↓その後ろにいた三匹もついでに突き刺さる。石突で顎をかち上げる↓その人狼が頭上へと飛んでいき周りの人狼も巻き込むといった風に威力は倍増している。

しかしやはり数の暴力はすごい。息絶え絶えの人狼が足を掴み生きている人狼に攻撃させたり、仲間の死体を盾にして突っ込んでくる奴もいる。

どうにかこうにか二百匹の人狼を倒したところには、治癒能力が間に合わなくなるくらい体中は裂傷でいっぱいだった。それでもなんとかこいつだけは倒すけど

「いやゝやつぱお前は成長したな。
でも俺が見たいのは槍術じゃなくてあの植物を操る力なんだ。さっさと見せろや!!」

そう言いながら襲い掛かってくるケン。なんだかそんな風に言われると見せたくなくなってくるんだが……。でもそういうえば最近あまり使わなかったな。唯一治癒のために使ったぐらいで植物を使役するのは前回人狼と闘ったぶりだな。こいつに言われて使うのは癪だけどいっちょ使ってみますか!!

指先から種^{ハウセンカの}を打ち出すイメージ
すると案の定指先からハウセンカの種が飛び出た。予想より遥かに速いスピードで
機関銃のようなその威力にケンもびっくりしている様子だが一番驚いているのは俺だ。

以前もたしか種を飛ばしたことがあるがここまでの威力はなかったはず。体力をつけたことと何か関係があるのだろうか？

「ヒューーウ、やるな。」

それじゃあ俺も本気を出すぜ！！」

奴の肉体がボコボコいい始めると体中に筋肉の鎧がつくられていく。勿論素直にそれを見つめる俺ではないのでホウセンカの種を飛ばして攻撃する。

が、カキンカキンと小気味よい音をたてて種は地面へと落ちた。

機関銃もきかないとなると最後の望みは槍だけだな。

と考えている間に奴の肉体は完成したらしくどこからでもかかってこいと言うように腹を一度叩く。ムカツクのでかなり助走をとって直前で一気に加速して突いたが、さすがに今の一撃を喰らったならばいいのか避けやがった。

「ちゃんと、わたしの気持ち受けとめてよ！！」

「さすがにお前の気持ちは重すぎだ。モテねえぞ」

「貴様っ、言っではならんことを言っただな！！」

俺の思い（重い）をこめて魔力の合成を行う。けっこう多目にマナを取り入れての風の魔法、マキアにあの時守ってもらったやつだ。さすがにあの時のように魔力の制御は甘くない。

手に渦巻く風に気づいたのかケンも必死に魔法の行使を止めようと駆け寄るがもう遅い。

極限まで圧縮された空気がケンの目の前で弾ける。

その瞬間木々は吹き飛び辺りは風に吞まれた。一応風の魔法障壁らしきものは使えるようになったものではあったが、自分の魔法の威力に若干持つかどうか不安だった。障壁は無事だった。マキアの言うこ

とは信じようと思う。

魔法の中心地は地面まで抉れているのでさすがにケンも死んだだろう。槍を片手にグルーナと交戦しているであろうマキアとクズ（師匠）の応援をしに向かおうとしたが、急に体の自由が奪われた。体を見ると妙に黒っぽい鎖に囚われたようだ。

「へっへ、さすがに今のは効いたぜ

人狼に魔法耐性がなけりや死んでいただろうな」

首をゆっくり後ろへと回すと肩耳が千切れ所々出血しているケンがいた。

あの攻撃でこれだけとはハンパないな。

とは言えこんな鎖俺にとつては……あれ？破れねえこれはちよっとピンチなのでは？

『どっからどう見てもね』

何気に酷いフィランの言葉を無視して再度破ろうとするが力がでない。

「あきらめろ。これは精霊さえも一度捕まったら逃げ出せない『ケレビュオンの檻』だ。

このままお前を帝都まで連行する。

たっぷりマッドサイエンティストたちに可愛がって貰えや。クックック」

俺は可愛がるならユーリイ、マキア、フィランがいいなと思いまし

た。

四十九話 華麗なる戦闘（後書き）

まだまだ頑張ります!!!!!!

五十話 楽しい監獄ライフ

あれから目隠しと猿轡をされ何かに乗せられた。時折馬の嘶きが聞こえることから馬車か何かだろう。勿論フィランとも離れ離れになつてしまい、話し相手もないまま馬車の振動で体が痛いわ、馬車酔いで吐き気がするわで気分は最悪だ。

ユーリイやマキア、リザルトさんやシクエちゃんは今頃無事にいるのだろうか？

ユーリイ達のことを考えるとあつさり捕まつてしまった自分が情けない。あの時油断をしなければ……と思うが今更過去は変えられない。今はこの状況からどう抜け出すべきかを考える時だろう。とは言つても常にケンと二、三人の見張りがついているし、それに何よりこの鎖が厄介だ。

ベアンテによつて与えられた植物を使役する力はおるか馬鹿力や植物と話すことも出来なくなつてしまった。この状態で例え運よく逃げ出せたとしても、外は危険な魔物や盗賊たちがいつ襲ってくるかもわからない世界だ。今は機会を待とう。

それから何日たったか分からないがこの最悪な環境には相変わらず慣れない。

飯は一日一回、塩味が僅かについたスープとカチカチになったパン

が一つ

取るに足らない量だが無いよりはマシだと思って口に入れる。口の中でゆっくり咀嚼するがあっという間になくなってしまっそれにシクエちゃんの料理が恋しくなる今日この頃。

しばらくたつと馬車の先頭のほうから話声が聞こえてきた。

「止まれ、通行証を見せろ」

馬車が止まった勢いで頭をぶつける。思わず痛みで呻いてしまっが首元に冷たい物があたる感触がしたので口を閉ざす。

「通行証はこれだ」

「……ふむ、間違いないようだな。馬車の中身は何だ？」

「交易品の木材だ。」

「近頃密入国者が多いから一応チェックさせてもらっぞ」

「待て!!」

「さては貴様も……!？」

外にいる兵が武器を抜く音がする。すぐ側で俺を見張っている奴も息が荒くなっている様子から緊張しているようだ。

「これを見る」

「……こ、これは!？失礼しました!!」

おい、このかたを案内してさしあげろ!!」

「いや、案内はいい。

それとお前は何も見なかった、いいな？」

「ハッ！！」

そうして馬車はまた進みだす。どうやら俺は何か大きなことに巻き込まれているらしい。

いったい何処へ連れて行かれるんだろうと暢気に考えていると腕に鋭い痛みがはしった。

俺を見張っていた奴が注射か何かを打ち込んだようだ。俺は直ぐに意識を失った。

・
・
・
・
・

・
・
・

・

意識が戻ってまず眼についたのは頑丈そうな鉄格子で、どう考えてもここはお客を丁重にもてなす気が全く無い場所であることが分かる。情報はそれだけで十分だ。

石床に染み付いた赤い汚れも誰かがあやまってトマトジュースをこぼした際に出来たものだろうし、俺の両手は後ろにまわされた状態で一本の鉄柱にくくりつけられていて体全体に鎖が巻かれているのは……理由はよく分からないが、とにかくそれが必要な措置だったんだろう！！

そうやって自分自身に暗示をかけていると

「起きたか？」

と背後から声がした。しかし体が固定しているせいか誰かを確認することが出来ない俺を見過ごしてか俺の目の前にその人物は移動する。

「初めまして、だな」

年齢は俺と同じくらいかそれより上ぐらいの男が見下ろしながらそう言う。

普段なら見下ろされながら言われたことに少しむかついたかもしれないが、この男の持つ威厳がそう感じさせなかった。身に着けているモノは至って普通なのだがこの男が身に着けるとその服が、靴が、自身を飾り立てる全てのものが二、三段階上のものになる、そんな気さえした。

「あんたは？」

「私は私たる全ての要素によって作り上げられている『私』という存在だ」

「ハッ、何言ってるの？」

「いやそれさえも欺瞞か、あるいはそれこそ真理なのか？」

「え、何それ怖い」

何故こんな簡単な質問にそこまで思考を廻らす必要があるのかさっ

ぱり分らないが目の前の男は真剣そうに悩んでいる。

おそらくこの男はバカなのだろう。

すっかり最初のイメージと違って見えてきた。

俺>>>>目の前で簡単な質問すら答えられない男

「ちよつ、その君さつさと俺の問いに答えなさい」

「何故だが非常に軽視されている気がする。」

だが名乗り遅れたな、

私はブレイン・ラノーラ。ゼノハ教の教祖兼、ラノーラ帝国第10
3代目皇帝だ。」

なるほど。おバカちゃんの上に自分の事を教祖だの、皇帝だの言
っちゃう程の重病だったか。ここに連れてこさせた奴の意図は未だ
分からないがこんなバカを俺の元に遣したのは間違いだったな。ま
ずはこいつから情報を得るとするかね

「あんたは自分が教祖って言ったけどそんなにゼノハ教はそんなに
歴史が浅いのか？」

「いや。一万年以上前から存在する。」

ゼノハ教とメイハ教が仕える神こそが最も古く、力のある神だ。
それ以外の宗教なぞ所詮この二つを体系化したものに過ぎん。」

「そんなに歴史あるのにあんたが教祖って話がおかしくないか」

この男の見た目はどう高く見積もっても三十代といったところ、さ

すがに一万年も人が生きるとは考えにくい。

「正確には教祖の生まれ変わりといったところだな。前世の記憶も確かに存在する。」

「……んでその教祖様は俺なんぞにどういう用がありなんでしょうか？」

「君では無く、君の中にいる精霊に用があるんだ。

精霊とは意志あるマナの塊だ。私が求めているのはそのマナを使つての神代の再現だよ。」

あれ？こいつバカにしては話し方もしつかりしているし話しの筋もあっている。

もしこいつの言っていることが本当だったとしたらやばいな。

男は話は済んだとばかりに指をパチンと鳴らして白い研究服を着た連中を呼ぶと長い通路を抜けて去っていった。

研究員たちは皆狂気の笑みを浮かべ俺の体を眺め、ひとしきり満足すると救急用の担架のようなモノで俺をどこかへ運んで行く。もちろん鎖がついたままなので抵抗らしい抵抗もろくにできず運ばれる。

何枚もドアを超えて辿り着いたのは研究室だった。ピーカーやフラスコがあることに驚いたが研究室の奥まで並べられ、緑色の液体で満たされた巨大な円柱のガラスの中に呼吸器らしきものをつけた人が浮かんでいるのを見ると地球の科学力をも超えているのではないかと思うほどだ。

俺が運ばれていく先にも似たようなガラスが設置されている。違う

のはその大きさと、隣にサッカーボールほどの大きさのものがより
嚴重な鎖によつて封印されているという点ぐらいなもので、どちら
にしてもあまりいい予感はない。

研究員たちは予想通り俺を緑色の液体で満たされたガラスの中に突
つ込んだ。息が出来ずに死ぬかと思つたが途中で呼吸するためのマ
スクが降りてきたので何とか助かった。

とはいつても体を縛られて喜ぶようなマゾでも無い限り今の状況は
悪い。はつきし言つて最悪だ。

研究員たちが何を言っているのかは水中の中にいるせいでよく聞こ
えないがもう少しで何かの実験が始まるらしく、その実験対象が俺
なのは確かだ。最後の抵抗で必死に体を芋虫のように左右に振ると
鎖が解けていくのが分かった。研究員達はそれを見て焦りだすが無
視して作業を続ける。全部解け終わり急いでガラスの中から抜け出
そうとした所で全身に痺れが襲つた。

胸に酷い痛みが走つた。

五十一話 懐かしき顔（前書き）

今回は少々短いですがいよいよ佳境に入ってきました！！

二章の構想も現在練っています。まだだいぶ先でしょうが

ブルーナ機関をメサイヤ機関に訂正 入力ミスです

五十一話 懐かしき顔

目が覚めてまず感じたのは猛烈な寂しさだ。両親にある日突然捨てられた子どもだってここまで心細さを感じないだろう。自分の血が、肉が急によそよしくなったかのようにも感じる。

俺はその時点で気づいてしまった。俺の中にいるはずのベアンテがいないことを

自覚すればそれは更に強烈な衝撃を伴い精神をゆさぶった。自分の半身ともいえるベアンテの不在は多大な喪失感を与え自らの存在が急に希薄になったようにも思える。

俺の体はここに連れてこられた時と同じように鉄の柱に両手をくくり付けられている状態だったが、ケルビュオンの鎖は体に巻かれてなかったので感情に赴くまま石床に突っ伏すことができた。

鎖が体を縛ってないのは今の俺がそうせずとも抑えられるということだろうからベアンテはまず確実に俺の中にいない。

「ダメだ。ベアンテのいないこの世に未練は無い、死のう！！皆先逝く俺を許してくれ」

「待て、早まるな！」

目の前にはナーガの幻影が見える。神もどうやら死にいく俺を祝福してくれているらしい

「最後にナーガの幻影を見るとは……どうせならユーリィとマキアが良かったよ神様」

「……お前はこんな時でも普段と全く変わらん」

「幻影にしてはやたらにリアルだな。この顔とか髪とか」

「痛てて、引つ張るな!!」

幻影のはずなのに何故か手には生きている人の感触が伝わってくる。

「はっ、まさか!？」

「ようやく気づいたようだ……」

「お前は中学校の時の同級生のタクヤじゃないか!!」

「誰だよ!!」

相変わらずいい突っ込みをするな。どうやら腕は落ちてないようである。安心した。

「俺だ、ナーガだ!」

「……で、何のようだ？」

ナーガはそれまでの空気とは一転して暗い表情を俺に向ける。

「……明後日、お前の処刑が決まった。」

城の広場で斬首刑にした後、見せしめに城外に吊るされるらしい」

まあなんとなく予想は出来ていたので驚かないが、そうか俺は死ぬのか。

「怖くないのか？」

「怖くないと言えば嘘になる。しかし怖いと言えばそれもまた嘘。」

ナーガは複雑そうにこちらを見ながらポツリと語りだした。

「これはある少年の物語だ。」

その少年は言わば捨て子だった。自我さえも芽生える前に捨てられたその少年に当然両親の記憶は無い。少年にとって家族とは道で乞食をする仲間達だった。

エルン、カーゴ、トロイ。皆馬鹿がつくぐらい純粹で優しかった。だが少年にとってそれはとても心地よいものだった。

ある日、仲間のエルンがいなくなる。皆総出で探したが行方は知れず搜索は翌日にまわされた。その次の日、搜索をしていた一番年の多いバスも同様に姿をくらましてしまう。

周りの連中をまとめるバスがいなくなったことで更に動揺した皆は、夜がくれても必死に探し続けた。翌朝泥まみれになって帰ってきた少年達は再び愕然とする。

また一人、今度はカーゴがいなくなっていたのだ。さすがに自分達の力じゃどうしようもないと感じたメンバーは騎士に助けを求めたがあっさり断られた。騎士たちは市民権もない連中を人としても扱わない。それでも助けを求めたが騎士が剣を抜いたので皆命からがら逃げ帰った。

もう子ども達に出来ることはなくなった。そして毎日一人ずつ消えていった。

ついにその少年の番になった時真相はあきらかになった。覆面姿の男達が身寄りのない子供たちを連れてある機関の研究材料にしていたのだ。その機関の名前はメサイヤ機関。

機関は子供たちを使って生物兵器の開発に取り組んだ。ある者は薬漬けにされ、ある者は強力な電気を帯び、ある者はモンスターとの融合の末、知恵無きイキモノになった。

何十人、何百人、何千人もの人間が苦しみ、叫び、恐怖し、憎悪した。

そうした犠牲の上につくりあげられた生物兵器、最もなりたくの無いモノに少年はなってしまう。少年にとってそれは目の前で犠牲となった人たちによって出来た憎悪の塊だったからだ。

少年は成長し大人になった。だが男の存在は変わらず生物兵器のまま。

それからは唯上からの命令のままに男は行動した。盗みはもちろん、女子供関係なく殺しもした。

ある日潜入捜査のために魔導具によって記憶を封印された。その方がより自然な振る舞いのまま情報を手にすることができからだ。上が手にいれたい情報を、本人は無自覚のまま、まるでそれが元々の自分の意思だったかのように情報収集行動をとらせる魔導具が体内に埋め込まれていた男はある日記憶の封印を解かれた。

皮肉なことにその封印を解いたのは男の友人だった。

そしてその男はこの先も生物兵器としてその一生を送るのですでした。」

そう言つてナーガは口を閉ざした。

「その話の続きは？」

「ない、それで終わりだ」

断固とした口調で言い放つナーガに俺は苦笑をこぼす。

「貴様つ、何故笑う！？」

勿論俺はそこまで鈍い男じゃないのでさっきの話しにでてる男がナーガだというのにはとくに気づいている。だからそれを逆に利用してやるのさ！！

「その話はあくまでその男の話だろう？」

だからまるでその男と自分を重ねているようなお前がちゃんちゃらおかしくてさ」

「……………」

「お前はそのお話にでてくるような奴じゃない。だからその男と自分を重ねるな」

「それに最後の『一生』が気に食わないな。お前はまだ生きている。『一生』と言いたいんなら死んだ後にその話をつくるんだな！！」

「……しかし未来は定まっている」

この期に及んでまだムスツとした顔で反論するナーガ

「ああそうだな。未来は定まっている。

しかしどのように定まっているかは神様だって決めちゃいないと思うぞ」

「それは屁理屈だ！」

「俺は理屈なんて説いてない！　これはただの俺の意見だ。」

俺とナーガは互いに荒い息を吐きながらにらみ合う。どちらも譲る気はないのでこれ以上の争いは無駄だと考えたのだろう、ナーガは

「ふん！！」

俺とお前との間にはもう何の関係性もない！　明後日を楽しみにしているっ！」

と言いつつ通路を去っていった。

もう知らんっ！！　あんな分からず屋は……

五十二話 処刑開始

十 十 十

ユーリイは今横で何か考え事をしているようじゃ。まあ無理もない

イツキが攫われて一ヶ月

カナゼ殿がメイハ教のコネを使って得た情報によるとどうやらイツキはラノーラ帝国の帝都ブロンディアに運ばれたらしい。我らはメイハ教の騎竜を借りて（我はガロンに乗って）一路ブロンディアを目指した。三日間にわたる強行軍じゃったがなんとかたどり着いた時、周りの騎竜たちがへとへとの中ガロンだけがピンピンしておったのはさすがといったところじゃ。

我の姿を見ても嫌悪しないイツキ、かつこよく敵を倒すイツキ、そして我の耳元で愛を囁くイツキ（脳内で大分美化された後、有りもしないことまで生成された）、その素晴らしい思い出が頭の中に蘇る。

じゃがそんなことを考えている我を驚かせたのはイツキの処刑が明日に迫っているという事じゃ。皆と相談してこれからどうするかを考えたが中々良い意見は出てこん。

結局イツキがいるであろう城は警備が嚴重なため、明日の処刑の際

にイツキを助けるしかないという旨をカナゼ殿が重々しい声でおっしゃった。普段あれほど酷いことを言い合う師弟じゃがカナゼ殿は本気で心配しているようだ。男同士の関係はオナゴの我にはよくわからん……

何とか処刑の阻止をせねば！

＋　＋　＋　＋

あれから二日、いよいよ今日が処刑の朝だ。日々ベアンテの不在から夜も安心して眠れず目に隈もでき、体重も落ちたように思う。元々俺はただの高校生だということを改めて実感する。今思えばモンスターを殺した時も何も思わなかったのはベアンテのおかげかもしれない。それでも無いと普通の高校生ではいつでも死が身近にあるこの世界では生きていけなかっただろう。ベアンテ無くして魔法もつかえない俺はただの無能だ。

「さっさと出る！」

牢の外から衛兵が入り俺の片腕を掴んで引っ張り出す。そんなに引っ張らなくても今行くよ

処刑台はいわゆるギロチンという奴でこの世界にもあるんだと思う。

木で出来た足場の上にギロチンが設置されていて、広場いっぱい集まっている観客が楽しめる趣向だ。さすがに間近には民衆はいないようで騎士団が万が一の為に周りを囲んでいる。その中には以前湖で見たクロトや名前は忘れたがその部下の姿もあったが、一番目

立つ玉座の上には帝王ヴレイン・ラノーラの姿があった。

奴は笑うでも悲しむでもなくただそこにいた。全てが自分の思うがままに動いているとでもいうように……

「この罪人、イツキ・チバは恐れ多くも帝王ヴレイン・ラノーラ様の居城に入り込みそのお命を奪おうという愚行をしでかした。よつてその穢れた命をここで浄化するものとする」

仰々しいくだりを延々と話しですが、そのほとんどが意味のないものだ。

それがすむと終にギロチンにセットされる。

やはり怖い、怖くないはずが無い。震えそうな顎をがちり押さえ込んで必死で冷静さを装う。やはり男なら最後はかっこつけたいのだ。

例の海賊王のように処刑台で笑うことはできないけどりりしい顔で最後を迎えてやる！

「では処刑をはじめ、グハッ！！」

ギロチンを落とす役目だった男の喉に矢が突き刺さる。何だ！？と思いい処刑台から見下ろすと鎧姿の騎士が赤い弓を引いていた。あの赤い弓は……マキアか！？

気づけばマキアの周りには修道士がよく持つ杖を持った人がマキアを守るように動いていて、そしてもう一人処刑台に剣を振り回しながら近づく人影がいた。

「待ってろ、イツキ！！ 今行くっ！！」

俺が女だったら惚れそうなセリフだな。まあ男の今でも充分惚れる

セリフだけど……

俺が囚われの姫だとすると、ユーリイはそれを救いだすナイトということだろう。

『プリンセス・イツキ』

そんな電波が飛び込んできたが、必死でその電波を頭から振り払って正気に戻る。

気づけばユーリイが直ぐ足下まで迫っていたが、クロトがそうはさせじとユーリイの剣を己の大剣で受け止め進路を塞ぐ。

俺は何も出来ない自分にイライラしたが手錠はジャラジャラと空しく音を鳴らすだけで到底抜け出せそうもない。そんな俺の様子を見て、

「おい、罪人が抜け出そうとしてるぞ！！ さっさと刑を執行しろ！！」

と民衆の一人が叫んだ。

執行者はそれに気づくと俺の思いも空しく、ギロチンを支えていた網を分厚い刃で切った。

血で黒く塗られたギロチンの刃が俺の首目がけて落とされた。

思わず目を瞑ったがいつまでたってもその瞬間は訪れない。

「ぶ、無事か？ クソ野郎」

目をゆっくり開けると太陽の光と共に金色の髪が頬に落ちてきた。

「普通、そういう時ってお前という人物を犠牲にして、俺が怒りで強くなるタイプじゃないか？」

ナーガは落ちてきたギロチンの刃を真剣白歯どりの要領で受け止めているが、予想以上にギロチンに勢いが有ったようであと数ミリ掴むのが遅かったら髪の毛だけじゃすまなく、頭がパツクリ割れていたことだろう。

「バカかお前は？」

俺が身を投げ出して守る存在はユレイア様だけだ――！」

当然のように言うナーガ。

「それよりさつさとここから出る――！」

「そんなの無理ですよ、僕ここから動けませんもん――！」

「なんだかお前急に余裕になったな――！」

そんなことをやっているとナーガの後ろから処刑執行人が大きな斧を持って振り下ろそうとする。

「危ないっ――！」

グハッという声を出して倒れたのは処刑執行人だ。そして倒れ行く執行人の後ろには血塗れた剣を持つユーリイの姿が……

ナーガはそれに気づくと慌てて土下座をしようとしたが途中で俺のギロチンを放したことに気づきギリギリなところで、間に合った。
「嬉しいぞナーガ、よく帰ってくれたな――！」

「その言葉だけでご飯二俵は行けます!!」

二俵って単位おかしいだろっ！

それにしても気に食わない。何故俺が空気になっているんだ!?

「イツキ、無事でよかったぞ」

ユーリイは甲冑のフェイス部分を外し腰まで届く長い金髪を見せながらそう言って微笑む。

そんな顔したら俺も何も言えなくなるだろう！ ご飯五俵はいけるぞ!!

ユーリイは魔剣で無理やり手錠を斬り、首を固定する道具も外す。久しぶりに自由の身となった俺は首をゴキゴキいしながらストレツチする。

「ほら受け取れ」

ナーガがそう言って投げ渡したのは俺の愛槍。

「貴様っ！俺のフィランを手荒く扱うな!!」

こいつの可愛さ舐めたら痛い目に会っぞ!!」

ナーガは呆れたような表情をした後、黒い金属製の手甲ガントレットを両手に嵌めて戦闘準備を始める。あれも魔武器の一種なんだろうか？

『ちよっと！ 僕の事をほっつておいて考えるのは違う魔武器のこと?』

「おいおい、俺はお前以上の魔武器は知ら無いぜ」

『ったく、心配したんだからね！ 見るからに体調もよく無さそうだし……』

そう言うフィランの声は最後のほうが泣きそうな声色だった。
どうやら心配かけちゃったみたいだな

「おう、体調はあんま良くないけどお前なら俺をちゃんと守ってくれると信じてるぞ」

『もう、心配かけないでね？』

「おうっ！！ でもその為にはここをどうにかして逃げ出さないと
な……」

騎士の中には師匠やリザルトさんが混じって無双をしていたが、騎士の数は多いしここは敵の本拠地だ。

まっ、やるしかないけど

五十二話 処刑開始（後書き）

これからも応援よろしくお願いします。

どうか迷える子羊に感想を……

五十三話 流れ出した時（前書き）

五十三話 流れ出した時

広場いっぱい集まった人、人、人。

有象無象の注目の的になっていたので少し恥ずかしい。元々目立つのはそんなに好きじゃないので尚更だ。

「おゝい、現実を見るのじゃイツキ！」

気がつけばマキアが処刑台の上に来て襟を掴みグラグラと俺の首がとれるんじゃないかというぐらいに振り回していた。ウゲツ、気持ち悪い

「そしてあわよくば、自分を助けに来た目の前の美女に祝福のキスを授けるのじゃ！」

マキアはどうやら魔法を使ったようで元の魔人の姿に戻っていて、突き出した胸と薄紫色の肌が妖艶な雰囲気をかもし出している。というかこの状況でキスをねだるマキアこそ現実を見るべきだろう！

「貴様っ！ 気でも狂ったのかナーガ!?」

いつの間に処刑台の上に登ったのか、目下に千名近い騎士姿の連中のトップにたつ聖地守護団長のクロトがナーガに指を突きつけて言う。クロトは見た目も厳つい鎧姿だが、健康骨にまで届くようなオレンジの髪に整った容姿でその厳つさは相殺されている。

正直、処刑台はたくさんの人が乗るように出来てないので俺、ユーリイ、マキア、クロトが乗っている今の状況はかなり狭苦しい。

「お前が任務で抜けた以来会ってないが、もしかして記憶が戻ってないのか？」

いや湖で会いましたよ。完全にクロトはナーガの女装姿に気づいてなかったみたいだが

「いや記憶はあるが、ちょっと悪魔にそそのかされてね。

一番の理由はユレイア様の笑顔の為だが、そいつの言うことも信じてみたくなつてな」

「貴様だけは裏切らないと思っていたが……ならば皇帝陛下！ 私にこの者を抹殺する許可を！」

玉座に座るヴレイン・ラノーラは薄ら笑いを浮かべて右手で首をかき切る仕草をする。おそらくクロトに対するリストラを表しているのではなく、抹殺許可だろう。

クロトは俺達に向き直ると殺気を飛ばす。ユーリイと同レベルかそれ以上の実力者であろうクロトから空気が軋むほどの殺気が向けられ我ながら情けないが、体がすくんでしまつてヘタリと膝をついてしまふ。今俺の体の中にベアンテがないからということもあるが、それを抜きにしても凄まじい殺気だ。

ナーガも黒い手甲をつけた腕を構えて殺気を放つ。

「死ねっ！」「ハッ！」

クロトが常人では振り上げることさえ出来無さそうなほどの大剣をほぼノーモーションでナーガに振り下ろす。ナーガは手甲が着けられた両腕をクロスさせなんとかガードするが、その攻撃の重さで木

で作られた処刑台が軋み、細かい木片が宙に浮く。

「とりあえずこの場所は巻き沿いくらいそうだから、避難しない？」

「イツキの意見に賛成したいところだが下を見る」

ユーリイに言われるまま見下ろすと、下にはギラギラした目でこちらを見据える聖地守護団の皆さん。不幸中の幸いはクロトが狭い処刑台の上にいるので弓や魔法を使うのを躊躇していることだ。しかし、俺達をここから逃げ出させないように軍列を固めて逃げ場を抑えている。遠くの方ではおそらくリザルトさんと師匠が戦っているのか、人が空に舞っているが広場を埋め尽くす人の波に比べると舞っている数が少なすぎる。

とりあえず現状はあまりよくない。

「我に良い手があるぞ」

「おっ！？ 何だマキア、得意の魔法か？」

「そうじゃのう。このままイツキとここで幸せに過ごすことを恋の魔法というならそれは正解じゃの」

「マキア、非常におもしろいジョークだが時と場所を選ぼうない！」

ユーリイの髪がゆらゆらとまるで炎のように逆立ち、後ろにスタンドが見える。

マキアは勿論、俺とはまるで関係ないはずなのに震えが止まんねえ。

「か、軽いジョークじゃユーリイ！ そう、イツキの言う通り魔法を使うのじゃ！」

ガロンを召喚魔法で呼び出そうというアイデアじゃ！」

マキアがそういう中、クロトとナーガはまだ戦闘を続けていた。クロトは狭い中器用に大剣を振り回してナーガの接近を許さないが、自身も満足な攻撃が出来ないようで拮抗した戦いが続いている。

「でもガロンってそんなに人を乗せられないだろ？」

俺、ユーリイ、マキア、ナーガ、リザルトさんに師匠はどう考えても重量オーバーだ。

「うゝむ、良い案だと思ったのじゃが」

俺の中にベアンテさえいれば、いくら精鋭だらけの聖地守護団と言えど植物を生やして隙をつくることができるのに残念だ。……やばい、ベアンテの禁断症状が！

『もうイツキ、いい加減にしっかりしてよ！ 君がそんなんじゃ僕だって満足に動けないんだから。確かにえゝつとベアンテだったっけ？ あの女の力は凄まじかったけど僕が君を認めたのはあの女には関係ないんだからね』

「そう言ってもらうと助かります、はい」

「うん！？ いきなり何を言っているんだイツキ？」

「いや、可愛い槍から慰めの言葉を貰ってた」

ユーリイは少し考え、槍をみると納得して頷いた。

そういえばユーリイの魔剣やマキアの魔弓はいったいどんな奴なんだろうと少し気にかかったがそれはまた後で聞くことにしよう。

何故かって？

それは足下の処刑台がナーガとクロトの激しい戦いによってギシギシという音からメキメキという破壊音に変わっていつているからだよ！！

「二人があまりにも熱く、粘っこい攻防を繰り広げるから、処刑台がギシアン言っているぞ！！」

「止めるっ！ そんな言い方ではユレイア様に誤解を与えるだろうがイツキ！！」

「不服だがナーガの言うとおりだ罪人よ！」

そんなふうにして、二人で仲良く抗議の声を上げるから本当にそっちの気があるのかと俺は距離を出来るだけとる。それを見て更にシンクロを増すナーガとクロト

正直きめえwwwwww

「ナーガ、別にお前がそっちの気があるうが私は否定しないぞ。ただちょっと態度が冷たくなるかもしれないがな」

ユーリイが止めの一撃を刺すとナーガは急にフニャツと体の力が抜けたように処刑台に倒れるが、その行動が幸運にもクロトの大剣をよける結果になった。

だが大剣は急に止まらず、二人の戦いによって傷んでいた処刑台に向かって振り下ろされ処刑台を支える柱をぶった斬ってしまった。

ギィーと齒軋りのような音をたてながら俺達が乗っている処刑台

が傾いていく。みんな慌てふためいて処刑台のどこかにしがみ付くがナーガは依然として放心状態のままその瞬間を待っている。いよいよ重力に従い落ち始める予想地点にいた騎士が悲鳴を上げながら逃げていくが、悲鳴を上げたいのはこっちのほうだ！

ユーリイとマキアにしがみ付かれた状態ではそのようなことは出来なかったが…

ドーンという轟音と共に地面に振り落とされる俺達。

一応シクエちゃんにしがかれていた経験が役に立ち、何とか受身をとることができたがそれでも背中を打ち肺の空気が全て押し出され苦しくなった。なんとか息が出来るようになり、横を見ると平気な顔の女性二人がいてホッとすする。

辺りは土が乾いていたせいで土埃が舞っており正にこの混乱の中逃げるにはピッタリだったが、早く逃げないと風の魔法で直ぐに見つかってしまうだろう。

ユーリイとマキアに脱出路を確保してくれるようお願いし、俺はナーガの搜索に入る。しばらくして、どうやって入れたのか？といいたくなるような処刑台の太い木材の間によりやく目覚め不思議そうな様子をしているナーガを見つけ、手を差し伸べようとする。ナーガの背後でクロトが大剣を振り下ろそうとしているのが目に入った。

ナーガも気づき行動をとろうとしたが周りが狭くて動きもとれそうにない。

慌ててフィランを十文字槍バージョンに変え大剣の腹を突くと、少し軌道が変わりナーガの足下を陥没させるまでにとどまった。その隙にナーガが木材の間から飛び出ると俺達は一目散に駆け出した。あんな馬鹿力野朗とやってられるか

「死ねえー！」

後ろから追いかけてくるクロトに恐怖を感じるが、それ以上に横で並走するナーガの存在がありがたかった。幼い頃から共に仕事をしてきた仲間を裏切^{クロト}つてまで戻ってくるのには決意がいっただろう。

「ナーガさん、どうですか今の心境は？」

「ユレイア様に冷たくされるかもしれないという恐怖でいっぱいです」

「これから大変なことになるだろうな？」
今更ナーガを巻き込んだことに罪悪感を感じる俺は人間が出来てないのだろうな。

「ああ、全てお前の所為だからちゃんと責任とれよ」
俺の心を見透かしたようにニヤニヤ笑うナーガ。

「わかった。ちゃんとユーリイにナーガはホモだから近寄らない方がいいと伝えておくよ」

「そつち！？ 話の流れが違くないか？」

土埃で前はほとんど見えないが俺の視界は酷く透きとおっていた。

五十四話 避難×非難（前書き）

シリアスになってしまいが別に、構わんのだろう？

五十四話 避難×非難

その教会は決して大きくないがいつぞやザルナ王国で見た大教会をそのまま小さくしたようだった。さすがに帝国内はゼノア教の信者が多く、メイ八教の修道士の姿は普段見えないが、今日は様子が違った。俺が処刑されかけたのと同時にメイ八教の信者も帝国民によって非難されはじめたらしく、ここ帝国支部のメイ八教会に逃げ込んだたくさんの人が集まっている。無論その中には処刑台から逃げ出してきた俺達も含まれる。

修道女たちは包帯を煮沸消毒したり、暴動によって怪我をした人の手当にいそしみ、カナゼ司教を先頭にした修道士達は外で構えている聖地守護団や、帝国軍からここを守るために神聖術による結界を行使している。何かに耐えるような表情を浮かべた彼らは額からタラタラと汗を流し、それに気づいた修道女が一人ずつハンカチで汗を拭うなどして対処しているが彼らにも体力の限界はあるし、外にいる奴らをどうにかせねば問題の解決には繋がらないだろう。

ようは大ピンチというやつだ。

「ユレイア様に何かお考えはあるのですか？」

「うーん、何をするにしても結局あの結界が持つまで私達は後手に廻らざるをえないからな。この場で何か出来ることがあるとしたら結界が破られた後の戦略を考えることぐらいしかないだろうな」

「そうじゃのう。今の段階じゃそれが限界じゃろっ」

「ギルドからギルドチームを雇って外から助けてもらうつていうのはどうだ？」

我ながらいい案だと思って満足していたら、冷たい視線や呆れた視線、いつそ殺してくれというような気持ちを起こすような視線を感じた。

呆れたように口火をきつたのはユーリイ

「まずこの結界は外側からの干渉を防ぐが内側から外へ出ることは可能だ。

だが周りを囲まれた状態で助けを求めることは出来ないし、仮にもし出来たところでギルドの連中が帝国軍を相手に戦って利益などないばかりか、逆賊としてつぶされるのがオチだ」

ユーリイが言い切つて息を落ち着かせるとマキアがかぶせるように話します。

「それにこの状況は一種の宗教戦争のようなものじゃ。宗教同士の争いはたがいに信仰する神の違いによるものじゃから、たがいに譲れんし期間は長引く。そんなものに進んで関わりたいと思う者はおると思うか？」

「わかった、俺が悪かったんだ！　これから先は何も口出さないからもう責めないで！！」

ナーガがほくそ笑んでいるのが地味にムカついたが俺は優しいので脛蹴りという寛大なお仕置きで全てを許した。ナーガが床を転げまわっているのを見て、俺はやはりSなんだと確信する。

それから真面目に戦略を練った。やはりベアンテがいない俺では

多少、いやかなり不安があるのでナーガやユーリイの援護及び、怪我人の運搬兼作戦の指示というかなり微妙なポジションだったが納得した。事実今の俺では足手まといになるのがオチだろうから。

「そつえばリザルトさんの姿を見ないんだがどこにいるんだ？」

「何でも父上は結界が破られた時の為に、大規模魔術を組んでいるらしい。

おそらくまたグルーナがこの結界を破るために来るだろうからそこを狙うと言っていたぞ」

ユーリイは俺に心配かけないように平気な顔でグルーナと口にしたが、奥歯をかみ締めて漏らすように放った言葉からは怒りの感情がむき出しで伝わってくる。

しかし事情の知らない俺はユーリイに慰めの言葉をかけることは出来ない。

しばらく居心地の悪い空気が流れ、俺は耐え切れずに逃げるように教会の二階部分へ向かった。

何もかも上手くいかないような気がする。

俺達が今このような状況になっているのも、ここの修道士達を巻き込んだのも全て自分のせいであって、それなのに自分の出来ることの何と少ないことが…

憂鬱な思いを抱えギシギシと音を鳴らす階段をのぼると、二階の飾り窓から見張りをしている修道服姿の人が目に入る。

「見張り、代わりますよ」

「いえいえ、カナゼ司教のお弟子さんを働かせる訳には……」

「やりたいんです」

「……それではお願いします。何か異常があれば大声で叫んでください」

「はい」

飾り窓の隙間から外を覗くと、教会を覆うようにある青白い結界の外側は騎士達で、その更に外側は魔法使いのローブを纏った兵によって完全包囲されているのが分かりたくないが、分かる。この時点で既に異常なので大声で叫ぼうかと思ったが冗談じゃすみそうにないので止めておく。

「ままならないね、何もかもが」

背後からヌツと現れたリザルトさんに驚いたが、リザルトさんは気にした様子もなく俺の返答を待っているようだ。

「……リザルトさんは俺のこと怨んでいます？」

「ああ、大事な娘の関心の的になっているからね」

「そうではなく！ 皆を巻き込んだ俺についてです！！」

リザルトさんはしばらく考える素振りをした後

「それについては何とも言えないな。ただ君はこの件について少なからず怨まれているだろうし、怨まれるだろう。この先かならず怪我人も出るだろうしな。」

「どうすれば…」

「それは君の中で既に答えが出ているだろう？」

「自分で、自分が動いて周りの皆に迷惑をかけないようにするしか無いと思うんですけど…」

「そうだな。そういう考えもある。」

だが他の皆がどういふ思いで君を助けたかを忘れてはいかんぞ」

どういふ思い？

「おっとこんなことをしている暇はなかったな。また会おう」

そう言うとりザルトさんは階段をすさまじい勢いで降りていった。相変わらずよく分からない人だ。

そんなことを考えていると轟ツという音とともにどこかヘミサイルが墜落したのではないかと思うほどの振動が襲った。

敵襲かと思ひ窓から外を覗いてみると、結界の外で騎士たちが慌てふためいているのが見える。どうにも今は敵の攻撃じゃないようだ。

音を聞きつけた修道士の一人が階段を二、三段飛ばしであがってくると、

「ちょっと、何しているんですか！？」

と慌てふためいた様子で言われた。

「いやそれがちょっと様子がおかしいんですって！」

俺の話だけでは埒があかないと考えたのか、その修道士は飾り窓の側に立つ俺を押しつけて外の様子を覗き込んだ。俺も事態がどう動くか気になって修道士に覆いかぶさるような形で外を覗く。修道士は露骨に迷惑そうな顔をしたがそれはまったく眼中になかった。

「何だありや！？」

修道士と見事にハミングしたがそれも仕方無いだろう。騎士達は何かに向かって果敢に立ち向かい、魔法使いたちは騎士たちが引いた瞬間を狙って魔法攻撃を仕掛ける。まさに戦闘のお手本とも言える動きとコンビネーションを見せたが顔色は総じて悪かった。

相手が悪かったのだ。

その何かは象のように大きく四足歩行で、全ての足は蟷螂の鎌のようにするどく前線の騎士を鎧ごと突き刺し、顔に当る部分は人の顔だ。元々あつたであろう髪の毛は全て抜け落ち、濁った白目で突き刺した騎士をムシヤムシヤと無心で食べる様子は背筋を凍らせる。

騎士たちは剣や斧を打ち付けるが、カンツという高い金属音とともに弾かれ意味をなさない。魔法使いたちは心底怯えきってはいたが、それでも巨大な火の球をそれ目がけて打ち出した。

「おおっ、やったか！！」

先ほどからやけにハモる修道士君と一緒に敵である聖地守護団を応援するのはおかしい感じがしたが、それほどにあのイキモノの放つ空気が人間にとって悪という存在だということが直感で感じ取れた

からだ。

爆煙がおさまると、そこには多少煤けてはいるが無傷のままのそいつがいた。

さすがに敵わないと思ったのか、生き残った騎士は怪我人を抱えて、魔法使いたちは逃げる騎士から意識を逸らすためにそのイキモノへ攻撃しながら撤退を始める。あそこまでやって無傷なんて、あれはいったいどういうイキモノなんだ？

「おつ、楽しそうにしているのう。何か大きな音が聞こえたんじやがあれは何だったんじや？」

緊張感の欠片もない顔でひょっこり出てきたのはマキアだ。

「マキア……とりあえず見てみたらいいんじゃない？」

「な、何じゃあれは！？　ここに入ろうとしておるぞ！！」

急ぎ確認するとイキモノは結界に少し弾かれたようだがそれでも鋭い鎌で何度も突つつく。

結界はその攻撃に青白く二、三度点滅した後、パァーと薄まり消滅してしまった。

階下ではドスツと何か大きなものが倒れた音が聞こえた。おそらく神聖術を行っていた修道士たちが結界を破られたショックで倒れたのだろう。

「ギューーーーーー！！」

そのイキモノは結界を破り獲物にありつけたことを誇るように不吉な声を上げた。

五十五話 力と思惑（前書き）

今回は短いです

五十五話 力と思惑

その不吉な声に気づいたナーガとユーリイが一階のフロアから飛び出て

くるのが見えた。

ナーガとユーリイは最初そのイキモノを見た時に驚いたようだが、さすがに経験が多いので直ぐに平静をとりもどし、互いにアイコンタクトをとり左右から挟みこむような形で向かう。二人の動きは元々かなり素早い上に、互いが絶妙なタイミングで前後左右へフェイントを入れるので、離れて見ている俺ですらその動きを目で追いきれずにいる。

あまり動きが機敏そうに見えないそのイキモノも当然動きについていけず、その外殻に左右から同時にユーリイの風の魔剣とナーガの手甲が突き当たる。カンツという金属音の後にブシュツと緑色の体液が流れ出す動きに支障は全く無いようだ。

「まったくユーリイもナーガも無茶しおるのお」

時折反撃をしようとするイキモノをマキアが正確な弓術でダメージを与えることは無いものを意識を上手くそらしている。

『イツキはいつ戦うの?』

突然フィランが話しかけたことに若干驚きつつ答える。

「いや、これ入っていける戦いじゃない?」

『そこんとは大丈夫! いつものあのウザイ女精霊がない分、

サービスでもう一本槍を使わせてあげるから」

あのウザイ女精霊ってひょっとしてベアンテのことか？

というかこいつら会ったことあるの？ ベアンテもフィランも基本的に俺と関わりのある精神体だから別に有り得ない話じゃないけど……何故仲が悪い？

「そんな簡単に許可下ろしていいものなのか？」

『いいんだよ。あの女がいないイツキは正直言っただけ弱いんだから！』

「うう、最初の頃は可愛かったのに最近のお前と来たら……」

『えっ！？ 泣くまで！？』

困惑するフィランは可愛い。

「それにしても俺、二槍流は始めてなんですけど」

『イツキは基本ダメ人間だけど槍を使うセンスだけはあるから直ぐ慣れるよ。』

それにいつか僕を完璧に使いこなすなら、最大で五槍流になるから今の内に慣れておかなきゃっ！』

「まあそつだよな」

『槍の銘は【天沼矛】（あめのぬぼこ）、型は鉤槍。』

イツキが前使えるようになった【地虚矛】（じむなのぼこ）と兄弟にあたる魔槍だよ。

この二槍は仲が良いから使う時はセットにしたほうが余計に働いてくれるし、魔槍としての能力を発揮してくれるんだけどそれは使って見てからのお楽しみで」

フィランがそう言うと共に手の中の槍が消え、気づけば両手に二本の槍を持っていた。

左手に柄が漆塗りの十文字槍【地虚矛】、右手にはあまり殺傷性が高そうには見えない鉤槍【天沼矛】、柄の部分は螺鈿細工が施されていて金のように自己主張が強い反射光が綺麗だ。

試しに両手の槍を回転させると、手に馴染むし悪くない。【天沼矛】は振るたびに螺鈿の輝きが見え、【地虚矛】は掌から大地の躍動を感じさせる。

「うん、悪くないな」

『でしょ、でしょ！』

マキアが弓を撃とうとしている飾り窓から身を乗り出すと、

「イツキっ！？ 自殺はいかんぞ！」

「いやいや違うから」

それでも引きとめようとするマキアを無視して窮屈な飾り窓から地面に飛び降りた。

飛び降りる寸前に思ったのは（あれっ、これ別にわざわざこんな高い所から飛び降りなくても普通に正面から出て行けばよかったんじゃない？）だ。

速く行きたい一心でつい行動してしまったが、この高さはマジで怖い。直ぐに地面と頭からキスをして短い生涯を終える破目になるかと思い、思わず目を閉じてしまったが想像された衝撃はいつになっても訪れなかった。目を開けて確認すると無傷の自分の体。

ベアンテがいた時ならこの状態も納得がいくが今の俺の体はただの一般人に過ぎない。受身もとらずに助かるはずがないのだが……

『それが【天沼矛】の力だよ。見てごらん』

フィランの言うとおりに見てみると、右手の【天沼矛】が地面へぶつかった衝撃を抑えるように俺の体の下に入り込んでいた。

『【天沼矛】は自動で槍使いへの攻撃を防御してくれるんだ。【地虚矛】はその逆で自動攻撃だね。でもその槍使い以上の動きはどちらもすることは出来ない、いわば不意打ちをあまり喰らわなくするちよつとしたオマケみたいな物だからそれに頼り過ぎちゃいけないよ』

本当に思ったより使いどころが少ないな。いずれ五本の槍を扱うことになるなら便利になるかもしれないが。

何はともあれ今だあのイキモノ相手に戦っているユーリイとナーガの加勢に行かねば。あのイキモノがどういう意図でここへ来たのかは分からないがこれまた何となく俺の所為だという気がする。自意識過剰かもしれないが確信に近い何かがある。

あのゼノア教の教祖兼、ラノーラ帝国の皇帝ヴレイン・ラノーラがこの状況を眺めて微笑んでいるのが脳裏に浮かぶようだ。

十　　十　　十　　十

皇帝とは言え、書類整理などでつかう執務室にある机は実用性を考え簡素なものがおかれている。その机の上で大きく場所をとっているのは治水や街道の整理のために必要な書類などではなく、大きな鏡だ。

魔導具の一種で、飛行する魔獣に埋め込まれている小さなレンズから撮られた映像をこの鏡に映すというものだ。各国で偵察などに使われているがこれは我が帝国の魔法使いが作り出した最新式のもので映像も非常にクリアかつ、伝達速度も以前のようにまる一日かかることもなく見たままの映像が直ぐにこちらへと伝わる。

あの少年がようやくマンティスに立ち向かう様子を見て思わず笑いが漏れてしまった。

「教祖様、あの精霊珠の余剰魔力でマンティス八十体の量産に成功しました。つきましては製造費のお支払いをお願いしたいのですが……」

生物兵器マンティスの製造並びに、人体改造を生業としてきた研究員の一人がこちらを遠慮深そうに金の請求をしに来た。ただでさえマンティスは通常の魔砲や魔導具の金額のおよそ百倍であり、一体ずつ対魔コーティングしたので最初に支給した予算を多く上まっただらしい。

金貨でパンパンになった麻袋を三つほど投げ渡すと研究員は分かりやすい喜悦の表情を浮かべ頭を下げる。

「これはどうも——我ら一同これからもさらに技術の研鑽をさせて

いただきます。」

「それはもう良い。それより肝心の精霊珠は持ってきたらうな？」

研究員は困惑の表情を浮かべたが、目で再び促すと懐から小さな鍵つきの宝箱をとりだし鍵をあけた。その中に大切そうに保存されている紫色の包装布をゆっくり外すと、中から光が漏れる。新芽のような緑でいて、それでいてエメラルドのような光沢を併せ持つエツグ型の精霊珠がそこにあった。

精霊珠は精霊の力の本体であり、精霊は自身の精霊珠が盗られることを恐れ異次元空間にしまうとも言われており今回精霊珠が手に入ったのはまさに奇跡以外の何者でもないだろう。あの少年がどういう方法で手に入れたかは分からないが、伝説級の代物が手に入った今では精霊珠を手に入れる可能性があるあの少年の存在は邪魔以外の何者でもない。

「ご苦労、ついでに君達も変わっていきたまえ」

「はっ！？ これはいつたい…… s d ふあ b d f ー！！！」

目の前の研究員の全身から赤い煙が噴出す。血だ。

精霊のマナを信者の血液とあらゆる魔獣の血液で無理やり固めたものに私自らが神聖術を行使したものを飲ませるとマンティスができる。目の前の男もいずれ醜い怪物に成り下がるだろう。

マンティスたちを連れ、メイ八教の総本山があるザルナ王国の首都までおよそ一日。私は広場にある転移魔法陣で直ぐに行けるだろうが対魔コーティングされたマンティスは転移できない。まだまだ改良の余地ありだ。

グルーナがカナゼやりザルトをどこまで足止めできるかにかかって
いるな

五十六話 いいところ取りってどういうことか

ナーガとユーリイは俺が槍を抱え駆け寄ってくるのを見ると少し驚いた表情を浮かべるが、笑顔で受け入れてくれた。

「ふん、ようやく出てきたか。たかが虫一匹退治するのに随分及び腰だな」

「やはりレディは虫の相手をするのが苦手かな？」

俺がナーガの女装を意図してそう言つとナーガもそのことに気づいてニヤツと笑う。

二人してニヤニヤが止まらなくなっていると、

「イツキ、ナーガ！ 男同士でニヤニヤしていると正直気持ち悪いぞ」

そのユーリイの一言でまるで感情がなくなつたかのように笑い止む。やはりユーリイの一言は大きいのだなと改めて思い知る今日この頃だ。

気を取り直して敵と向き合つと、それは既にこちらへ鋭い鎌を振り下ろす最中だったので焦って槍をクロスさせ防ぐ。受け止めた瞬間手がビリビリと痺れて槍を落としかけたが何とかもちこたえ、続く第二撃は体を横へ転がすことで何とかかわした。

これは予想以上に手ごわいぞ。魔法もたいして効果がない上に攻撃力はハンパ無い。

ゲームで出てきたら完全に初見殺しの代名詞になるであろうが、こ

れはもちろんゲームではないのでコンテニューは出来ないのだ。

「私が左側から行く。イツキとナーガは隙を突いてやってくれ！」

これがユーリイを囚とする作戦だと気づき、止めようとしたがナーガがそれを無言で制した。手に酷い火傷を負っていて本当は剣を握るのだってつらいくせにそれでも自分から体を張ろうと頑張るユーリイ。それを止めれることなど出来るだろうか？

願うなら、こんどこのような場面に立ち会うときはもつと強くなりユーリイを囚なんかにさせないような力をてにいたい。

ユーリイが宣言通り、左側からそいつの甲殻で覆われた足を風を纏った魔剣で斬りかかるとそいつも風の影響を受けて体勢が崩れる。その隙を狙って俺とナーガは一足飛びで反対側から攻撃した。足はとても堅いので俺は頭を二槍で貫き、ナーガは手甲で腹を攻撃したがそいつは相変わらず平然としている。

「クソッ、全然効かねえーじゃん！！」

ナーガはそのまま手甲でめった打ちにしていたがさすがにウザッたのかイキモノも鋭い足で振り払おうとするが既にナーガはそこから離れていた。

「イツキッ、良く聞け！ こいつは上手く隠しているがさっきから人間でいう鳩尾の位置を庇っている。こいつも生物だ。おそらくそこが一番装甲が薄い場所なんだろう。俺が今から隙をつくるからそこを狙え！」

「それは本当なのか！？」

ユーリイがイキモノの攻撃を剣で受け流しながらそう聞く。俺に言われたのに……

「確信はありませんがこのままではこいつに決定打が与えられないままスタミナ切れでやられるのがオチです。少々の冒険は必要かと……」

「……そうだな。イツキ、頼めるか？」
おそらくユーリイも今の自分では満足な攻撃が行えないと分かっているのだろう、渋々と受け入れた。

「勿論。で、ナーガはどうやって隙をつくってくれるのかな？」

「あまり気が進まないがそうも言ってられないな。こうするのさ」
ナーガはおもむろに両目に当てられている包帯を解き始める。黒龍波でも封印されているのかな？と思ったが残念ながらそんなことはなかった。目は灰色で時折砂が舞っているかのように見える。てつきり見えないと思っていたその灰色の瞳の焦点は確かにイキモノを捉えていた。

こいつ、嘘つきやがったな。後でメイドさんの格好させてやる。
でも前回女装した時まんざらでも無い感じだったから喜んでやりそうで怖いな。

閑話休題

イキモノはそのナーガの瞳に捉えられた瞬間、まるで時が止まったかのように動きを止める。その瞬間までイキモノの気をひいていた

ユーリイは勿論、俺も驚いてしばし動きを止める。

「イツキ、直ぐ殺せ！ 長くは持たない！！」

ナーガの怒声に押され、【地虚矛】を鳩尾の部分に突き刺す。確かに他の部分より装甲は薄いがそれでも充分堅い。二、三度突き刺して肉を広げると奥に緑色のドクドク脈打つものがあつた。あれがおそらく心臓にあたる部分だろう。

一突きで貫こうとしたが槍は心臓に二センチほど沈むと筋肉の萎縮により動かなくなってしまう、奥へ突き刺そうとしても、抜こうとしても上手くいかない。

俗に言うお手上げてやつですね！

「おゝい！ ユーリイ手伝ってくれ」

こういう時に女性に頼るのは、何だか堅く閉じたビンの蓋が開けられずに女子に頼ってしまうのと似た気分だ。要するに、すごく恥ずかしい！！

でも、そんな状況でもないので素直に助けてもらふ。

「本当だな。全然ビクともしないぞ！？」

「もうあと十秒ほどで束縛が解けるぞ！！ なんて抵抗力だ！？」

ナーガに急かされてユーリイと共に渾身の力を込めて押し込んでようやくゆっくりと動き始めたがナーガのカウントは既に五秒をきってしまった。

このままのスピードじゃ絶対に間に合わない！

後一秒で急に槍に衝撃が走った。ゼロを迎えた瞬間、イキモノは動き出し、そして大きな音を立てながら地面へと倒れた。

しばらく俺達の中でクエスチョンマークが飛び交ったが槍の石突を見て納得した。

槍の石突には一本の矢が突き刺さっていたのだ。おそらく石突へと矢が突き刺さった衝撃で穂が心臓の奥まで届いたのだろう。そしてこんな芸当ができる人物を俺は一人しか知らない。

「マキア感謝するぞー！！」

マキアは笑顔で教会の飾り窓から顔を覗かせて言う。

「惚れ直したじゃろう！！」

いつもは軽く流すところだがマキアの活躍無ければ倒せなかったし、それに正直ちよつと笑顔にクラッとしてしまったのでこう答えるでしょう。

「ああ、惚れ直したぞー！！」

……ユーリイの視線が痛い

五十七話 規格外の方もいるようで

ようやくイキモノを倒したせいもあって俺はベタツと地面に伏せていた。地面の冷たさがちょうどいい。

「そういや、さっきは急いで聞いてなかったけど、どうやってあのイキモノの動きを止めたんだ？」

「ああ、あれが俺が『ナーガ』と名づけられた所以だ。まさに蛇に睨まれた蛙のように、俺によって見つめられたあらゆるモノ、魔法や物体、生物の動きを一時的に止める『痺腫』。それが俺の能力だ」

「それって何てチート！？」

「そうでもないぞ。これを使うとかなり疲れるし、普通にやると範囲が広すぎるので意識的に視界を狭くしなければいけないから、その間周囲の敵に対し完璧な無防備になる。後、目を使っている最中は俺も体を動かせないしな」

ナーガは使えないとばかりに言うが、俺にとってはそれを差し引いても充分に使えるように思う。なんせ動けないナーガを仲間でカバーすればその弱点を補って余りある威力だ。

「助かったぞナーガ、頼りにしている」

「ユレイア様のお役にたてて光栄です。ユレイア様は手の平の方は

……」

「私なら平気だ」

俺はユーリイに手の平を見せてもらうと、少し赤く腫れ上がった。今の俺では碌な手当ても出来ないのもので教会の端で育てていたアロエの皮を剥いてユーリイの手にあてる。

「たぶんこれで少しはマシになると思うけど」

「……すまないな」

少し赤面して答えるユーリイ。

しばらくすると教会の中から修道士たちが一人また一人と外の様子を覗きに出て来た。

結界をつくっていた修道士は疲労のせいか姿は無く、戦闘力のない修道士たちの姿が多い。

こちらへ駆け寄ってくると怪我は無いか？ や騎士はどこへ行つたの？ などの疑問を投げかけてくるので俺達はそれに一つ一つ答える。

とりあえず騎士やあのイキモノのいない内に避難するように促すが、修道士達の意志は固いらしくここで死をも迎える覚悟らしい。信仰心の薄い日本人の俺にしてみたら考えられないがそれがこのやり方なんだろう。

理解は出来るが納得は出来ないっていう感じだな。

師匠は今頃どうしているのだろうと思って見に行くと、師匠はホルの中央でぐったりとしている修道士達に神聖術をかけていた。師匠は一度祈るように手を合わせ自分の額に指を当てると、指先に青

白い輝きが宿る。それを床に倒れている修道士の胸に置くとその青白い輝きが一瞬修道士を覆いつくし、修道士は目をさました。

「師匠って本当に司教なんですネ」

俺の声に気づいた師匠は疲れを滲ませた声で答える。

「それはどういう意味だ？ まったくお前と来たら昔の弟子を思い出せるようなことばかり言うな」

その師匠の弟子に興味を持って訊ねようとするとシスターの布を裂くような甲高い悲鳴があたりに広がった。

「イツキ、外を見て来い！ 私は手当てで忙しいからな」

「はいはい、わかってますよ」

また面倒事じゃなければいいのだが……

とつまらない期待を抱いて、シスターの悲鳴が聞こえた教会の扉を開けるとそこにはまたもやあのイキモノがいた。今度は少し形が変わっていて、背中がパツクリと開き、その中には戦車のような砲身が搭載されている。説明無しでもあれが遠距離攻撃主体だと分かるだろう。それが目算で二十体以上教会の外にいて、こちらへ今にも撃たんとばかりに砲身を向けている。

その奥からクルーゼ、クロト、人狼のケンの順番で現れた。

「さあ、犠牲を出したくないなら私の元に戻って来るんだユレイア！」

そのクルーゼの発言に俺達はともかく大剣を背負ったクロトでさえ露骨に嫌な表情を浮かべた。しかし奴の言つとおりこのままではあのイキモノの砲撃でこちらはやられてしまつたろう。三百六十度囲まれているのでナーガの『痺腫』も役に立たないし……

どうすべきかと考えていた時にユーリイがあいつのもとへ向かおうとしているのが目に入った。

「ユーリイ、行っちゃだめだ！」

「ならどうしろと言うんだ！ このままでいても多くの犠牲が出るんだ。なら犠牲は少ない方がいい」

悔しさで唇を噛み、血が流れているユーリイに何も言うことはできなかった。

一步一步クルーゼの元へ向かうユーリイだったがちょうど教会の庭を半分程進んだあたりで、庭が光った。いや、あれは文字か？

教会の地面に幾何学模様によつて意味を持たされた魔法陣が浮かび上がると、それと連動して更に教会の上空にも幾つもの魔法陣が浮かぶ。俺が何一つ理解できないままでいると、

天空から真つ赤に燃えた……隕石が降ってきた。

目をゴシゴシと擦るがその幻影は消え去ってくれない。いくら異世界だからってこんなことがあつていいのだろうか？

それはゴォーという音とすさまじい熱と共に見る見る姿を大きくしていき、教会の周りを囲んでいるイキモノ達の群れに突っ込んだ。爆音と同時に隕石がぶつかった衝撃で立ってられないほどの地震

が五、六回続き、気づけば教会の周りはボコボコとクレーターが出来ており勿論それが直撃したであろうイキモノの姿はどこにもなかった。

しばらく敵、味方関係無く目をパチパチさせていると教会の尖塔からリザルトさんが軽く手を振っているのが見えた。

あいつはとんでもない物を盗んでいきました。あなたの常識です！！

隕石を降らすとか人外認定されたいとは思えんな。いや、エルフだからエルフ外か、エルフ害やエルフgayでもいい。個人的なお勧めはエルフ貝かな。何だか美味しそうだ。
えっ、別にこんなどうでもいいところ膨らませなくても良いだつて？　それだけ驚いたってことだよ。

閑話休題

まあ何はともあれこの隙を乗じて敵に攻撃をしかけようってことで脳内会議は終結した。

ナーガとユーリィに軽く目配せすると互いの標的目指して駆け出す。ユーリィは何やら因縁があるクルーゼと、ナーガは元同僚のクロトと、そして俺は道端を歩いている蟻ん子と、と言いたいところだが人狼のケンとの戦いだ。

「精霊がいなくなったお前に負ける気はしねえんだけどよう。まあせいぜいあがいて死んでくれや」

「ふっ、言っておくがベアンテのいない俺が勝てる気はしねえんだけどよう。まあせいぜい手加減してくれや」

ケンは血管が額に浮き出ていかにもお怒りの様子だ。ちょっとからかいすぎた気がせんこともない。

「決まったぜ！！ てめえはギッタギッタにして…」「ボ口雑巾のよう
うに捨ててやる！ と貴様は言うだろう」

「ちげえし、もう面倒くせえよ。殺す！」

ケンは地面が陥没する勢いで踏ん張り、物凄い勢いで肉薄してきた。

五十八話 血液（前書き）

なんだか文章が短くなっている？
感想をいただければ嬉しいです

五十八話 血液

人狼姿のケンはおそらく百kgを超すだろう巨体で突っ込んでくるので俺は一度右に飛ぶと見せかけ、逆方向へ飛んだ。

何せあの巨体で突っ込んでくるのだ。爪で攻撃してくるにせよ何にせよ、あのスピードでかなりの重さが加わっている。普通に攻撃を受けたら、槍は壊れないにしても受け止める体の方が持たない。

その試みは見事成功して、ケンの攻撃をかわした。ケンは鋭い爪で地面を掴んで減速すると再び向き直る。普通ならここで軽口をたたきたいところだが何分俺にそんな余裕は無い。

『良しっ、そこだ！ やつつちゃえ！！』

フィランの可愛い応援に心癒されながら（我ながら結構余裕だな）、右の【天沼矛】でケンの毛皮で覆われた背中へ鋭い穂を突き刺す。だが少しは穂が突き刺さったもの、やはり硬い毛皮で奥まで突き刺さらない上に、すぐケンに片手で振り払われてしまった。

『やっぱり手ごわいな』

さすがにケンの手前声を出すわけにはいかず、心の中でフィランに話しかけた。

『いや、単純に君の力不足じゃない？ あの女精霊がいた頃の君だったら余裕で貫いてたよ。さすがにあの人狼もちよっと油断しすぎたみたいだね』

フィランの言うとおりケンは表情を真剣なものにし、どういう原理

かは分からないが爪を十センチほど伸ばすと野性の狼のように両手を地面についた。

「これが俺の本気だぜ！　ちよつと速くなるからちゃんと着いて来いよ」

ケンはそう言うと共に残像を残して消えた。まさに消えたのだ。たしか以前似たようなことがシクエちゃんとの稽古であつたが正にその時と同じだ。

どこがちよつとだよ！　軽トラとコンコルドぐらい違うわっ！！

とりあえず前方と後方に槍を構えてガードするが本当に全てガード出来ると思つてない。ただ致命傷を避け、次の攻撃に繋げるためにやっているのだ。俺が達人だつたら気配とかで分かると思うが無いものねだりは見苦しいので止めにしよう。

そしてその時が来た。

『危ない！』

フィランの声で思わず一步下がった俺の首から血が流れ出る。攻撃した瞬間ケンの姿が見えたので槍で目を突こうとしたがまた猛スピードで動き、目の前から消え去ってしまった。

しかし、このままじゃマジでヤバイ。さっきのはフィランが気づいてくれたのとただの運に過ぎない。次来たらもうお終いだ

人は死があまりにも近いとかえって冷静になるらしい。今の俺が正にそれだ。

現に足は震えているし、無性にお花を摘み（トイレ）に行きたくな

っている。いやちょっと湿っているかもしれない？

俺はやっぱ世界一のヘタレだ！！

『まあこの人生がたまたまついていなかったただだよ』

『人生規模でダメだしされた！？』

『で、どうすんの？』

『無視された……。まあ、一つだけ方法があるっちゃあるんだけど、たぶん俺も死ぬ可能性が高いな』

『じゃっ、それで』

『鬼だっ！』

『まあまあ、死ななかったらご褒美あげるから』

命をかけてくれるご褒美だったら俺はよっぽど良い物じゃないと認めんぞ。ユーリイのキスとマキアのキスぐらいじゃないと、とつまらん（重大）ことを考えている暇が勿体無い。さっさと終わらそう。

槍の穂で手首をばっさり切る。案外手首は血が出にくいのでばっさりやるのがコツだ。マジで死ぬほど痛い、当然のごとく出てきた血液を溢さずに口内へと流し込む。

口の中に鉄の味が広がって気持ち悪いが我慢して口に溜め、充分溜まったところで俺は消毒の時にやる酒での消毒の要領で霧状にして一気にあたりに噴き出した。

「ついに血迷ったか！？　なら俺があの子へ送って正気に戻してやるよ！！」

＋　＋　＋　＋

奴は完全に俺のスピードに着いてこれてねえ。

終には血迷って自らの手首を斬り、流れ出た血を口内に含むと霧状にして噴き出し始めた。

何の遊びかはわからねえが見苦しいことこの上ねえし、霧状の血液があたりに漂うだけで何の効果もねえ。

やはりこいつは植物を操ることが出来なければ何もできねえクソ野郎だ。

霧も消えたところでとっとと止めを刺そうと俺はスピードを維持したまま奴の背後から襲いかかった。

ズブツ

やっぱり爪が肉に突き刺さる音は何時間聞いてもたまんねえな。俺はこの音が好きで人を殺していると実感する。

だがおかしいな。いつもは人を殺すと頭がスツキリするのに、今日は頭にまるで焼きこてを入れられたみたいに熱い。汗がとまんねえし、あれ……これ汗……じゃねえや

血……！？　いった……い誰の……だ？

＋　＋　＋　＋

後ろでズシンと重い音をたたせてケンが倒れた。ケンの頭に突き刺さっている槍を抜くため息をつく。

なんとか一発で殺れたみたいだな。

『どうやって倒したの?』

フィランがいかにも不思議そうに聞いてくる。

「血液を霧状にして撒いて高速で動くケンを赤色でマーキングしたんだよ。途中で霧が消えた時も赤色は目立つから、なんとか動きを線で追えたのさ。後は襲い掛かってきた所を槍で迎えればいいだけ。本当にそれだけだよ」

フィランから賞賛の拍手が送られたが俺は既に立っていられる状況じゃなかった。

さすがに血を失い過ぎて頭に靄がかかったようにボンヤリしてきた。いまだ手首からは血がドクドクと流れ落ちているのを感じる。止血しなくちゃと片手で押さえたが出血で力が入らない。

『イ……どう………?』

途切れ途切れに聞こえるフィランの声をBGMにして俺は意識を失った。

五十九話 分かりやすい展開（前書き）

本当にこの小説を読んでいる人はいるのか？ というのが最近の悩

みww

何にせよ最後まで書くつもりです。

五十九話 分かりやすい展開

淡いまどろみの中、誰かに腹部を蹴られて俺は一気に覚醒した。
いったい、誰だ！？ こんな起こし方をするのは？

「さっさと起きろイツキ」

目の前にはヤンキー座りで疲れた様子の師匠が。俺は師匠の話を聴きながら深く斬った手首を自然になぞると少し赤くはなっていたが傷跡はさっぱりなかった。おそらく神聖術で師匠が治してくれたんだろうと、礼を言おうとするが師匠は面倒くさそうに軽く手を振って断る。

「とりあえず、お前が寝ている間にあったことを話すぞ。いいな？」

「お願いします」

「まずユレイアだが、クルーゼ相手に剣技で互角以上に戦ったがクルーゼに止めをさす前に逃げられてしまった。憎しみの力というのは正にあのことだな。

私もあそこまで闘志を、いや殺気を剥き出しにして戦うユレイアは見たことがなかった。

まあ、でも仕方ないな。あんなことがあれば……」

そついいかけて師匠は言いよどむ。言いくいことだろうか？

「……そついえば今まで聞けなかったんですけど何でユーリイはクルーゼをそんなに怨んでるんですか？」

リザルトさんや師匠は何か知っているっぽいんだが俺はユーリイに今まで聞いたことが無い。というか深い理由がありそうで直接聞けない。

「……それはユレイアがいつか話してくれるだろう。あとは確かナーガとか言ったな、あいつはしばらく大剣使いと戦った後和解したらしくてな。今だあの化け物が暴れまわっている帝国内部で化け物を操っている奴を捜している」

うーん、俺が寝ている間にそんないろいろな事が。もし俺が物語の主人公だったらきつとあつという間に敵を倒してハッピーエンドだろうから、位置的にはサブキャラクターってところだな。

我ながら相応しすぎて涙が出てくる…

「今ユーリイはどこに？」

「ユレイアは魔力の使いすぎで二階の病人専用ベッドで休んでいる。今はマキアちゃんが見守っているし、ベッド自体が自然治癒力を高める魔導具の一種だから直ぐに良くなるだろう」

ユーリイもいろいろ思うところがあるだろうし、マキアが側にいるなら安心だ。それに今ユーリイと会っても話すことが無く気まずくなるだけだろうから、いろいろ気が利く女の子のマキアが何とかしてくれるだろう。

ナーガとクロトの間に何の話があったかは分からないがそれも会えば分かるだろうし、今は俺もあのイキモノを操っている奴？ 十中八九皇帝のヴァレイン・ラノーラだろう。

そんな一番大事なことを部下にやらせるはずは無い。違っていたら

お終いだがそんなことは無いだろう……たぶん。

何にせよ、このままあいつを放っておいていい訳が無い。確かあいつは『神代の再現をしたい』って言ってたけどあまりいい予感はないな。ユーリイにこの世界の神話を聞いたがどれもこれも巨大な神が自らの力を見せ付ける為に破壊活動をしたとかいうものばかりだ。まあそのおかげでこの世界が生まれたって話だから別に全て悪いってわけでもないが、人々が生きているこの時代でそんなことが起これば被害は壊滅的だ。

……俺はどんどん気分が鬱になっていく前にナーガ達に倣って皇帝を捜すことにした。

教会を勢いで出て行ったものの、何の策も無くこの広い首都内を探し回っても無駄なことに気づく。

「どうしよ……」

しばしポカーンと立ち尽くしていると、懐からブーンブーンという振動が。

探ってみるとそれは例の大商人の家に侵入した際につかったコードだった。そういえばすっかり忘れていたなと思いながらコードのボタンを押す。

『ガガ…ガガガッ、お…、聞こえ…、聞こえるかイツキ？』

コードは雑音が酷く壊れたかと思ったが途中から何とか繋がった。マキアも試作品だと言っていたからそんなに耐久性は無いらしい。

『こちらイツキ、聞こえるぞオーバー』

ナーガに返答する。

『どうやらあまり調子が良くないみたいだから、手短に話すぞ。あの頑丈なイキモノ、正確には生物兵器マンティスというらしいがな、そいつらは市街地を破壊した後ザルナ王国の方向へと進軍を開始した。おそらく教祖さ……いや、教祖はメイハ教の総本山である首都エリアノを攻撃させようとしているんだろう。そして教祖の性格から言って自らも首都殲滅に乗り出すに違いない』

「ちよつ、それってかなりヤバイんじゃない……！」

『正直言っただけかなり不味いな。一般人の被害もかなり出るだろうし、ザルナ王国はマンティスを倒せる可能性がある。Cランク以上の冒険者が少ない』

確かにあれは手を負傷してはいてもAランクのユーリイですらまともな攻撃を喰らわせることは出来なかったからな。一般人がいくら武装したところで死人が増えるだけだ。

『よってあれを操っていると見られる教祖をここで止めなければいけない、分かるな！』

事の重大さにナーガの口調も強くなり俺も少し動揺しながら肯定する。

『今、俺達はこの首都に設置されている転移魔法陣の上にいる。ここにきて教祖と戦う覚悟があるなら来い、戦う覚悟が無ければ来るな』

言っていることはキツイがナーガの言葉の節々に俺への気遣いを感じる。ベアンテのいない俺はハッキリ言っただけカスみたいな存在だが、

この世界で生きると決めた以上やるべき時にやらなければもつと俺はダメな存在になってしまうだろう。フィランも一生俺を認めてくれない気がする。

決心は早かった

「場所を教えてくれ！」

ナーガは何がおもしろいのかクスツと笑って答える。

『今から上空へ雷を打ち上げる。その下が俺達のいる場所だ』

雷を打ち上げる？ 雷は落ちるものじゃないのかという疑問が浮かんだが、この世界は何でもありだったなと思い返しひとまず疑問を押し込める。

「そういえば師匠に事情を少し聞いたんだけど、どうしても気になることがあるんだ。最後にちょっといいか？」

『手短にな』

「どうやってクロトと和解したんだ？」

『それは……ここに来る途中で分かるさ。さあいまから雷を打ち上げるぞ、目をかっぱじって準備しておけ』

言葉を濁されてしまったがナーガの言うことが本当なら直ぐに分かるだろう。俺は叫びたくなるぐらい綺麗で高い青空を見上げ雷を見逃さないようフィランにも頼む。

いったい何処に目があるか分からないが……フィランならきつとな

んとかしてくれる！

『こ、今回だけなんだからね！』

素晴らしきツンデレ！

んなことをやっていると、ちょうど右斜めの方向から雷が……上がった！？

雷につきもののゴロゴロという爆音を鳴らしてその雷の柱は自然現象とは全く逆に上がったのだ。

『雷魔法の一つだね。あそこまで大きいのを打ち上げれるとはなかなかやる〜！』

もういろいろと驚きが頭の中で消化しきれなくなった俺は理解するのを諦めた。

さっそく雷が上がった方向へ急ぐが通りを曲がった所で悲惨な光景を見た。

通りの両側に立ち並んでいる家が無残に破壊されていたのだ。民家から病院まで見境なくマンティスの爪や砲撃によって壊され、火を上げている家もある。マンティスと戦ったであろう騎士の名残も散らばっていて相当グロテスクな光景だ。

子供が泣く声もどこからか聞こえてくる。

助けてあげたいがここで教祖かつ皇帝、グレイン・ラノーラを倒さなければもっと大きな被害が出るだろう。しかしクロトがナーガと和解し、教祖を裏切った理由がこれではつきりした。これは騎士の務めに大きく反する行いだ。

グレインを倒すモチベーションはこれでバッチリだ。フィランに急

かされながら雷が打ち上げられた方向へ急ぐとまた大きな雷が打ち上げられた。今度は真上ではなく斜めに打ち上げられたが、もう場所は分かっているのだから必要は無いというのに…… ナーガはせっかちなのか？

しばらくすると今度はその場所で爆発が起きた。まだ少し離れているというのに俺のいる場所まで衝撃が伝わり、近くの建物のガラスが破られ破片が飛び散る。

「これはおかしいぞ」

『どうやらもう戦闘をしているみたいだね。また肝心なところで役立たずになりたくないなら急ぐんだよイツキ!!』

「わかってるよ!」

人の気配がない屋台を飛び越え、荷物で道が塞がれていれば槍でぶっ壊したりと考える最短経路を無理やり導き出す。後で金を請求されてもワタシ、ニホンゴ、ワカリマセーン!だ。

なんとか努力の甲斐もあって普段だったら十五分かかるところを七分ぐらいで着いた。

魔法合戦はもう終わったらしく今はクロトが大剣を軽々と振り回し、ナーガは目にもとまらないスピードで手甲による打撃をくりだしているが、その攻撃を簡単にナイフ二つで受けとめているヴレイン・ラノーラ。

「忘れたのかクロト。昔からお前が私から一本でもとれたことがあるか？」

「クツ、それでも教祖様！　あなたのやっていることは間違いです！」

「理解して貰おうとは思ってない」

クロトはその美貌を悔しさで滲ませ大剣を振るうが全て軽くかわせられるか、教祖の細腕で受け止められる。ナーガがその隙を狙って多彩な蹴り技を繰り出すがこれも成果を上げられない様子だ。

「私が以外だったのは君だよ、ナーガ。下らん正義感を持つクロトならともかく君だけは裏切らないと思っていた。いや、そう躰けたというべきかな」

ナーガの蹴りを掌で受け止めながら不思議そうな目でナーガを見つめる教祖。

「確かに裏切るつもりなどなかった。その考えすらなかった。正直言うと今でもない」

ナーガの声を聞きながら自分の心臓の音が不気味なくらい大きな音を打っている。

「ほうそれでは何故かね？」

一番聞いて欲しくない質問をブレインが投げかける。
もう止めてくれ！　親友がいなくなるのは嫌だ……嫌なんだ

「親友の頼みだからだ」
バカ

……俺の周りにはツンデレが多くて困る

さすがにずっと見ているのも居たたまれないし、俺も参戦する。

ナーガが走ってくる俺を見て頬を少し赤らめたが気持ち悪いだけだ。男（男の娘）で頬を赤らめて許せるのはフィランだけだと思う

「バーガ、男がそんな顔しても気持ち悪いだけだぞ！」

「ええい黙れ！ 後俺の名前を貶した感じにするな！」

焦るナーガを他所にグレインはしばらく俺の顔を見て何か考えると
思い出したように掌を打つ。

「思い出した、君は精霊の抜け殻か。既に君には用は無いんだが…
…」

「俺はあるんだよ。ベアンテを何処へやった！？」

「ベアンテ……！？ ああ精霊のことか。それなら今ここに」

グレインはおもむろに懷から翠色の宝玉を取り出す。エメラルドでもあそこまで綺麗な輝きを放たないだろうそれはドクッドクツと脈打っているように見える。

それはベアンテだと俺は確信した。

グレインの元へ一足飛びで駆け寄り槍でベアンテをもっている右手を貫くがそれは高い金属音を立て、片手のナイフで防がれた。それでも諦めず突き、払い、巻き上げ、打撃と繰り返すがまるで自分の攻撃がどこへ来るか読めているようにことごとく防がれる。

俺の劣勢を見てか、クロトとナーガもブレインを囲むようにして己の一撃を仕掛けるがどれ一つとして当らない。ここまで齒が立たなかったのは師匠振りだが、3人を軽くあしらっているところから判断するとその実力は、信じたくないが師匠をも超えるかもしれない。

「なんでそんなに強いんだよ！ あんた皇帝だろ、もっと引きこもらなさい！」

あまりの強さに投げやりになってしまうことは戦闘中死にも繋がりがねないが、歴戦のクロトとナーガも口には出さないが同じことを考えているようだった。

「私はザルナ教の教祖の生まれ変わりなのだよ。ザルナ神は武芸を好んでいてな、初代は武芸に秀でていて神との感応ができたのだ。その武芸を重んじる教法は今でも生きている」

「そして一番大事なことは、全てが完璧だからこそその皇帝だということだ！」

俺達3人の渾身の一撃はその言葉と同時に二本のナイフでことごとく方向を逸らされ俺の槍はナーガの首元に、ナーガの手甲はクロトの頭に、クロトの大剣は俺の腹にあと数センチというところで止まっていた。途中で気づいて勢いを緩めなければ俺達3人は死んでいただろう。全くなんていう強さだ。

「そしてたった今から私は最強になる。この精霊珠を使つてな」

ブレインが何をするかは分からないが思い通りにさせてなるものか！
【地虚矛】でかかるが蹴りで吹き飛ばされ、ナーガとクロトも同様

に飛ばされる。

ヴレインは以前<ジャナイ>が口癖だったローグと同じように、しかし精霊殊を砕くことは無く、それを飲み込もうと手を口へ持っていく。

最後の悪あがきにヴレイン目がけて槍を投げると、さすがに集中していたのか気づくのに遅れ槍が精霊殊にかすりキラキラと破片をこぼす。ヴレインは今までの冷静な表情を変え片手で投げた槍を手に取り俺目がけて凄まじいスピードで投げた。

まだ吹き飛ばされた衝撃で起き上がれない俺は防ぐことも出来なかったが【天沼矛】の自動防御の能力でなんとか軌道を変えた【地虚矛】は俺の足の腱を切り裂いて地面に突き刺さる。

「イツキ!? 大丈夫?」

「痛い痛い痛いー!!」

「……大丈夫そうだね。でも左足は動かさないほうがいいかもよ」

フィランめ! めちゃくそ痛いんだぞ。ああ今も出血が酷い。

俺の様子を満足げに見下ろすヴレインは気を取り直し再び精霊殊を飲み込もうと大口を開ける。今度こそ俺はどうにも出来ずにヴレインはそれを飲み込んだ。

ヴレインは飲み込んで数秒は平気な顔をしていたが、突然地面に倒れてゲーゲーと吐しゃ物で魔法陣が書かれた床を汚すとピクリとも動かなくなった。

まさかリアルに喉に詰まって死んだのだろうか?

確かにあの大きさの宝石を呑みこもうとすると高確率でなりそうだがこんな頭が切れそうな男がそんな単純なミスをするとは考えにくい。

「おい、ナーガちょっと死んでいるかどうか調べてこいよ」

クロトが沈黙に耐え切れずナーガに促す。クロトがもう少し聞くのが遅かったら俺が言うところだった。

「ええ、断る！ 触っている途中でビクツと動いたら嫌だろう？」

「我慢しないで行けナーガ！ 男だろう！」

「イツキまで言うか！？ ……仕方無い、俺が終わったらお前らも行けよ？」

ナーガは腰を屈め恐る恐る倒れたブレインに近づく。白眼を向いていて非常に不気味だ。

指先を伸ばして脈を取ろうとしているナーガをよそにクロトが俺の肩を意味ありげに二、三度叩く。親指を上げて了承して、クロトと俺でゆっくりナーガの後ろに近づき……

「「ワッ！」」

「ひいいー！ ……ってお前らか、ビックリしただろうが
「――！」」

しばらく場にそぐわない楽しげな空気が流れる。

クロトとは親しくなれそうだ。

「お、おいお前ら後ろ見てみるヤバイぞ！」

「おいおいそんなことでさっきの仕返しをしようとしても無駄だっ

ての」

「正にイツキの言うとおりだ」

騙されないというのにナーガはしつこく後ろを見る見るさいので、仕方なく騙されて後ろを見てみると……ヴレインがビクッビクッとして微妙に体を動かしていた。

急いで止めを刺そうとクロトが大剣を振り下ろしたが不可視のバリヤーいや、魔法障壁がその攻撃を防いだ。ヴレインは魔法障壁の中でゆっくり立ち上がると鼓膜が破れるほどの咆哮を上げる。

そして背中の骨が折れるんじゃないかというほど背中を曲げ、黒い翼が皮膚を破って生えてきた。続いて目がパツクリ割れ、赤黒い剣が片手におさまり、最後にベアンテの精霊珠が額に浮かび出たかと思ったがどうやらそれだけで終わりではなかったらしい。

不気味なヴレインの体がどんどん大きくなっていくのだ。魔法陣が描かれた床も不吉な音をたててひび割れて崩壊の一途を辿っていく。ここにおいては危険だと感じた俺達が避難する間もどんどん大きくなっていく。

ビル程の大きさになったヴレインを民家の屋上から見た俺はいったい誰があれを倒すのだろうと他人事に考えていた。隣のアホ達もポカーンとしている。

俺はマンガやTVで悪者が巨大化する様を何度も見ていたからビククリはするけど放心はしないが、そういう経験のないナーガ達は天地が引っくり返ったような衝撃だろう。

さてウルトラマンを呼ぶ準備でもしようかなww

五十九話 分かりやすい展開（後書き）

最後のはジョークです!!

六十話 それは一つの終わり

目の前で起きた光景に圧倒される俺たちはその大きな体がこちらの方に動き出してからようやく、危機感を覚え反対方向へ逃げ出した。だが左足の腱が切れた今では満足に走れず無様にすっころぶ俺。

『イツキ〜！ しっかりしてよ』

「いやいや。俺足の腱切れてんのによく頑張っている方だと思うよ」

「何をブツブツ言っているイツキ！ さっさと逃げて、あれの対処方法を練らないと帝国は滅びるかもしれんだぞ！！」

どうやらフィランと念話モードで話してなかったらしいのでナーガに怒られてしまった。

最近はフィランとの間にプライバシーが無くなってきているので、念話と普通の会話との境い目が分からなくなってきたのだ。喜んでいいのかどうかは分からないけど……

「分かったよ」

一人でなんとか起きあがろうとするが左足が言うことを聞いてくれない。見かねたナーガとクロトが起すのを手伝ってくれてようやく立てた俺は、一人で立てないことを情けなく思いながら感謝の礼をする。じいちゃんが生前そう言っていた気持ち分かる気がした。

ベアンテがいれば傷も直ぐ治ってこんな思いもすること無かっただろうにな……

そんなことを思うと巨大なヴレインの足下が淡い緑の光を放った。
それはとても懐かしい光で、両側から俺を抱え込むナーガとクロト
もそれに気付いたらしく不思議そうに見ている。

あの光はなんだかベアンテを思う…あつ、また光った！

どうやら俺がベアンテのことを思うと光るらしい

『……なあ、あれ絶対ベアンテに関係あるよな？』

『……そうかもね』

やけに歯切れの悪いフィラン。

『いやいや。絶対あれベアンテでしょ』

『はいはいそうだよ。で？』

『なんで切れてんの？』

『……あの胸くそ悪い女がイツキに媚びてるみたいに光るからイラ
ツとしちゃって、僕のこと嫌いにならないでね』

シューンとしよげかえったフィランもまた良しっ！！

『嫌いになるわけ無いだろっ！　バーローーー！！』

『ふっ、ちよろいな』

『あれ？　今なんか小さい声で言わなかった？』

『ッ！？ な、何も言ってないよ』

どうやら勘違いだったらしい。まあ可愛いフィランが陰で黒い事言うとは考えられないし大丈夫だろう。それよりも差し迫った問題がある。

あの馬鹿げた大きさのヴレインだ。今はこちらにゆっくりと近づいてきて実害はないが（それでも一歩足を進めると小規模の地震が起ころが）、いつ本格的な攻撃に乗り出すかもしれない。

相手が本格的な攻撃に入る前にあのベアンテらしき反応がある地点へ行って招待を確かめるのが最善だが、臆が斬られた今の俺ではヴレインに踏まれないようにあの地点へ行くことは不可能に近いだろう。蟻のようにペシヤンコにされるのがオチだ。

「ナーガ、クロト。俺をあそこまで連れて行ってくれないか？」

「おいイツキ、あの光が気になるのは分かるが今はヴレインから逃げなくては死んでしまうぞ」

「ナーガに賛成だ。それに死んでまで行く価値があるとは到底思えないのだが」

「俺には必要なんだ。嫌なら断ってくれ、自分で行くから」

「バカな！？ 死ぬぞ！」

ヴレインも俺の声が聞こえているかどうかはわからないがニヤツと笑うと初めて攻撃らしい攻撃をしようと剣を振り上げる。クロトの大剣がおもちゃに見えるほど大きい超剣は大気を2つに切り裂くような轟音を上げながら地面へと振り下ろされた。

轟音を予想していた俺は耳を塞ぎ、身を伏せるがその轟音はやってこない。いや、正確に言うところ剣が大地に接したとき鉄片を擦り合わせたような音はあったのだ。しかしあれだけ大きな金属が大地に落ちた時に起こる破壊音はほとんどなかった。

その答えはしごく簡単なもので、それゆえに絶望も大きかった。

「大地が斬れている！！……だと！？」

巨大ヴレインが振り下ろした剣は地面を切り裂き、アホなことに振り抜いてしまった。どうやら本気で当てる気は無かったようで俺たちへの被害は無かったが転移魔法陣の設置されていた広場の端から端まで、約百メートルが真横に切り裂かれていた。奴の攻撃の直線上に入るとスパツといっちゃうわけですね、わかります。

「……さて、俺の希望を聞いてくれる勇気ある強者は名乗りをあげろっ」

「「あんなもの見せられて行く奴がいるか！！」」

弱虫どもが。しかしこいつらの言うことも確か、俺を抱えてあの剣を避けながら行っても死ぬだけだ。

「おゝい、イツキゝ我が来たからにはもう安心じゃ！ なっ、なんじゃあの巨大な人は！？」

「ギョルルゝ！？」

どこかに俺を運べる頼りがいのある仲間がいれば話は変わるのだが

……

「むっ、無視はないじゃろイツキ！」

「そんな都合良くいるわけもないか。現実逃避は止めにして現在で
きることを考えよう」

「現実逃避をしているのはイツキのほうじゃろっ！」

つつい口に出してしまっていたみたいだ。マキアをからかうと楽
しくて止められない。

きれいな白髪を振り回しながら必死に自分の意見を主張するのは眼
福ものだからな。

「そっぴやマキアはユーリイの看病をしているって師匠から聞いた
んだが、ユーリイを見て無くていいのか？」

「途中でリザルト殿が引き受けてくれたの。急いでかけつけたの
じゃ」

確かにリザルトさんのあの過保護ぶりならユーリイを任しても全く
問題ない。むしろ過剰防衛に近い気がするの俺だけか？

「とりあえず話を戻そう。俺は訳あってあいつの足下に潜り込まな
ければならない。助けてくれるか？」

「うむ、どういう理由かは分らんが、我は一向に構わん！」

「なら早速」

久しぶりのガロンの乗り心地を味わっていたかったがブレインの前

そうするわけもいかずマキアの細い腰にしがみついて出発に備える。ガロンは二、三度足踏みをする一瞬でトップスピードに至った。辺りの全ての景色を置き去りにして移動するがそれでも巨大なブレインの剣は俺達を捕らえようとその剣を突き刺す。

それに一瞬早く気づいたガロンが地面に長い爪跡をつけ、振り下ろされた剣が目の前で爆発する。消し飛ぶ瓦礫をガロンは素早い身のこなしで飛び越えたが乗っている方はたまったもんじゃない。昔からジェットコースターの類は苦手とあるテーマパークで乗った緩い子供向けジェットコースターでリアルにリバーシしかけた男だ。

『楽しいね〜イツキ』』

『……ああこれが続くようなら死んだほうがマシだな』

そんな会話をしている間にブレインの直ぐ足下まで迫っていた。近くで見ると足に血管が浮き出ているよけいリアルに感じる。

「あそこだ。あそこについてくれマキア！」

ちょうど股の下辺りに緑色に光る輝きを見つけた俺はマキアに指差して伝えると分かったように軽く頷いて進路を変更する。

ここまで足下に来ると碌な攻撃は出来ないだろうと思っていたが俺は最も原始的な攻撃を失念していた。ブレインは足を振り上げ俺達を潰そうとしていた。

「やばいぞイツキ。ここは一度引き上げたほうが……」

「いやここで引き返したら奴はもう二度とこんなチャンスをくれな
いだろう。行ってくれ」

「まったく我は知らんからな！」

足が見る間に振り下ろされていく。俺はガロンの体を両足で締め付けて地面と平行になるまで体を持ち出した。少しガロンがしんどそうに鳴き声をあげたが今は少し我慢して欲しい

足下まで来たところでガロンにスピードを落としてもらい急いでその緑の光の正体、砕けた精霊珠の欠片を拾い集めるがその最中も巨大な足が迫ってくる。

「早くしろイツキ！」

「ちょっと待って！ あともう少しだから……」

広い集めた欠片をこぼさないよう掌でしっかり蓋をしてガロンの背中に飛び乗る。

「もういいぞ！」

頭上の足すれすれをガロンが走りぬけなんとか生還。ホッと一息ついたところ掌の隙間から今度は先ほどまでの倍以上の光が溢れはじめる。

『ようやく話せましたね』

『そ、その声は俺がこの世界に来て初めて会話したきり一度も接触が無かったベアンテじゃないか！？』

『やけに説明臭いのが気に入らないところですが……その通りです』

『まったくイツキの面倒も見ないで何が自称イツキを見守る女神だよ』

！』

じ、自称……！？

『そつ、それは私も出来ればそうしていたかったのですがイツキをこつちの世界に運ぶのに消耗しすぎて出来なかったのです。今でこそ精霊殊にされたことでエネルギーが凝縮され話すことも可能ですが……それももう余り時間ありません』

『だからって……』

『あゝフィラン、ちょっとベアンテの事情を聞こうか。なんだかあまり時間が無さそうだし』

『どうもすみません』

『……少しだけだからね』

『今はなんとか話ができていますが私もじきに話ができなくなるでしょう。それというのも私の本体はグレインとかいう人間の額にあるのです。そこから直接エネルギーの供給が無ければ欠片である私の活動も休止するというわけです』

『それでいったい俺はどうすればいいんだ？』

『先ほども言ったとおりグレインの額の部分に私の本体があります。そこに欠片の私を近づけてくだされば欠片を通して本体をこつち側へ引っ張り込むことが出来るのです。』

さすればグレインも動力源である私をなくした後、急激なマナの損失によってその体を保つことが難しくなるでしょう。問題は私の本

体を移動させるのにしばらく時間がかかるということと、ヴレインの額までどうやって行くかということです』

『ちなみに時間ってどのくらい？』

『五分といったところでしょうか』

予想以上に長い上にヴレインの額まで行く手段がないときたか。

日本ではヴレインぐらいの大きさの建物はいくらかでもあるので屋上から飛び移れば不可能じゃないこともないが例えばビル級の建物があったとしても途中でヴレインに気づかれ撃墜されるのがオチだろう。百歩譲って近づけたとしても五分の間、相手は人形のようにただっ立っていてくれるわけが無い。

「どうしたイツキ何か考え込んで？」

マキアがずっと黙っていた俺を心配したか声をかけた。

「そっぴやガロンってたしか空を飛べるんだったか？」

「ギュルロォー！」

いかにもそうです飛べます！　と言わんばかりにガロンが吠えたのでおそらく飛べるのだろう。

「あそこまで飛ぶことは出来るのか？」

ヴレインの額を指差して伝えると

「うゝむ、そもそも騎竜という生物は広い高原に住んでいて飛ぶの

に助走がけつこう必要なのじゃ。ここまで通りに面してなく、建物が多いここではあの高さまで飛ぶことは難しいだろうな」

発砲塞がりというやつか。そんなことを考えている間にもヴレインの攻撃は止まない。

その巨体で剣を振り回すたび衝撃波にも似たような風の壁が目視できる。ガロンは今の所素早い動きでなんとかそれを避けているが、その攻撃を受けた地面がパツクリ口を開けたように避けているのでぞつとしない。

『何かいい手はありませんかねえフィラン先生？』

『せ、先生！？……それもいいね。』

ヴレインの額まで行くのは何とかかなりそうんだけど……』

『行けるの！？』

『問題はどうかやって時間稼ぎをするということなんだよね』

ガロンが急にスピードを落としたので一時会話は中止した。フィランやベアンテと話している間は少し無防備になるのでこういう外の動きの反応に遅れてしまうのが難点だ。

随分移動したらしくヴレインが遠くの方でいまだ暴れているのが見える。

「どうだったんだイツキ。何か成果はあったのか？」

いつの間にかここまで移動していたナーガとクロトが近寄ってきた。炎天下と長距離の移動のせいか、ナーガのシャツは汗でびっしょりで、クロトのほうは汗が長髪が額にくっついていてる。

一連の事情を説明するとクロトは俺の中にいたベアンテの存在を始めて知ったらしく少し疑わしそうにしていたが一応納得はしてくれた。

「そこでちよつと頼みごとがあるんだが……」

「分かっている。どうせヴレインの足止めなんだろう。あそこまで大きな相手に俺の痺腫がどこまで通じるかわからないがやってやるさ！」

「我とガロンも協力するぞ！」

続けてクロトを見るが、クロトはまだ少し戸惑いの表情を見せていた。まだ気持ちの整理がっていないのだろう。無理強いはいしない

「それでフィラン。いったいどうやってあんな高いところまで行くつもりなんだ？」

「ふふ〜ん。それは新たな槍が解決してくれるよ。出ろっ飛槍【ミサゴ】！」

フィランがそう言うと共に掌に槍が現れた。穂は内側に向かって尖っている刃が対角上に四つ、穂だけを見ると槍がまるで四本束ねて置いているように見える。柄の部分は鳥の羽をイメージするだろう白い紋様が施されていてとても綺麗な。

「なんだか凄そうなのは分かるんだが、これがヴレインの額まで行くのどう関係があるんだ？」

「チツチツチ、甘いねイツキ。そのミサゴを放してごらん」

よく理由がわからないがとりあえずフィランの言うとおりに槍を放すとそれは重力をまるで無視して宙を浮いている。手で槍の上下に何かないか確認したがそれを吊るす糸も見つけることができなかった。

『で、デカルチャー！』

『何をいつているのかは分からないけど驚いたのは理解できるよ。でもその槍の能力はまだまだこれからっ！ その槍に乗ることによって自由に空を飛べ、更に【天沼矛】と【地虚矛】やこれから出るであろう槍達も浮かばせ操れる。ただしミサゴからあまり離れるとその効果を失うけどね』

『なんたる素晴らしきチート性能！』

俺の掌にいきなり現れた槍に驚いたマキア達に質問攻めにされたが緊急事態ということで諦めてもらった。それにあまりフィランのチートさが公になると盗まれかねんからな。

とりあえず飛べるということだけは作戦上必要なため伝えたら呆れられた。

ミサゴの柄の部分にチャリの横乗りの要領で怪我した片足を庇うようにゆっくり座ったらあまり痛みもなく自然に乗れた。魔女のように跨ったら絶対痛いということは予想できたので残されたこの体勢しかなかったのだ。いずれは立ち乗りを目指したい！

準備も出来たので出発しようとするくとクロトに止められた。

「どうした？」

「……これからするお願いは我俣だとわかっている。だが聞いてくれ」

「ああ」

「教祖様を、ブレイン様を殺さないでくれ。あのお方は先代まで続いていた強硬外交を止めこの国の為に尽くしてきた方だ。何人もの犠牲を出しナーガのような人間もつくったのもそれ以上の悪事を働く者による犠牲を増やさない為でこのように帝国民を犠牲にするお方ではなかった。数十年前急にゼノア教の教祖の生まれ変わりとしての人格が出だしてから変わられたんだ。……自ら裏切った私の言うセリフではないのかもしれないが、あの人を殺さないでくれ」

「……努力はしてみるよ」

それも全てこの作戦が上手くいくかどうかにかかっている。プレッシャーに押しつぶされないように頬をパシッと打ってから俺は槍を進ませた。

ミサゴは俺の行きたい方向へ飛んでくれるので操作は難しくない。

俺を乗せているミサゴを追いかけるように【天沼矛】と【地虚矛】が着いていつているのを見ると改めてこの槍の凄さが分かるものだ。ようやくブレインの目線と同じ高さまで来るとブレインは直ぐ俺に気づき手の平をこちらに向ける。嫌な予感がして急降下すると頭上を極太なレーザーが通り過ぎた。

どうやら接近戦だけでは無いらしい。

「ジェットコースターは大嫌いだけど、そついう動きでもしなきゃ被弾しそくだよな」

自分で動かすだけあってジェットコースターのように予想外な動きはない分多少は楽だがそれでも進んでやりたくはない。そんな俺の意思、全無視のレーザーが次々と放たれるが槍に乗ってアメリカの曲芸飛行も真つ青な超絶飛行でなんとか全弾回避を続けている。

数十分かけてようやくヴレインの正面までたどり着くとヴレインはおもむろに巨大な剣を地面に突き刺して八工でも払うかのように手を振るう。

「ちよつ！？ 危なつ！」

視界の外からきたその攻撃に俺が反応できるはずも無くマンガのように吹き飛んだが、どうやら【天沼矛】の自動防御のおかげで直撃は避けれたらしい。

しかし体はギシギシと痛み、どうやら肋骨も折れているらしく呼吸するだけで痛みがはしる。

それでも槍によりすがって体を支え、攻撃が終わってヴレインは隙だらけだったので額まで行くことは簡単だった。近くで見ると更に大きな緑の宝石に懷から取り出した精霊珠の欠片をあてると太陽のように辺りを緑色の光が包む。

『ただいまインストール中です。しばらくお待ちください』

どこかのPCみたいなことを言い始めたベアンテ。

あの処理が終わるまで分って絶対嘘だって分かっているけどそれでもイラつくよね。

さすがに目の前で俺達のやっていることに気づいたヴレインはそれを止めさせようと掌で捕まえようとする。でもベアンテの作業中、

この場を離れられない俺は当然逃げることもできない。

その大きな手の平があと数メートルというところでようやく止まった。見下ろすとヴレインの足元に虫のような大きさの人影が見える。おそらくナーガが痺腫を使っているのだろう。

『一分経過』

そのベアンテの声が合図だったかのようにヴレインが動き出す。やはりここまで大きな相手には痺腫の効果も薄かったのだろう。

再び俺目がけて動き出した手の平が今度は複数のブスツという音によって邪魔された。

よく見るとヴレインの手の甲は燃える矢によって傷つけられていた。何やら高速で動き回りながらいる人物によって放たれているようなので、ガロンに乗ったマキアによるものだろう。

『二分経過』

ヴレインは俺に向けられていた手を地面に刺している剣へと伸ばしていた。どうやら先に邪魔物を片付けてしまおうという考えらしい。剣を手に取り足下のナーガ達へ容赦のない剣撃。

今までのように斬ることに重点を置いた攻撃ではなく鈍器のように面をつかって叩き潰すという考えだ。

その攻撃によって砂煙が立ち上がり視界はほぼゼロに近い。

『三分経過』

目標を見失ったヴレインが一時攻撃を止めると、急にガクンとヴレインが膝をついた。

落ちないように必死にしがみ付いていたのが良かったらしくベアン

テの作業の中止にはならなかったがかなり驚いた。

「何だあれば、穴？」

ヴレインの片足はそれを上回る大きさの地面にあいた巨大な穴によって埋まっていたのだ。

土の属性魔法によるものなんだろうか？ マキアは今だ矢を射っているのに、姿は見えないがリザルトさんによるものだろう。でもリザルトさんは確か今ユーリーの看病をしているはず、親バカのリザルトさんが他の人に看病を任すとも考えにくい。それじゃあまさか……

『四分経過』

再び襲う衝撃。体が宙に持ってかれるような感覚を覚えたがここまで頑張ってくれた皆のためにもベアンテをブレインの額にある宝石へ繋げておかなければいけない。

どうやらヴレインは完全に転倒したらしく目の前にはその衝撃によってバラバラになった民家の残骸が転がっているのに気づいた。そして地面を覆う氷にも……

風の魔剣を片手に優雅に微笑んでいるユーリーの姿。

『五分経過、本体の移動を終了しました。さあ私を胸に当ててください』

手の平にあった欠片は再び綺麗な楕円型の精霊珠に戻っていた。それを言われたとおりに胸に当てるとどんだん体の中に沈んでゆく。不気味な光景だったがようやく有るべき所に戻った嬉しさでそんなことはあまり気にならなかった。ベアンテが戻ってきた恩恵か、怪我を負っていた部分も傷口から蔓が延びてきてあつという間に傷口

が塞がっていく。

『マスターよ、私は帰ってきた!』

『シリアスな空気が台無しだ……おかえりベアンテ』

『あゝあ。せっかくイツキを独り占めでできていたのに』

『でもまだ終わりではありませんよマスター。見てください』

動力源であるベアンテを失い動けないはずのヴレインが土で埋まっただけの片足を無理やり引っ張り出し、もう片方の足で地面に張られた薄い氷を踏み砕く。

今だピンピンしている様子のヴレインの姿があった。

『おいおい何でまだ動けるんだ!?!』

『どうやらまだ予想以上のマナが中に残っていたようですね。動力源だった私を失っても動けるとは……才能か、あるいは執念か? その両方かもしれませんが』

狂ったように、最後の命を燃やし尽くすように暴れまわるヴレインの近くには巻き添えに成りかねないのでミサゴに乗ってユーリイ達のほうへ急いで移動する。足が治ったので大分楽だ。

『何でまだヴレインが動いているんだイツキ!!』

案の定近づいてきた俺にナーガが吠える。

「ベアンテもよく分からないらしい。それよりユーリイはもう大丈夫

夫なのか？」

「ああ、カナゼ司教が怪我人達の治療が終わった後、フラフラと病室に入ってきてな。

私を神聖術で回復された後は倒れるように眠ってしまったわれたよ」

「なるほど。……師匠らしいな」

会話をしている間もヴレインは俺達とまるで見当違いな方向へと剣を振り回し、その攻撃によって民家が五軒同時に吹き飛ぶ。これ以上ヴレインを放っておいたら犠牲者の数は増えるばかりだろう。なんとかしなければ……

『ベアンテ、今の俺の力であいつを倒すことはできるか？』

『無理でしょうね。今のヴレインは精神が肉体を超越しています。生半可な攻撃は意味を成さないでしょう』

『どうすればいいか教えてくれ』

ベアンテに頼ることは恥でもなんでもない。もはやベアンテは俺の一部なのだから

『私の持っているマナのほとんどを魔武器に注いで攻撃すればあるいは倒せるかもしれません』

『なら……』

『しかしそれをした後、私の宿主たるマスターは強すぎるマナにあてられ最悪死ぬかもしれません』

死ぬのは怖い。怖くないという奴は漫画かなにかの影響を受けすぎた奴か、人生に何の意味ももてない奴だけ。

俺は漫画は好きだが死〃かつこいいという考えを持つ奴でもなければ、当然人生に興味をもたない奴でもない。しかし、それでも俺の答えは決まっていた。

『かまわない。』

……ヤコブ村やこの帝国で犠牲になった人の数は数えられない。そしてその原因を作り出したのは俺。ここで自分の命を賭けて争いを終わらせなければ無事生き残った人と面とむかって喋れそうにないし、死んだ人に怨まれてもしかたない』

『……わかりました。このベアンテ、マスターと命を共にしましよ
う』

『イツキがどうしても言うんなら僕が力になってあげないこともないんだからね！』

死は覚悟したがユーリイ達にまったく何の挨拶もせず死地を望むほど俺は強くない。

今も震える指先をミサゴを握り締めることでなんとか平静を保っている状態だ。

「ナーガ！」

「どうしたんだ急に！？」

ナーガの近くで耳打ちをするようにこっさり言う。

「ユーリイを頼むよ。ナーガはアホだがその点に関しては心配ないと分かっているけど一応な」

「君が何をいつているのか分からないよイツキ君？」

「遺言だよ」

最後までノリのいいナーガはその後も喚いていたが無視して次はクロトだ。

「クロト。付き合いは短かったがこれから頼んだ」

クロトは俺の表情を見て何か悟ったように頷いてくれた。
次はマキア

「マキア。きっといい人がみつかるさ」

「今更何をいつておる。もう見つかつておるわ」

マキアはまだ俺のこれからする事に気づいてないようで輝くばかりの笑みで即答した。自分の顔が真っ赤になっているのが分かった。

最後は

「ユーリイ」

「どうしたんだイツキ、改まって？」

「……いやなんでもない。師匠によろしく言っといてくれ」

ユーリイにも何かちゃんと伝えたかったがあまり話すと、未練が出来てしまうので結局口から出た言葉はおざなりな言葉でしかなかった。

『いいの、イツキ？』

『いいんだよ』

別れの言葉がすむと、左手を地面に置いて五本の大樹降臨。

地面から顔を出した芽が見る間に大樹へと成長していく。ちょうど俺を除いた皆がこちらへ来れないようなバリケードをつくり上げ、今だ暴れるヴレインのもとへ急ぐ。

「イツキーー！」

ユーリイの声から逃げるようにミサゴへ乗りこみヴレインのもとへ急ぐ。

ヴレインはさらに十数軒の民家を跡形もなく壊しておりその剣は血で金属特有の輝きを失っていた。目には狂気がこれでもかというほど詰まっている

俺の姿を見つけるとまるで新しい玩具が来たように愉悦に浸っている様子から、マナで精神も汚染されているのだろう。

ベアンテがいた時と違い、正確な太刀筋をもって斬りかかってくるのではなく子供がちゃんばらごっこをするかのようにでたらめな動きで避けやすい。

『そろそろ頼むベアンテ』

『ええ……！？　どうやらマスターにお客さんのようですよ』

振り返るとそこには金髪をふりかざして走ってくるユーリィ。どうやら風の魔剣であの大樹を斬りさいてやってきたらしい。

「イツキ！ ナーガから聞いたぞ。どうやら一人で死のうとしているらしいな！！」

ナーガは後で絶対殴る。いや、もう殴れないかもしれないけど……

「そんなの嘘に決まっているだろ」

「ナーガが私に嘘をつくと思うか？」

そついわれれば何も答えられない。

「だいたいイツキにそんな小説の主人公みたいなカッコイイ死に方ができると思っているのか！？ 子供でも一笑して見るのを止めるようなそんな終わり方を私は認めない！！」

「だったらどうやって俺は償ったらいんだよ！！」

「償わなくていい。私がイツキをここまで導いてきたんだ。これは私の責任だ！」

認められない、そんな屁理屈を！

俺はミサゴに乗って上空へと飛び上がりベアンテに【天沼矛】と【地虚矛】へマナを注ぐように言う。

『いいのですか？』

「ああ、分からず屋のユーリィに邪魔される前にやるぞ！」

『そのユーリイさんの事なんですか……あの……後ろに』

「分からず屋はイツキの方だ！」

いつの間にミサゴの柄に座っていたらしいユーリイが背後で大声を上げたので驚いた。

まさかここまで追ってくるとは！？

ユーリイを巻き添えにするわけにはいかず一度地面へと下りようとするが、ユーリイがそうはさせじとミサゴを掴んでヴレインの方へ動かそうと暴れる。本当聞き分けのない娘だ！！

「バカっ、止せてユーリイ。まだ飛行に慣れていないんだ」

「私に任せろイツキ！」

ユーリイと争っている間にミサゴはご機嫌を損ねたのか真っ直ぐにヴレイン目がけて急降下していく。止めようとするが全くいう事を聞かない。

『仕方無い。ベアンテ、【地虚矛】にマナを溜める』

『いいんですね？』

『ミサゴがいう事を聞かなくなったからこれ以外方法はないだろう。もう一度運よくヴレイン目がけて飛んでくれるともわからないしな。後フィランは【天沼矛】をユーリイの防御にまわして絶対マナから守りきつてくれ！』

『出来るだけ頑張るよ。イツキも気をつけてね』

ミサゴは俺とユーリイを乗せたまま恐ろしいほどのスピードでブレインの額目がけて突っ込んでいく。ベアンテの精霊殊があった場所だ。

それと同時に左手の【地虚矛】に不可視の巨大なエネルギーが集まっ
ていくのを感じる。これがマナの力か

「ユーリイ、もう止めろとは言わないから俺の手を握ってくれるか？」

無言で【地虚矛】を握る手にユーリイの細くて綺麗な手が重なる。手のひらは火傷で痛いはずなのに俺の手をギュッと握り締めてくれるその優しさに甘えそうになるが手に持つ槍をいっそうしっかりと握り締めた。

そしてまるで流星のように槍がブレインの額を貫いた。ブレインは大きな地響きを上げて倒れると見る間に体を小さくし始め、額の小さな傷を残した以外は無傷で生還した。

全ての戦いが済んだ後駆けつけてきたナーガ達の前には、幸せそうな寝顔のユーリイを守るように古そうな槍が転がっていた。

そしてそこに――――イツキの姿はなかった。

六十一話 死への一歩（前書き）

第二部の始まりです。

ずっと前から書きたかったので嬉しさで一杯です。
これからも頑張りますのでどうぞよろしく！

六十一話 死への一歩

だるい。体が鉛のように重く感じる。

そのくせその気だるさに任せて眠ることも、瞼を開けることもできないのでホルマリン漬けにされた生物の気分だ。とにかく今自分がどのような状況にいるのか知りたい。

『ようやく起きましたか？』

透明感のある女性の声。それは聞き覚えのある声だった。

『ベアンテ……なのか？』

『はい、マスター』

ベアンテの声をきっかけに次々と記憶が戻ってくる。確か最後に俺はユーリイと一緒に巨大化したヴレイン目がけて槍で貫いたはず。そして目の前が真っ白になったと思ったなら……そこからの記憶が全くない。

『ご混乱の様子だと見受けます。私が説明いたしましょう』

断る理由もないので頷く。どうせ一人で考えても答えは出てこないのだ

『まず今現在ここはいったい何処なのか？ という疑問があるでしょうがそれは話を進める内に自ずと分かってくるでしょうから説明を省きます。』

あの時、私のマナの影響をほとんど受けたマスターはいつ死んでもおかしくない状態でした。同時に私自身のマナもヴレインの巨大化によってほとんど失ってしまい、消滅しかけていました。そこで緊急措置として私は残ったマナでマスターの延命措置、つまり精霊珠の塊で包み込み…』

『ちょっと待ってくれ！ 俺はマナの影響で死に掛けたらしいが、何でそのマナを使って延命措置が出来るんだ？ 普通悪化しそうな気もするが……』

『どうやらマスターは少し誤解をしているようです。私がマナを扱うのと、マスターが直接マナを扱うのは体に及ぼす影響に天と地ほどの差があります。なので私がマナを扱ってもマスターの体には何の問題ありません。私を介してマナを使う場合も同様です』

『……一応は理解したよ』

『では説明を続けます。精霊珠でマスターを包み込んだ後は近くの空の柱へ移動してマナの回復に努めているというわけです。つまりここは空の柱の中ということになりますね』

空の柱というと確か見た目大樹だったが、言葉を話せるほど長い時を生きた木だったな。

まあその声を聞けるのも俺が植物を愛するエルフぐらいしかいないだろう。

『そして空の柱でマナを回復し始め今日でおよそ一年になります』

は……！？

『すると俺は一年間も寝ていたというわけか!？』

俺の最長睡眠時間である十三時間を優に越えているだ!？　これならギネス狙えるな

『はい。そしてマスターのmana汚染はまだ治療できてなく、私のmanaが回復するまでここから出ることはできません』

『百歩譲って俺はいいとしてベアンテは一年も回復し続けているのにまだmanaが回復してないのか?』

『そうです。限界量のようにやく半分と言ったところでしょいか』

きつとゲームだったらベアンテのMPは完全にカンストして画面に表示しきれていないだろう。魔力ポンプと言っても過言ではない。

『そして肝心のマスターがmana汚染から回復する方法は簡単です。人の中にある魔力、オドを延命措置が続くであろう四年後までに大量に注いでもらえば汚染は浄化されるはずです』

『おお!　四年とはなかなか条件が厳しいけど、まだ救いがあつたか!』

しかしそんな俺に水を差すように、ベアンテはただしと付け加える。

『ここはヴァロ大陸の東端に位置するコロ大湿原の奥地。ザルナ王国の東に位置するカヤ国の治める土地で、コロ大湿原はロッドマスターにいたシンの森と同じくらい生存者の少ない場所です。つまり人が来る可能性が極端に少ないのが唯一絶対の難点でしょう』

『ダメじゃん！！　むしろ最悪じゃん！！』

『……残り四年頑張つて生きましょう！』

『かなりの高確率で逝くと思う』

ここで目を開けることも体を動かすことも出来ずに死んでしまうのだろうか。

……出来れば誰か助けてください。それなるべく早く

＋　＋　＋　＋　＋

この世界には五つの大陸がある。
まず現在地であるヴァロ大陸。

そして浮遊大陸シルム。その名の通り雲の発生する高さに浮いていて、ワイバーン船で近づくことが出来るのは年に一回シルムの高度が下がる時期にだけだ。

移動大陸、ムーヴ。これまた名前どおりに常に移動し続けている大陸。だが不思議と他の大陸とぶつかることはないらしい。……謎だ
氷結大陸、コキュートス。その大陸全体が薄い氷でドーム状に囲まれているらしく、いまだ開拓されきっていない。

魔法大陸、グリムフォン。この地に住むものは全て魔法を使えるといわれており、『原典の時代』に失ったとされていた技術も多く残っている。

なおこの大陸により魔物の生態、種類は変わっていて、たとえ同じ

生物でも姿や行動に激しく差がでると言われているのだ。

『まあ、この世界における地理の一般常識としてはその程度でしょうね』

認めたくはないが予想通りここを訪ねにくる人は未だいないようで俺はベアンテからこの世界の一般常識を学んでいた。何も見えず、動くこともできないのはやはり暇で碌にしてこなかった勉強も楽しく思える。もしベアンテという話し相手がいなければ早々に狂っていただろう。

『はあゝ、早くここから出たいな』

『まだたった二ヶ月ですよ』

『そうは言ってもこの状況じゃな』

ベアンテによるとここは洞窟の中だが、空の柱があまりにも成長しすぎて洞窟の天井を突き抜けてしまったらしく、開いた天井から太陽の輝きや月光が降り注ぐ綺麗な所らしい。

そんなことを聞かされて、ぜひその美しい光景が見たい俺は必死で目を開けようとしたが

瞼は岩のように硬く一ミリたりとて動かない。

こんな究極の引きこもり生活で食事も運動もとらずにいて大丈夫なのかと聞いたところ、そのための延命措置として俺を精霊珠に閉じ込めたのだと言われた。

最近じゃあ余りに暇すぎて脳内で師匠や通常時のブレインと闘ったりする。フィランが今いないのが本当に惜しい。脳内でツンデレさせまくっているのなんとか落ち着いているが何時禁断症状が出る

か分からない感じた。

勿論脳内ではミサゴを使つての空中からの攻撃も試して師匠と闘っているのだが、今の所

234戦中0勝234敗という素晴らしい結果を誇っている。

『マスター弱すぎです』

『師匠が強すぎなんだよ!! どうして死角からの攻撃を防げるの!? 真つ向勝負だと一分もしない内にやられるしさっ!!』

『では気分を変えてブレインと闘えばよろしいのでは?』

『気分変えられねーよ!むしろ実力の差にもっと落ち込むわ!!』

あと最近分かってきたのがベアンテはSだということ。

口調は丁寧で俺を呼ぶ時もマスターと言うが、内心マスターにどんなルビを振っているかわかったもんじゃない。候補としては豚、奴隷、下僕などがあげられるな。

『そんなこと考えていませんよーマスター（豚野朗）』

『今確かにルビが見えたぞ! そんなに俺を蔑みたいか!?』

『どこかに俺の心を労わってくれる女神はいないものか?』

『何言っているんです。ここにいるじゃありませんかマスター?』

『すまない。今の俺は目が見えないから目の前にいるのであろう女神様が見えないんだ』

『何をとち狂ったこと言っているんです。……私ですよ』

ベアンテはそれまでのおふぎけの空気を一瞬で取り払って言い放った。まるで喉元にナイフを当てられているようなそんな殺気が俺に押し寄せる。

こゝこれは俗に言うヤンデレかつ！？

フィランがツンデレだからってお前がそんな新ジャンルを開拓しなくてもいいんだよ！ 本当に！！

勿論怖くて口には出せなかったけど……心の中で叫んだ。

六十二話 死か生か？

ベアンテのヤンデレ振りが発覚して二年。ようやくベアンテのマナは回復したらしいが当然のごとくオドをくれるような人間は訪れていない。

……正直暇だ。ベアンテとの話の話題は外の様子で始まり外の様子で終わる。

「今外はどんな感じ？」と聞くと『小鳥が二羽楽しそうにしています』や『今日は曇りですね』と返ってくるのが普通で、違いといえば小鳥の数だったり天気だったり雨だったり、その程度の違いしかない。

その分俺は妄想という名の脳内シミュレーションで日々訓練する毎日。

なかなか師匠がタ・オ・セ・ナ・イ

妄想の中の俺が一足飛びで着地する瞬間にミサゴを師匠目がけて突くと見せかけて槍投げするがそれを余裕でかわされる。続けて【天沼矛】と【地虚矛】の連撃。

槍が幾重にも見えるほど素早い攻撃でも師匠の黄金の槍は弾き、それ以上の速さで反撃さえした。そして不意打ちでミサゴを後ろから呼び寄せて攻撃したがそれすらも読まれ逆に利用される始末。ちなみに今日も連敗記録更新中♪

槍だけの勝負じゃ勝てないことが分かったので、ミサゴに乗って上空からマシンガンのように種を打ちまくっての絨毯爆撃でボロボロにしてやった。

その後も蔓で拘束した後たこ殴りしてやったり、師匠の体力がなくなるまで食人植物の群れを呼び寄せてやったりすること二時間。よ

うやくすつきりした！

『そこまでやるのは連敗記録が四桁になった時以来ですね』

『仕方無いだろう？　することがないんだから』

『私だっただけと激しく、陰湿にやるのにマスターは優しすぎます！』

『何故だろう？　褒められてるのに素直に喜べないぞ』

どんどん黒くなってくるベアンテ。数年後は精霊というよりか邪神になっていそうだ。

またそれが冗談ですみそうじゃなく本当に怖い。

『そういえば今日はいつもと少し外の様子が違うようでしたよ』

『本当か！？』

いつもと違ってゐるならなんでもいい

『この近くまで冒険者が来たようですが魔物の襲撃に遭い残念ながら……』

『何だともうっ、期待してたのに……！　ベアンテもどうにかしてここまで連れてこれなったのか？』

『すみません。私の介入が出来るのはせいぜい洞窟の中ぐらいなんです』

イライラしてついベアンテにあたってしまった俺に本当にすまなさそうにベアンテが言ったので、後悔の念がこみ上げてきて素直にあらやまった。ベアンテも気にしていないですと答えたのでしばらく静寂な空気が流れた。

そして月日が流れる。

今が昼か夜かも分からない俺は精神体のままその無駄に長い時を生きた。

こうしている間も俺の体はマナによって汚染されているらしい。ベアンテの延命措置もマナ汚染を限りなくゆっくりにすることしか出来ない。症状は確実に進行しているのだ。

まあだからといって特に痛みも走るわけでもないが、痛みがあったほうがマシだと思うぐらい代わり映えのしない時間があるだけ。唯一あるいいことと言えば最近ようやく師匠に真っ向勝負から勝てるようになったということかな。

十回に一回ぐらいだが……

そしてベアンテの言った延命措置の続く四年後まであと一日。

それまでも近くに冒険者は来たようだがこの洞窟まで辿りつく者はいなかったようだ。

『なんだかここまで来ると、もう無駄な期待は抱かないほうがいい気がするきたな』

『大丈夫です。きっと来ますよ！……たぶん』

『なんだか今凄いい死と正面から向き合う自信があるんだが……』

『ダメなほうに自信満々でどうするんです!』

『……………』

『……………』

『……………』

『……………』

『……………』

『……………!?!? き、ききききき来ましたよ……!?!』

『そうか、ついに人生最後の時が来たか。今の俺なら大丈夫ださあ
来い!?!』

『違います! この洞窟の直ぐ側まで3人組みの冒険者が来ていま
す!?!』

『なななんだと……!?! 俺の死を迎える覚悟を台無しにする気が
!?!』

『いつまでそんなことを言っているんですっ!! ああ!?! この
洞窟に入ろうかすごく迷っています。このままじゃマスターのお命
が……!?!』

やばい、それはヤバイ! 仙人モードでいる場合じゃないぞ! 俺
は命が惜しいんだ。
まだまだ死んでたまるか、八十まで生きて老衰で死ぬんだ!!

『なんでもいいからやってこっちに気を惹かせるんだベアンテ！』

『は、はい分かりました！』

すると初めて自分の体が前方に動いている感覚がある。

『マスターを閉じ込めている精霊殊の光であの冒険者達の気を惹く作戦です。更にマスターが閉じ込められているのを見て冒険者は魔法を使って助けようとするでしょう。その時オドを吸ってマナ汚染も浄化してしまおうという一石二鳥のアイディアです！』

『素晴らしいアイディアだぞベアンテ！ 影の帝王という称号を与えてやるう！』

『そんなことを言っている間に冒険者の方がこっちへ来ましたよ。あつ、今マスターを見てチームのリーダーらしき女の子が助けようとマナとオドの合成を始めました。オドの量も汚染に充分です！精霊殊の方はオドを吸収した後、破壊されるようになっていきますのでマスターはあの冒険者達に素晴らしい第一印象を与えてください。人付き合いは第一印象が肝心ですよ』

『おう、ようやく出れるんだなここから！』

長い、長い時がたった。外は今どんな様子なんだろう？

ユーリイは？ マキアは？ ナーガは？ クロトは？ 師匠は？

リザルトさんは？ シクエちゃんは？

そして俺の愛槍であるフィランはいつたい今頃どうしているのだろうか？

気になることだらけだがそれもこれから自分の足で、目で確かめれ

ばい。

耳元でパリンとおそらく精霊珠が割れた音が聞こえた。

＋　　　＋　　　＋　　　＋

「だからってどうしてコロ大湿原に行こうって話になるんだ!？」

私に唾を飛ばす勢いで怒る小さい頃からの幼馴染のランスフィール
ドゥフラン君。通称フラン君。

「でもルクゾの宴に入るにはそれくらいの実力がなくちゃ! きやつ
!？」

慌てて口を押さえ込んだけどどうやらフラン君にはばれちゃったみたいだ。

「お前ルクゾの宴に入りたかったのか? 無理無理止めとけ、お前
みたいな弱虫じゃ門前払いだよ」

「私弱虫じゃないもん! それにお前じゃなくてアリアだもん!」

いつもフラン君は私のことをアリアじゃなくてお前とか言うのはや
めて欲しい。昔はアリアちゃん、フラン君って呼び合っていた仲な
のに!

それをお父さんに言った所、そういう年だから仕方ないんだよと微
笑ましそうに笑っていたけど私には理解できない。

「それに私は本当にあのルクゾの宴に入りたいの！ 確かに蛇やねずみが出た時は今でも少しビクツとしちゃうけど弱虫なんかじゃないよ。……少なくとも近所の女の子よりは」

「……どうしていきなり冒険者に、それもギルドチームランクAのルクゾの宴なんかに入りたいなんて言い出したんだ？ 別にこのまま魔法使いの道を歩めばいいじゃないか？」

「それは……」

それを話すには数ヶ月前に遡らなければいけない。

「数ヶ月前にお父さんの行商でザルナ王国に行ったとき私は女神と会ったの」

「女神……！？」

フラン君の反応もごもつともだけど、私は一応話を最後まで続ける。そうしなければ誰だって理解できないもんね。

「お父さんが商売している間、私は邪魔だと言われザルナ王国の首都、確かエリアノっていったっけ？ そこで暇をつぶそうと歩いていたの。そしてちょっと路地に入っていたらいつの間にか何処にいるのか分かんなくなっちゃって……」

「バカッ！ お前みたいなちんちくりんが都市の路地に入ったら危ないだろっ！！」

フラン君は大声で怒鳴って私の頭をポカリと殴った。でもそうされても仕方無い

「うん、ごめんなさい。それでそのまま迷っちゃってたらなんだか大人の人に囲まれちゃって『お嬢さん、遊ばない?』とか誘うの。でも私はその人たちの目が怪しかったから勿論断ったの。そしたらその大人の人が無理やり私を押し倒して…」

「おいっアリア大丈夫なのか!? 乱暴なことはされたのか?」

「ちよっ!? フラン君!?」

フラン君がいきなり私のことを両手で持ち上げて体に怪我がないか確認してきた。私はこそばゆいのと、恥ずかしいのと嬉しいのでアワワしちゃったけどしばらくたって落ち着いたフラン君に語りかける。

「私は大丈夫だよ。何もされてないから。それよりさっきフラン君が私のことアリアって呼んでくれたのが嬉しかったよ」

「そ、そうか／＼／＼」

フラン君は我に帰ると少し赤面しながら私を地面におろした。チェッ、もう少ししてもらいたかったのに……

「でね。あきらめかけたその時声が聞こえたんだ」

「声……!?」

「そう、『お前たち、何をしているんだ?』って声。その人の方を見た時、驚いちゃった。

私が今まで綺麗だと思ってきた人の何十倍、いや何百倍も綺麗な金

髪の人で、その人の方をみた大人の人们たちも興味を移したみたいで『あんたが遊んでくれるのかい？』って言ったんだ。そしたら女の人はずい怒って『クズが、これだから男は嫌いなんだ！』っていつて剣を抜くと、こうズババーンとやっつけちゃったの！！」

フラン君は私の話しにどこがおかしいところがあつたのかクスクス笑っている。なんだかバカにされている気分だ。

「それで？」

「それがすつごくかつこよくてね。後でお父さんに聞いてみたところなんとルクゾの宴のギルドマスターらしいの」

「それで懂れたってわけか。でもコロ大湿原なんて危険な場所にわざわざ行くこともないだろう？」

「それが違うの。なんでもその女の人、ユレイアさんっていうんだけどね。その人はコロ大湿原に危険なシンの森を突破した人らしいんだ」

「……バケモンだな」

失礼なことを言うフラン君だ。でもきつとフラン君もユレイアさんを見たら惚れてしまうだろうから化け物だと思っててくれていいのかな？ いやでもユレイアさんみたいな綺麗な人を化け物だなんて……

そんな風に悩む私を見て何を考えたのかフラン君は手の平に拳を打ちつけ決断した。

「なら俺も行くぞ！」

「ええっ！？ ダメだよ、危険なんだよ」

「ならお前パーティはどうするんだ？」

「えと……それはまだ決めてないけど」

「ほら見る！ お前みたいな弱つちいやつが生きて帰ってこれるとおもってんのか？ 俺みたいに『黄金の槍』の力ナゼ並みの実力がないやだめなんだよ！」

「でもフラン君は最近近所の槍道場で合格もらったばかりだよね？」

「そんなのは実戦しだいでもうとでも強くなるんだよ」

フラン君はどうしても着いて来ると意気込んでいるけど私のせいで傷つけるわけにもいかないし、それは勿論フラン君が着いてきてくれるほうが心強いけど……

「なに……話している？」

そういつて後ろから声をかけられ振り向くとそこには私のよく知った人が。

「シーアさん！」

シーアさんはボブヘアで上はタンクトップに下はミニスカート、少々露出が多いが立派な冒険者さんだ。普段あまり感情を表に出すことがないので冷たい人と思われがちだが話してみると優しく可愛い人だということが分かる。そして私の魔法の先生でもある人だ。

一連の事情をシーアさんに話してフラン君に諦めさせてほしかったけど、

「それ……面白そう」

といってフラン君の同行も認めてしまった。なんでもコロ大湿原の奥地にある洞窟に興味があるらしくそこを調べるついでに私達を連れて行っていいということだ。

私は歓喜したけど途中で難題にぶつかってしまい意気消沈する。

「お父さんがたぶん許してくれないよう」

娘の私から言ってもお父さんは厳しい人で夜遊びはもちろん、門限までに帰らなければ物置に閉じ込める。それが愛情によるものだと分かっているので何も言えないし……

夕食後、勇気をもってお父さんに頼んだところ当然のごとく断られた。でもあきらめずに説得を続けること一時間、シーアさんがいるから！と言った所で急にお父さんの表情が変わる。しばらくお父さんは悩むと、「仕方ないな、シーアさんから決して離れるなよ」と許してくれた。

私ははしゃぎまわったが同時にいったいシーアさんは何者だろう？
と思った。

翌朝、準備をし終わった私はお父さんにいつてきますと告げ、でかける。

お父さんは最後まで心配そうだったけどほっぺにキスしたら悲しそうなお父さんの表情で送り出してくれた。私も泣きそうだったけど出発の日

に泣いていたらランス君にまた言われちゃうので泣いていない。

「よろしくねシーアさん♪」

「ああ……よろしく」

「俺に任せりや余裕だったのー!!」

こうして私達は旅立った。

そしてコロの大湿原にたどり着いて初めて私は自分の考えの甘さに気が付いた。

実際魔物たちはかなり危険で、なんとか私の魔法とシーアくんの槍で倒そうとしても何一つ通じなかった。火に弱い植物系モンスターは私のファイヤーボールをくらってもビクともせず、フラン君の槍は魔物に当ることはなかった。

無茶ばかりする私達にシーアさんが初めて本気で怒ったのを覚えている。

さすがに懲りた私達はシーアさんの指示通りに動き、旅をすすめた。シーアさんの動きはすごいもので、手にした短剣と魔法で襲ってくる魔物を次々とやつつけてしまったし、途中で荷物を持つのがしんどくなった時はフラン君が奪い取るように持って行ってしまい、私は良いとこ無しだった。

それでもシーアさんは初心者はこのものだよと優しく励ましてくれて、フラン君はぶっきらぼうな手で私の頭を撫でてくれとても嬉しかったのを思い出す。

そしてようやく目的の洞窟にたどり着いたときは私とランス君はヘトヘトだった。

「はふゝ、ようやく着いたよ！」

「すこゝしだけ長かったな」

洞窟は途中から大きな木が天井を突き破って生えていて、シーアさんも興味深そうに眺めていた。でも洞窟の中に魔物がいたら危ないので皆中に入れないでいると急に洞窟の中が緑色に光りだす。それはとても淡く、神々しいもので私は誘われるように中に入っていく。

どうやらシーアさんもフラン君も気持ちは一緒に私に続くように入る。

「何でしょうかシーアさんあれ？」

私が指差す先にはちょうど人ぐらいの大きさのひし形の宝石が浮いている。

「どうやら中に人が……入っているようだ」

「えっ！？ 大変助けなくちゃ！！」

近くで見ると確かに人のようなものが入っている。でも中がハッキリ見えない所為で生きているかどうかも定かではない。

とにかく私の使える最も強い治療魔法で治そうとその宝石に手を当て魔法を行使した瞬間、その宝石が砕け散った。キャッ！？ と思わず声が出てしまい、そんな私を守るようにフラン君が立つ。

「何だ？ こいつは本当に人なのか？」

フラン君からそんな声が漏れたのも頷ける。巨大な宝石から現れた人はゆっくり地面に降り立つと一歩ずつこちらへ向かってくる。それだけなら何の不思議もないけどその人が一歩足を踏み出す度にその足下からたくさんの植物が生えてきて、もう片一方の足を出すころにはその植物が枯れていき、再び踏み出したほうの足下からまた植物が生えてくるを繰り返した。そんな不思議な光景を見せられては人を疑うのも無理は無いと思う。

またその男の人の格好も変だった。魔法使いが着るような赤いローブに、額にはイバラでできた冠を被り、左腕はつる草の刺青がびっしり入っている様子は異様だ。そのくせ顔つき自体は少し整ってはいるもの至って普通。さすがにこのような経験はしたことがないのだろう、シーアさんも普段の無表情を捨て、ポカーンと放心状態でも可愛い。

そしてその場の注目を集める彼が最初に放った言葉は、

「やっべー、太陽超眩しいな。でも、嫌いじゃないぜ……お前のこと」

……やたらキザでロマンチックだった。

六十二話 死か生か？（後書き）

イツキが精霊殊から出た後の行動は、もののけ姫のシシ神がやったやつです！
いつかやらせたいと思っていた！！

六十三話 出会いとか再開とか（前書き）

作者はけっこう二次創作作品よりこっちのほうが好きかもしれない。

以上作者の戯言でした！

六十三話 出会いとか再開とか

やはりベアンテの言ったように第一印象は大切だな。冒険者の気を惹き、それでいてこいつは安全で信用できる奴、そして頼りになる奴だと思わせるのが一番だ。

なにせ五年ぶりの外の世界なのでいろいろと情報も手にいれたいし、ベアンテと話してばかりいたので久しぶりに人とコミュニケーションもとりたい。

どちらかというと後者を優先したいのが俺の本心だ。

精霊珠がパリンと砕け散ってゆっくり地面へと降り立つと、洞窟の隙間から太陽の光が俺の目を焼く。五年ぶりの日差しに思わず呻いてしまいそうだったがここでそうすると目の前の冒険者の人にいらぬ心配をかけてしまうだろう。

薄目を開けながら、足下を確かめるように一歩一歩進む。俺の踏みしめた土から若葉色の植物が生えてくるのをイメージしながら歩き、足を離すと枯れるように設定する。

これで俺の力をアピールするつもりだったが、目の前の冒険者、特にクールビューティっぱい女性が想像以上に驚いてしまっているのに気づきやってしまったと思った。

力強さをアピールしすぎた結果、むしろ神々しさが出て近寄りがたい人物だと思われてしまったみたいだ。なんとかこの空気を和やかなものにしなければ動揺した冒険者に攻撃されてしまうかもしれない。俺を助けてくれた恩もあるのでそれはどうしても避けたかった。……そして俺がだした答えは、

「やつべゝ、太陽超眩しいな。でも、嫌いじゃないぜ……お前のこと」

更にその場を静寂が包んだ。

『マスター、人として軽蔑します』

『嘘ッ！？ そんなにひどかったか？ 俺としては警戒心を削ぐ素晴らしい言葉だと思うんだが……』

『警戒心はゼロになりましたが、不審さはグンと上がりましたね。あと犯罪者の匂いもプンプンします』

ベアンテの痛烈な言葉にどんどんHPを削られているとようやく立ち直った冒険者の中の少女。15〜17歳ぐらいでベビーフェイスの大人しそうな子がおそろおそろ話します。

「えゝと、神様ですか……？」

「実はそう「んな訳ねーだろ、こいつは犯罪者かなにかだよー！」

肯定しようとした俺の言葉を遮った少年。髪の毛をツンツン立てて活発そうなガキだ。

誇らしげに槍を持っているがその手つきは心もとない。何でこんな低レベルのガキがここまでこれたんだろう？

ちなみに先ほどの少女とこのガキの対応に若干の違いを感じたかもしれないがそれは気のせいだ。

「確かに……怪しい」

先ほど驚いていたクールビューティーちゃん。タンクトップとミニスカートという素晴らしい露出度だ。無表情っぽいながらもまたいい。

それとこちらへの警戒の仕方からして強さのほうもどうやら申し分ない。少女とガキがここまで来れたのもひとえにこの女性のおかげだろう。

「待てっ、俺は怪しいものじゃない！ 断じて、絶対だ！！」

「余計……怪しい」

「待ってくださいシアアさん！ さすがに疑ってばかりは失礼ですよ」

素晴らしい少女だ。

「分からないぜ。こいつは人間に擬態した魔物かもしれないんだぞ。変な宝石に閉じ込められていたし、植物だって生えてたし！」

黙れ小僧！！ せっかく打ち解けれそうだった少女の警戒心と呼び覚ますな！

カオスになりかけている状況の中俺の腹が突然ギュルルと鳴り出した。素晴らしい空気を讀んだそのお腹に内心グッジョブ！

シアアさん？ もそれで警戒心が解けたようで短剣を鞘に収め、それを見た少女やガキもひとまず落ち着いた。

「とりあえず……ここで休憩する」

「やったー！」

「シアさん、こいつはどうするんです!？」

「危険……無さそう。でももしアリア傷つけたら……殺す」

混じりつけない殺気に背筋がゾクツとするが、それで生きているという実感も湧いてきてあまり怖くはなかった。すっかり俺はバトルジャンキーになってしまったのか？

師匠と比べると大抵の人の殺気は微々たるものだからなのかもしれないと結論づけて素直に頷いておく。

冒険者の皆さんと洞窟の外へ出てみるとそこはやはり大湿原だった。巨鳥の群れや、遠くのほうにある池にはシャチみたいな生物が跳ねていていかにもここは危険ですよと親切に教えてくれているようだった。

まあそんな危険な景色でも、例え氷山の中でも火口の近くでもきつと俺は喜んでいただろう。胸いっぱい新鮮な空気を吸い込んで深呼吸しなければあふれ出る興奮も抑えきれなかった。

「やっと出れた~~~~~!!!!」

少し冒険者たちは煩そうだったがこうでもしなければ俺の気持ちは晴れないので我慢して欲しい。

その後景色のいい洞窟の出口で休憩をとることになった。魔物を呼び寄せることになるので火を使わない味気のない携帯食糧だがそのあまりの美味さに不覚にも泣きそうになった。

五年前はあまりの不味さに碌に食べなかったかもしれないが今は違

う。美味さで人は泣けるんだ！

「これがそんなに美味しいんですか？ ……とっても酷い目にあつてたんですね」

慰めるように俺の頭を撫でる少女、名前はアリアというらしい。けっこう年下の子に慰められる俺っていったい何なんだ？ と思わないうでもなかったが優しさは伝わった。そんな俺を親の敵でも見るような目で見つめる少年、確かフランとかいったかな？ 心配しなくてもアリアちゃんは恋愛対象じゃないので安心しなさい。

だがそのフランはそうとは知らず憎しみのこもった目線で見続ける。うざいから完全に無視だ無視。

「どうしてイツキさんはあの宝石に閉じ込められていたんですか？」

心底不思議そうな表情で訪ねるアリア。別に真面目に答えてもいいがどうせ信じられないだろう。ここは適当に答えておいたほうが無難だな。

「悪い魔女に騙されてね」

『マスター、直ちに訂正しなさい。さもないと……ヤリマスヨ』

「いや……可愛い魔女に騙されてね」

「……！？ それに何か違いがあるんですか？」

「それが大有りなんだよ（俺の命に関わるからな）」

「そ、そうなんですか。じゃああの植物は何ですか？ オドを感じ

なかったし、魔法じゃありませんよね？」

なかなかこの娘はよく見ているな。見た目通りのポワポワした人物じゃないようだ。

「あれはその魔女からかけられた呪い…いや、祝福？」

呪いといいかけたところでベアンテからの殺気が飛んだので急いで言い換える俺。

さすがにアリアちゃんも不審に思っているようだが優しいので深く探りをいれてこない。だがそんな空気を読まない男もいたようで、

「てめえ！ さっきから適当なことばかり言ってアリアを騙しやがつて！！ ムカツクんだよ。ここで殺してやつてもいいんだぞ！」

「何言ってるのフラン君！？ この人はさっき助かったばかりだし酷すぎるよー！」

「アリアちゃんの言うとおりだぞフラン君」

「つてめえ！ 何気軽に呼んでやがる」

『マスター。あまりからかうと可哀そうですよ』

『これもれっきとしたコミュニケーションの一つだよベアンテ』

「フラン、危ない！！」

俺へ意識が集中していたフランは背後で棍棒を振り下ろそうとするゴブリンに気づかなかった。シアさんが注意を呼びかけるがもう

遅い、その棍棒は勢いよく振り下ろされた。

だが既にその場にフ란の姿はなかった。俺が地中から蔓を生やしてフ란を安全地帯に引つ張り込んだのだ。ターゲットを見失ったゴブリンは醜悪な顔を更に醜くして怒ったがほどなくしてゴブリンの首にナイフが刺さる。俺はシアアさんの投げナイフで即死したゴブリンの血で携帯食糧を汚さないようサツと逃げた。

「大丈夫フ란君!？」

「ああ、何とかな。いきなり何かに引つ張られたと思ったんだけど……?」

「命あつての冒険者稼業だぞ少年」

「ハッ!? そういえばその指輪は冒険者のものですね。いったいどこのギルドに所属しているんですか?」

アリアちゃんは急に俺の人差し指の指輪に興味が移ったのか興奮して問いかける。

「……仲間と一緒につくろうって約束したんだけど、その時は次々と事件が起きて忙しくてねえ。正式な手続きがまだ出来ていないんだ」

あの時はゼノア教との全面戦争だったし、ナーガもその時いなかったからそんな時間もなかった。でも今はユーリイがギルドマスターとして『ルクゾの宴』も有名になっているかもしれないな。

ああ思い出したらはやく会いたくなってきた。……でもそういえば

俺はいつたいどうなったと思われているんだろう？ ベアンテの話だといきなり姿を消したんで死んだとは思われていないだろうか、失踪かな？

何にせよ会って元気な顔を見せなくては！！

そうと決まれば即行動

『待つてくださいマスター！！ まだこの近くに空の柱があるんです。そこで力を吸収してからにしましょう』

『ええい、そんなのは後だ！』

『助けてもらった恩を仇で返す気ですか？ せめてこの人たちを大湿原を抜けるまで無事に送り届けてあげるぐらいはするのが礼儀でしょう。そして次に行く空の柱で力を制御すれば癒しの力が一段と強くなって誰かを治してあげることもできるはずです！』

誰か……だと！？ それは勿論手の平を火傷で覆われたユーリイに違いない。

『……それは五年前の火傷もきれいに治せるのか？』

『はい、生死に関わる傷じゃなければ治るはずです』

『場所？』

『ここから北東に二十キロといったところですかね』

むう確かに助けてもらったアリアを放っておくのは胸が痛むし、何よりこの娘はやさしい娘だ。シアさんみたいな美人を守るのも男

の役目。

フランとやらはなんとかなるだろう。さすがに命の危険があれば助けるけどそれ以外はどうすることもない。

考えてみるとなんだか楽そうだぞ。

「あのーシーアさん、少し寄るところが出来たんですけど」

モグモグと携帯食糧を食べているシーアさんの機嫌を損ねないように慎重にお願いしてみる。

「無理……アリア、フラン守りながら……精一杯」

要するに自分のことは自分で守れってか？ 俺でもそのぐらいは出来るかと告げると、

「お前……植物操る。怪しい……連行」

いつさい信用しないということですね。こんな美人に疑われるようなことをした記憶はないだが。……なら別の手を考えるのみ！

「なら妥協案があるんですが」

「妥協案……？」

「その場所へ行くまでに襲ってきた魔物は俺に全部任せて、シーアさんはあの二人を守るといっのはどうですか？ もし魔物が俺の手に負えないようだったら俺を囿にして逃げればいいし、俺が戦っている間に何か作戦を考えることも可能かもしれませんよ……」

「何……考えている？」

「いや、これは俺の我侭ですし、なによりあなた達は命の恩人ですからね。このぐらいやるのは当然ですよ」

「……そう」

少し驚いた表情をするシアさん。普段無表情なだけあってこういうちょっとした時に表情が出ると萌えるな。

まあ結局俺達が発したのは太陽がちょうど真上に昇った頃になった。予想以上にアリアちゃんとフランに疲れが溜まっていたらしい。

道中襲ってきた鋭い牙の生えたペリカン、ペリカンという何とも捻りのない名前らしいがそいつの噛み付きを華麗な動きで避ける……ことも出来ず俺はあっさり左手をバクツといかれた。久しく動いてなかったたので頭では避けられているんだがその動きに体がまだついてこない。

「だ、大丈夫ですか!？」

アリアちゃん達は少し離れたところで見ていたので助けに入るにしても遠すぎる。

俺は噛まれた左手からあの有名な有毒植物、トリカブトで特に毒素のある根の部分を生やして食わせるとペリカンの様子が徐々におかしくなってくる。

アリアちゃんたちから見るといきなりペリカンがおかしくなったように見えるが症状はあきらかに中毒。

ペリカンはたまらない様子で左手を吐き出し、大きな翼をバタバタ動かして呼吸困難のつらさを訴えているようだ。

しばらくして動きを止め、ピクリとも動かなくなった。死んだのだ。左手もペリカーンの牙で血を流していたけどベアンテの力で傷跡もまったくない。

フランから槍を借りればもっと楽に殺せていたと思うが、フランに嫌われているようなので無理そうだし何よりフィラン以外の槍を使うのは浮気だ！

「怪我……治す」

戦いが終わったのを見計らってシアさんが包帯を持ってくる。少し態度が軟化したようで非常に嬉しいのだが、あのペリカーンに噛まれて怪我が全く無ければまた警戒してしまうだろうので左手を口ーブの裾で隠し、断っておく。

「無理……するな」

「なんのなんの。この程度は怪我の内に入りませんよ」

「……そうか」

悲しそうにうつむくシアさん。俺よりか年上っぱいけどお家に持って帰りたいほどかわいいぞ！

その後も次々と襲いくる相手を手札を隠しながら相打ち覚悟で挑んで行ったが、途中からはシアさんも戦闘に参加してくれるようになり嬉しかった。そして俺も大分動きに慣れてようやく楽に魔物を倒せるようになった。この空の柱に着いた。近くで見ると空へとどこまでも伸びているように見えるほどの大きさだ。

「わあゝ大つきいですねゝ！」

「はしゃいで怪我するなよな」

「もうっ、私子供じゃないもん！」

なんとも微笑ましい会話だな。

『マスター急におっさんぽくなりましたね』

『若い子には敵わんわい』

『まだまだですよお爺さん』

ベアンテと老年夫婦漫才をひとしきりやって満足いったところで空の柱の裏側に回りこむ。ベアンテは中々ノリがいいからつつい掛合いが長引いてしまうのが考え物だな。

ちなみに空の柱の裏側に回りこむ理由は俺が空の柱の中に入り込むのを見られなくなかったからだ。

あたりに誰もいないのを確認したところで、水の中に潜り込むように木の中へズブズブ入っていく。毎回木の中に入るとすぐ落ちて着くのは何故だろう？ と考えると幹の中で大きな意志を感じた。

『ようこそいらっしやいました統率者様。後、その宿主様』

おいおい、俺は完全にお荷物＆後付かい！！ と気軽につつこもうとした所、俺の中のベアンテの気配が完全に変わったのを感じた。この感じは俺がベアンテをないがしろにした時の殺気の数十倍いや格が違うというべきか？ とにかく尋常じゃないプレッシャー

だ。

『私の手足に過ぎない駒が何を言う。親愛なるマスターを侮辱するとはお前は何様だ？』

決して声を荒げることはないがその分怖い。冷静な切れ方をする人が一番怖いとよく聞くがまさにその通りだ。

『も、もももうしわけありません！ 単なる駒に過ぎないこの命、どうぞ統率者様のお心のままに使ってください！』

『貴様の命など我がマスターの誇りに比べる値もない！ そのような卑しい命を捧げられても迷惑なだけ、まったく無駄な生涯だったな』

ベアンテに言われる度に目の前の意志がみるみる小さくなっていく。さすがに少し可哀そうだ。

『おいおいそこらへんにしとけよベアンテ。悪気はあったのかもしれないけどユーリイの治療にはそいつの力が必要なんだ』

『フー、仕方ありませんね。マスターがおっしゃるなら。しかし覚えておけ！ 今後マスターを侮辱するとお前たちを植物の仲間から外して晒し者としてくれよう』

『ハハッ、しかと承りました！ ではこれより最上者様へ力をお渡しします』

宿主から最上者様とはだいぶランクが上がったものだ。統率者様にあたるのがベアンテだからその上の俺が最上者か、あまり大声で

言われると恥ずかしいし全く俺に向いてない言葉には違いない。

そうしていると胸の真ん中あたりにポワーンと暖かい力が注ぎ込まれていく。以前感じたような痛みが無いのは大変結構なことだが、なんだか達成感が全くないので本当に力がついているのか不安だ。

『これで終了しました。最上者様はこれより一日一回の完全治癒を行使できるようになりました。最上者様と統率者様の健やかたることを……』

完全治癒はその名の通り完全に治癒することだろう。これでようやくユーリイの手を治せる

『イツキとベアンテでいいよ』

『そういうわけにもいきません』

頭が固い連中だ。何百年と生きていると凝り固まった考えしかでないのか？

『ささつ、そろそろここから出ましょうマスター。冒険者の方が心配しているかもしれません』

ベアンテの言うとおりに幹から出ようとしたところであからさまに空の柱がホツとしたような気配をした。頭が固いわけではなく、ただ外と内を使い分けているだけなんだな。人間臭いところもあるもんだ。

外に出て直ぐにシアさんと目が合った。もしかしくても完全に俺が幹から出るところを見られていただろう。

「そこ……どく」

シーアさんは俺が出てきたところに秘密の通路があると考えたのか、俺を押しつけ幹の中に入ろうとしたが結果は当然。ゴツンといい音をたてながら幹と正面衝突をした。

「痛い……何故？」

「何故と聞かれても……」

『おいどうするベアンテ？』

『仕方ないですね。殺しますか？』

『平和的な解決方法を模索しているんですけど……』

『なら素直に話したらどうです？ どうせ冒険者を続けるならいずればれることですし』

それもそうだなと俺はシーアさんに自分の能力について説明したところすんなり受け入れてくれた。未だシーアさんの表情にあまり変化がなくて本当に分かったかもどうか怪しいがとりあえず説明はすんだので俺も気が楽になった。別に隠し通さなければいけない事でもないがやはり異端扱いされると俺のガラスハートが粉々になるのあまり進んで言いたくもないのだ。まあ、だったら精霊殊から出てきた時のあれは何だ？ と聞かれたら様式美と答えるしかないんだけど……

「……驚き」

本当に驚いているかわからない声色でシアさんは呟く。

「あつ、こんなところにいたんですかイツキさん！ 探しましたよ」

息をきらしながら駆け寄ってくるアリアちゃん。

「ちょっとお花を摘んでいたもので」

「そうなんですか、でもどこにその花があるんですか？」

アリアちゃんは素直すぎて冗談が通じないところがあるな。それも彼女の魅力なんだろうけど……

勿論お花なんて摘んでいなかったが、俺の力を使えば嘘も真になる。左手をサツと後ろで隠し手の平から白百合の花束を取り出す。

アリアちゃんも随分驚いたようで「魔法ですか、手品ですか？」とせわしく聞いてきた。

そしてしばしの休憩をした後、再び出発する。シアさんに聞いたところカヤ国の首都、イグンセンに向かっているらしく到着までに一週間かかるらしい。

勿論それまでの護衛は全部俺がやるわけで……

深夜襲ってきた狼の群れ、それも百頭以上の大軍勢。キャンプの周りをいつの間にか囲まれていたみたいで寝ているアリアちゃんとフランは俺のつくったイバラの壁の中にいてもらい、後方の憂いをなくした俺とシアさんは共闘して狼を追い払う。

狼の腸を切り裂き、分厚い毛皮ごと短剣で切り裂くシアさんは只

者じゃないことがわかった。しかも本人に聞いたところ短剣は本来の武器ではなく、新しい武器が手に入るまでの代用品でしかないらしい。

俺も負けてられないと両手の指先からマシンガンのごとく種を飛ばし狼の群れを一掃する。

アリアちゃんもフランも見えてないので思う存分植物を扱える楽しさは格別だ。

「俺の両手は機関銃<ダブルマシンガン>」！　ハーハッハッハ
「――！」

「真面目に……やれ」

『怒られましたね』

『でもこの言葉言うのと言わないのじゃ威力がかなり違うんだ』

狼の死体の数が群れの半分を超えはじめた頃、群れのリーダーらしい一番大きな狼が一声吠えると周りの群れはゾロゾロと逃げ出した。念の為にその後十分ほど警戒を続けたが気配は無かったのでおそろく大丈夫なのだろう。

狼との戦闘中、消えかけていた焚き火の火に乾いた木をくべて火を大きくすると両手をかざして手を温める。

ここら一帯は年中温暖だが、今の季節は秋の始めごろで息が白くなるほどではないが夜は少し冷え込むのだ。あたりに散らかっている狼の血と毛皮の獣臭さで居心地はあまりよくないが今更キャンプ地を変えるわけにもいかなないので一晩だけ我慢しよう。

「お茶……いる？」

シーアさんが火にかけていたヤカンからコポコポと木製のコップにお茶を注いで渡してくれたのでありがとうと言って受け取った。お茶は少し熱かったが香ばしくてとても美味しい。

「……シーアさんはどうしてあの子達をこんな危険なところへ連れてきたんですか？」

道中フランの槍さばきやアリアちゃんの魔法を見たが、まだまだ実戦で使えるようなレベルではない。まあ才能はありそうなのでいずれ使えるようになるかもしれないが少なくともあと三年はかかるだろう。はつきり言って足手まといだ。

「……経験は……大事。危険から……学ぶことが……大事」

「それだけが理由なんですか？」

「……実はある……人物探している」

その探している人物はこんな危険な所にいるとは思えないがそれは最後まで聞いてみて判断しよう。俺はシーアさんに続きを促した

「先輩が……言うには五年前に……突然失踪した人らしい。そして……その人は……自然がいっぱいある……所にいる可能性……高いらしい。名前は……イツ、ミ？ だったかも？ 後は……ロリコン？」

なんだか話がおかしくなってきた。五年前に失踪といえば俺と同時期。自然がいっぱいあるというのはベアンテの能力からそう推測したの

かもしれないし、名前も一文字違い。おまけに本人もうる覚えのようだ。ロリコンは……違うよ？

まさ……か、まさかね。話が少々上手すぎだし偶然俺と同じ境遇の人がいるかもしれないしね！

でも一応確認のために聞いておこう。

「ちなみにシアさんの所属しているギルドとその先輩の名前は？」

「……？ ルクゾの宴……マキアさん。最後は……ナーガさん」

ビーーーーーーンゴーーーーーッ！！！！！！

はい、それは間違いなく俺です。っていうかシアさん気づけっ！！！！
戦闘以外じゃとことん鈍いなっ、君は！！

……そういえば五年間も失踪しているなら普通死んだと思うのに
マキア達はまだ探しているのか。ナーガは絶対なぐる、顔の原型が
なくなつて別の人格になるまで殴る。

『あれ？ 照れてますか？ もしかしなくても照れているでしょマ
スター？』

全然照れていませんよ、ええ！

「様子……おかしい？」

「なんでもないですよ。……ルクゾの宴って有名なんですか？」

やはり自分のいなくなった後結成したギルドのことは気になる。必死でどうでもいい感じをアピールして話しているが、興奮で声が上ずってないか不安だ。

「……！？ 知らないの？」

心底驚いた顔のシーアさん。なんでもシーアさんの途切れ途切れの話を繋ぐと、ルクゾの宴はヴァロ大陸唯一のAランクギルドチームらしく冒険者で知らない人はいないらしい。

ギルドマスターはやはりユーリイらしいが基本的なことはナーガがやっていて、ユーリイやクロトの容姿からギルド入団希望者は男女問わず耐えないらしいが合格率は年に数人という厳しいものだ。

ルクゾの宴がそんなに有名になっっているとは思わなかったが不思議なところがある。ユーリイの性格上、ギルドマスターの仕事は全部自分でやると思うのだがなぜナーガがやっているのだろう。

……ナーガがユーリイを甘やかしている可能性も無いこともないのだが、それをユーリイが認めるとも思えない。なにせよ会えば分かるだろうけど。

そしてザルナ王国の首都エリアノについたのはそれから五日後。アリアちゃんとフランはこれまた驚いたことにルクゾの宴の入団試験を受けに来たらしい。てつきり実家がエリアノにあるからここまで来たと思っていたが、どうやらコロ大湿原に行ったのは入団試験のための度胸試しだったらしく都市の賑やかさに緊張と興奮が入り混じった表情を浮かべている。

俺も久しぶりの人の活気にあてられてすっかりテンションが高くなってしまう、フランに田舎者だと言われるてようやく熱が冷めたく

らいだ。

街の様子は以前と少し変わっていて戸惑ったが、遠くの方でカナゼ師匠のいるであろうメイハ教の大協会の尖塔が見つかった時は不変の美を再認識した思いだった。

アリアちゃんも同じく浮かれていたが、フランに至っては都会の騒がしさと入団試験の緊張から顔を青白くさせ、手と足が一緒にでる江戸時代のなんば歩きを体現していた。

ひとしきり観光がすんだ後でシアさんが試験の行われるルクゾの宴の本拠地へ俺達を案内する。俺もどうせ会っなら驚かしてやろうと入団試験を受ける事にしようと思いついて行く。

これで俺が落ちたらいったいどうすればいいのだろうか？ と緊張している二人を見ていたら不安になってきた。落ちたらユーリイたちに顔向けできねえ……

メイハ教の大教会に割りに近い位置に本拠地はあった。

貴族の住む豪邸かと疑うような大きさだったが、つくりは頑丈そうで綺麗だ。

そしてその本拠地の周りをグルッと囲むように人の山がいまや遅しと待っていた。冒険者に多い筋肉ムキムキのボディビルダーのようなから、もはや着ているのは下着じゃないのかといわんばかりのセクシーな姿の妖艶な女性まで、猫耳、エルフ、ドワーフ、その他の亜人間わずいるのだから驚く。このままノアの箱舟に乗せても子孫は繁栄しそうである。

「こんなにいるんですか!？」

「安心……して。ルクゾの宴のメンバー……紹介すれば直ぐ」

シアさんの分かりにくい言い方を解釈すると、ルクゾの宴のメンバーであるシアさんの紹介があれば優先して試験が受けられるらしい。それが分かった時のアリアちゃんと俺の喜びは尋常じゃなかった。え、フラン？ フラン君は早く決まって嬉しいのか嬉しくないのかよく分からない表情でした。

テスト返しのときと同じ気分なのだろう。分かるよその気持ち

そういう訳であまり待つこともなく裏口から入った俺達は、同じくメンバーの紹介で優先されたであろう人たちの後ろに並んだ。どうやら入団希望者は呼ばれた順に部屋に入りそこで何らかの試験が行われるらしく、既に紹介で入った人は悔しそうに部屋から出て行った。

中で待っている間混雑している人を静めようとする人物がクロトであることに気づいた俺は慌ててフードを被って顔を隠す。フード越しにクロトがこちらを注意深く見ていたが、しばらくして気のせいだろうと視線を外し、俺はホッと一息ついた。

では次、と部屋の奥で声がするとアリアちゃんはフラン、俺の順番で挨拶して部屋の中に入っていく。アリアちゃん、フラン、俺の順番で並んでいたのもうすぐ呼ばれるフランはガチガチに固まっている。

「フラン少し落ち着けて」

「お、俺は至ってへへ平常心に保っているぞ」

おかしい言葉をブツブツと呟くフランの頭を軽く殴って平常心にもどしたところでアリアちゃんが部屋から出てきた。その顔は嬉しそうだ。

「あ、アリア受かったのか？」

「うん、……いやあくまで候補生としてらしいよ。数年後に認められて正式にメンバーになれるらしいの」

確かに将来有望な子がいればそれを手元に置いておきたいという気持ちはあるだろうから候補生という制度はなかなか考えたな。

「そ、そうか。よしっ！ 俺も受かってやるぞ！！」

「頑張ってねフラン君！」

そう言っただけで意気揚々とフランは部屋に入っていく。そしてその時ドアの隙間から短い金髪のナーガが中央の机ごしにかけていたのが見え、俺のテンションはどんどんあがっていく。

『マスター落ち着いて今は策を練りましょう』

『それもそうだな』

ベアンテの言うとおり落ち着いて深呼吸をすると部屋の上に何かが飾つてあるのが見えた。

古そうで、石突の部分の飾りが特徴的な日本槍。

それは夢にまで見たフィフス・ランスのフィランだった！！

『チッ、見つけてしまいましたかマスター』

『お前気づいていたんなら教えてくれよ！』

大事そうに天井近くに飾られてあるフィラン。俺は周りの人の様子を確認したが、希望者は自分のことで精一杯、それを整列させようとする人もまた希望者のことで精一杯、これなら誰も気づかなさそうだ。

ベアンテの鳶をゆっくり天井まで伸ばしフィランの柄を絡ませ、ついに自分の手へとおさまると直ぐに頭の中を絶叫が走った。

『イツキ~~~~~~~~!!!!!! イ、イツキー!!
イ・ツ・キーー!

I・T・U・K・I——くあwse d r f t g yふじこーpーア
ツ————!!!!!!』

カオスだ。正にこれはカオス以外の何者でもない。

興奮して奇声をあげているフィランを落ち着かせること数分、ようやく落ち着いたフィランはどうやらご機嫌斜めの様子。

『もうっ!! どうしてイツキはどっか行っちゃったのさ! 僕がどれほど心配して眠れぬ夜を過ごしたと思っているの!??? どうせその性悪女に騙されて連れさられたんでしょっ!?!』

『まったく、あなたの言動には知能の欠片も感じられませんね。そしてちなみに私とマスターはとっても親密で濃い五年間を過ごさせていただきました♪』

『殺す! 絶対殺す!』

ヤンデレは一人? で充分なのでフィランに誤解を与えるような発言をするんじゃない!!

そこからフィランを宥め、慰め、愛を語ったポエム(原稿用紙十枚

分）を朗読してようやく機嫌のよくなったフィラン。それとは対称に機嫌がとて悪くなったベアンテもなんとか宥める事に成功したころ目の前のドアが開き、フランが出てきた。どうだったと聞くと親指を立てて嬉しそうな表情である。

俺もドアに入る前に少々準備をしよう。

『フィラン、【天沼矛】と【地虚矛】、ミサゴを出してくれ』

『分かったよイツキ』

フィランの了承と同時に手には古そうな日本槍の変わりに三本の槍がでてくる。

『ベアンテは得意の拘束用の薦を容易して下さい、お願いします』

『マスターがそこまで言うのなら……』

いったいどっちがマスターなのだろうか？

そんな考えは焦れ気味にどうぞ次の人、と言われた瞬間に消えた。

ドアを開けると同時にミサゴへ飛び乗った俺はすさまじいスピードでナーガの執務室におかれてそんな机にミサゴを突き刺すと同時に宙を舞う。

さすがにナーガは驚いてはいるようだがその不意打ちをバックステップで優雅にかわした。

だがここからが本番である。【天沼矛】と【地虚矛】をナーガの逃げる先へ投げてこれ以上回避運動を取れなくした後、ベアンテの拘

束用蔓が左手からナーガ目がけて射出される。

さすがにその行動を予期してなかったナーガは蔓が綱か何かだと思
ったまま無様に拘束された。

「貴様ツ！ 何者だ！？」

さすがに五年前で、フードで顔を隠していることもあり直ぐに俺だ
とは気づきはしない。

「俺の名を言ってみろナーガ！」

目の見えないナーガは俺の声に聞き覚えがあるのか、少し戸惑った
後こう言った。

「も……もしかして……ロリコンか？」

「誰がロリコンじゃー！！ お前そこはもつと違うセリフがある
だろっ、 久しぶりだなイツキとか言えんのか！！」

騒ぎを聞きつけたクロトが見たものは、植物の蔓に雁字搦めにされ
たまま延々とナーガの顔をサンドバック代わりに殴りつけるイツキ
の姿であった……

六十四話 不慮の事故（前書き）

このまま話しを進めていつちやっていいのか俺！？

六十四話 不慮の事故

試験官の不慮の事故（いったい誰がしたんだろう？）で入団試験の延期があり、残った連中は口々に不満を述べたがそうやってしまっ
ては仕方無いと大多数の受験者は帰っていった。残りの連中は天に
向かって罵声をあげたり、ルクゾの宴ギルド本部で暴れたりしてい
たのでクロトが女性には天使の笑みで、男性にはその大剣で実力行
使で追い出したりすること一時間。ようやくギルド本部の周りは静
かになったが中は以前うるさかった。

「どういことですかイツキさん!!」

「てめえ騙しやがったな!」

「嘘……いけない」

俺とナーガが旧知の仲でルクゾの宴のメンバー（正式ではないが）
だったことをアリアちゃんたちが知ると激しい質問攻めにあった。
余りにもきつく普段優しいアリアちゃんにまでなじられ、だんだん
なじられるのが気持ちよくなってきたところでナーガが止めに入っ
た。

ロリコンに加えマゾという負ステータスまで手にいれるところだっ
たぜ……

「まあ、だいたいの事情は掴めた。シアは任務ご苦労だったな」

ナーガのかける言葉に恥ずかしそうに頷くシアさん。

「ところでイツキはユレイアさんに会ったのか？」

何故かアリアちゃんがユレイアという言葉に敏感に反応した、何故だろう？

「いや、まだ会ってないけど。……そういやどこにいるんだ？ 普通ギルドマスターであるユーリイこそルクゾの宴の入団試験官をやるべきだろう？」

クロトとナーガは一度目を合わせた後何か考えでもあるのだろう、コソコソと相談を始めた。俺が聞いてはいけない話など今更ない様に思うが空気を読んで黙って待つ。

しばらく話しあって答えが出たのかようやく向かい合ったナーガの表情には少し迷いがあるようだ。

「申し訳ないがここからはあまり人には言えないことでは……」

シーアさんはナーガに軽く頷いてアリアちゃんとフラン君を連れて部屋から出て行く。アリアちゃんは最後までこちらを気になる様子で見ていたが焦れたフランがアリアちゃんを引っ張り部屋から連れ出した。

フランは後でおわびに槍の稽古をつけてやろう。

「それで何なんだ。態々人を下げるような秘密の話とは？」

「……お前のいったとおり今ユレイア様はギルドマスターとしての働きをされていない。それで俺がユレイア様の代わりにルクゾの宴をまとめている」

「いくらユーリイを崇拜しているとは言え、さすがにそれはやりすぎだろう」

「それならどれだけ良かったのか……」

何故かは知らないがナーガはあまり進んで話を進めたくはないようで、それから俺が続きを促しても要領をえない返事が返ってくるまでだ。

「はつきり言えよナーガ！」

「……………」

「……仕方ないなナーガが言わないなら私が言っぞ」

「っ！？ クロト！」

「お前がいつまでも言わないのだからしょうがあるまい。いずれイツキにもわかることだ」

「えっ！？ どういうこと？ まさかユーリイに何かあったのか！？」

「ユレイアさんはな……記憶をなくされているんだよ」

瞬間、比喻でもなんでもなく頭に電撃が落ちたような気がした。ようやく頭がクロトの言った言葉を理解し始めると額から、手から変な汗がでてくる。それはローブの裾で拭いても拭いても次々と出てきた。

「何故だ？」

しばらくたってようやく出た言葉がそれだった。

「わかったのはイツキがちょうどヴレインを倒していなくなった後だ」

それまで押し黙っていたナーガが重い口をようやく開いてそういった。クロトがそこまで言ったならもう最後まで言ってしまうおうという表情だ。

「目を覚ましたユレイア様にイツキはどこへ行ったのか？ と聞いてみたところお前はだれだ？ と逆に聞かれてしまったよ。さすがに様子がおかしいと思いカナゼさんを連れてくるとユレイア様はカナゼさんの記憶はあるようでカナゼさんに現状説明を求めている。そして分かったのはユレイア様はクルーゼとかいうバカ野郎に婚約者を殺された時までの記憶しかないということだ。そうなった理由はいまだよくわからないが……」

俺は激しい怒りに襲われた。クルーゼを憎む気持ちと、その事実を知らずにいた自分に対してだ。そしてユーリイに婚約者がいたということに対しての無様な嫉妬。

お気楽な気持ちはどこかへすつとんでしまったようのでその代わりに激しい自己嫌悪に陥る。

「……そうか、クルーゼはますますぶち殺してやりたくなったよ」

「ん？ そうか、イツキはまだ知らなかったのか。俺達も緊急事態だということでカナゼさんとリザルトさんからその時間いたんだ。

……あいつは許せないな」

『……イツキ、肝心のユレイアさんのことなんだけど』

『うん？ どうした。つまらないことだったら今はよしてくれ』

『それ……たぶん僕のせいだ。僕も一生懸命ユレイアさんをマナの影響から守ろうとしたんだけど【天沼矛】は物理攻撃からしか守りきれないから、全部僕のせいだ！』

怒りで頭に血が上ってしまった俺は罵声とともに床へフィランを叩きつけようとしたが、脳内で大声で泣きながら謝るフィランの声を聞いてその手をなんとか止める。

（落ちて着け俺、ここでフィランにあたったら俺は最悪だ。）

（フィランは一生懸命やってくれた。責めるべきはユーリイを守りきれなかった俺のほうだ）

自分の舌を噛み締めることによって怒りを醒まそうと、鉄臭い血液の味が口内に広がりひとまず気分は落ち着いた。そんな俺を心配そうに見つめる二人の視線が嬉しい。

「大丈夫か？ 随分思いつめているようだが」

「ありがとうクロト。でも大丈夫だ」

俺の声色から平気だと感じたのかナーガも再び話しだす。

「続けるぞ。そうしてユレイア様は今もその時と同じように男を毛嫌いするようになってな。俺とクロトならまだ話しかけても大丈夫

だが、やはりいい顔はなさない。カナゼさんの『なら記憶が戻るように以前作ろうとしていたギルドをつくってはどうか？』というアドバイスを元に今のルクゾの宴をつくったが未だ男にたいして酷い嫌悪感を持つておられる。そんな状況でギルドマスターを務めると他のギルド間でも問題になりかねるので、名目上はギルドマスターだが実質は俺がやっている」

「そんな状況でよく大陸一有名なギルドになったな」

トップがすっかりしてない組織はそうそうに潰れやすく、内部崩壊を起こしていくのがオチだ。そんな中、上下間の厳しいギルドでここまで有名になるとは不思議でしょうがない。
もめなかったのだろうか？

「何分、俺達初期メンバーは優秀でね。後は有能な部下を探してスカウトしていくうちにそうなってしまったんだ。勿論争いを起こした奴は血の制裁を加える！」

「まあ、有名になった所為でユレイアさん狙いの冒険者が殺到してね。そのおかげでますます我らがユレイア姫は男嫌いになってしまった」

なんだかやることが裏目裏目にでてしまったみたいだ。ナーガはユレイイに妄信的だし、クロトは諦めて傍観気味になってしまったところもあるのだろう。

「そういえば我らがメンバーにはもう一人お姫様がいただろう？」

褐色婆言葉のマキアにも随分会ってない。マキアもガロンも立派に成長しているのかな？

でもマキアの方はあれ以上成長してもらったら困る、主に俺の精神衛生上に

「もう一人のお姫様は終始ユレイアさんに付きっぱなしだ。最近では二人はそういう関係なのかという噂も出ているくらいだぞ」

「なんだとっ！！ それはいかんよっ！」

「まずは鼻血を拭いてからそのセリフを言おうなイツキ」

これはいつの間に！？ フキフキ

……粉雪のような白い肌に金髪をなびかせ、そのスレンダーな体で小鳥と微笑むユーリイ。

対称的に褐色の肌とそれを浮かばせる白髪、グラマラスなボディで猫を思わせるマキア。

その二人が絡み合っている姿を想像するだけで俺はもう……

『変態な思考で私を汚さないでください変態』

『うわぁ、最低だねイツキ』

何故だ？ 罵られているのに感じちゃう、ビクンビクン

「まあ、話はわかった。とりあえず一回ユーリイに会ってみたいんだが今何処にいるんだ？」

クルーゼのこと、婚約者のこと、記憶喪失のことなど色々思うことはあるが一度ユーリイと向かい合って実感しなければ先に進めそうにない。

「……冷たくされても気を落とすなよ。今はおそらく一階の中庭にでもいるだろう」

外から見ただけではよく分からなかったがここは中庭であるのか。ちよつとした宮殿みたいで楽しい。

ナーガやクロトは入団試験の用意でまだ忙しいらしく俺は一人で行くことになった。

ナーガの部屋があつた二階から植物を模した手すりのついた階段を降りていくと階下ではおそらくルクゾの宴のメンバーであろう人が木製の大きなテーブルで酒を飲んだり、読書をしたりとやっていることはバラバラだが各々楽しそうだ。その中には肩身のせまそうなアリアちゃんたちとのんびり何かを飲んでいるシーアさんの姿もあったので声をかけようとする

「おいっ、お前話を聞いたところによるとあのナーガをたこ殴りしたって奴だろ？」

口調自体は荒く、ハスキーボイスだがその声は間違いなく女性のものでその声の主を確認しようと振り返ると直ぐに体が宙を浮いていた。そして背中に衝撃を受けてようやく自分が投げられたのだと気づく。誰だか知らんが乱暴なやつだ。

「先輩に話しかけられたらさっさと答えな！ ヒック」

赤毛をポニーテールにして、へそだしスタイルにしている女性。そして最も重要なのはピクンピクン動かしている二つの耳、そして蛇のように意志をもつて動く尻尾！

つまり猫の獣人。猫の獣人なのだ！ 大事なことなので二回言いました

口からは酒の匂いがプンプンしているのが若干減点だがそれでも猫の獣人という特典に比べれば微々たるものだ。犬耳や、狼、ウサギなんかの獣人はよく見かけるが猫耳は滅多に住んでいる山からでないので俺も話しには聞いたことがあるが見たことはなかった。

俺は興奮でハアハア言っていたが周りの連中は怯えているのかと思いい目の前の女性に絡むのをやめさせようとする。だが女性は酔っているせいか猫耳はもっているが聞く耳をもたない。

「さっさと答えるんだよ！」

どうやらナーガ達は他のルクゾの宴のメンバーに俺のことをまだ伝えてないようで俺の首をガクンガクンと現在進行形で振り回している。これは酔ってるせいもあるかもしれないがどちらかということこの人元々の性格なのかもしれない。

「ケイ……止める」

「ああっ！？ シーア、てめえは黙ってな。こいつには上下関係つてやつを体で教えてやらなきゃな！」

シーアさんとケイ？ とかいう猫の獣人が向き合っている今が唯一のチャンス！

俺はそのフワフワしている尻尾をつかんだ。かなりの猫好きである俺は久しく触る尻尾に癒される。

「キャッ！ て、てめえ何触ってや…アン！？」

猫は尻尾を触られるのを嫌がるものだがどうやら猫の獣人は違うよ

うで、さっきの強きの態度とは別に色っぽく鳴いている。ギャップ萌えってやつですな！

ケイを先ほどまで止めていた周りの連中も今度は俺を止めてくるようになるまでたくさん楽しんだ。

フラフラとすっかり消耗した様子のケイは、

「てめえ、ぜ、絶対ぶち殺して…やるかな」

といい残して倒れ、シアさんの手によってどこかへ運ばれていく。残った連中、女性も男もアリアちゃんもフランも皆例外なく、こちらへ冷たい視線を向けていて耐え切れなくなつた俺はナーガの言っていた中庭のほうへ向かう。

だが俺は先ほどの行為に後悔も反省もしていないっ！ あれにはそれだけの価値があつたのだ。

『イツキもそろそろ本当に捕まる前にやめたほうがいいと思うよ』

『ここには俺を縛る法律は存在しないんだよフィラン』

中庭へと続くドアを開けると、そこには緑の芝生と人が休むことを考慮したのか柱と屋根だけの休憩所のようなものがありそこには二つの人影が…

そのなかの一人は風を浴びて金髪からまるで金色の粒子が出てるように錯覚してしまう。そして向き合っているもう一人は軽やかに笑っている様子だ。芝生の感触を楽しみながら足を進めていくと音で俺に気づいたその中の一人のマキアは口を両手で押さえ啞然としている様子。憂い気のある目元以外は五年前とあまり変わってないように見える。

エルフであるユーリイは見た目変わってないが、ただやはり記憶が

ないようで俺が近寄ってくるのを見ると後ろへ下がって警戒した様子を見せた。わかつてはいたがやはり悲しい

「まさか……！？ 本物か？ 本当にイツキなのか？」

「そんなことを言うマキアは本物か？ 怪しいぞ」

俺のふざけた答えで本物だと確信したマキアは俺のほうへ向かって走ってくる。

脳内エフェクトはこの感動的な再開にキラキラと光を散らし、なかなか空気を読んだものになっている。後もう少しまキアの手と触れるところでドンッ！ という効果音とともに俺は横から何か巨大なものに吹き飛ばされた。

「ギユイギユイ」

頬に伝うベトツとした触感。この懐かしい感覚は間違いなくガロンだ。

見上げると随分毛並みが立派になり、竜のような顔つきはより凛々しく威圧感のようなものが出ているガロンの姿が…

（立派になったのはいいんだがこの調子で毎回挨拶されたら数年後には死ぬんじゃないか？）

「大丈夫かイツキ？ もうガロン、そこは我が先に行くところじゃぞ！」

「ギユル」

そんな俺達の姿を見ていたユーリイは踵を返して何処かに歩いて行

く。何か声をかけようとするが良い言葉も出てこず結局ユーリイは
何処かへ行ってしまった。

本当に男が嫌いなんだな……

「ああ、イツキ。実はユーリイのことなんじゃが――」

「知ってるよ。さっきクロトたちから聞いたからな」

「そうか。……我も記憶が戻るように日々努力はしておるんじやが
中々成果は出なくての。」

なぐに、イツキも戻ってこれでルクゾの宴のメンバーは皆揃ったの
じゃからきつと直ぐに記憶も戻ろう」

励まそうとしてくれるマキアに感謝して室内に戻った。マキア
の話によるとカナゼ師匠やリザルトさん、シクエちゃんもユーリ
イのことを心配してこっちのメイハ教の教会へ住んでいるらしい。
普通ならこのまま挨拶をしにくべきだが日も暮れかけているし、
それになにより今日はいろいろありすぎた。今会ったとしてもその
時俺はきつと碌な顔をしてないだろう。

とりあえずストレス解消の為に街へ繰り出そうとするとマキアに夕
飯までには帰ってくるんじやぞ」と実の母親みたいなことを言っ
ていた。

夕焼けに染まった街。忙しそうに何処かへ行く奴もいれば、武器屋
で店主と値段交渉にうるさい奴などいろいろいるが俺は特にあても
なくぶらぶらしていた。出店でおいしそうな焼き鳥風のを売っ
ていて欲しかったがそういえば金をもっていないことに気づき、今度
出歩くときはナーガに金を貰おう！と心の中で決める。

「やっぱり人がいるっていいな」

『そうですね。牧歌的な風景もいいですが、都会の街並みというの
も捨てがたいですね』

『都会の街並みはもっと高いところから見たほうが綺麗だと僕は思
うんだけど……』

「それはいい案だフィラン！」

ひょいっと路地裏に入り誰も見ていないことを確認すると背中に蔓
で括り付けているミサゴを取り出し柄の部分に乗る。穂先にかぶせ
る穂鞘はフィランの力でも用意できないので明日にでも三本の穂鞘
を武器屋で作ってもらおう。錆びたりすることは魔槍なのでない
は思うが持ち歩く時他の人に当って怪我でもさせたら大変だ。

ミサゴの上に危なっかしく両足で乗って上空へとゆっくり上がって
いく。最初は慣れないせいかバランスをとることが難しかったが、
ミサゴの上では重力が少なくなるように乗っている内に慣れてしま
った。

上空百メートルあたりに上昇したところでゆっくりと進ませながら
都市を見下ろすとまさに圧巻だった。

夕焼けの中、それでも光を求めランプや魔法の光で照らされた庶民
街。そして細長い尖塔が特徴の教会のガラスが夕焼けの光を反射し、
いつせいに祈りを始める修道士。

未だ見たことのない光景だったが不思議と懐かしさを感じさせる光
景だった。

いつまでも見ていたい気分だったが、地平線の向こうで太陽が沈んだころあたりは闇につつまれてしまっていたのでおとなしくマキアの言った通りに本部へ戻る。

すっかり暗いからミサゴで降りてもバレナイだろう。本部の大きな正面ドアを開けるとスーブのいい匂いが漂ってきた。

どうやら入り口はシアさんや他のメンバーが騒いでいたところに繋がっているらしく、見覚えのある大きな木製のテーブルがいくつも置かれている。

「あつ、お帰りなさいイツキさん」

ジン

……なんかいいなこういうのは。かなり久しぶりにその言葉を聞いた気がする。

そのままアリアちゃんの案内でテーブルについたが他のメンバーを全く知らないのでも正直まずい。手持ち無沙汰も嫌だったので先ほどからいい匂いの漂ってくる方へ足を進めると、そこはどうやらキッチンのように不器用に包丁を握っているのは猫耳のケイ、それとは対照的に手馴れた手つきで玉ねぎをいためるマキアの姿があった。予想できたがやはりここにもユーリイの姿はない。

「て、てめえあの時の恨み！」

包丁を片手に飛び掛ってくるケイを避け、マキアの元へ避難する。別に怖くて逃げたわけじゃない……ぞ

「こらケイ、そんなでも今日のパーティの主役兼、我の未来の旦那様じゃぞ。丁重に扱え」

あれ、今なんかとんでもないことを言ってた気が……

「へ！？　だつて今日は新人歓迎パーティーじゃなくて確か長年不在だった初期メンバーの歓迎だろ？」

「だからその初期メンバーの一人がこのイツキじゃ。むしろ我は初期メンバーの方でも遅く入ったほうだからのう。ケイにとってイツキは大先輩じゃぞ」

「どもよろしく猫耳ちゃん、また尻尾触らせてくれ」

「こ、こんな変態が先輩だなんて認めたくねえ！！」

あらあら照れ隠しとは可愛いねえ。

『たぶん本気で嫌がっているんだと思いますよマスター』

何はともあれケイとのコミュニケーションはとれたところで本題の手伝いに入ろう。

マキアの隣でユーリイの好きだった肉じゃがをつくる。この世界の素晴らしいところは醤油やご飯があるということだ。異論は認める。

それにしても自分の歓迎パーティーの料理を自分でつくるというのも何だか変な感じがする

料理の準備が終わった頃合を見計らったように食卓に人が集まり始めた。巨大な長テーブルの食卓は半分が女性、もう半分が男性という別れ方をしている人間から亜人、根暗から陽気そうな人まで様々だ。とは言っても数は十数人ぐらいだが、さすがに大陸一有名なギルドだけあって個性、実力ともにそこのギルドを優に超えている。

男性側の一番端にナーガ、その両側に俺とクロトが、そして反対側にマキアに無理やり連れてこられ機嫌があまり良さそうでないユーリイが揃ったところで<ルクゾの宴>の宴がナーガの挨拶によって始まる。

「皆よく集まってくれた！」

昨今有名になってしまった我らが<ルクゾの宴>だが、今日この日によろしくルクゾの宴が完成したと言ってもいい。わけあって姿を消していた初期メンバーが今日帰ってきたのだ。私の目はとくに光を失ったが私達の未来には光が今差し込もうとしている」

ナーガの長ったらしくて要領を得ないスピーチにあき、目の前の食事に手を出そうとしたところでようやくナーガが俺に一言を言えとマイクのようなものを渡してきた。魔導具の一種なんだろうがいろいろこの世界は以前の世界の文明に近すぎると思う。

「えゝ、皆はいきなり変な奴が来たと思っているのかもしれないが——「事実だろ」そこっ、黙れケイ！」

クロトが頼むぞイツキみたいな目で見てきたので気を取り直して話し出す。

「まず自己紹介といこう。俺の名前はイツキだ。後俺はナーガのように長話をしてせっかくの食事を冷ますようなことはしない。皆食べ、飲んでくれ！」

「おいおい今日の主賓がそれだけじゃ——」「ウオー——！！」「——いや、何でもない。ハアゝ」

それから食事で目の前に並べられている血のしたたるステーキや

ポトフ、肉厚で横長のトマトのようなものが入ったサラダなど見慣れないものが多くあったがどれも美味しかった。最初はぎこちなかったがアルコールの力でどんどんルクゾの宴のメンバーも気軽になり一気飲みでバカやったりした。

「よし俺の挑戦受けてみるナーガ！」

酔ったとはいえギルドマスター代理であるナーガに勝負を挑む奴などいないので皆の期待を背負って挑戦する。周りの女性も男性陣もやんややんやの大盛り上がりだ

「ふっ、バカめ。俺に挑むとは百年どころか幾星霜早いわ！」

互いに片腕を組み合ってジョッキに注がれたエールを飲み干す。仕切るのを好きな奴が調子に乗って司会の進行を始めだし空になったジョッキが二十を超えたところでさすがに限界が近づいてきたかナーガの顔色は土気色になってきた。

「アホですね。マスターの新陳代謝は常人のそれとは別物だというのに……」

「いいんだよ楽しけりゃ ♪ ヒック」

「うわっ！？ 酒臭っ、酒臭いから僕の方に顔を向けなくてよイツキ！」

見れば目の前のテーブルの上に置いてある【天沼矛】、【地虚矛】、【ミサゴ】の近くは空になったジョッキが山の様に積んでいて放たれる酒の匂いもかなりきつい。

『いいからフィランも飲めよ』

そう言いながら三本の槍を酒ダルの中に突っ込む。フィランが入れる前に大きく悲鳴をあげたような気がするがそれより今は目の前にいるナーガをダウンさせることが先決。

その日は一晩中ルクゾの宴の本部は賑やかな声で溢れていたと言う。

十 十 十

耳元で軽やかな声が響いて私は目を覚ました。石造りの天井を見てここが木造の（大樹と一体となっているので木造というのも少し違和感がある）実家ではないのだというのを思いしらされ、私は声の主を見上げる。

「起きたかのユーリイ？」

小首をかしげると共に褐色の肌に白い髪がパラリとかかる。この女性にはマキアというのだが、このマキアは女の私が見ても綺麗で欠点などというのはほとんどないように思える。

数年前私はそれまでの記憶を失ってしまいそれからはマキアが私の世話をいいと言っているのに甲斐がいしくやってくれている。記憶を失ったと言っても両親や、恩師である力ナゼ司教や同郷の友人の記憶は残っている。そしてあの憎憎しいクルーゼ……今も思い出すだけで奴を考えうるあらゆる方法で陥れ、死んでしまった婚約者の墓の前で土下座させたあと殺してやりたい。

今は力をつけるために冒険者というのをやっているがどうやら私は記憶をなくす以前も冒険者をやっていたらしく、それもギルドラン

クは上から数えて四番目のAランクで最初は身の覚えのないことばかりで酷く動揺した。

何せ記憶と同時に私は戦闘の経験という大切なものを失っているのだ。そんな私を助けてくれたのが今日の前にいて私の知らない冒険者時代を知っていて、そして同じギルドであるマキアとその他の仲間らしい。

「どうしたのじゃユーリイ。何か気分でも悪いのかの？」

少し考え事をしていた私を心配げに覗き込むマキアに平気だと伝えギルドの食堂へと向かう。食堂でマキアと共に朝食をとっていると両目を包帯で覆った男が挨拶をしてきた。

「やあご気分はいかがですかユレイア様？」

「平気だ」

この見るからに怪しいナーガという人物も私を今までサポートしてくれた恩人だ。私に対する対応も実に親切で、少しウザったいほどだがそれが私を思っていることだと分かるので嫌ではない。嫌ではないのだがやはり男「クルーゼ」という考えが私の中にあるのかあまり長い話は出来そうにないのだ。ナーガもそれが分かっているのか私の答えを聞くと後はごゆつくりと言いついて残し去っていった。ギルドマスターの責務も押し付けて本当にすまないと思ってる。彼が女だったらどれだけよかったことだろう。

今度は女装でもしてくれないものかな？

そうしたきつと楽になるだろうに……

朝食の後は中庭で剣の素振りを始める。

この中庭は父上と母上のシクエちゃんの手をつけたもので今はちょっとした植物園に近いものになっている。季節によって様々な花の匂いが広がるここはくつろぐのも修行するのも気持ちがよくてよく利用しているのだ。

袈裟斬り、水平斬り、唐竹割り、突きなどあらゆる型を練習するのは日課で雨の日以外は毎日やっている。素振りをする前は両手の強張りを手で揉んでよくとっておくのが大事だ。

手の平に醜く広がっているのは魔力による火傷による強張りはそのやって取り除くことができる。記憶のない五年前からの付き合いだが未だ満足に剣が震えないのは少し残念だ。

医者やカナゼ司教の神聖術による処置も効果がないので最近は諦め気味だが、つくづく記憶を無くす前の私は何をやっているのだろうと不思議になる。

気をとりなおしてビュンという音をたて振るわえるのは風の魔剣。今は魔力をこめてないのでせいぜい涼風をおこすくらいだが一度魔力をこめればドラゴン族の鱗ですら斬るとんでもない業物だ。

なんでもこの魔剣はマキア曰く、私の大切な人と共にシンの森（魍魅魍魎が巣くう森）にある遺跡で手にいれたものらしく値段もつけられないそう。シンの森から生きて帰れただけでもありえないが、私の大切な人とやらが男というのはもつと有り得ないと思う。

そんな思いを打ち消すようにいっそう剣に力をこめる。

「今日も精がでるのうーリィ」

「そういうマキアも今日は随分楽しそうだな？」

「なんでじゃろうのう……今日は何かいいことがありそう、そんな予感がするからかのう」

いつも楽しそうなマキアだが時折誰かのことを考えて物憂げな表情をするのを知っている。

そんなマキアが澄んだ笑みを浮かべるのだから今日はきつといいことがあるのだろう。

私はそう思っただけで再び剣を振り始めた。

しばらくそうしていると外が騒がしくなってきた。おそらく私達が所属しているルクゾの宴の入団試験が始まったのだろう。私やマキア、ナーガとクロトのコンビでいろいろ有名になってしまったこのギルドは最近王国や帝国から名指しで指名がくるほどだ。さすがにいつまでも四人でやっていくわけにはいかなかった五年前から少しずつ入団を募集しているのだが今回の入団希望者は去年の倍以上いて騒がしい。

今日は仕事を入れていないので本当なら私も入団試験を手伝うべきなんだろうが、私がやると男を半殺しにしかねないので出来るのは邪魔にならないようにいることだけだ。

「なあマキア、ガロンを触っていいか？」

ガロンというのは魔獣使いであるマキアのパートナーの騎竜のことだ。非常に大人しく、賢く、何より速い。そして一番大事なのがモコモコの毛皮だ。見た目はゴツゴツしてそうなんだがその手触りはシルクもかくやといったもので一度触ると中毒になること間違いなしだ。そういう私も中毒者の中の一人ではあるのだが…

「いつもよいと言っておるじゃろくに、ユーリイは遠慮しいじやの」

「し、しかしやはりこういうのはパートナーの許可があるんじゃない

いのか？」

「まあそういうところもユーリイの魅力ではあるのじゃが、あまり遠慮されるとユーリイとの距離を感じるの……」

「ち、違うぞ！ 私はマキアのことを無二の友人だと思っているのだがやはり親しき中にも礼儀ありというか何と言うか——と、とにかくマキアそんな顔をしないでくれ！！」

「ハッハッハ。冗談じゃ冗談。ユーリイが可愛くてついのだ！」

私は先ほどまで言った言葉が恥ずかしくてガロンの毛皮に顔を埋めながらマキアに抗議の視線を送る。ガロンはしばらく一緒にいてくれたが、マキアの今月のデザートは全て謙譲するという条件でようやく私の気分が元にもどったところで何処かに行ってしまった。少しさびしい……

ガロンがいなくなった寂しさもあるがなんだろうこの寂しさは？

記憶をなくした五年前とは違い、今は私を支えてくれる人や私をたよってくる可愛い後輩もいる。それなのにさびしいと感じるのは私の我侘なのだろうか、それとも本当に私にとって何か大切なものがたりていないというのだろうか？

答えはでない

そして気づけば中庭に人がいた。

赤いローブを身に纏い、頭にイバラの冠。そして三本の槍を背中に蔓のようなものでまとめているが穂鞘はなく、刃がギラリと光っている。

黒髪に黒目、顔立ちは一応整ってはいるがそこらにいそうな顔であ

る。

何はともかく私にとって大事なことはその人物が男かどうかであつて、その考えでいくと目の前の人物は間違いなく男だった。私も見たことがないのでギルドのメンバーではないだろう。おおよそ入団希望者が間違えてここに来てしまったのだらうと考えたが、

「まさか……！？ 本物か？ 本当にイツキなのか？」

「そんなことを言うマキアは本物か？ 怪しいぞ」

目の前で始まった会話はあきらかにマキアと知人であることを示している。それも結構深い仲であろう。私は居たたまれなさを感じその場から離れた。

いや、あの男がマキアに送った既知の視線と同様のものを私にも感じ怖くて逃げたのだ。

何故？ 何時？ どうして？

疑問が次々と浮かぶ。とりあえずあの男が私を知っているということとは私もあの男を知っている可能性があるということだ。もしかすると以前マキアが言っていたルクゾの宴の初期メンバーは彼のことかもしれない。

そんな悶々としたまま私はずっと悩んでいた。何故ここまで悩むのだらうと考えたがその理由も出てこない。気がつけばすっかり辺りは暗くなり、私は枕元のランプを灯す。その時近くの窓越しに空から人影が降りてきたように見え、急いで窓を開けて確認したがどこにも姿はない。その人影はローブを着ているように思えたので、直ぐに昼間会ったあの男の姿が浮かぶが考えすぎだとかぶりを振る。変に意識をしすぎだ。

「ユーリイ、おるか？ 入るぞ」

了承もとらずに入るのはマキアの悪い癖だ。最もそんなの慣れっこだったのもう何とも思わないけど

「今日昼にユーリイも見ただであろうが、長い間音信不通だった赤いローブ姿のイツキというんじやがそのイツキの歓迎会があるのじや。ユーリイは覚えてないと思うがイツキとユーリイ達は初期メンバーじゃったのじやぞ。皆で騒げばきつとユーリイの記憶も直ぐ戻ろう」

マキアは私の記憶が戻る喜びと同時にせつなさを抱いているようで私は何と返したらいいか分からず立ち尽くすままだった。あの男が直接の原因かどうかは分からないがこのままだと平穏な生活が崩れていきそうなそんな気がする。

「何を遠慮しておるのじやユーリイ。みなも待つておるぞ」

「！？ マキア。別に引つ張らなくても……」

ほとんど無理やり連れて行かれた私は渋々席に着く。

皆が揃う日は食事の前にナーガの一言があるのが常、あのイツキとと言う男は何をしているのだろうと思ひ覗いてみるとナーガの話しも完全に無視して寝ている。何だか妙におかしく思わず笑いそうになってしまったがそんな自分に気づき、男なんて存在に気を許しては！ と身を引き締める。

そしてナーガの話しは終わり、いよいよあの男に音量増加魔導具が手渡された。

「えゝ、皆はいきなり変な奴が来たと思っているのかもしれないが

——「事実だろ」そこっ、黙れケイ！」

どうやら既に猫の獣人のケイと知り合いらしい。ケイは人見知りの激しさを隠すために大きな態度をとっているところがあるのに今の彼女は自然体そのものだ。

ケイと仲良くなるのには結構かったので少し嫉妬を感じてしまう。

「まず自己紹介といこう。俺の名前はイツキだ。後俺はナーガのように長話をしてせっかくの食事を冷ますようなことはしない。皆食べて、飲んでくれ！」

「おいおい今日の主賓がそれだけじゃ——」「ウオー——！！」「——いや、何でもない。ハア」

私の知るナーガはもっと礼儀正しく、冷静なイメージがあつたので少し意外だがマキアの笑っている様子を見ると別におかしい様子はないみたいだ。ナーガの新たな一面を引き出すあのイツキという男はどうやら油断できないみたい。

「ほれユーリイ、我らも食べようぞ」

気がつけばマキアの手によって大皿の料理が目の中の小皿に食べやすいように置かれていた。冒険者稼業ではどうしても食事が肉に偏ってしまう中、肉は入っているがそれと同様にジャガイモや玉ねぎなどが多く入っている料理に目がいつて試しに食べてみると、ジャガイモのホクホクした触感、肉や玉ねぎの美味さを引き出すための甘い味付け、不思議と知るはずのないこの料理はどこかで食べたことがあると感じた。

「なあマキア、この料理の名前は何というんだ？」

「ん？ それは確かあそこでナーガと呑み勝負しているイツキがつかった物での。名前は聞いてないが気になったら本人に聞いてみたらどうじゃ？」

「それなら……別にいい」

そのイツキとかいう男によって盛り上がるわずらわしいはずの男達の歓声は不思議と我慢できた。

六十五話 例のぬたぐんって奴です(前書き)

六十五話 例のぬたぐんって奴です

何だかやけに体が重い。昨日はかなり遅くまで飲んでたからな」と眠気を振り払い目を開けると目の前には見事に割れた腹筋があった。どつりで重いはずだと誰だかわからないがとりあえずどかしてその腹筋の持ち主を確認するとそれは酒瓶を片手に熟睡しているナーガだった。

どうやら俺達はあそこでそのまま騒いで寝てしまったらしく、毛布も掛けずに床で寝てしまっていたようだ。その中にはブリッジのままだ寝ていたり、男同士でBLのように抱き合って眠っているやつなど、大陸一有名なのは個性が強いからか？ という疑問が出てくるくらいである。クロトはイケメンの意地？ なのかイスに座って片足を抱えるようにかっこよく眠っていてムカついたので、起きないように細心の注意を払いながら地面にカエルのように四つんばいにさせた。いい気味だ

さすがに寝ているのは男たちだけで女性たちは騒ぐ俺達を他所にベッドで寝てしまったのだろう。このまま寝起きドッキリでもしようかと思っただがさすがに一人で行く勇氣はないし、ナーガやイケメンクロト野朗も起きる気配はない。

外からは時々荷車で何かを運んでいるのだろう、ゴトゴトという音がするだけだ。

随分早く起きてしまったな。普通ならもう一眠りするとこだが冷たい床の上で二度寝などお断りだ。少し長い散歩にでも出かけたら帰ってくるころには朝食の準備を女性陣がしてくれているところだろう。

早速散歩に出かけようとしたところでフィランを握ってないことに気づいた。

空っぽになっている酒樽と熟睡中の人を避けながらフィランの姿を探すと、まだ中身が充分ありそうな酒樽に三本の槍が入っているのを見つけた。

「ったく！ 誰が俺のフィランにこんな真似しやがったんだ！？」

「間違いなくあなたですよマスター」

「えっ！？ 嘘っ？」

「はい、少し酔いが回ったマスターが自らの手でそうなされました。あのシヨタ槍には相応しい待遇ですね」

酔いというのは人を狂わせるものだなとしみじみ思いながら急いでフィランを酒樽から救いだす。酒樽につかっていただけあってすごく酒臭い。フィランには悪いことをしたな

「おゝい、フィラン大丈夫か？」

「ん？ どうおゝしたのイチユキ？」

ダメだこいつ完全に酔ってやがる。早くなんとかしないと……

「僕はじえんじえん酔ってないよ。ケラケラケラツツ」

酔った人間の常套句を言うフィランの酒気を醒ましてやろうとミサゴの力で宙へ浮かばせた【天沼矛】と【地虚矛】を激しく回転させ、ミサゴの方はおれ自身の手で回す。

『おえっ、気持ち悪いよイツキ!』

『槍だから吐けない、ということはこれ以上気分も悪くならないから後は直るしかないだろう』

『マスターの理論はかなり無理やりですけど、そこに痺れるっ! 憧れるっ!』

戯れがすんだところで本部へ出てたくさんの露天商がいる大通りへ向かう。結局酔いが醒めたフィランはかなり不満気だったがそれでもまた置いてかれることを嫌がったので持っていく。むしろ俺はフィランが拒否しても持つていくつもりだったので結果は変わらないんだけど……

あわよくばフィランの穂鞘が欲しいとこだったさすがに店が開いてなかったので諦めることにした。しかしそのほかの店は結構朝早いというのにあいていた。

やはり文化の違いと言うやつなんだろうか？

朝食に向いてそんな薄いパン生地になんか砂糖をたっぷりかけたものを売っている店や、アクセサリーショップ、魔導具店などいろいろやっている。

その中で気になったのがアクセサリーショップだ。俺がいない間も探してくれていたマキアやナーガ、クロトたちに感謝の気持ちを表したいし、ユーリイは今の状況じゃおそらく受け取ってくれるとは思えないが記憶が戻った時に渡す為に何か買っておきたい。

指輪は自らが冒険者であるという証明の為に既にあるので渡すとしたら、腕輪かピアスカネックレスかあるいはちよつとした小物でも

いいかもしれない。いずれにせよ渡すのならある程度のセンスが必要になってくるので考える時間も欲しいし、何より金がまったくない。さすがにナーガやクロトに金を借りて買っわけにもいかないの
で今日は何かギルドで依頼を受けよう。

「あんだ買うのかね、買わないのかね？」

店先ですつと悩んでいたら店員のおばちゃんに怒られた。

「また金が入ったら買います」

「冷やかしたら結構だよ！」

そのまま手に持った筈で追い払うような仕草をしたので渋々店をでる。気づけば朝日も眩しく、人通りも大分多くなってきたように感じたので本部へ戻る。

本部の入り口には朝日を気持ち良さそうに浴びている男の姿。名前
は知らないが昨日一緒に飲んだルクゾの宴のメンバーだ。

黒いマントの下は貴族が着るような白いフリル付きのシャツ、下は
装飾はないが高そうなズボン。髪は沼のようにくすんだ色だが、目
は黄金色で正確的に明るそうなこともありあまり気にならない。年
はフランと同じく15歳ぐらいでやんちゃそうな少年といったところ
だ。

「おはよう。そういえば名前をまだ聞いてなかったな。知ってはい
ると思うが俺の名前はイツキ、種族は人間だ」

この世界では自分の名前の後に種族名をつけるのが主らしい。最も
明らかに人間やエルフだと種族が分かる時は省かれるらしいが、丁
寧な挨拶の時は今もやっているらしいので俺もやってみたというわ

けだ。

「おはようございます。俺の名前はルクイエーゲツシュフォールド、種族は吸血鬼です。」

……正直、昨日の騒ぎようからこんな丁寧な挨拶がされるとは思ってもみませんでした」

八重歯の代わりに白い犬歯をだして苦笑いするルクイエ君。なるほど確かに吸血鬼だ。

「俺も時と場所をわきまえるんだよ。……それにしても意外だな。失礼だけど吸血鬼はもっと暗くて、太陽が苦手なイメージを持ってたんだよ」

「そう思われても仕方ありませんね。同属の中でも僕は異端中の異端で、太陽も大好きですしニンニク料理は食べたら口が臭くなるだけですよ」

そう言うルクイエ君の表情は少し悲しそうだった。そんな悲しそうな表情をするルクイエ君の前だが俺の空気を読まない鼻は本部の中から漂ってくる香ばしい香りを貪欲なまでにキャッチする。

「おっ、中からいい匂いがしてきたな。一緒に行こうかルクイエ君？」

「俺はもうちょっと太陽の光を浴びときますよ。お誘いありがとうございます」

それなら仕方無いと本部の大きな木製のドアを開ける。既に朝食の香りに誘われてやってきた人がテーブルについていてその中には寝

癖でアホ毛がついているシーアさんや魔導書を読むアリアちゃん、自らの槍を抱えるフラン君の姿もあった。

3人に軽く挨拶をして同じ席に座るとフランは少し不満気だったがアリアちゃんは俺にお茶まで入れてくれた。この子はいいい子すぎて少々フランには勿体無いような気がする。

シーアさんはまだ眠気が覚めないのか目をゴシゴシと両手で擦りお腹からは空腹を要求するように抗議の音を鳴らす。

「お腹……空いた」

シーアさんの今すぐ抱き寄せてウリウリして可愛がりたいほどの愛らしさをその時偶然二階から降りてきたケイの猫耳と尻尾を弄んで解消する。本人はもの凄く嫌がってたがこうでもしないとシーアさんをどうにかしてしまいそうだから勘弁してもらいたい。

はあああ、シーアたんのカワユサ恐るべし！

そんな可愛いシーアさんは本当に年上なのだろうか？

案外年は近いのかもしれない。まあ例えそうだとしてもシーアさんへの対応は変わりそうにないが

そうこうしている内に続々とメンバーは集まってくる。昨日親しくなった何人かに挨拶をすると向こうも元気よく返してくるので清々しいばかりだ。

最後に一度起きて、上のベッドで寝なおしてきたのだろうナーガが降りてきて全員が集まったところで朝食が始まった。

うーん、このフワフワとした触感のパンとジャムがまた合うな

朝から美味しい食事に満足していたところで、マキアがこちらをキ

ラキラとしたアーモンド形の目で見つめてくることに気づく。

「どうしたマキア？」

「いや、今日はイツキは何をするんじゃない？ 良ければ我と——」今日はギルドで依頼を受けてくる予定だけど「……そうか、ならば我也着いて行こう！」

「いや気持ちは嬉しいけど、久しぶりに体の動きを確かめたいからきつとマキアの足を引っ張るだろう。だからいいよ」

そうか、と見るからに落ち込むマキアに悪い気がするがマキア達にアクセサリーを買うための依頼を本人に手伝わせるわけにはいくまい。今度また手伝ってくれとお願ひしておいたら一応は納得してくれたが不満気である。

「そういえばシーアからお主の五年間を聞いたぞ。大変だったろうのう」

確かに精霊殊に閉じ込められ五年（体感時間は四年だが）、もうあまり思い出したいくはない経験には違いない。マキアの同情の言葉に熱いものがこみ上げそうになったがここでいきなり泣き出しては周りの連中に引かれること間違いなしだ。

「まあ悪くはなかったさ」

と俺は強がって泣きそうな自分をどこかへ放り投げる。マキアにはばれていたみたいだが話を聞いていた他の連中はさすがだとも言いたそうな表情でこちらを見るので罪悪感によるダメージが俺のHPを削っていく。

俺は早々に食事を終わらせ本部から出て（別に逃げたわけじゃない、絶対にだ！）依頼を受ける前に鍛冶屋か武器屋で三本の穂鞘をつくってもらおうと考えていると慌ててフランが追いかけてきた。

よほど急いで来たのか息を切らして随分しんどそうである。見ると服の上から革製の鎧を身につけ、槍を片手にもう片方にはなにやら手提げの包みももっていて完全に俺について来る気満々のご様子。今のフランではお荷物になりかねないので別にこのまま走って逃げても良かったがあまりにも必死な表情だったのでそんな気もなくなってしまった。

「どうしたフラン？」

「ぜえ、はあ……マキアさんが同じ槍使いとして……腕を見ておけつて。後絶対目を離すなつて」

どちらかと言うとマキアは後者の理由が本命だろうな。もういなくなったりしないというのに心配性な所は変わってないどころか加速している。

とは言え以前の恩もあるしいずれ有名になるだろうフランに槍について教えておくのも悪くないと考え始めた時、ハッと気づいた。そういうえはまだ俺は自らの師匠に挨拶をしてない！

昨日いろいろあつてすっかり忘れていたが普通は帰って一番に師匠に挨拶しにいくべきだとあつちで剣術を嗜んでいた友人のS君が言っていた。

それに師匠の許可なく槍を人に教えるようなことをしていいものか？

いろいろ考えたがうちの師匠ならいいか！と結局答えは変わらず近くの武器屋へ直行。ギルドでの依頼がすんで帰ってきてから挨拶

すればそれでいいだろう。あまり師弟関係は厳しくないうちだから出来ることだ。

とりあえず以前師匠が言っていたお勧めの武器屋へ行ってみる。

大通りから二つ三つ外れたところにあり、行くまでにチンピラらしき連中に睨まれたフランは冷や汗を垂らしていた。あまり治安がよさそうではない場所だったので心配したが、そこへ着いてみると店は小さめな割りに小奇麗で店員のおじさんもホンワカとした雰囲気を感じも良い店だ。

「すみません。この三本の槍の穂鞘が欲しいんですけど」

槍を渡そうとした時、フランが泣くわ騒ぐわで大変だったが心を鬼にしておじさんに渡す。おじさんは俺のフランを手放す悲しみで目から血の涙が出んばかりの表情に分かってますよと言わんばかりに優しく微笑む。ああ、きっとこの人も槍道楽だ

「おお……！？ これはなんとも……素晴らしいものですな。魔槍なのは分かりますがここまでの物は私も商売40年の間に見たことがあります」

「魔槍……！？」

フランも普段とは違い驚きと喜びの混じった少年らしい表情になる。

「でしょでしょ」

俺は勿論自慢のフィランが褒められ天にも昇る気持ちだ。

「それに少々この柄に羽根模様が施された槍は穂が複雑なので穂鞘

をつくるのに時間がかかるでしょう」

柄に羽根模様が施された槍というのはミサゴのことで、穂は正方形の頂点のように四つ並んでおり、そこから長さ50センチばかりの刃が対角線の内側に向かつて細くなっている。

そんな普通ではない穂をしているので作るのに時間がかかるというのも頷ける。

一応すべての槍の穂の角度や大きさを測り、型紙が出来ると手間賃（フランに払ってもらった）を出してギルドへ向かう。

【天沼矛】と【地虚矛】は穂の形に近いものが見つかったのでちゃんとした穂鞘が出来るまでの間貸して貰う事にしたが、未だミサゴには穂鞘がなくすれ違う住人も武器の管理も出来ない奴め、みたいな顔をしている。これが俺の自意識過剰であってほしい

何はともあれギルドへ着くと受付嬢のところへ向かう。ここへ着くまでにコロ大湿原でモンスターを倒したのでひよっとするとCランクからBランクへ上がっているかもしれない。

「いらっしやいませ。本日のご用件は？」

「ランクをチェックしたいんですけど……」

「はい分かりました。え〜と……イツキさんは現在Cランクです」

なぬっ！？ あんだけ倒したのにまだCランクなのか？

そんな俺の表情を読み取ったか受付嬢は、

「どうやらイツキさんは依頼以外でモンスターをたくさん倒されて

いるようですが、依頼を通すのと通さないでのモンスター討伐はギルドに対する貢献度に大きく差ができ、よってギルドランクも上がりにくいのです。モンスター討伐依頼を受けることをお勧めしますよ」

今まで全然知らなかったその情報に啞然とする俺を見て大丈夫かこいつ？ と小声で毒づくフランの頭を一発殴って再び受付嬢と向き合う。

「後どのくらいでBランクになりますか？」

「そうですね。後中級レベルのモンスター討伐を一度受ければBランクになると思います」

受付嬢にお礼を言った後フランを連れて依頼のたくさん貼ってあるボードへ向かうとそこには既に冒険者が続々と集まっていた。

押し合いへし合いしながらなんとか列のトップに躍り出ると直ぐ目に入ったく中級モンスター>の文字が書かれている依頼書をボードから剥がす。帰り際に誰かの足を何度か踏んで、『痛えー』や『誰がやりやがった、ぶち殺す！』などと叫ぶ連中に心の中であやまつて列の外で待っていたフランと合流した。

「それで、どんな依頼をとってきたんだよ？」

「ハッハッハ、これだ！ 見る愚民め！」

バシッと紙を見せ付けるとフランは顔色が一気に悪くなる。

やはり初心者には中級モンスター討伐は少々刺激が強すぎたかな（キラッ

まあ今は我慢の時だよ少年！

「おいおい、あんたこれに俺を連れて行くとかアホじゃないか？」

うん？ フランの様子が少々おかしい。確認のためフランのほうへ向けていた依頼書をピラツと裏返すとそこにはこう書かれていた。

<中級モンスターの群れの討伐>

対象：西の森に住むジャツカルナイフの群れの討伐（およそ百頭～二百頭だと思われる）

報酬：200万ラド

注意：ジャツカルナイフは体中あらゆる場所からナイフのような突起物を生やすことができる魔物で、非常に攻撃的で主に集団行動を行う。一匹だけでもその体中から生やすナイフによって攻撃は防がれ、逆に攻撃した手がそのナイフによって傷つく。

おまけに俊敏で狡猾、チームワークも出来ていることもあり、一匹一匹はCランク程度だが群れになるとBランクの上位さえも倒すことがあるらしい。

最後にこの注意書きを読んでそれでも依頼を受けようとする奴に一言、『死ぬな！！』

う、うゝんこれはちょっとなまった体を慣らすどころかなます斬りにされてしまいそうだなWW

『きつとあの最後に死ぬな！！　と書いた人はいいい人だね』

我ながら上手いこといったなと思ったが、フィランは褒めてくれず、そればかりか見当違いな意見を出したので自分で自分を褒めてみる。
テヘッ／／／／

『マスター、私が褒めてあげましょうか？』

『うん！ 褒めて褒めて♪』

イツキはいろいろとショックを受けたせいでただ今幼児退行中。
しばらくお待ちください

『はい、よくやりまちゅたよマスター♪』

『うん♪ ありがとうベアンテっ——ブッファアー！』

『大変！？ マスターが大量に吐血をなさりました！』

『きつと今まで赤ちゃんになっていた自己嫌悪とか羞恥心が一気に
解き放たれたからだよ』

『普段はマスターに甘々なくせにこんな時だけ厳しく当るんですね。
マスターが可哀そうです』

『ち、違うよ！ 僕はイツキのことを思って……。だいたいお前が
いつもイツキに甘くするからこんなダメ人間になっちゃったんじゃないか！』

グサッ！

『フッ、甘いですね。私はマスターがダメ人間だろうと人間のクズ
だろうと、果ては床をコソコソ動き回る黒いGだろうと面倒を見ま
す。一生ね。あなたにそれが出来ます？』

グサツ、グサグサグサツ！

『それは純粋な愛じゃないよ、そんなのただのヤンデレだっ――！』

うん、その通り！

『分かっていませんね。愛とは相手を縛り、相手に働きかけることです。純粋な愛は何も生まず、相手に働きかけない。それは相手にしてみたら無関心と一緒ですよ。あなたはそれで本当に愛しているといえるのですか？』

理詰めをさせるとベアンテに並ぶものはいないな。さてフィランはどう返すのか？

『そんなことないよ！ 僕だってイツキのことをあ……あああい……して』

「おいつ、聞いてんのか――！！」

感動的なフィランの告白はフランの罵声によって意識が脳内会話モードから現実へと引き戻された。大事なところを邪魔しやがって！ そっいえば全然関係ないけどフィランとフランで響きが似ているというかほぼ一緒じゃないか？

まあ可愛さを比べたらフィランが圧倒的完全勝利だね。

「はいはい聞いてるお。で、ユーリイと俺のなりそめはどこまで話したっけ？ たしかロッドマスター編だったっけ？」

「全然っ違う！ 本当にこの依頼にするのかって聞いてんの――！！」

「全く最近の若者は、大声上げて年長者をびびらせることしか出来んのか？ もっと年長者を労わりなさい」

「誰が大声上げさせているんだ、コラッ！」

本当に切れやすいな最近のガキは、牛乳だけじゃカルシウムが足りないのなら煮干でも豚骨でも食べてカルシウムを増やすべきだろうに……

これから先こいつらが未来を背負っていくと考えたら無性に悲しいね

「よしっ、じゃあこの依頼受けよう！」

「え！？ じゃあって何だよ、じゃあって？」

「別にさっきまでは違う依頼にしようと思っていたが、こ五月蠅いフランにせいぜいこれで怖い思いさせて反省させてやるぜっ！ ケツケツケ」 という展開によりこの依頼を受ける事にしたなんてことはまったくないから安心するんだ」

「何っ一つ！ 安心させる要因がないんだけど気のせいかな？」

気のせい、気のせいと軽く流して俺は受付に依頼書を持っていく。ローブの裾を引っ張って必死で俺を止めようとするフランを引きずりながら依頼受付完了」

最後の方はフランが少し涙ぐんでいたが受付完了の印が入った依頼書を見せると諦めてギルドの床へペタンと座ってしまう始末だ。迷惑がかからないようにフランをギルドの外へ連れ出し準備にとりかかる。さすがに何の準備で行くほどバカでもないのでジャッカルナイフをおびき寄せる為に血のしたたる牛肉の塊と討伐証明のためのジャッカルナイフの尻尾を入れるためのおおきな麻袋を購入して準

備おkだ。

昼飯も買っっていこうとしたところフランが自らの持っている包みを指差す。フランが俺を追う前にマキアが急遽弁当を作って持たせたらしい。

何の心配も無くなったところで西の森へ続く城壁の門の前で少々手続きをして出かける。

出かける前は酷くやつれていたフランだが雲ひとつない晴れ晴れとした天気のせいか徐々に気分も楽になったようで今は口笛を吹くほどリラックスしているようだ。

緊張感に欠けているようだがこれから先は緊張のしっぱなしになるだろうので今の内にせいぜい平穩を楽しんだほうがいいだろう。

「フランはどうして冒険者になろうと思ったんだ？」

俺の素朴な質問でフランは口笛を吹くことを止め、少しの空白の後に言う。

「……俺の名前はランスフィールド＝フランっていうんだけど、誰にも愛称でランスって呼ばせたくない。それは付き合いの長いアリアでも一緒だ」

「槍使いになるのにぴったりの名前じゃないか」

「ああ、俺も幼いころは自分の名前に自分の好きな武器の名前が入っっていて喜んでいたよ。だけど同じ槍の道場生にこれまたすげえ才能の奴がいて、だんだん俺は自分の名前とそいつに対してひけめ——って言うの？ それを感じて来たんだ。

またそんな自分を認めるのも悔しくて、冒険者になって有名になればそんなひけめなくなるだろうという考えに至ったっていう感じ

かな」

フランはそこまで語ると、なんでこんな奴にこんなことを話してしまったんだと自己嫌悪に陥っているようだ。俺はむしろ冒険者になるのにそんなちゃんとした目標を持つてなる奴が少ないのでフランの目標に好感をもてた。冒険者はたいがいその日暮らしの小金を求めてなるやつが多い、無論俺もその中の一人だ。まったく文化や習慣が異なる異世界でそういうことが求められる客商売がやっていけるとは思えなかったのでそれしかなかったというのが正しいけど……

「自信を持つていけよランス。お前の才能は俺が認めてるんだからさっ」

「ハッ、あんたに認められてもな。せいぜい黄金のカナゼ並みの実力がなきゃあ俺があんたを認めないさ」

言っていることはきついが口調は先程よりもだいぶ柔らかなものになっている。

だが師匠と俺の槍術を比べるのはよくないぞ。凡人が一生真剣に槍を振り回し続けてもいけるレベルではない。類まれなる才能と、それを凌ぐ努力によってのみたどり着くことが出来る境地といっても過言ではないだろう。

「お前それは無茶言い過ぎじゃないかランス」

「だからそれ言うの止めろって!!」

「今の内にランスって呼んでおかないと将来有名になった時ランスって呼ばれた時に反応できないだろう?」

「ハア、もう好きにしてくれ」

フラン改め、ランスの了承を得たのでこれからランスと呼ぶ事にしよう。フィランとの差別化成功だ。

ランスとの溝も大分埋まった頃に西の森に着いた。途中街道沿いに魔物が出ることもなく、行商人の一団に会っただけで安全な旅だったがここからは違う。

訪問者を退けるように鬱蒼としげる森の入り口は延びた蔓によって塞がれている。槍で切り裂くのもありだが植物を愛する俺にとってそれは少々心を痛めることだ。仕方ないのでランスに怪しまれないように、俺が手で蔓の壁をこじ開ける動作と同時に脇にどけてもらう。複雑に絡み合った蔓の壁の強度はすさまじいもので普通は両手でこじ開けることなど

出来やしないのでたいていはナイフで切り裂いたり、火で燃やすのが一般的な解決方法だがそれを知らないランスは、結構簡単にいけるんだなと暢気な発言をする。これは後で冒険者の一般的な知識を教えておいたほうがいいだろう。

森の中に入ると木々はあまり高さがなく、太陽光線を遮っているせいか薄暗いという表現がピッタリで不気味な鳥の鳴き声が耐えることがない。こんな状況では魔物の襲撃に会った時反応が遅れる。逆に魔物と呼び寄せる事になるかもしれないがそれでも不意打ちをくらうよりはマシだろうと索敵の為にランスの用意していた背囊からランプを取り出し、マッチで火をつける。

ポオッという音共に不明瞭だった辺りの様子をランプが照らし出し、ランプのオイルが充分あることを確認した後森の奥へと足を進める。

「ランス、そこコケが湿って滑りやすいから気をつけるんだぞ」

「もっとこつちへランプを近づけてくれよ。足下が見えにくいんだ」

そんな風にしていちいち足を引つ張るランスを連れてしばらく進むと暗い所為ではつきりとは見えないが少し平けた場所に何かがあるが見える。一気に緊張したランスは、

「なんだあれ魔物か？」

と少々震えた声で聞いてきた。

「わからない。でも油断はしないほうがいいな」

近づいてみるとそれは頭から一本角を生やし、乙女しかその背に乗せないといわれる聖獣のユニコーンだった。まあそれは地球にある神話の情報なので、この世界では正しいといえないがその姿はゲームや本でよく見る姿と同じだ。問題はその聖獣が地面に倒れ伏し、確かな腐臭を漂わせて自身の青色の血の池で死んでいたということ。体には刺殺痕が多数あり、穴だらけになったその姿は無残としか言いようがない。

「何故ユニコーンがこうも無残に……！？」

ランスの口ぶりではどうもこの世界でもユニコーンは強く気高い種族であるらしいな。

『イツキ、気をつけて。何かに囲まれているみたいだよ』

『木々の振動から見るに四足歩行型の生物約二百頭がこちらを円形に囲んでいるようですね。十中八九標的のジャッカルナイフたちでしょう』

ジャッカルナイフをおびき寄せるために持ってきた肉の塊はどうやら無駄だったようだ。

事態を読めてないランスに事情を語ってランプを死守するように言う。この薄暗い森の中で唯一の光源であるランプを失ったら、夜目がきくジャッカルナイフどものリンチになるのは分かりきったことだ。それだけは避けなければいけない

自分ひとりだったら傷ついてもなんとかなるが今回はランスがいるのでより安全策をとるほうがいいだろう。森の中から二つの光る目がどんどんとこちらへ近づいてきて、一番近い数十頭のジャッカルナイフの位置を素早く確認すると地面に左手を押し付け、足下から拘束用の蔦を生やして捕らえた後はそのまま絞め殺す。ランスからではいきなり二つの光る目がいなくなっただと同時にグエツという絞め殺したジャッカルナイフの断末魔が聞こえたことしか分からなかっただろう。

群れに動揺が走り、何頭かが撤退しようとしたがそれより速く群れ全体を囲むように巨木を生やして逃げ場をなくす。撤退が無理だと分かったジャッカルナイフは当然のように檻に囚われた俺達を狙うだろう。

その前に震える手で槍を構えているランスの周囲にミサゴで自動防御の【天沼矛】と自動攻撃の【地虚矛】を浮かばせて後方の憂いをとっておこう。俺にはまだミサゴがあるから何とかなる

「な、何だ！？ 槍が勝手に浮いて？」

「それはランスを守るから安心しろ。後絶対そいつらから離れるなよ」

「お…おう！」

ランスの声と共に駆け寄ってくるジャツカルナイフを再び蔓で捕えようとしたが、先ほどの攻撃で学習した奴らは生えてきた蔓を体中からナイフのような物を出し、それで蔓を斬りさいて脱出した。まるで意志というものが感じられない丸い白目にそれほどの知性があるとはなかなか信じられない。

そして続いてその蔓攻撃を行ったのが自分だと気づくと直ぐに向かってくる。奴らの気を惹くために地の滴った牛肉を放り投げたが見向きもしない。奴らは分かっているのだ。俺達を倒せばもつと新鮮な肉が手に入ることを……

「うわっ！？ アブねえ！！！」

戦闘の意志がほとんどなかったランスを狙おうとしたらしいが、その爪とナイフは【天沼矛】により防がれ、【地虚矛】の返す一撃で地面に崩れ去る。しばらく何匹かでランスを狙っていたようだがそれが無理だと分かると標的を俺に変える。

「ハッ！！！！！！！」

こちらを襲おうとしていたジャツカルナイフの動きが一瞬止まるほどの咆哮を上げ、一足飛びに固まった数頭へ向かうと瞬時にその脳天にミサゴを叩き込んだ。

ミサゴの四本の刃によって脳天を貫かれたジャツカルナイフの死に様も見ず、直ぐに次の敵を狙う。

決して俺は受身になってはいけない、常に一定の距離を保たないと存分に槍は震えないのだ。だから攻めて、攻めて、自分の間合いを取り続けることだけを考えないとこの群れ全部を相手に出来ないだ

ろっ。

ふとジャツカルナイフ達の攻撃が止みどうしてだと一瞬俺が迷った時、なんと四頭のジャツカルナイフが四方から同時に飛び掛ってくるのではないか！

直ぐに槍を短く持って振り回すことで何とか叩き落したが、その知性溢れる攻撃には驚きの念が隠しきれない。チームワークが得意とは聞いていたがまったく同時に四方向から攻撃を受けるとは想像してなかった。

「やるなあ」

再び襲い来るジャツカルナイフたちの攻撃が止むと、油断していたさつきと違い今度は俺を囲むように四頭が位置どるのが分かった。同じ攻撃を繰り返し返そうとするとは所詮獣は獣だということだろう。先ほどと同じく四頭が飛び掛るがそれを予期していた俺は焦りもなく全て叩き落す。

「危ないぞっ！！」

フ란の声で俺はとんでもない勘違いをしていたことに気づく。四頭が地面へと落ちていく中で、足下から俺の足目がけ頭にナイフを生やしたジャツカルナイフが一頭飛びつこうとしていたのだ。四頭が先ほどと同じ攻撃をしたのは注意を上に向けさせるための布石に過ぎず、更に恐ろしいのは先ほど飛び掛ってきた四頭は自ら囿になり死を覚悟してまでその役目を果たそうとしたことだ。

「チッ！」

足下から飛びついてくるジャッカルナイフの存在は意外だったが、まだ充分石突による返して迎撃出来る距離だ。俺はそいつを煩わしく思いながら迎撃に入ろうとしたが、

「シャツ」

「な——うおっ!？」

そのジャッカルナイフによる体当たりで体勢を崩され地面へ倒される。

距離的には充分間に合うはずだったが、やはりまだ体が鈍っているらしい。一緒に倒れこんだジャッカルナイフは俺の膝をその大口で喰らいつこうとしたが、そうはさせじと蹴りを無防備な脇腹へ叩き込んで吹き飛ばす。なんとか地面から起き上がると、数十匹近くが既に俺の槍の有効範囲内の内側に来ていた。

「今だけ【天沼矛】を呼ぶからねッ!！」

フィランが切羽詰ってそう言うと言の前にランスを守っているはずの【天沼矛】が現れやつらのナイフによる攻撃を高い金属音を響かせ受け止めた。当るはずの攻撃を受け止めた【天沼矛】の存在に動揺したジャッカルナイフたちの頬面を蹴飛ばして安全距離を保つとすかさず天沼矛をランスの守りに返した。今は俺に攻撃が集中しているが、ランスの守りが無いとしたらすかさず奴らはランスを狙うだろう。

「フィラン、さっきは助かったがもうこんな真似はしてくれなよ」

「……嫌だよ」

フィランとの会話中にでも構わずジャッカルナイフは襲ってくるので、打撃と突きを使い分けて闘っていたがフィランのその発言に思わず驚いて、奴らの一匹に噛まれるところだった。

『な、何言ってるのフィラン！？ 俺は少々の怪我は直ぐ治るからいいんだけど、ランスは死ぬかもしれないんだぞ！』

『だけど僕は……イツキが傷つくほうが嫌なんだもん！』

『気持ちは凄く嬉しいんだけど——ねっ！』

ジャッカルナイフはだんだんチームワークを利用した攻撃が増えてきて、前と後ろから来たジャッカルナイフの一体を槍で巻き上げ、向きを変えてやり互いのナイフによって脳天を貫いて死んでゆく。

『私もクソ槍と同意見です。最優先されるのはマスターのお体のみ、それ以外が死のうと関係ありません』

相変わらずのヤンデレ振りに辟易するがそれがベアンテという存在なので仕方無い。

俺が出来るのはおれ自身を守る事によってランスの守りの要である【天沼矛】を奪わないことだけだ。

唯でさえ体が鈍っているのにそんな制限まである縛りプレイはきついな。

魔法で吹き飛ばすという方法もあるが一度魔法を失敗して暴走させ、自らの命も危うく仕掛けた俺が五年ぶりに魔法を使って失敗する可能性は多いにあるし、マナとオドの合成に時間がかかるがそんな暇はジャッカルナイフが与えてくれるとも思えない。

「手が無いこともないけど、ランスの手前上やっぱり槍だけでやるしかないか……」

無論、本当に命がやばい時はランスの前でもバンバン使うけどね。それにこの制限された環境で闘ってこそ槍術のレベルアップ、しいては師匠の打倒にも繋がるわけだから少々のは困難は覚悟の上だ。

そろそろ槍で倒した数が百を超えるだろう。今も向かってきた五頭を真横に斬り割いたからそれプラス5。

息が上がり、肩が震え、地面に倒れたジャッカルナイフの血で滑りそうになるがまだ全体の半分しかいってないのだ。返り血で元々真っ赤だったローブは更に紅く染まり、血の匂いが染み込んでしまっている。

このまま帰ったら門番に完全に門前払いされるだろうなどどうでもいいことを考えてしまうぐらい俺は疲れていた。

そんな俺にも容赦などしてくれない数十頭のジャッカルナイフは時間差をつけて、脇腹に生やしたナイフで俺の腕を、足を切り裂こうと迫る。さすがにこれを受けたらヤバイだろうと体をミサゴの上に投げ出し、宙へ浮かびその攻撃を避けたがしつこくこちらの方へ飛び掛ってくる。必死でジャンプして噛み付こうとしているが、ミサゴは地面から高さがあるのでその攻撃は全く届かない。

「ちょっと……休憩させてくれ」

「わあゝ！ こっちへ来んなー！」

ふとランスの声のする方を見るとランスの周りにたくさんのジャッ

カルナイフが集まっているのが見えた。【天沼矛】や【地虚矛】が意志を持っているかのようにそれらの障害を斬りさき、ランスを守るがそれでもこのまま放っておけば敵の数は増えていずれ手に負えない時が来るだろう。一応ランスも槍を持ってはいるが頼りになりそうもない

「少しは休ませてくれよ」

『私の力を使えば直ぐ片付きますよ』

ベアンテの甘い誘惑を振り切りミサゴでランスを襲おうとしているジャッカルナイフを追い払うと再び地面について対峙する。

大丈夫だ。師匠との脳内戦闘を思い出せ。

相手の動きをよく見て、動きを予測しろ。脳内は槍を手の内で扱いきる冷静な部分と、相手と向き合う心構えを養う情熱、その両方を持ちえたらただ無心に槍を振るえ。

向かってくるジャッカルナイフの群れの動きがゆっくりに見え、耳元でやたら大きなやつらの息遣いが聞こえる。世界は色を失い、唯一手にある槍のみがセピア色の世界の中鮮やかに輝いていた。

槍を動かすのは俺ではなく、俺自身が槍によって動かされている、そんな感覚だ。

ジャッカルナイフは一頭、また一頭とゆっくりこちらへ向かってくるがある種の予定調和？ めいたものを感じさせるように俺の槍によつてあるものは刺し殺され、あるものは叩き殺されていく。自分でも到底無理なスピードで槍は振るわれ、不謹慎ではあるが楽しいという感情がこみ上げる。

ああ、これだ。これが師匠たちのいる高みだ

気づけば百頭近くいたジャツカルナイフは半分が減り、残りの五十頭もこのまま倒せると確信したところで世界に色が戻ってきてしまった。

その反動のせいか一気に疲労感がダツと押し寄せ、その場に膝づく。

『大丈夫、イツキ！？』

疲れてフィランに返事をするさえおっくうだが、気配で残りのジャツカルナイフがこちらを警戒しながら近寄ってくるのは分かった。

もはや奴らも俺しか狙ってないだろう。

残った力で【天沼矛】と【地虚矛】を呼び寄せ、俺は糸が切れたように地面へ倒れた。

ガクン、ガクンと一定のリズムで振動が起こる。

それまでは体中が心地よい気だるさに包まれていたが、その振動は妙に荒つぽく肌にヌメツとした触感がしたので状況確認の為に薄目を開けてみると、そこにあったのは茶色の髪の毛だった。いや正確には人の後ろ頭か？

足も目の前の人物に抱えられているところから、どうやら俺は誰かに背負われているらしい。

「どこだ、ここは？」

「おっ、目覚めたのか？」

声からランスということが分かったが、いまいち現状が掴めてない
とりあえず今分かつているのは又メツとしていたのはランスの背汗
と、ジャツカルナイフの返り血だったという、嬉しくもない情報だ
けだ。男におんぶされるなんて屈辱だが、やはりあの時相当無茶な
動きをしたせいかな立って歩けそうにないので我慢しよう。

「ここは首都エリアノへ続く街道だ。あんたが気絶しちまった後に
あの勝手に動く槍たちが全部ジャツカルナイフを倒しちまったから
討伐証明の尻尾だけ斬って寝てるあんたを負ぶさってここまで連れ
てきてやつたんだぞ」

『その通りだよ！ 僕が最後までイツキを守ったんだからね！！』

「ありがとうな」

「礼なんていいさ。俺はあんたに助けられたんだ。槍もあんたには
遠く及ばないってことが分かったし認めてやるよ」

フィランに言ったお礼がどうやら口に出てしまっていたようで、何
やら勘違いしたランスが妙に偉そうにほざいている。……まあ、い
いか

自分の実力が足りないってわかったただけランスも強くなっただろう。

エリアノに着くと俺はランスの制止も無視して自分の足で地面にた
った。フラフラしてて何度も転んだが、男におんぶされたままで街
中は歩きたくないので仕方無い。返り血は門に入る前にローブを絞

ったので大分落ちたが臭いは酷いままなので早く本部に帰りたいがその前にギルドで証拠のジャッカルナイフの尻尾を差し出し討伐証明した。

受付嬢は血の匂いにビクともせず淡々と報酬の200万ラドを差し出し、俺のBランク昇格を営業スマイルで賞賛する。凄まじいばかりの営業精神にこちらが賞賛したくなるほどだった。

そして日が暮れる頃に帰った俺を見てマキアが大慌てで怪我はないか？と心配そうにし一時、本部のメンバーを巻き込んだの大騒ぎになったことは語るまでもないだろう。

六十五話 例のぬたぐんって奴です（後書き）

い
フィランのカワユサは異常だ。作者の俺が言っただから間違いはな

六十六話 いろいろ思うよ

「ふう、怪我はかすり傷程度だけど精神的に疲れたな」

あの後マキアに血まみれのロープを取り上げられ、あれよあれよという間に本部の大浴場へ連れてこられた。そんなものがあると知っていたら帰ってきて直ぐに入りたかったのだが、大量の水と高価な魔道具を使うらしく週に一度しか入れないそうだ。

そんなことを聞かされては、俺一人の為に準備されたこの状況に悪い気がしてくる。

なにせ学校のプールの半分ほどの広さの大浴場で、タイル張りの床や体を擦る垢すりでさえその作りから高価だとわかるのだからよりいっそう罪悪感に苛まれるというものだ。

『その割には随分くつろいでいるよう僕は見えるのだけど……』

「風呂は日本人の癒しの場なんだよフィラン」

風呂場でも勿論フィランと一緒に。さすがに風呂の湯に直接つけることは躊躇われたので壁に立てかけている。

『随分くつろいでいる所に水を差すようですが、何か重要なことを忘れていませんか？』

「……ああっ！？ そういえばユーリイにただいまのキスをしてないっ！！」

『そんなこと今まで一度もなかったでしょう？ そして今それをや

ると確実に殺されますよ』

「ハハッ、ジョークだよ……」

そんなことは自分自身がよく知っている。食事中もあの冷たい視線をまともに受けるだけで心が悲鳴をあげるのだ。べ、別に落ち込んでなんかいないんだからねっ！

『私がいいたいのはマスターの師匠、カナゼ様への挨拶です』

「それは明日でもいいよ。だって疲れたし」

『言い切った！？ 言い切ったよこの人！』

『忌々しいですがクソ槍と同じことを考えていました。さすがに師へのその態度はどうかと思われますよ』

一応師匠には感謝してるんだよ、本当に。

だが普段の言動やら何やらを総合的に判断すると、尊敬に値しない人間なのは明白。

槍の腕だけは尊敬していいがそれ以外となると……本当、何故あんな人がメイ八教の司教をやっているんだろう。よっぽどメイ八教は人材が足りてないと見た！

それに一応建前として殺し合いをした後の、血の匂いが染み付いた状態で師匠に会いに行くのは大変失礼なことだ。そして現在疲れ切った体では教会に着くと同時に倒れてしまうかもしれない、迷惑をかけるわけにはいかない。

こうして理論武装……もとい合理的判断から日が暮れかけた今、師

匠に会いに行くのは正しくないという結果が導きだされたところで
しばし風呂を楽しむことにするとしよう。

しばらく風呂の中を泳ぎまわったりと幼稚な行動を楽しんでいると、
脱衣所の方で誰かが服を脱ぎ始める音がする。今はマキアが俺専用
の時間として大浴場を開けてくれているので、人はここに来ないは
ずなんだが……

曇りガラスの向こうで人影が一つにまとめた長い髪を色っぽく解い
て、その細長く綺麗な足で大浴場へ近づいてくる。

あの長い髪はまさかユーリイか？

……べ、別に、によ、女体に興味などないが変態扱いされてはたま
らんで湯船の中に隠れるとしよう。

『そついうのを変態つていうんだよ』

『マスター。不潔です』

外野の声を無視して湯船の中に沈む。湯は乳白色なので沈めば外か
らは見えないはずだ。

そうしてしばらく湯船の中で我慢していたが、ついに息が持たなく
なり湯船から勢いよく飛び出した俺を迎えた光景とは……………クロ
トのあられもない姿だった。

「うわっ！？ ビックリさせるなイツキ！」

「……………わかつてはいたよ。わかつてはいたけど少しぐらい夢見ても
いいじゃないのー！」

「いきなり何を言ってるんだ？」

そう言っただけで再び体を洗い始めたクロト。体を洗う動作ですら一つ一つが洗練されていて、正に肉体美という体つきのクロトを見ているとなんだか胸の中で一つの感情がこみ上げる。

ああ、これが嫉妬ってやつか……

「ちよっ！？ 何でいきなり俺の腰を後ろから掴むんだ？ 俺にはそんな趣味は全く無いぞ！」

「俺にも無いわボケえー！！！」

クロトの腰を両側から持ち上げ、そのまま湯船の中にバックドロップの要領で投げ入れる。

クロトが状況を掴めずに水中で暴れていたがこれはイケメンへの正当な制裁だ。諦めて消えて欲しいのだがさすがにギルドランクA、直ぐに体勢を取り戻し荒い息で抗議を上げる

「ぶはっ、こっ……いうのはナーガの仕事じゃないか？」

「若い内にたくさん経験のすることはいいことだよ」

「ほう、ならばイツキもその経験を積んだほうがいいな。俺よりも若いから二、三回はやっておくべきだろう」

は？ 何を言っているの？

そして何故俺の腰を掴むんだ？ や、止めなさい！

「喰らえ〜!!」

浴場の天井が凄まじいスピードで前に流れていき、目の前が泡で真っ白になった。すぐさま水の上へ顔を出したが、鼻に水が詰まったようでひどくむせる。自慢じゃないが俺は全くの金槌なのでこういう攻撃にはかなり弱いのだ。

目の前でケラケラ笑うクロトになんとか仕返しをしてやりたいと考えていたところ、再び大浴場への扉が開かれ、こんな時でも目に包帯を巻いたナーガが入ってきた。

「なんだか随分賑やかだな。ひょっとしてお邪魔だったか？」

「んな訳ないだろっ！」

「そうか、それならいいが。後から他の男連中も入ってくるから尊厳を失うようなことだけはするなよ」

「なんだかナーガが酷く生意気だ。」

ふと横を見るとクロトがいい悪戯でも思いついたかのように目配せする。男の俺はなんとも無いが女性はこいつのウインクなんて受けたら卒倒するんだろうな、とどうでもいいことを考えながらクロトの作戦を聞く。

そんな俺達の思惑を知らないナーガは垢すりでゴシゴシ汚れを落としている。

「正にこれは最大のチャンスじゃないだろうか？」

「なあ、ナーガ頭を洗ってやるよ」

「……どうしたんだ急に？」

「ナーガ。イツキの気持ちを察してやれ。きっと今まで五年間迷惑をかけたナーガに恩を少しでも返したいのだろう」

ナーガはそれまでは半信半疑だったが、クロトのその説得に促され無抵抗になる。

「どうだナーガ？ 痒いところはないか？」

「いや、ちょうどいいぞ」

ナーガの頭を石鹸のようなもので泡立てながら、俺はナーガの座っている湯椅子の足を蔓でしっかり固定してゆっくり頭上へと上げていく。目の見えないナーガは感覚が敏感なので繊細な動きが必要だ。途中何度か違和感を感じたようだが、それはクロトの適切な話題変更によってなんとか未だ気づかれないでいる。そして湯船の上まで移動させたところで、

「よし、泡を流さないとな。少し一気にお湯をかけるけど驚かないでくれよ」

と、目の見えないナーガに気を利かしているような発言をする。

「ああ。……すまない。これでユレイア様の記憶が戻れたらまた昔のように楽しくやっていけるだろうにな」

大丈夫だよ。ユーリイのことは俺がなんとかするから……
だから今は………楽しんでくれ！！

蔓を使ってナーガの乗っていた湯椅子をひっくり返した。するとナーガは頭を下にして湯船の中にダイブする。結構な高さから落とし

たせいか、湯船の底にぶつかってゴンツという鈍い音がしたがきつとナーガなら大丈夫だろう。

喜びをクロトとハイタッチすることによって分かち合っていると蘇ったナーガに俺だけ袋叩きにされた。企画担当はクロトだというのに結局本人にお咎めなしというのは納得できない。この世の不条理を嘆く思いだ

その後3人で湯船に浸かっているとナーガの言った通り、男が大浴場に集まりだした。

知っているのはランスと変わり者吸血鬼のルクイエ君、それともう一人俺の知らない大柄でスキンヘッドの男。筋肉美という点ではナーガといい勝負をしている。

眼光も鋭く、これでグラサンをかければマフィアの幹部にいてもおかしくない。

後それと背中に鱗のようなものが張り付いているので人間ではないだろう。竜人ってやつなのか？

ランスとルクイエ君は年が近いこともあり（実際は長命種であるルクイエ君のほうが大分年上だろうが、見た目は同い年なので気にしない）、仲良く話していたが、スキンヘッドの人はナーガとクロトに軽く頭を下げてただけで全く話さないし、無表情だ。

なんとなく嫌われていそうな気配がしたが、ここでチャンスを逃すともうこれから話せそうにないので勇気をもって話しかけてみる。

「いい湯だとは思わないかい？」

「……………」

完全に無視だ。いや、まだ諦めるわけにはいかない！

「知っているとは思うけど俺は人間でイツキというんだ。よろしく」

「……………」

「君の名前は？」

「……………」

今度はその鋭い眼光でギロツと睨まれた。さすがにもう無理だと思い、俺は大浴場の外へ出た。怖くなんてなかったよ全然……だから俺の膝よ静まれっ！！

翌日本部から出て、流石に何も持たずに行くのは悪いかないと思い近くのお菓子屋で売っていた焼き饅頭のようなものを片手にメイ八教の教会へと足を進めた。

大教会には目立つ尖塔があるし、それでも分からないときはメイ八教の修道服を着た集団についていけばいいのでしょくあっさり教会へとたどり着くことが出来た。

全体的に荘厳なつくりをしているメイハ教の教会には日本人がよくイメージする天使像などは無く、幾何学模様が柱や天井に描かれています。ただのものだがそれがよりいっそう宗教色を高めている。広い聖堂にはたくさんのお道士たちと信者が円形に集まり、その中心で五年前よりいっそう老けた師匠が柱などに描かれている幾何学模様と同じ模様が刺繍された修道服を着て、周囲の人へと語りかけている。

なんだか邪魔をしてはいけない雰囲気だったので、見つからないよう聖堂の柱の陰へと身を潜め、その集会が終わるまでまっていることにした。

ほどなく信者達が帰り、修道士が仕事で何処かへ行ってしまったが師匠だけはその場で未だ天に祈りを捧げている。これはちょうどいいと柱の陰から出ようとすると、

「その柱の陰に隠れている奴、先日私はここに大罪人がいないと確かに言っただがどうやら記憶違いだったようかな？ ついに教団直々に暗殺者を差し向けてくるとは、再び戦争がやりたいのかね？ そう上司に伝えたまえ」

まるつきり話が読めないが、どうやら何か師匠が勘違いをしていることだけは分かる。

とりあえず誤解を解こうと柱の陰から出て師匠に自らの姿を見せると、師匠の顔が固まった。

さすがに五年ぶりの弟子の姿に驚いたのだろう。

「ははあ、成るほど。終に馬鹿弟子の偽者を用意してこちらの発言を嘘にしようとする考えか。確かにいい案かもしれないが、馬鹿弟子は赤いローブをいつも着ているんだ。騙されはせんぞ!」

あれ？　なぜかより勘違いが広がった気がする。確かに今は赤いローブは着てないが、それはジャッカルナイフの返り血によって汚れたから今は洗濯中なだけであって、俺はカナゼ師匠の本物の弟子だ。数年のうちに痴呆症が進行したのか？

「ちよっ!？　師匠何を勘違いして——っっ!」

師匠がどこから取り出したか、自前の黄金の槍で俺の体を押し折ろうと横払う。

なんとかそれを身を屈めることによってかわしたが、背後の柱は真っ二つに砕けた。

事情は分からないが緊急事態らしい。【ミサゴ】を両手で真正面に構え、両肩の上に自動防御の【天沼矛】と自動攻撃の【地虚矛】をミサゴの能力で浮かして固定する。

これが長年の妄想で手に入れた最も理想のフォーメーションだ。

「それにしてもイツキのお師匠さんは凄いね。あの年で五年前より腕を上げているよ」

「師匠だからということとその理由が説明できるのが怖いところだな」

「マスター、私の力で植物を生やせばカナゼ様の誤解が解けると思うのですが……」

『いや、こんな敵意バンバンの師匠と闘えるチャンスなんて中々ないから少しだけ頑張るよ』

『マスターに危険が及ぶようなら植物を生やしますからね』

『それはこっちからもお願いするよ』

師匠の槍は速く、重く、そして鋭い。槍使いとしての理想形だと対峙してみても分かる。

確か師匠は俺の三槍流をあまりみたことが無いはずだから俺だと気づかないのだろう。だが見てないということは対処も出来ないということでもある。それに付け加え俺は四年もずっと脳内シュミレーションで師匠の槍を見てきた。ならば少しは通用するはずだ。

師匠の連突きは背中が地面に付くぐらい背を逸らしてその大部分を避け、当りそうなのは【天沼矛】の自動防御に任せ、ミサゴの四本の穂で師匠の槍を絡めとろうとしたが師匠はそれに気づき咄嗟に槍を引き抜く。

攻めに転じる時と見極めた俺は、【ミサゴ】と【地虚矛】で二槍流の構えに変え、振り下ろしの直ぐ後にもう一方の槍で突きが飛んでくるというトリッキーな技を使ったがあっさり受け流され、逆に反撃の隙を与えてしまった。

「お前は技に頼りすぎている。技とは出そうと思って出すものではない、その刹那の攻防において生まれるものなのだ」

もはやこれ俺だと気づいて闘ってるよな？

「だったら師匠みたいに槍の間合いを伸ばす方法を教えてくださいよ。間合いがたりないから技で補わなくちゃいけないんです！」
俺の恨みの籠った突きと寸分違わず槍の穂先をぶつけてくる師匠。
今は完全に俺と師匠の間で鋭い穂先同士がぶつかり合って制止した状態だ。

「自分の腕のなさを他に押し付けるなど言ってるんだバカ弟子めっ
！！」

師匠がこれまでとは段違いの速さで三本の槍全てをいなし、俺の首元へ鋭い穂先を突きつける。……やはり敵わないこの人には

六十七話 これからのこと（前書き）

ちよつとシリアス……かな？

六十七話 これからのこと

「まあその席にでも座れ、話すことはたくさんある」

師匠に誘われた部屋。教会の中に宛がわれた師匠専用の部屋なのか部屋には聖書のようなものが高く積み上げられている。司教という地位の癖にベッドなどの家具も普通で、イスも木製のものがポツンと二脚置かれていただけだ。

とりあえずそのイスに座って三本の槍を壁に立てかけ、師匠がカップで渡したお茶をズルルと飲む。

このほのかな苦味は少し緑茶に似ているな。後で少し分けてもらおう

師匠も自らの手にカップを握り、待ちきれないように質問しだした

「今まで何処で何をしていた？ 戯けたことをぬかすと今度は本気でその喉を貫くぞ」

やはり師匠はキレている。殺意が波のように押し寄せてくるので俺は事情をいっさいふざけずに語った。まだ死にたくないもの！

師匠は一連の事情を聞くと、しばらく口を堅く閉ざし何か考え事をしているようだ。

そうして体感時間で一時間、実質十分位の時間がたちようやく師匠が口を開いた。

「……お前も大変だったようだな。だがこちらもいろいろと大変な
ことになったのだ」

「ユーリイの記憶喪失と、師匠のさっきの勘違いですね？」

「ユレイアの事を知っていたのか？ ……ユレイアのこととはこっち
でも何とかしているのだが中々上手くいかなくてな。それより後者
のほうが今一番対応しなければならぬ問題だろう」

確かに物陰に隠れていた俺を暗殺者扱いするなんてただ事ではない。
そんなに師匠は切羽詰った状況にいるのか？

それと師匠は暗殺者を送ってきた連中に何か心当たりがあるようだ
ったのが気になる。

「……ブレインのことは覚えているか？」

それは勿論覚えている。ラノーラ帝国の皇帝かつ、ゼノア教の教祖
の生まれ変わりかつ、師匠をも超える力量の人物。それだけの特徴
をもつ人物を忘れるはずがない

そういえば最後に巨大化したブレインを倒した後はどうなったのだ
ろう？

あの攻撃は死んでもおかしくなかったから心配だ。まあ、生きてい
たとしても再び何がきっかけで暴走するか分からないので微妙だけど

「その顔を見るとどうやらブレインを心配しているみたいだな。安
心しろ

「元気にラノーラ帝国で善政を続けているとの噂だ。何やら憑き物が
落ちたかのように宗教とはスッパリ手を切ったらしい」

「それはよかった♪」

またあんなチート野郎に暴走されたら今度は勝てないだろうし…

「ところがいいことばかりではないのだよ」

そうため息をつく師匠の顔をみると本当に老けたなと感じる。色々心労が溜まっているのだろう。

「ゼノア教の教祖の生まれ変わりという絶対的な存在を失った信徒たちが暴走してな。グレインの中の教祖を殺したとしてお前は酷く怨まれているんだ。何とか最後教祖に止めを刺したユレイアだけはメイ八教の情報操作によって事なきを得たが、さすがに実質止めを刺したお前だけはどうしようもなく、メイ八教がお前を保護しているのではないかと暗殺者紛いのものがちよくちよく入り込むのだよ」

なん……だと……！？

狙われているのは師匠ではなく俺だったのか！！

っていうかヤバイだろこの状況。怨むなら俺じゃなくて師匠にしてくれ

そして何で師匠はそんなに笑いが堪えられない様に半笑いをしてるんだ！？

「た、たたたた大変じゃないですか！？　なんでそんなに冷静にしてんだあなたは！！」

「勿論、他人事だからだ」

ダメだこいつ、早くなんとかしなくちゃ。

『これはいくらマスターの師匠様と言えども制裁ですな』

『構わん、俺が許す!』

『イエス、マスター』

見る間に師匠の脇から多種多様の食虫植物、いや食人植物がニョキニョキと生えていく。ラフレシアの真ん中に鋭い牙を生やしたものもいれば、見た目は可憐なただの小さな青い花だが自らのクジラさえも一瞬で殺す毒粉を撒き散らすやつ、王水に非常によく似た消化液を持つ植物で出来たグリーンドラゴンもいる。そのどれもがロッドマスター級の火魔法を使わなければ焦げ後すら付かない正に化物だ。俺の力では到底出せないそいつらを簡単に呼び出すところはさすが植物の統率者と呼ばれるベアンテなのだろう。

しばらく師匠の断末魔を聞いた後、グリーンドラゴンが瀕死状態の師匠を口からポイツと吐き出す。でも師匠だから大丈夫だ! なんせナーガを凌ぐタフネスを持つ男だからだ

案の定復活した師匠は自らの神聖術で体を治していく。その光景は正に神の奇跡というやつなのだろう。こんな力を持つ師匠さえユーリイの記憶を取り戻すことは出来ないのだからユーリイの脳へのダメージはよっぽどのだろう。

「先ほどのちょっとした冗談だ。実はその両方を解決するいい手段がある」

「本当か!？」

「昔、私にもう一人弟子がいるという話はしたか？」

そういえば前そんなことも言っていたような気がする。俺は一度軽く頷いて師匠の話を促す。

「その弟子は槍の弟子ではなくて、私が神聖術を叩きこんだ弟子だな。幼少の頃から叩き込んだ奴は周囲を軽く越える才能の持ち主でたしか七年前に『師匠に教わることは何もない』と言って、この大陸から出て行ったんだ。あいつに頼るのは癪だが、私を超える癒しの力をもつ奴はせいぜいあいつぐらいだろう」

弟子にすら負けず嫌いの師匠が認めているくらいだからきつとその人の神聖術の腕はもの凄いのだろう。今も唇を噛み締めて悔しそうな表情を浮かべる師匠の顔から推理するに、それだけではない気もしてくるのだが……

「ユレイアのことはいつに任し、お前はしばらくその大陸でゼノア教徒のほとぼりが冷めるまでのんびりしてこい」

悔しい話は準備が出来る数ヶ月後まで待てとのことだったので、俺は教会に仮住まいしているリザルトさんとシクエちゃんに会いに行った。教会に信徒以外の人を住まわせていいのだろうかと考えたがきつと司教の権威を使つてのことだろうので気にしない事にする。

そしてリザルトさんに出会つと直ぐに師匠のように斬りかかれた。師匠のは勘違いだがリザルトさんは完全に俺だと知つた上で斬りか

かつて来たので性質が悪い。

何とか戦闘中に事情を説明したのだが、リザルトさん曰く全く聞こえなかったのことで魔力の球を何度もぶつけられ危うく意識を落とした。

その後何度も土下座して、土下座する俺の頭に唾を吐きかけてようやく満足できたようで笑顔で迎えてくれたのだが、酷く気分が悪いのは気のせいだということにしておこう。

一方シクエちゃんは俺を見るとその可愛い幼女顔にたくさんの涙を浮かべて抱きつこうと駆け寄ってくる。そして俺はその時完全に油断していた顎への強烈なアッパーによって完全に意識をうしなった。

確かに、何も言わずに五年間失踪した俺が悪いよ。でもこれはないんじゃない？

教会の中の診療室で目が覚めた後、もう一度全員に挨拶して俺はマキアたちにプレゼントするためにアクセサリーショップへ出かけた。既に日は高く上り、ちょうど昼飯の時間だ。

まずは腹ごしなえということでもし屋が並ぶ通りへ向かう。お昼時ということだから人ゴミが出来ていたので、背中に背負う三本の槍は邪魔になると考え、フィランに元の一本の古臭い槍に戻っても

らい極力邪魔にならないようにしてもらった。

本槍？ はご機嫌斜めの様子だったが他人を傷つけると洒落にならないので、穂鞘が出来るまで我慢してもらおう。

「いやゝ、こんなに一杯あると迷うな」

『僕あつちのトブ肉を甘く煮たやつがいいな』

トブ肉は豚と鳥を合体させたような見た目の生物で、まさにその通りの味がする不思議生物だ。フィランは実際に食べないが、子供心から屋台の外に置かれた大きなトブ肉の塊を置いているその店が気になったのだろう。

『やはりクソ槍の思考はそんなものですか。マスターのことを真に思うのなら、あの女性たちが列を作っているく野菜好き うさぎ食堂だよ！ キヤハツ』 亭へに行くという答が出てくるはずです』

「よしっ！！ フィランの言った店にいこう！！」

『そ、そんな馬鹿な！？』

『ふふゝん！！ やっぱイツキと僕は以心伝心だね』

ベアンテには悪いがさすがにあそこに行く勇氣はない。あの列に並ぶクロトとマキアの姿が見えたのはきつと気のせいだ。そうに違いない

幸いなことにフィランお勧めの屋台くトブ天国へはちょうど二人連れが出て行ったところなので二席ほど空いている。メシを食べよう

とその空いている席に座り、テーブルにいているメニューでも読もうと隣の席の人にとってくれるようお願いする。

「ほい、これがメニューだよ——ってお前は!？」

何と隣でガツガツトブ肉の塊に食いついていたのは猫耳獣人のケイだった!

でもとりあえず驚くのは構わないが、口に含んでいたものを飛ばすのはやめて欲しい。

「何でこんなところにいるんだ? という野暮な質問はよしておくが、ケイも女の子なんだから向こうのく野菜好き うさぎ食堂だよ! キヤハツ♪ 亭>にいったらどうだ?」

「う、うるせえっ!! 別にいいだろ好きなんだから／／／それにその質問こそ野暮ってもんだろっ!!」

慌てるケイを他所に俺は店主らしきおっさんにお勧めのメニューを注文する。困った時は店の人に頼むのが一番確実だそして隣に座ってるケイと全く同じ、巨大な肉の塊が出てきたときは少し泣きなくなった。

いくら若いといってもこの量を食べたら胸やけになることは必須。俺は半分だけ食べると残りはケイの方に押しやる。

「ほら、残りはやるよ」

「えっ!? 本当に……いいのか?」

ここでダメと言ったら泣き出しそうになるぐらい気色満面で答えるケイ。尻尾もフリフリ動かして肉から視線を外しそうにない。イタ

ズラしたかったが、その可愛さに免じて許すでしょう

「見ての通り俺はもうお腹いっぱいなんだ。むしろ食べてくれ」

「そ、それじゃあ仕方無いな」

許すと同時にムシャムシャと食べ始めるケイを微笑ましく見守る店主と俺。そして全て食べ終わった後も皿を舐めんばかりの勢いだつたが、さすがに周囲の目を気にしたらしくそうはしなかった。

「それ間接キスになるのかな？」

ケイは少し訳が分からない表情をした後、体を掻きまづて恥ずかしかる。どうやら好物に夢中でそのことに気づかなかつたようだ。

そのままケイを見ていたかつたが、まだ今日は用事があるので店主に金を払いアクセサリーショップへ向かう。

今度は金があるので店のおばちゃんにそれを見せるとおばちゃんも納得したように、お勧めの商品を紹介し始める。だがそのどれもが高い品ばかりで、中には5千万ラドを超えるようなものまで勧めた。そのような品には持ち主を守るためのあらゆる魔法がかけられているから高いそうなのだが、手元にはマキアに世話代として払った五十万ラドを引いて、残り百五十万ラドぐらいしかない。プレゼントするのはマキアとユーリイとクロトとナーガなので一人あたり約三十万ちよつとの品というと、あまりたいそうな魔法がかけられていないものしかない。

結局俺が二時間時間かけて選んだのは涙形の水晶が付いた指輪で、

込められた魔法は互いのいるだいたいの方角が分かるというものだ。このくらいの装飾は道行く人がだいたいはしているので別におかしいことはない……と思うのだがいざ人にあげるとなると心配になってきたな。

『全然おかしいことはありませんよマスター。むしろ私が実体化できたなら欲しいぐらいです』

「……それならいいんだけど」

とりあえず本部へと帰ると執務室で暇そうにしていたナーガがいたが、男に改めて指輪へ送るといふのは気持ち悪い。アクセサリーシヨップのおばちゃん曰く、この世界ではよくあることらしいが元日本人の俺としては抵抗がある。

というわけで先に女性に送ったほうが俺の心象的に楽だろう、と中庭へ向かうとそこには楽しくお茶をするマキアとユーリイがいた。ユーリイは俺の姿を見ると今度は逃げたりしなかったが、冷たい視線は変わらずあり、なかなか気まずい。それとは対照的にマキアは自分から近寄ってくれてなんともありがたいばかりだ。

「イツキもお茶会に参加しないかのう？」

「それはありがたいが……俺がいても邪魔だろう。それよりこれは今までお世話になったお礼だ。受け取って欲しい」

マキアは指輪を直ぐに指へ嵌めると、

「とても嬉しいぞ……ところでユーリイの分はあるのか？」

最後の方はユーリイに聞こえないように小声で質問してきたので、俺も小声で返す。

「勿論あるんだがユーリイは受け取ってくれないだろうな」

「大丈夫じゃ。我がそれと分からぬように渡しておくからの」

「すまん。助かる」

小声でやりとりする俺達が気になったかユーリイは少しこちらを気にしている様子だ。まあ、対象は俺というよりか、大嫌いな男と会話するマキアの方を心配してのことだろうので期待はしてない。

だが、会ってここまで近くにユーリイがいるというのは始めてでここを逃したらもうチャンスはやってこないだろう。

機敏な動きでユーリイの近くまで一気に移動してユーリイの両手を握り締める。

……別にやらしい意味はないがすごく柔らかいです。

「貴様っ！」

しかし当のユーリイは大激怒して俺の股間を蹴ろうと足を背後へ延ばす。何も俺は何の意味もなくユーリイの手を握ろうとしたわけではない。ユーリイの足が最後の審判を下すまでの数秒で天の柱から貰った治癒能力で火傷で爛れたユーリイの両手を治癒したのだ。そして後はまるで筋書きどおりのように俺の股間は蹴られる。

!!!!!!!!!!

その痛みに崩れる俺を他所に手を振りほどいてすぐさまユーリイは
駆けて行く。

さすがに……これはかなり……痛い

「……さすがに強引過ぎじゃろイツキ」

呆れかえったような声を出すマキアに、

「そうだな」

とだけ返して中庭を後にした。

いつか昔のように笑い会えるユーリイに戻ると信じて……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0933/>

樹当千

2011年10月7日01時43分発行